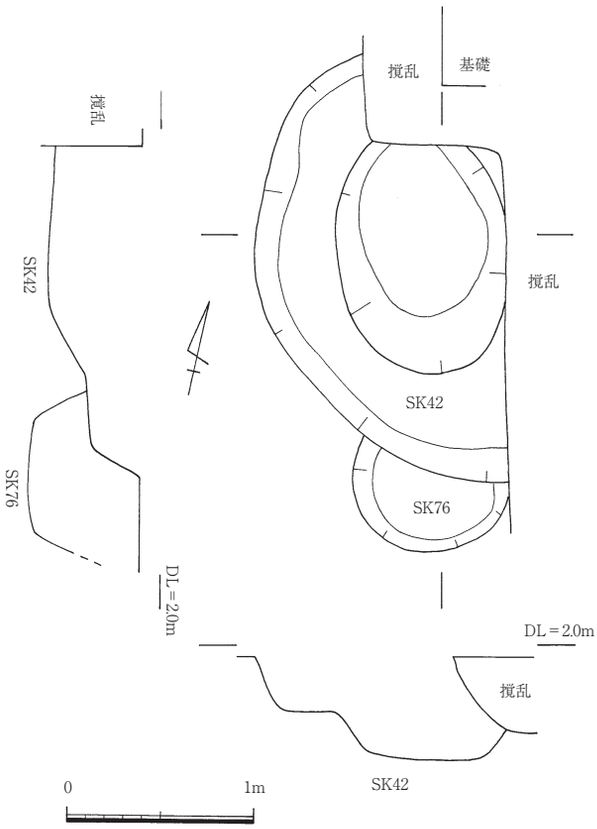


Fig.113　SK42平面図・エレベーション図

SK43（Fig.115～117）

調査区東部に位置し、浅い落ち込み状の遺構SX12・13の下面で検出された。平面形は不整形で、検出規模は南北長3.50m、東西長3.22m、深さ90cmを測る。断面形態は不整形で、床面は北西側が深く壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は褐色シルト、にぶい黄褐色シルト他である。切り合い関係では18世紀後葉のSK72と18世紀のSK75、P113を切り、18世紀末～19世紀初頭のSK25と18世紀末～19世紀のSX12・13に切られている。

出土遺物は、磁器（中碗22･小碗4･小杯6･鉢1・小皿五寸皿10・中皿1・猪口1・瓶1・蓋物4・紅皿2・人形2）、陶器（中碗18・小碗2・小皿3・中皿3・鉢2・擂鉢3・鍋1・甕3・瓶2・茶入1・火鉢1・灯明皿3）、土器（杯7・小皿16・白土器小皿1・焙烙1・焜炉1・人形1）、銅製品（煙管2・不明4）である。

図示したものは、1065～1100である。1065～1073は磁器で、何れも肥前産である。1065・1066は皿で、1065は内面に山水文、外面に花文、高台内には渦「福」を描く。1067～1069は猪口。1067は型紙刷りと手描きによる桐文と鳥文を描く。1068も型紙刷りと手描きによる草花文を描くも

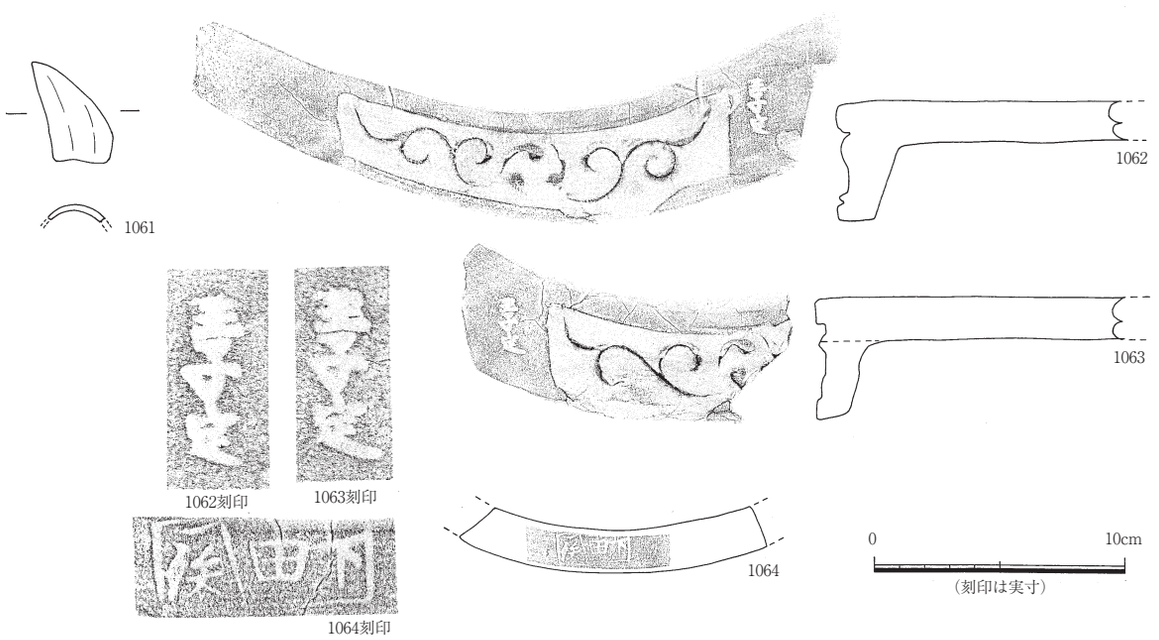
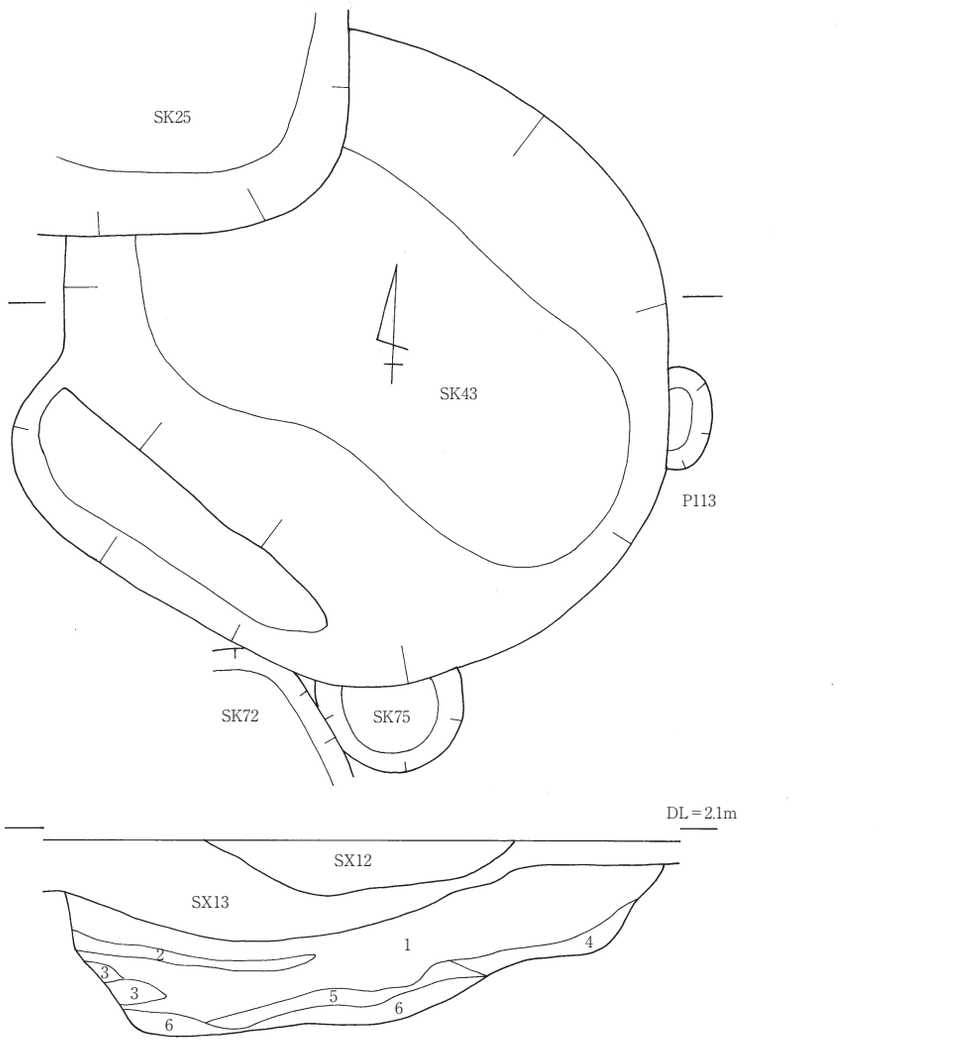


Fig.114　SK42出土遺物実測図

ので、高台内に略化した「大明年製」銘をもつ。1069は色絵の猪口で、赤・薄緑・黒の上絵付による水仙を描く。1070は草花文の瓶。1071は色絵染付の蓋物。1072・1073は人形又は水滴である。

1074～1089は陶器。1074～1079は碗。1074～1076は尾戸窯の灰釉碗。1074は鉄錆による笹文、1075は錆絵を描くものである。1078・1079は肥前産の京焼風陶器。1078は呉須で楼閣山水文を描き、高台内に「清水」銘印をもつ。1080·1081は小皿。1080は菊花形小皿で、黒褐色の鉄釉を施す。内面は白抜きし透明釉を施す。1081は長方形の灰釉皿である。1082は灰釉の碗蓋で、錆絵を描く。1083は鉄釉の鍋である。1084は丹波焼の甕。焼締めで、外面に多段の凹線を施す。双耳の有無は不明である。1085は瀬戸の肩衝形小壺である。1086・1087は灯明受皿で、1086は灰オリーブ色を帯びる透明の釉を施す。1087は備前の灯明受皿。焼締めで外底には火襷が残る。1088は関西系の鉄釉甕。



1層：10YR4/4褐色シルト（0.5～2cm大の円礫を含む。炭化物を少量含む。）
2層：10YR4/4褐色シルト（炭化物を少量含む。）
3層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト
4層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（橙色シルトをブロック状に含む。）
5層：10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（炭化物を少量含む。）
6層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト質砂（黄褐色シルトをブロック状に含む。炭化物を少量含む。）

0　1m

Fig.115　SK43・SX12・13平面図・セクション図

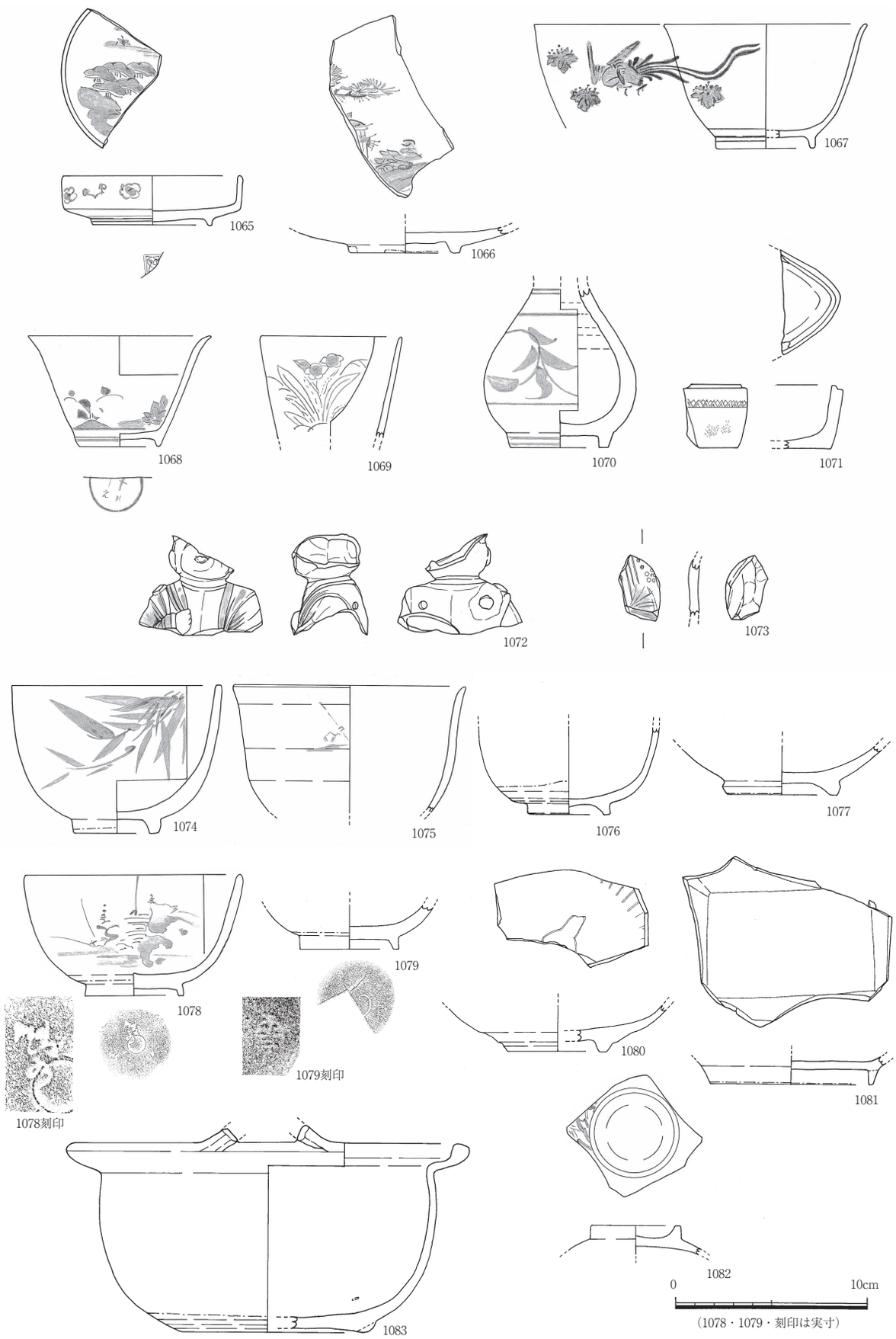


Fig.116　SK43出土遺物実測図（1）

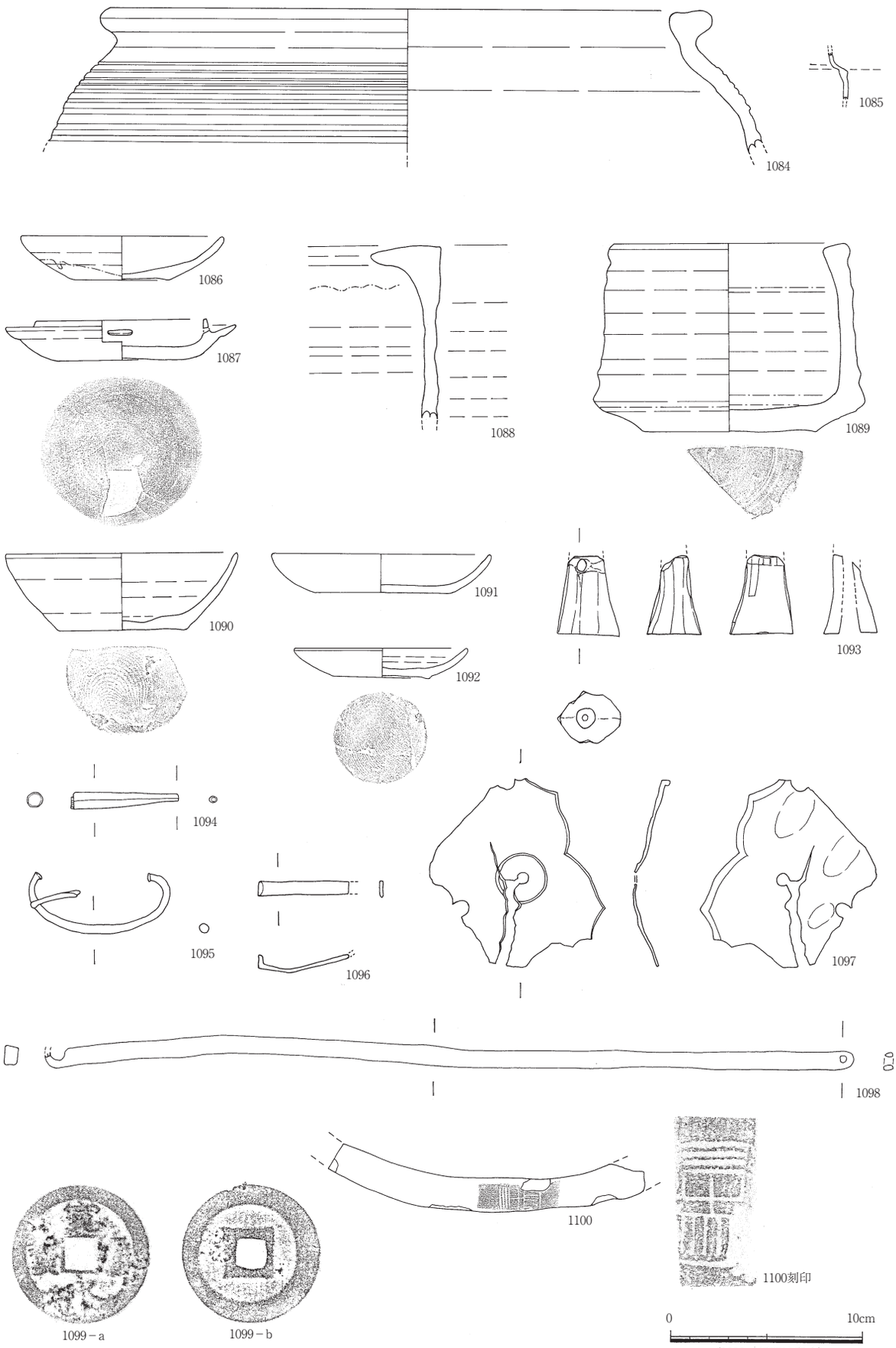


Fig.117　SK43出土遺物実測図（2）

1089は瀬戸の灰釉陶器で用途不明。内面無釉で、外面に淡黄色を帯びる半透明の釉を施す。

1090～1093は土師質土器。1090は杯。1091・1092は小皿で、ともに口縁部に灯芯油痕が残る。1091は褐灰色の胎土に白化粧土を施す。内外面はナデ調整である。形態や調整痕が尾戸窯の白土器に共通しており、尾戸窯産の可能性をもつ。1093は人形で、人物か。型押し成形前後貼り合わせで、中実。底部に径1.1cmの円錐形の穿孔をもつ。

1094～1098は銅製品。1094は煙管吸口。1095は用途不明で、把手の一部か。1096は扁平な棒状製品である。1097は薄い花形で中央に円孔をもつ。1098は棒状製品で、先端部の片側が鍵状となる。

1099は寛永通宝。1100は平瓦で、銘印をもつ。

図示したものの他にも、肥前産の染付丸碗、染付広東形碗、京信楽系の小杉碗、肥前産の灰釉丸碗、肥前内野山窯の銅緑釉皿、備前焼擂鉢、窯道具（サヤ）、関西系焙烙等が出土している。

出土遺物の内容及び切り合い関係からみて、SK43は18世紀末～19世紀初頭に比定される。

SK44（Fig.118・119）

調査区東部に位置する。平面形は不整形で、検出規模は長軸1.30m、短軸0.98m、深さ14cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は暗灰黄色シルトであり、埋土中に炭化物を多く含んでいる。

出土遺物は土師質土器の杯又は皿の底部（1105）1点と、土師質土器細片1点である。出土遺物が僅少のため、SK44の時期の詳細は不明である。

SK45（Fig.118・119）

調査区南東部に位置し、火災に伴う焼土溜まりSX11の下面で検出された。平面形は楕円形で、検出規模は長軸1.40m、短軸の確認長1.20m、深さ38cmを測る。埋土は褐色シルト、にぶい黄褐色

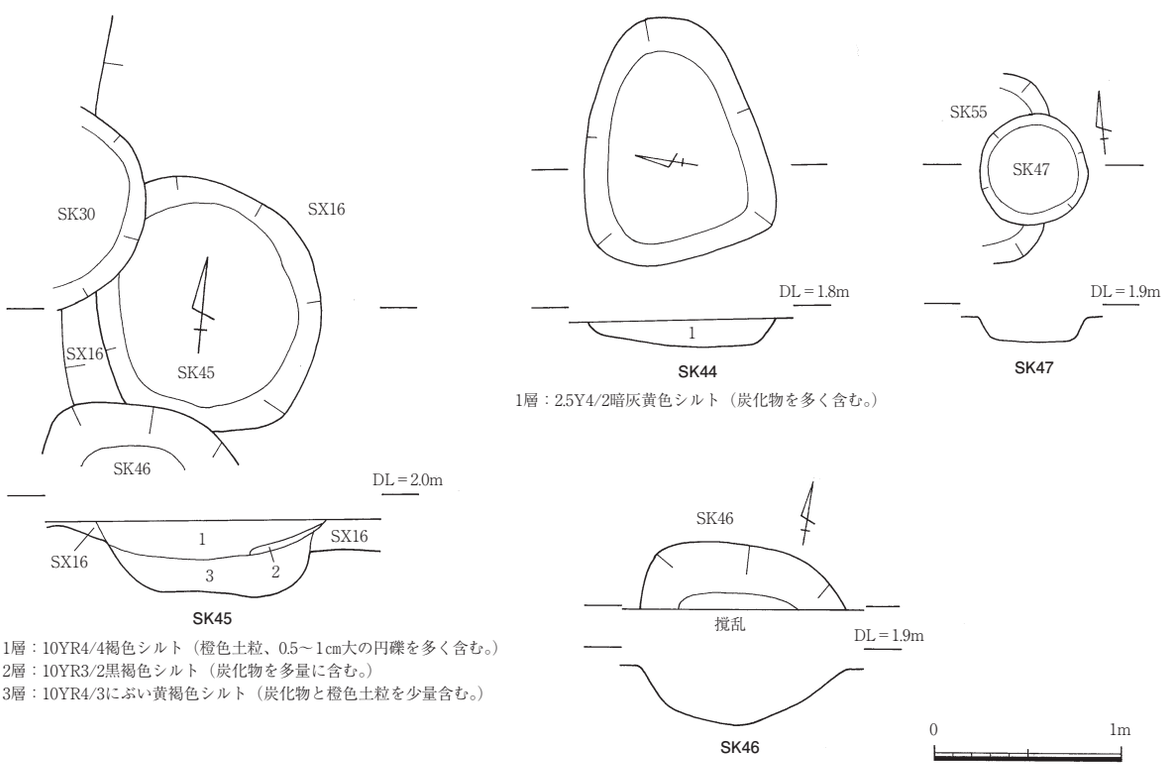


Fig.118　SK44～47平面図・セクション図・エレベーション図

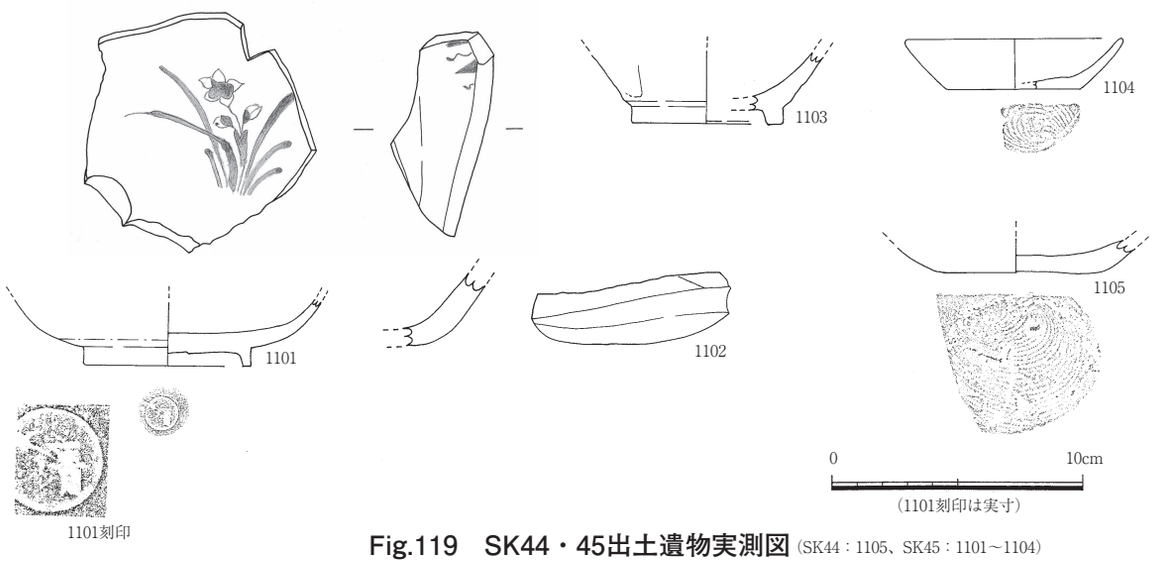


Fig.119　SK44・45出土遺物実測図 (SK44：1105、SK45：1101～1104)

シルト他であり、埋土中に炭化物と橙色土粒を多く含む。切り合い関係では17世紀のSX16を切り、18世紀前葉の火災処理遺構SK30と近世のSK46に切られる。また、上面には18世紀前葉の焼土溜まりSX11が広がる。

出土遺物は、磁器（蓋物1・不明1）、陶器（中碗1・小皿1・瓶又は壺1）、土器（小皿3）、鉄製品（釘1）で、17世紀初頭から18世紀前葉までの遺物が含まれる。また、出土遺物には二次被熱によって釉が変質したものが含まれる。

図示したものは、1101～1104である。1101は京焼の灰釉皿で、内面に呉須で水仙を描く。高台内に円圏状の段を設け、「清」銘印をもつ。1102は灰釉の皿又は鉢で、尾戸窯の製品とみられる。厚手の作りで、ロクロ成形の後、外面下位にヘラで面取りを施す。内面には鉄錆による暦手文を描いている。1103は碗で、外面に面取りを施す。胎土は灰色で、全面に白化粧土を施した後、透明の釉を施す。二次被熱を受け釉は変質している。1104は土師質土器小皿である。

図示したものの他にも、砂目をもつ唐津系灰釉陶器小皿、備前焼の瓶又は壺、丹波焼甕の体部片等、17世紀から18世紀前葉にかけての遺物が出土している。

SK45は18世紀前葉に比定される。また、埋土や出土遺物の内容からみて、SX11、SK30とほぼ同時期に掘削された、火災後の処理に伴う廃棄土坑と考えられる。

SK46（Fig.118）

調査区南東部に位置する。南部側が撹乱を受けるため全体の規模と形態は不明であるが、検出規模は東西残存長1.10m、南北残存長0.34m、深さ32cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいる。切り合い関係では17世紀のSX16と18世紀前葉のSK45を切る。出土遺物は、肥前産染付皿の体部細片１点である。

遺物が僅少であるが、周辺遺構との切り合い関係により、SK46は18世紀前葉に比定される。

SK47（Fig.118）

調査区南東部に位置する。平面形は円形で、検出規模は径0.57m、深さ12cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。切り合い関係では、18世紀のSK55と18世紀前葉のSX11を切っている。

出土遺物は尾戸窯の灰釉中碗、能茶山窯産の行平、灰釉碗の体部片、磁器細片である。

SK47は19世紀中葉に比定される。

SK48（Fig.120・121）

調査区南東部に位置する。北部側が撹乱を受けるため規模、形態は不明であるが、東西長1.02m、南北の残存長0.50m、深さ48cmを測る。床面は片側が窪み、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトと灰黄褐色シルトであり、1層埋土中には橙色土粒と炭化物を多く含んでいる。また、近接するSK49とは遺物の接合関係があり、同時期に機能したことが分かる。

出土遺物は、磁器（中碗1・小皿五寸皿3・不明1）、陶器（小皿1・瓶1・不明1）、土器（小皿1）、石製品（石臼1）である。

図示したものは、1106・1107である。1106は鉄釉の小壺。1107は尾戸窯の灰釉鉢。薄手で、ロクロ成形の後、口縁部を変形させる。この他にも、肥前産の染付丸碗、丸皿、砂岩製の石臼等が出土している。

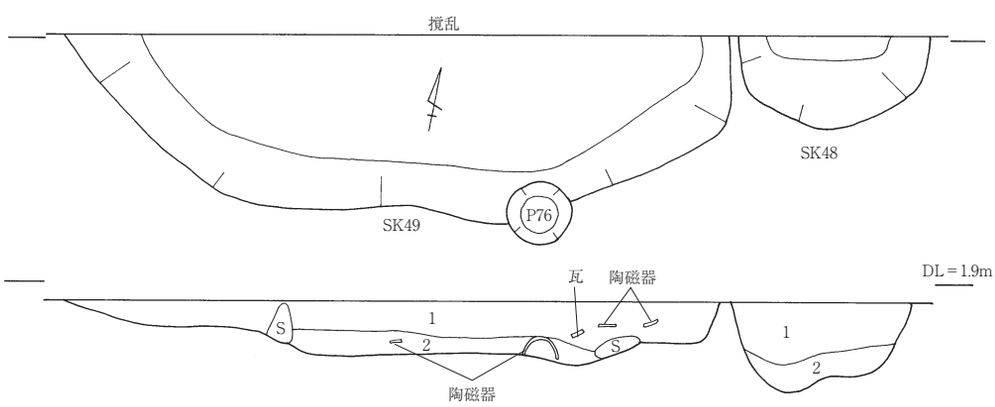
SK48は18世紀に比定される。

SK49（Fig.120・121）

調査区南東部に位置する。北部側が撹乱を受けるため、規模と形態は不明であるが、東西確認長3.54m、南北の残存長1.00m、深さ32cmを測る。床面は平坦でなく、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトと褐色シルトであり、埋土中に橙色土粒と炭化物を含んでいる。切り合い関係ではP76を切っている。また、近接するSK48とは遺物の接合関係があり、同時期に機能したことが分かる。

出土遺物は、磁器（小杯1・小皿2・猪口1・段重1・蓋物蓋1・火入れ1・不明1）、陶器（中碗3・小皿3・中皿1・捏鉢1・擂鉢1・瓶1・甕1・不明1）、土器（焜炉1）、及び瓦片で、17世紀から18世紀までの遺物が出土している。

図示したものは、1108～1112である。1108は染付の香炉か。六角形で、外面にコンニャク印判



SK49

1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.5～3cm大の円礫を多く含む。橙色土粒を多く、炭化物粒を少量含む。）

2層：10YR4/4褐色シルト（0.5mm～1cm大の円礫を多く含む。橙色土粒を少量含む。）

SK48

1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.5～4cm大の円礫を含む。橙色土粒と炭化物粒を多く含む。）

2層：10YR5/2灰黄褐色シルト（0.5cm前後の円礫を含む。炭化物を少量含む。）

0　1m

Fig.120　SK48・49平面図・セクション図

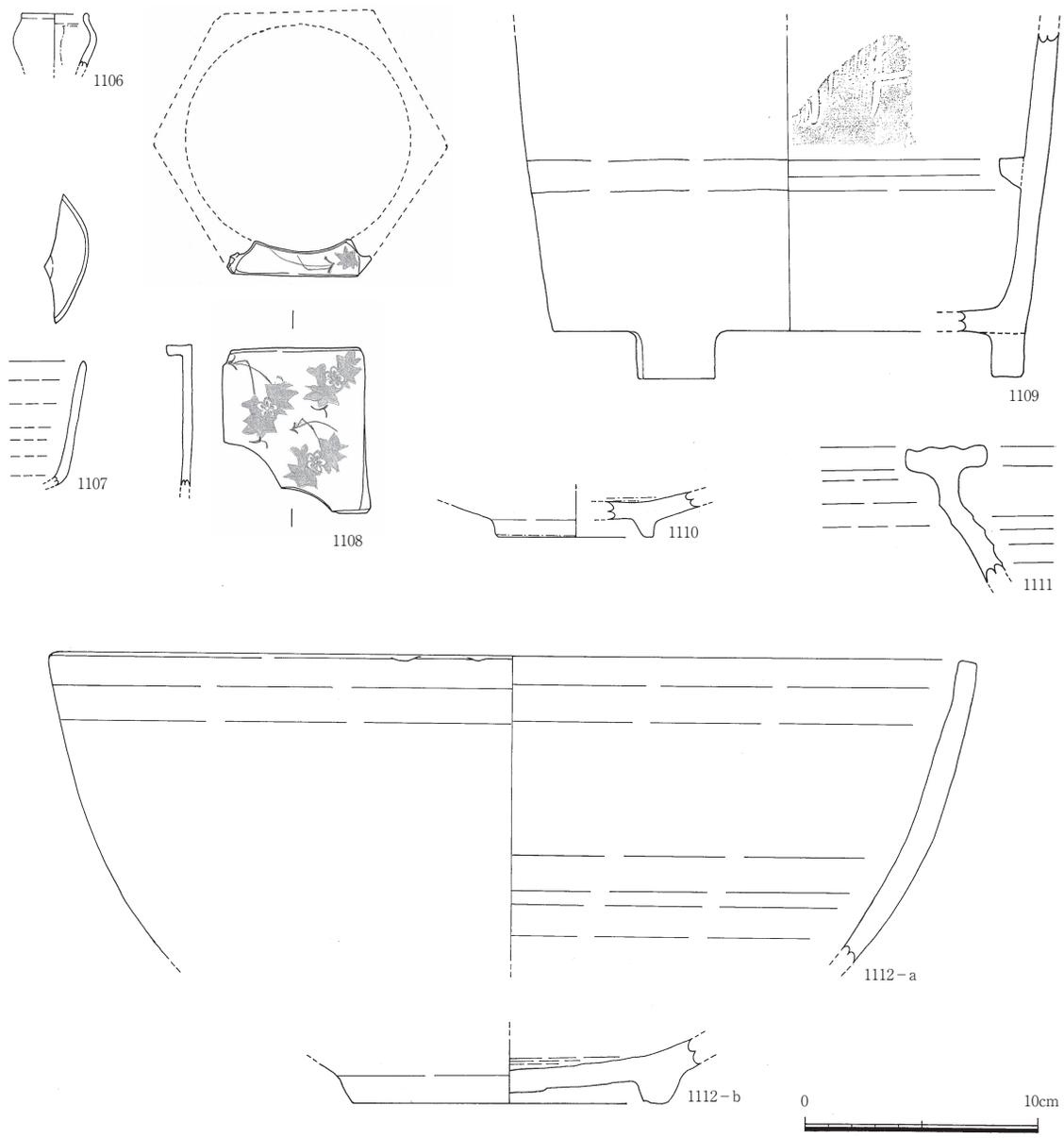


Fig.121　SK48・49出土遺物実測図 (SK48：1106・1107、SK49：1108～1112)

による花文と、手描きによる折松葉文を施す。1109は土師質土器の焜炉。1110は灰釉の小皿。見込み蛇の目釉剥ぎで、釉剥ぎ部分に白土を施す。1111は丹波焼の甕である。1112は灰釉の大鉢で、明オリーブ灰色を帯びる透明の釉を施している。

SK49は18世紀に比定される。

SK50（Fig.122～126）

調査区東部に位置する。平面形は楕円形で、検出規模は長軸2.26m、短軸2.12m、深さ48cmを測る。断面形態は不整形で、高低差のある床面から壁が斜め上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトであり、炭化物を多く含んでいる。切り合い関係では18世紀後半のSK68を切っている。

出土遺物は、磁器（大碗1・中碗35・小碗7・小杯14・小皿五寸皿23・鉢5・猪口21・碗蓋1・蓋物5・蓋物蓋2・段重1・瓶4・紅皿2・香炉1・不明1）、陶器（中碗45・小碗18・小皿2・中皿1・捏鉢

片口3・擂鉢3・鍋2・土瓶3・水注1・瓶1・甕1・蓋物1・灯明皿2・餌鉢1・不明2)、土器（杯7・小皿34・白土器小皿1・焙烙1・焜炉1・火鉢1・火消壺1・人形4)、及び瓦片である。

図示したものは、1113～1176である。1113～1132は磁器で、何れも肥前産である。1113・1114は丸形の染付中碗で、1114は高台内に「大明年製」銘をもつ。1115は色絵小碗で、赤、その他の上絵付による文様を施す。1116は青磁染付の半筒形小碗で、見込みにコンニャク印判による五弁花文を施す。1117・1118は染付の小杯。1119は色絵の小杯で、赤、その他の上絵付で、草花文を描いている。1120・1121は皿で、1120は高台内に二重角枠内渦「福」を描く。1122は鉢。1123は碗蓋である。1124は青磁の碗蓋である。1125～1127は猪口。1126は青磁染付の猪口で、見込みに手描きによる五弁花文、高台内に銘をもつ。1127は口縁部輪花形の青磁猪口である。1128は青磁の香炉で、蛇の目凹形高台をもち、高台内の釉剥ぎ部分には鉄錆を施す。1129・1130は蓋物、1131は白磁紅皿である。1132は用途不明。型押し成形で、箱形を呈する。

1133～1158は陶器。1133～1135・1137～1140・1143・1146～1149は中碗、1136・1141・1142・1144・1145・1150は小碗である。1133～1136は尾戸窯の灰釉碗で、1133～1135は高台内に渦状の鉋痕が残る。1134は鉄錆で宝文、1136も錆絵を描くものである。1137は鉄錆と呉須で文様を描く。1140は京焼の灰釉碗で、高台脇に波状の鉋痕を装飾的に巡らす。外面は鉄錆と白土で垣と花木を描く。1141・1142は京都・信楽系の半球形小碗で、鉄錆で略化した草花文を描く。1144・1145は京都･信楽系の色絵半球形小碗である。1147～1149は肥前産。1147は京焼風陶器で、高台内に「清水」銘印をもつ。1148は高台施釉の灰釉丸碗。1149は白化粧土打刷毛目の碗で、胎土は黒褐色を呈する。

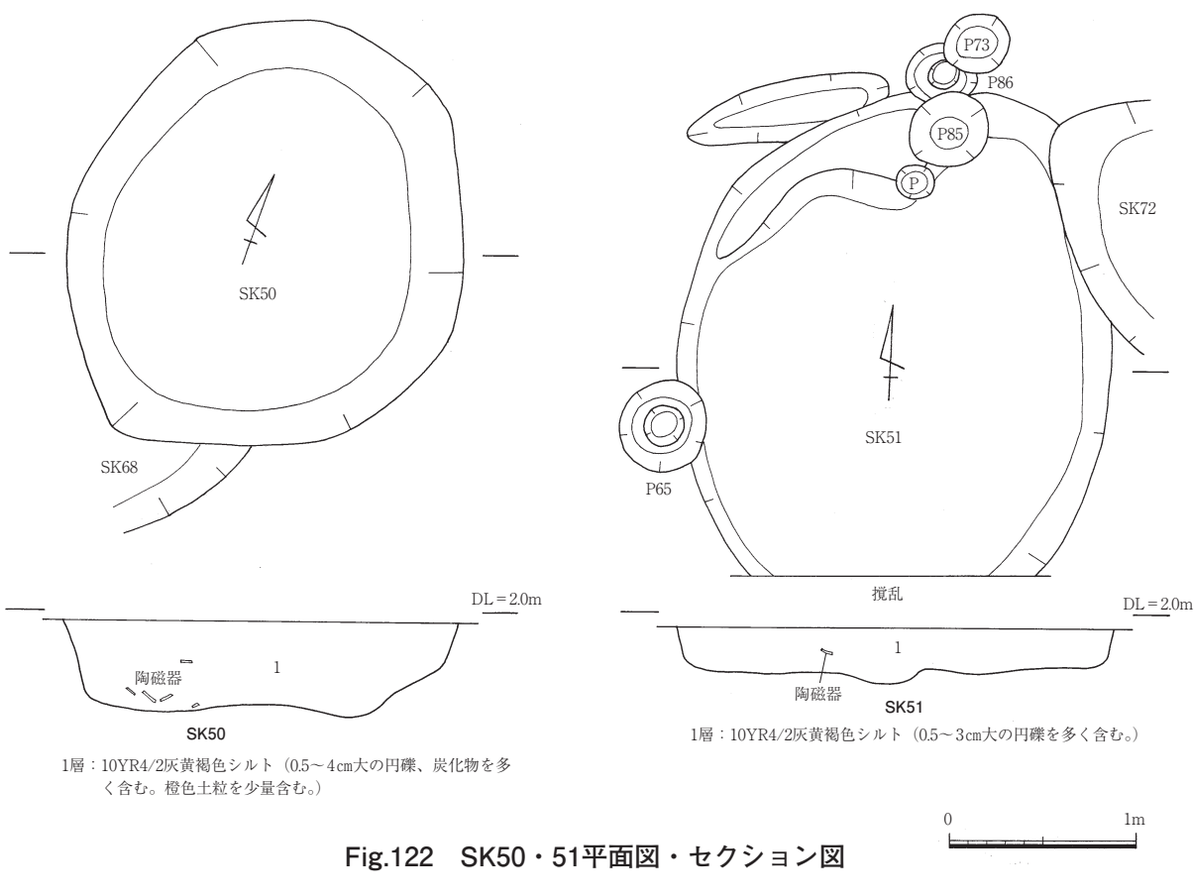


Fig.122　SK50・51平面図・セクション図

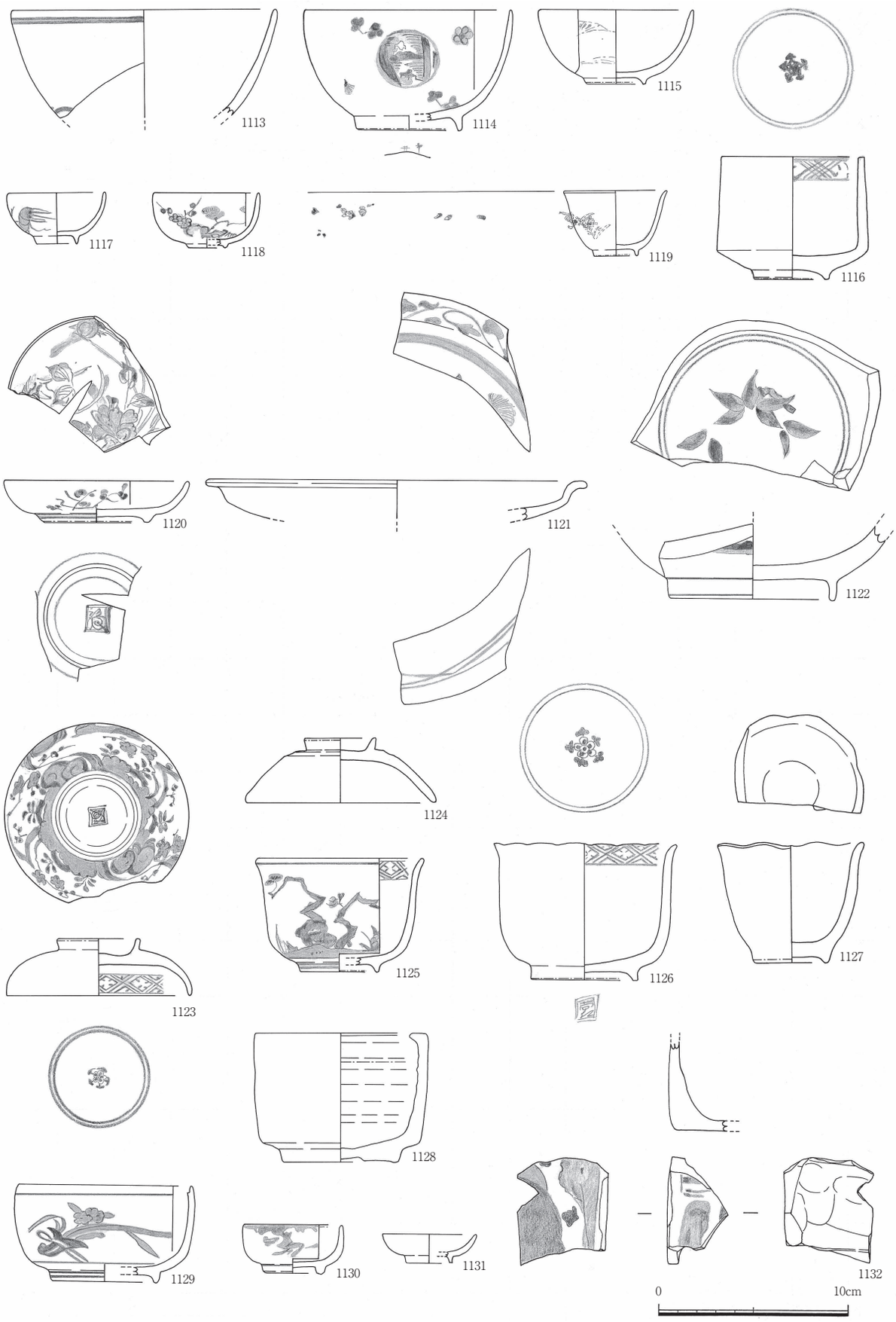


Fig.123　SK50出土遺物実測図（1）

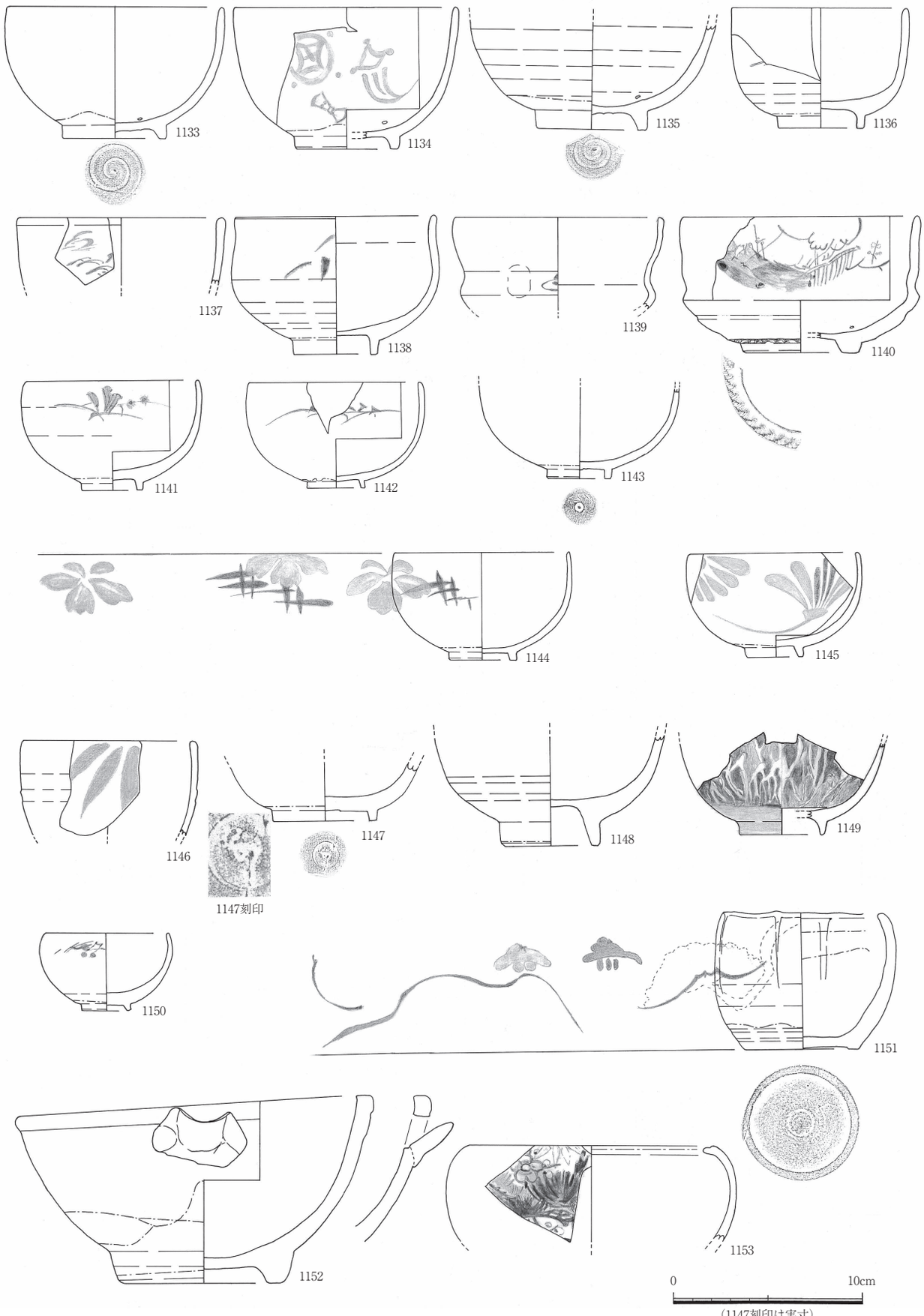


Fig.124　SK50出土遺物実測図（2）

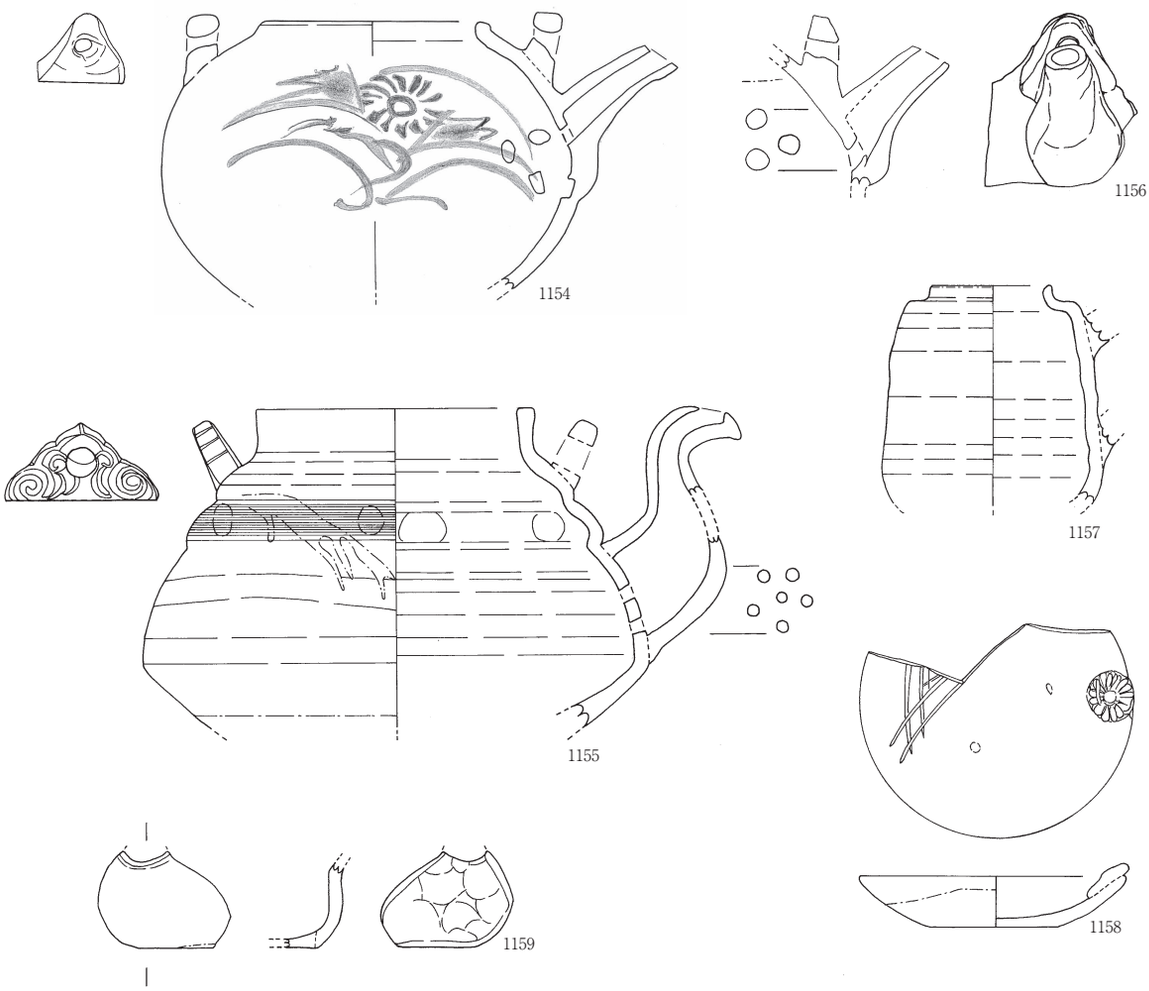


Fig.125　SK50出土遺物実測図（3）

1151は京焼の火入れで、口縁部を輪花形に変形させる。白化粧土の後灰釉を施し、鉄錆及び赤と薄緑の上絵付で松文を描く。1153は京焼の蓋物か。鉄錆、呉須、白土、赤と薄緑の上絵付で松竹梅を描いている。1152は片口。1154～1155は土瓶。1155は鉄釉の土瓶で、体部上位の数箇所を窪ませ変形させる。1157は鉄釉の水注。1158は京都系の灯明受皿である。1159は器種不明。型押し成形で、外面に灰黄色を帯びる半透明の釉を施す。

1160～1176は土師質土器。1160～1162は杯。1163～1167は小皿で、1163～1165が口径９～10㎝台のもの、1166・1167が口径６～７㎝台の小型のものである。このうち、1166と1167は口縁部に灯芯油痕を認める。1168・1169は尾戸窯の白土器小皿で、灰白色の胎土をもつ。1168は文様の有無は不明、1169は無文である。1170は五寸皿で、胎土はにぶい橙色を呈し、外底に回転ケズリを施す。1171は讃岐岡本系の焙烙。1172は筒形の焜炉である。1173～1176は人形で、1173･1176は人物、1174はかみしも人形、1175は鳥である。1173と1174は型押し成形貼り合わせで、中実。底部に断面円錐形の穿孔をもつ。1175・1176は型押し成形貼り合わせで、中空である。この他、肥前産のくらわんか手染付草花文皿、網目文皿、白磁菊花形紅皿等が出土している。

SK50は18世紀後半に比定される。

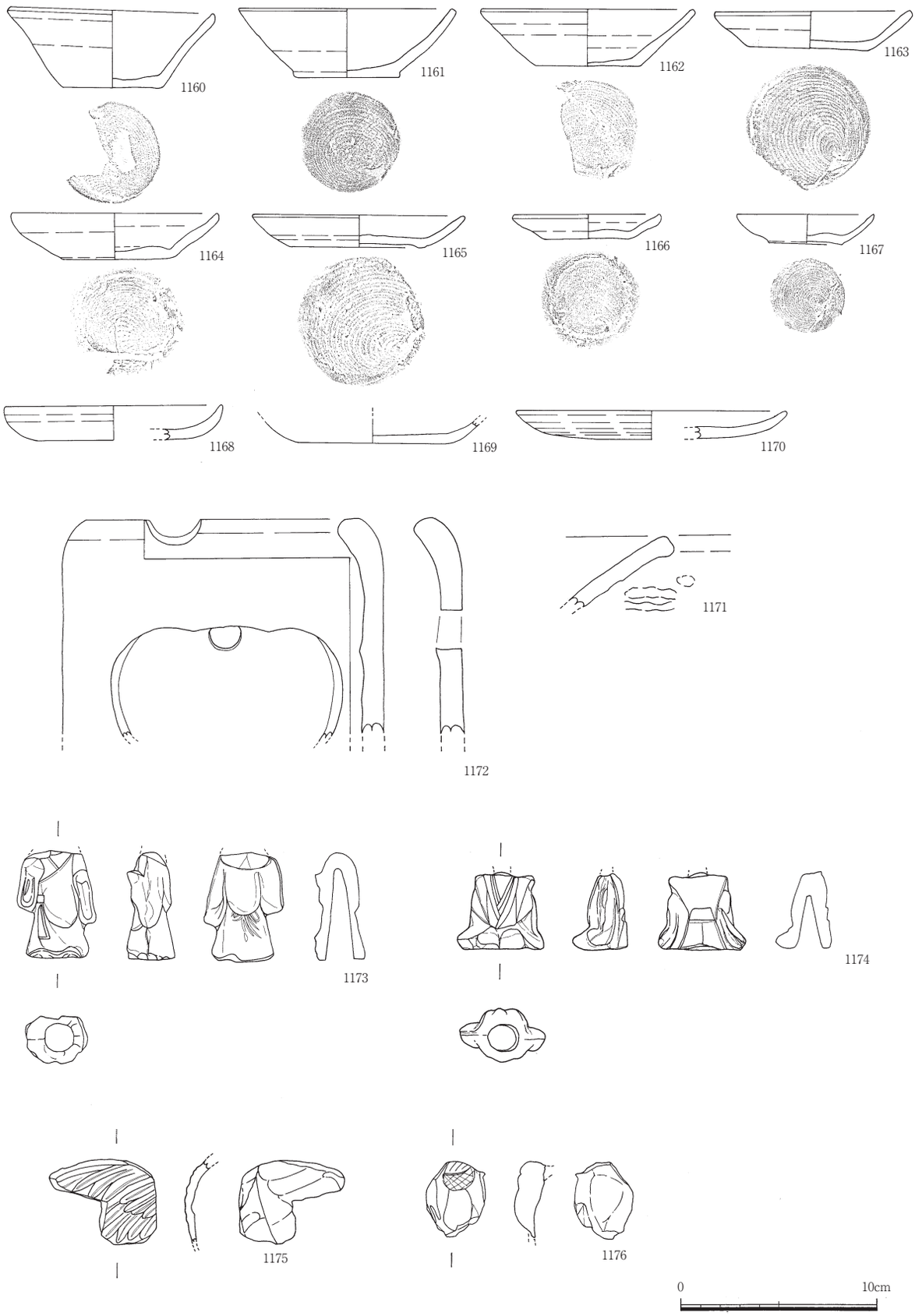


Fig.126　SK50出土遺物実測図（4）

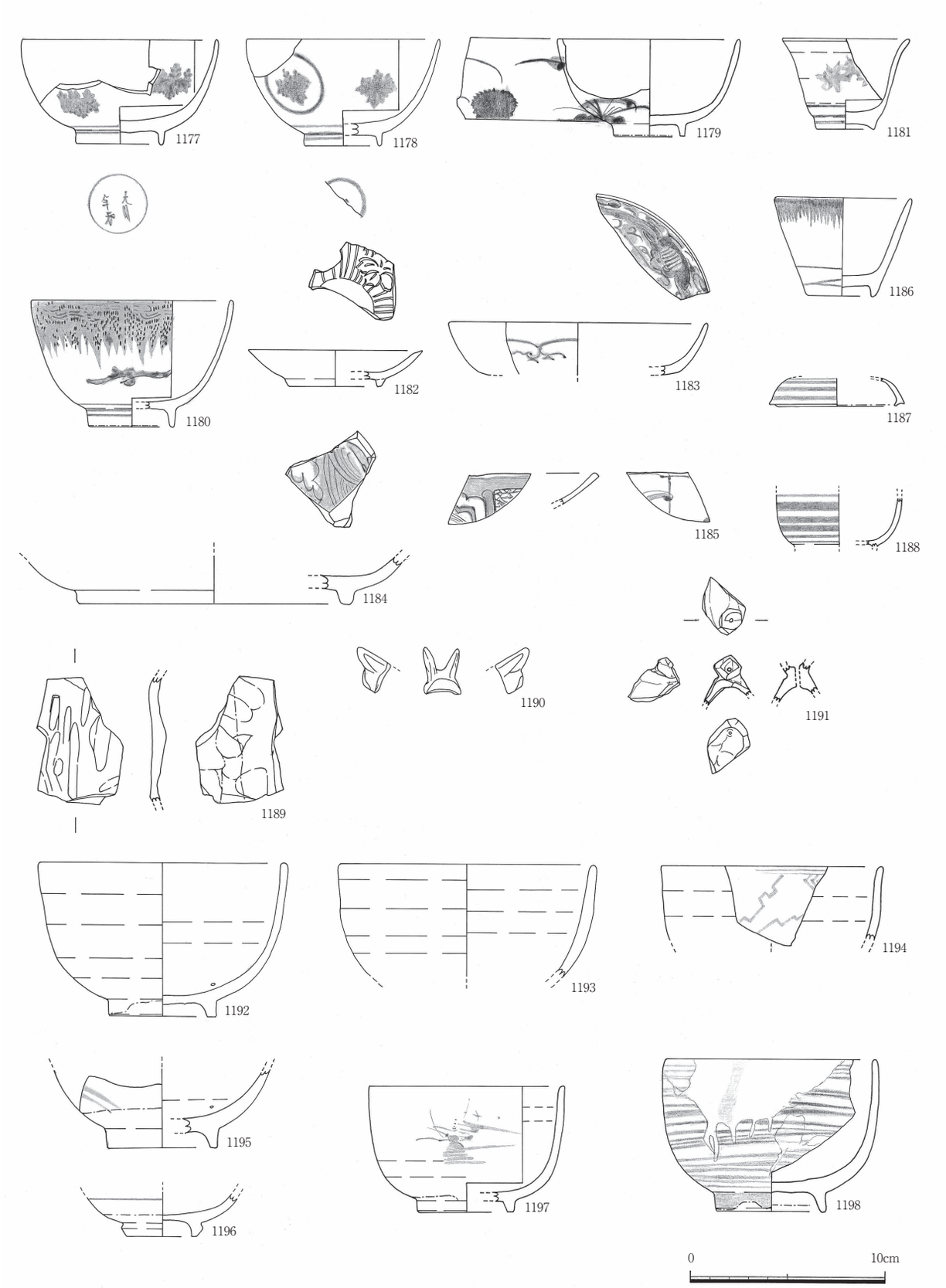


Fig.127　SK51出土遺物実測図（1）

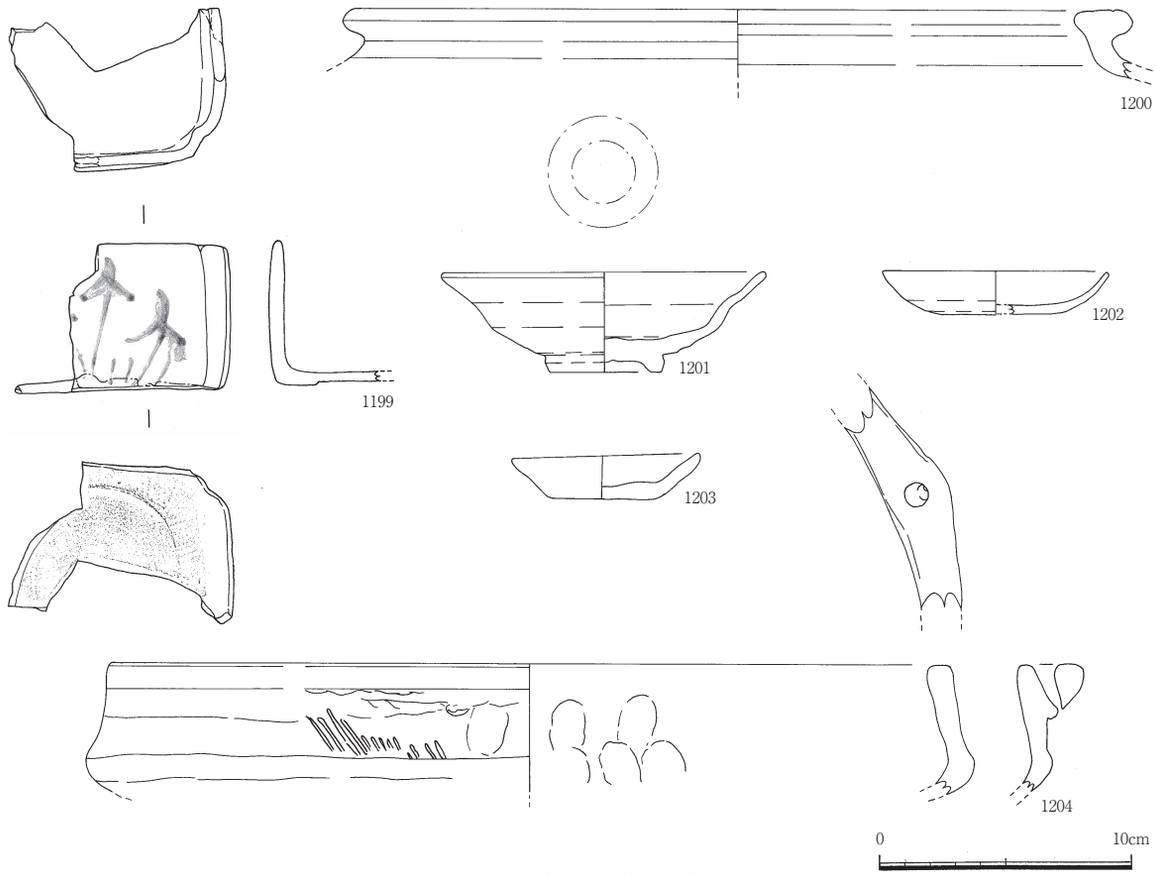


Fig.128　SK51出土遺物実測図（2）

SK51（Fig.122・127・128）

調査区東部に位置する。南部側が撹乱を受けるが、平面形は楕円形とみられ、東西長2.32m、南北の残存長2.58m、深さ30cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトである。切り合い関係ではP65・85・86・127を切り、18世紀末～19世紀初頭のSK72に切られる。

出土遺物は、磁器（中碗9・小杯3・小皿7・猪口3・蓋物1・蓋物蓋1・水滴1・人形又は水滴1）、青花（皿2）、陶器（中碗16・小碗1・小皿4・向付1・擂鉢1・甕2・火鉢1・灯明皿1・不明2）、土器（小皿20・焙烙1・火鉢1）、鉄製品（釘1）、銅製品（不明1）で、17世紀から18世紀前半までの遺物が含まれる。また、この中には被熱したもの（1182）が含まれる。

図示したものは、1177～1204である。1177～1191は磁器で、1184・1185は中国産、その他は肥前産である。1177～1180は中碗。1177はコンニャク印判による桐文を施す。1178はコンニャク印判による桐文と手描きによる丸文、1179はコンニャク印判による菊花文と手描きによる草文を組み合わせるものである。1180は雨降り文で、手描きによる雨に、型紙刷りによる雨粒と雲を組み合わせる。1181は端反形の小杯で、コンニャク印判による花文を施す。1182～1185は皿。1182は陽刻型打ち成形の小皿。1184は中国漳州窯系の青花皿である。1185は中国景徳鎮窯系の芙蓉手の青花皿である。1186は雨降り文の猪口。1187・1188は蓋物。1189～1191は人形又は水滴である。

1192～1202は陶器。1192～1198は碗である。1192～1196は尾戸窯の灰釉碗で、1194は呉須で幾

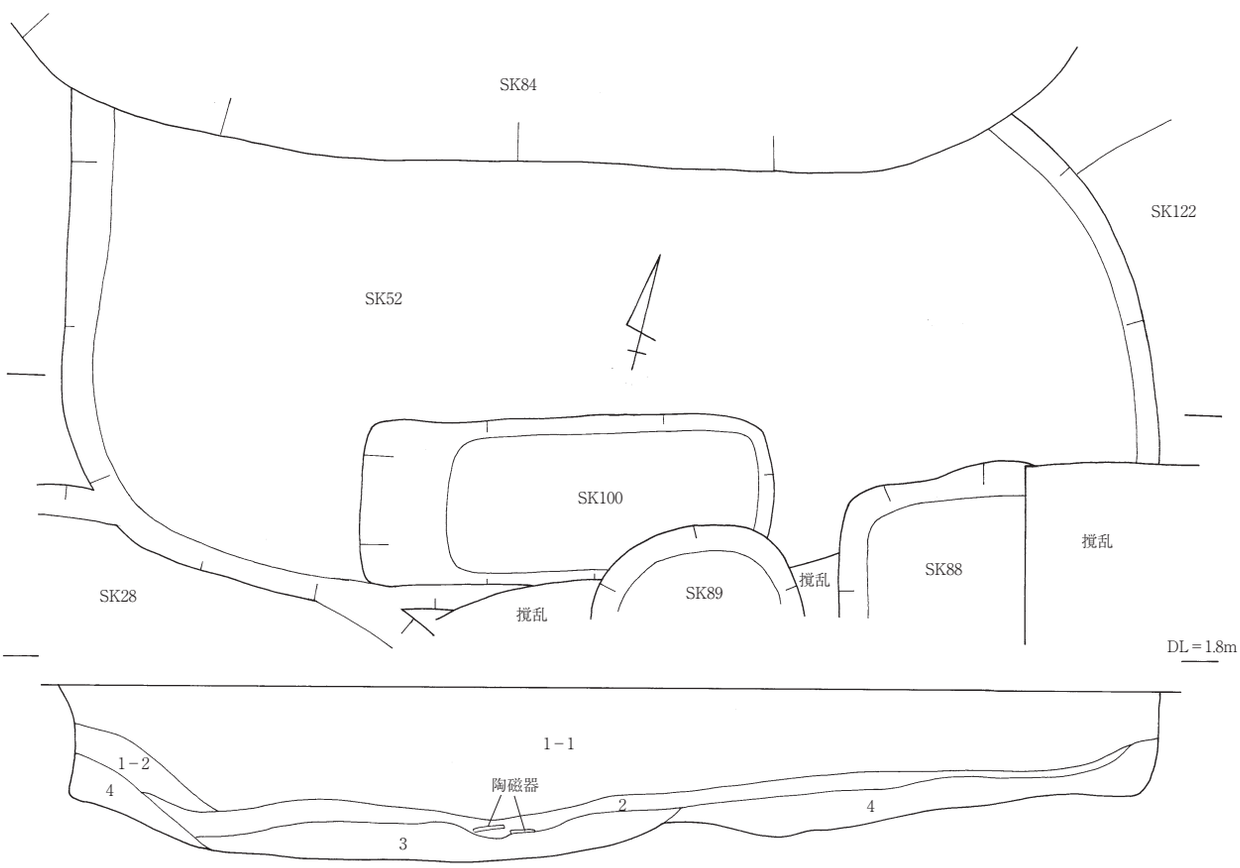
何文と二重圏線を描く。1195は錆絵、1196は呉須絵を描くものである。1197は肥前産の京焼風陶器碗。1198は肥前産の刷毛目碗である。1199は志野焼の向付で、長石釉を施し、錆絵を描く。1201は肥前内野山窯の蛇の目釉剥ぎ小皿で、灰黄色を帯びる透明の釉を施す。1200は丹波焼の甕である。1202は灯明受皿で、内面に鉄釉を施す。

1203・1204は土師質土器。1203は小皿。1204は関西産の焙烙で、双耳をもつ。外面に叩き目痕が残る。図示したものの他にも、瀬戸・美濃産の天目形碗、窯道具（ハマ）等が出土している。

SK51は18世紀前半に比定される。

SK52（Fig.129～134）

調査区東部に位置する。南部と北部が削平を受けるため、全体の規模と形態は不明であるが、東西長5.88m、南北の残存長2.40m、深さ92cmを測る。床面はやや高低差をもち、壁は上方に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色砂質シルト他であり、埋土中に炭化物を多く含んでいる。切り合い関係では17世紀前葉のSK122を切り、18世紀のSK28と19世紀初頭のSK88・89、19世紀中葉のSK84・100に切られている。



1－1層：10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト（0.5mm～2cm大の円礫を多く含む。橙色の風化礫を含む。）
1－2層：10YR4/2灰黄褐色シルト（粗砂、0.5～1cm大の円礫を含む。炭化物を多量に含む。）
2層：10YR3/2黒褐色シルト質粘土（炭化物を含む。木片を少量含む。）
3層：10YR4/1褐灰色シルト質粘土（粗砂、0.5～1cm大の円礫を含む。炭化物を含む。）
4層：10YR6/2灰黄褐色シルト（粗砂、0.5～1cm大の円礫を含む。炭化物を含む。）

0　1m

Fig.129　SK52平面図・セクション図

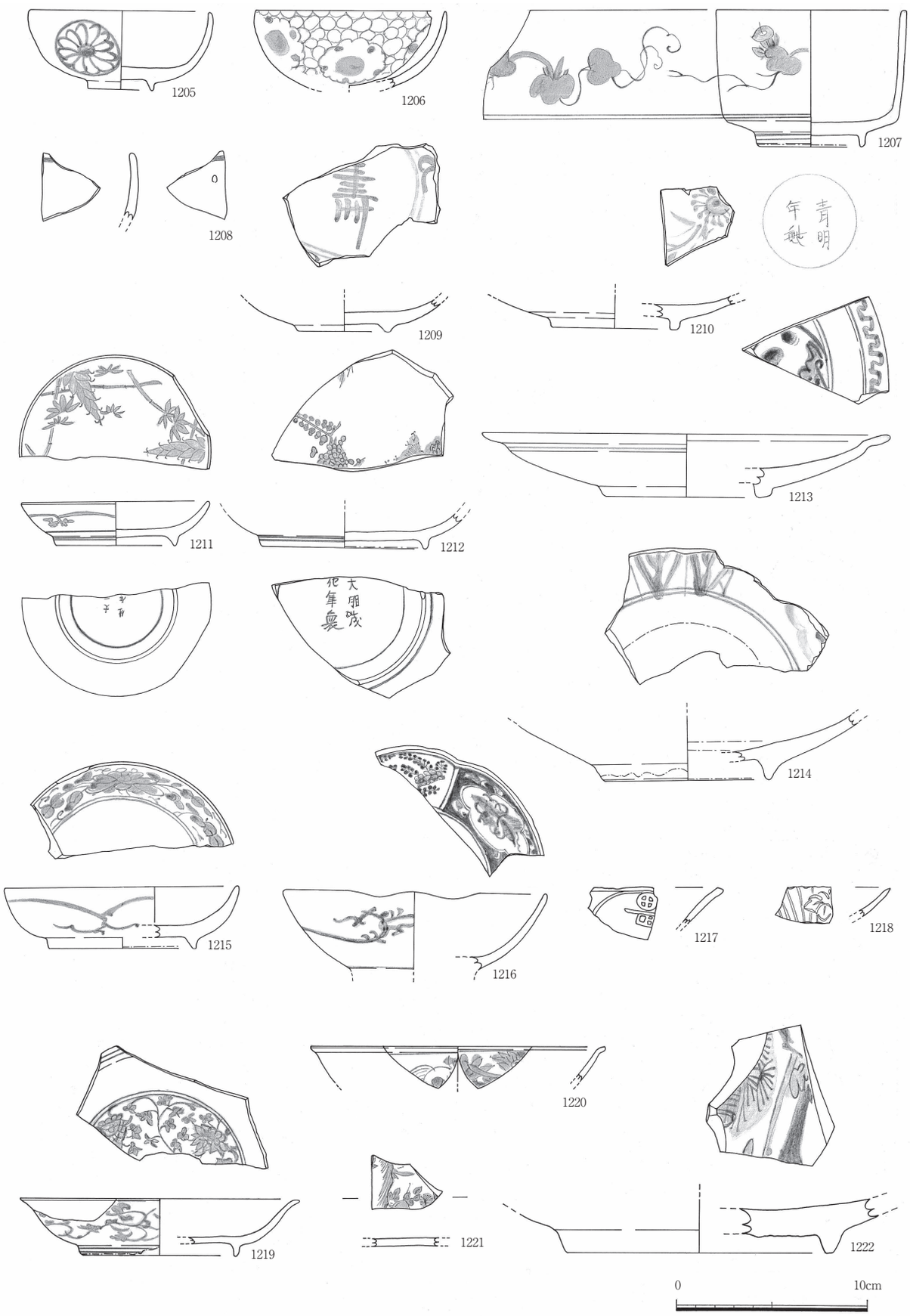


Fig.130　SK52出土遺物実測図（1）

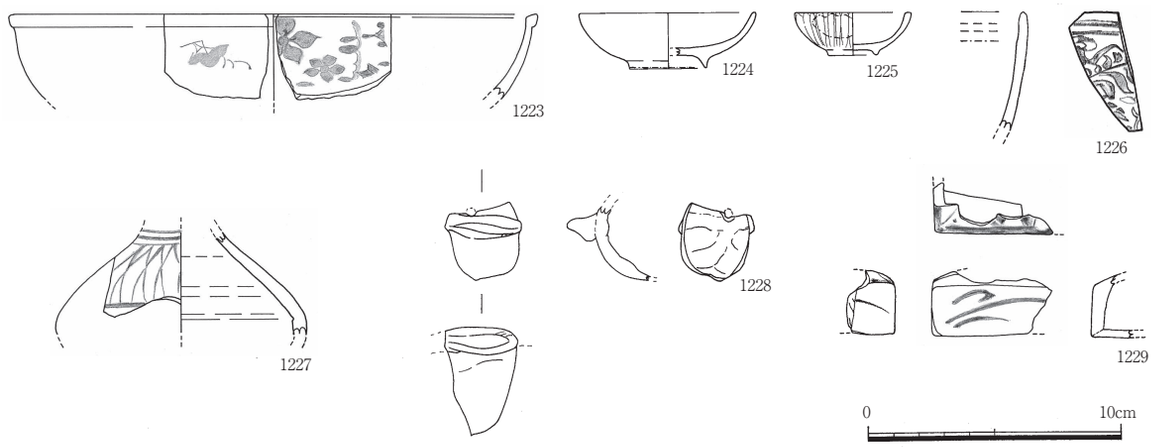


Fig.131　SK52出土遺物実測図（2）

出土遺物は、磁器（中碗38・小碗13・小杯9・小皿五寸皿32・中皿2・碗蓋1・鉢4・猪口8・瓶3・蓋物6・蓋物蓋3・紅皿7・火入れ又は香炉1・水滴2・水滴又は人形2）、青花（碗1・皿1）、陶器（中碗38・小碗4・小皿12・中皿2・鉢4・捏鉢4・擂鉢5・鍋2・土瓶3・蓋2・甕3・瓶4・火鉢2・灯明皿5・鳥の水入れ1・不明1）、土器（小皿21・白土器小皿1・人形1・竈1）で、18世紀を主体とする遺物が多く出土している。また、この中には志野焼の破片4点など17世紀の遺物も混じる。

図示したものは、1205～1265である。1205～1229は磁器で、1208・1219～1222は中国産、その他は肥前産である。1205～1208は碗。1205は丸文に菊花、1206は雪輪を描く。1207は半筒形碗で、外面に植物、高台内に「青明年製」の銘をもつ。1208は中国漳州窯系の青花碗で、白化粧の後透明釉を施す。

1209～1222は皿。1209は初期伊万里の小皿で、内面に寿字文を描く。1211･1212は高台内に「大明成化年製」銘をもつ。1217・1218は陽刻型打成形による白磁皿である。1219～1221は景徳鎮窯系の青花皿で、1219・1221は高台内に放射状の鉋痕が残る。1222は漳州窯系の青花皿で、外底と高台に灰黄褐色の粗砂が多量に付着する。1223は鉢で内外面に草花文。1224は白磁の小杯。1225は白磁の菊花形紅皿である。1226は色絵の蓋物で、赤の上絵付で唐草文を描く。1227は色絵の髪油壺で、赤・その他の上絵付で網目文を描く。1228は青磁の水滴で、兎か。1229は色絵の水滴で赤・その他の上絵付による文様を施す。

1230～1261は陶器。1230～1246は碗である。1230～1239は尾戸窯の灰釉碗で、1230は白象嵌による圏線と印花文、1231は細線のヘラ彫りで白象嵌の暦手文を施すものである。1232は呉須で圏線、檜垣、暦手文を描く。1233は外面上位に強いロクロ目による凹線を3段巡らせる。1234は鉄錆で笹文を描く。1242は京都系の煎じ碗。1243は京都系の色絵小碗で、薄緑他の上絵付で笹文を描いている。1244は瀬戸・美濃産の灰釉碗。1245は肥前産の京焼風陶器碗。1246は肥前産の刷毛目陶器碗である。

1247～1249は皿である。1247は尾戸窯の灰釉中皿で、内面に錆絵を描く。1248は尾戸窯の灰釉見込み蛇の目釉剥ぎ小皿である。1249は唐津系灰釉陶器小皿で、内底に砂目痕が残る。1250

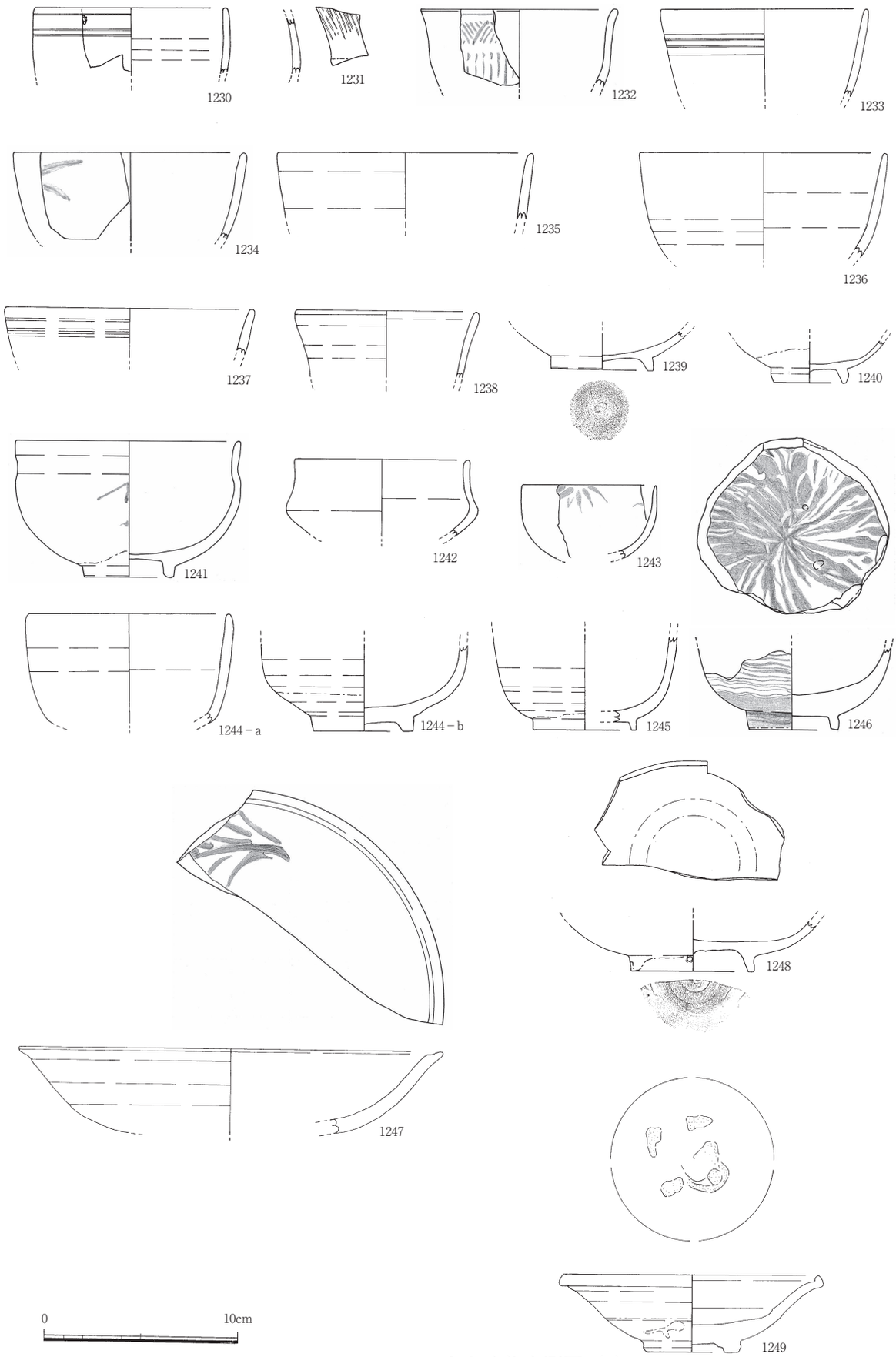


Fig.132　SK52出土遺物実測図（3）

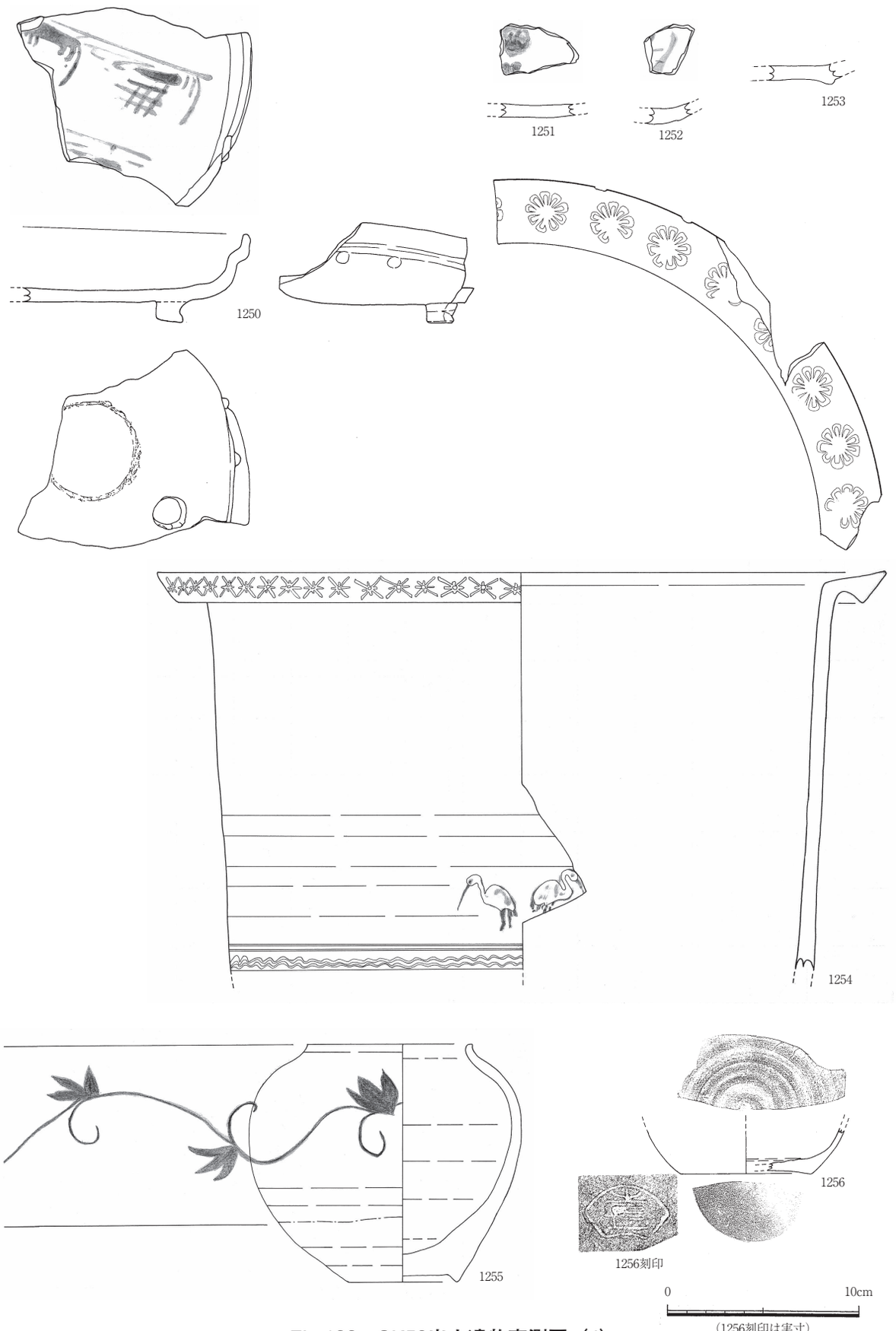


Fig.133　SK52出土遺物実測図（4）

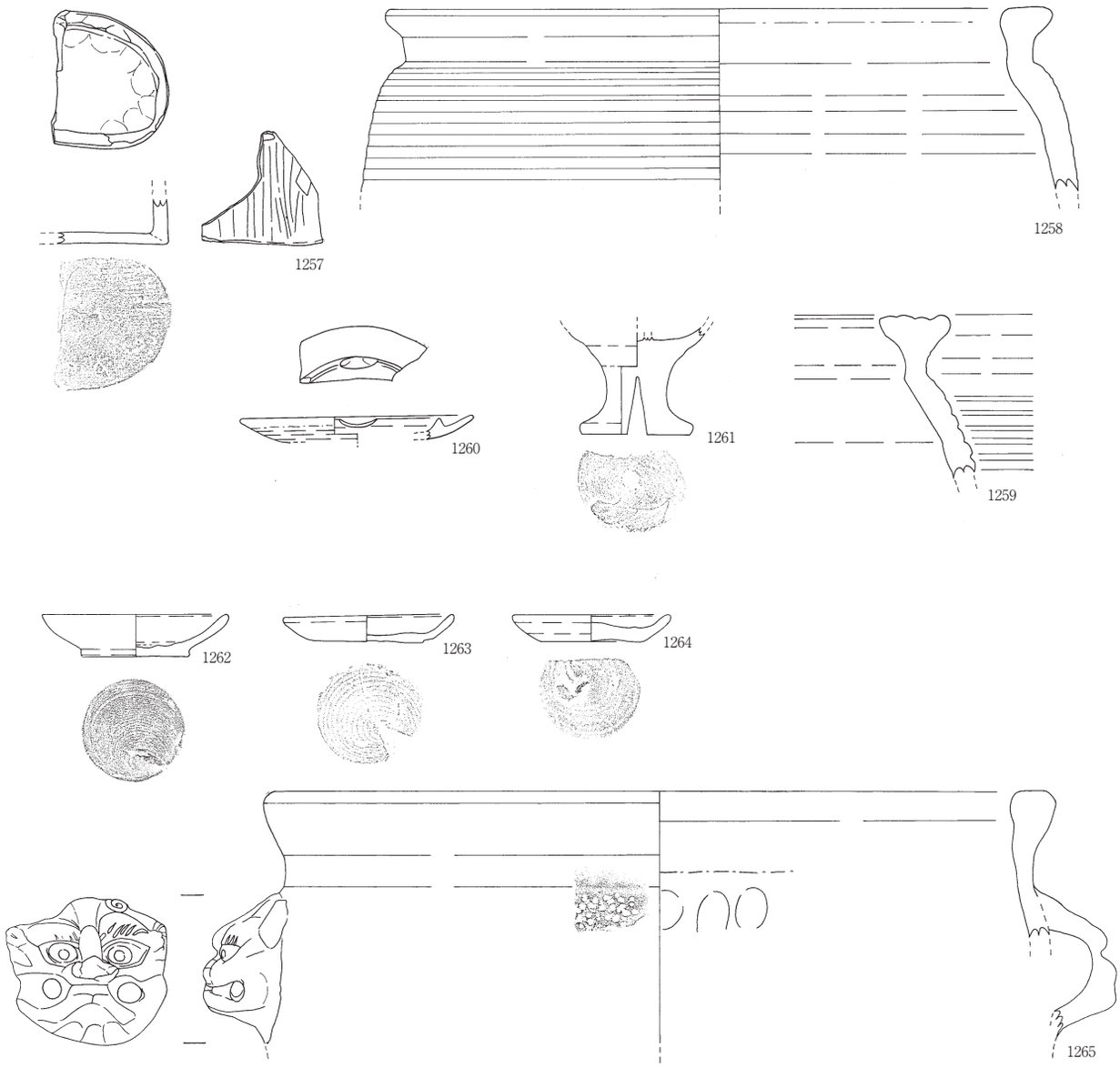


Fig.134　SK52出土遺物実測図（5）　0　10cm

～1253は志野焼。1250は向付で、内面に錆絵を描く。1253は底部片で、外底施釉である。1254は肥前産の三島手の深鉢。口縁部の内外面に白象嵌の印花文と幾何文を巡らせ、体部外面の中位に印刻の白象嵌による立鶴文、その下に白象嵌の波状文を施す。鶴の体部は白象嵌、嘴と足は鉄錆で描き分けている。1255は絵唐津の壺である。1256は備前焼の糸目徳利で、外底に銘印をもつ。1257は鳥の水入れ。1258は鉄釉の甕で、外面上位に多段の稜線をもつ。1259は丹波焼の甕である。1260は灯明受皿で、内面に錆釉を刷毛塗りする。1261はひょうそくで、外底に円錐形の穿孔を穿ち、黒褐色の釉を施す。

1262～1264は土師質土器、1265は瓦質土器である。1262～1264は小皿で、1264は口縁部に灯芯油痕を認める。1265は火鉢で、獣面の双耳を貼付する。

SK52は18世紀中葉に比定される。

SK53（Fig.111・136）

調査区南部で検出された土坑で、浅い皿状の窪みSX25の床面から２基の円形土坑SK41とSK53が並んで検出されたものである。平面形は円形で、径1.06m、深さ24cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトであり、SX25・SK41とも同質である。

出土遺物は、磁器（中碗１・瓶１）、陶器（皿１・蓋物１）、土器（焼塩壺１）である。図示したものは、1266・1267である。1266は灰釉の合子の身で、尾戸窯産か。型押し成形で菊花形に型取る。内面ユビオサエ、外面にはナデを施すが部分的に布目痕が残る。にぶい黄色を帯びる透明の釉を施す。1267は土師質土器の焼塩壺で関西産か。

出土遺物の内容及びSK41との関係からみて、SK53は18世紀前半に比定される。

SK54（Fig.135・136）

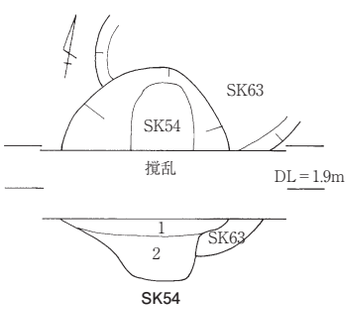
調査区南東部に位置する。南部側の半分以上が撹乱を受けるため形態、規模とも不明であるが、検出規模は東西確認長0.90m、南北残存長0.44m、深さ33cmを測る。床面は平坦で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトと灰黄褐色シルトである。切り合い関係では18世紀のSK63を切っている。また、近接するSK60とは同一個体又は揃いの白磁小皿が出土している。

出土遺物は、磁器（小杯１・小皿１・瓶１）、土器（小皿１）で、他に白象嵌を施した尾戸焼碗体部片も出土している。図示したものは、1268～1270である。1268は肥前産の白磁小皿で、内面に陽刻による菊弁を施す。1269は肥前産の陽刻の染付瓶で、部分的に呉須を施す。1270は灰釉の端反形小碗である。

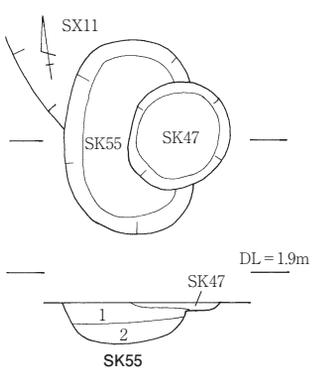
SK54は18世紀に比定される。

SK55（Fig.135・136）

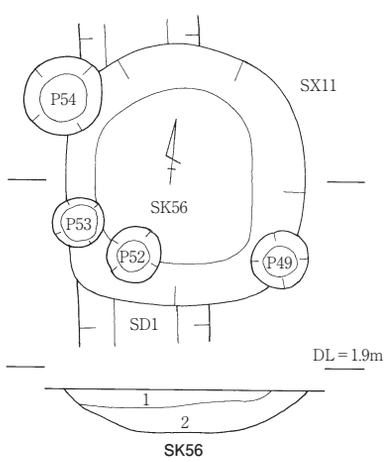
調査区南東部に位置し、焼土溜まりSX11の下面で検出した。平面形は楕円形で、検出規模は長軸1.04m、短軸0.72m、深さ22cmを測る。断面形態は皿状である。埋土はにぶい黄褐色シルトと黒褐色シルトであり、埋土中に橙色土のブロックと炭化物を多く含んでいる。切り合い関係では、18



SK54
1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.5～1cm大の円礫を含む。橙色土粒、炭化物粒を少量含む。）
2層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～1cm大の円礫を含む。橙色土粒、炭化物粒を少量含む。）



SK55
1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.5～2cm大の円礫を含む。橙色土ブロックを多く含む。炭化物を少量含む。）
2層：10YR3/2黒褐色シルト（橙色土粒、炭化物粒を多く含む。）



SK56
1層：10YR4/4褐色シルト（0.5～2cm大の円礫を多く含む。橙色土粒を多く含む。）
2層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.5～1cm大の円礫を多く含む。炭化物、橙色土粒を少量含む。）

0　1m

Fig.135　SK54～56平面図・セクション図

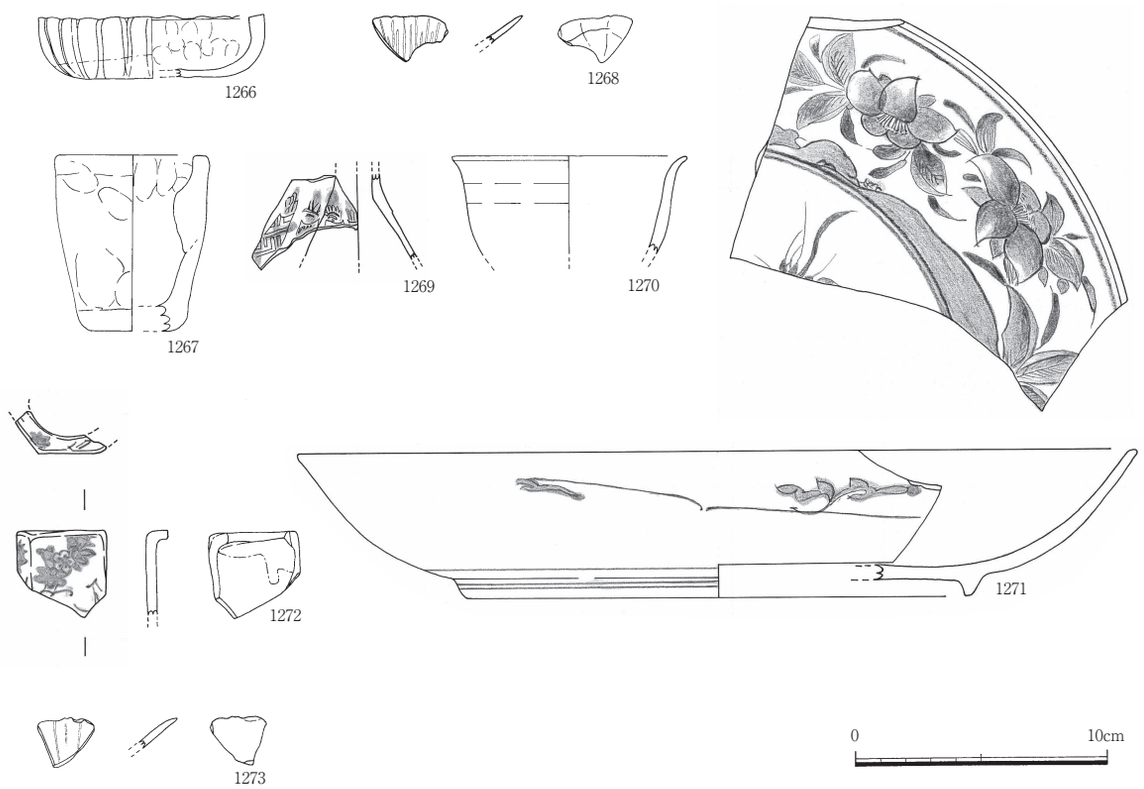


Fig.136　SK53 ～ 56・60出土遺物実測図

（SK53：1266・1267、SK54：1268～1270、SK55：1271、SK56：1272、SK60：1273）

世紀前葉の焼土溜まりSX11と19世紀中葉のSK47に切られる。

出土遺物は、磁器（中碗１・大皿１）、土器（小皿１）である。図示したものは、肥前産の染付大皿（1271）である。

SK55は18世紀前葉に比定される。

SK56（Fig.135・136）

調査区南東部に位置し、焼土溜まりSX11とSD1の下面で検出した。平面形は隅丸方形を呈し、検出規模は長軸1.40m、短軸1.28m、深さ22cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は褐色シルトとにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係ではSD1、18世紀前葉のSX11、P49・52～54に切られる。

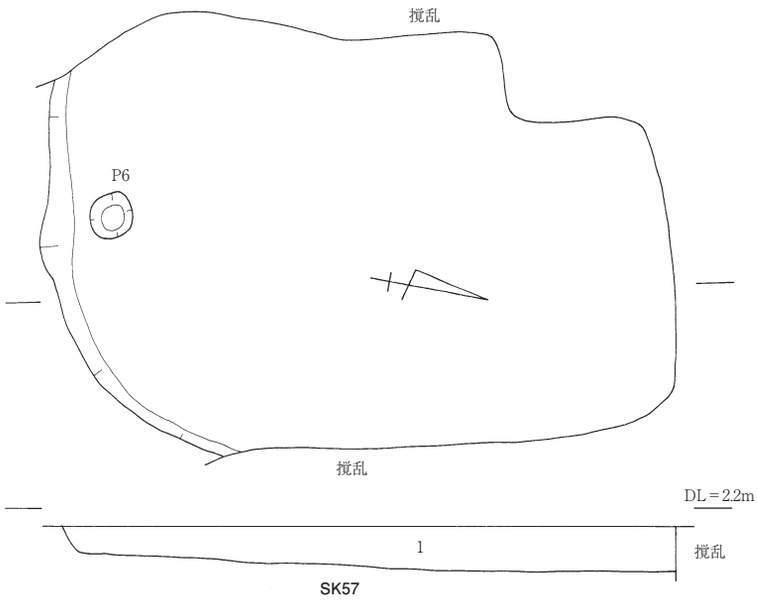
出土遺物は、磁器（小杯１・小皿１・瓶１・壺１・蓋物蓋１・不明１）、陶器（中碗１）、土器（小皿４）である。図示したものは、肥前産の染付磁器（1272）である。1272は平面形六角形で、内面無釉。外面にコンニャク印判による草花文を施す。図示したものの他にも、肥前産の染付網目文碗などが出土している。

出土遺物の内容及びSX11との切り合い関係から、SK56は17世紀末～18世紀前葉に比定される。

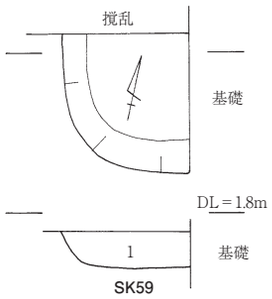
SK57（Fig.137）

調査区中央部に位置する。南部以外の三方が撹乱を受けるため全体の規模、形態は不明であるが、検出規模は南北残存長3.30m、東西残存長2.36m、深さ22cmを測る。床面は平坦で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトである。切り合い関係ではＰ６を切っている。

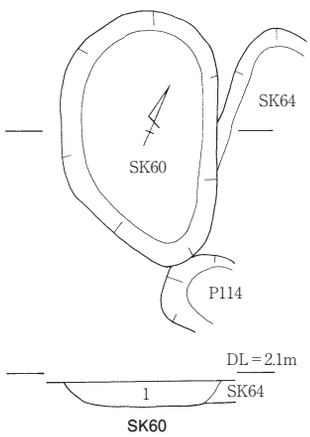
出土遺物は、確認できていない。



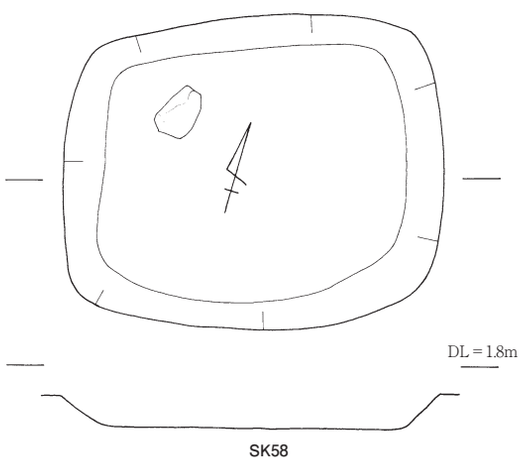
1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～3㎝大の円礫を少量含む。炭化物を少量含む。）

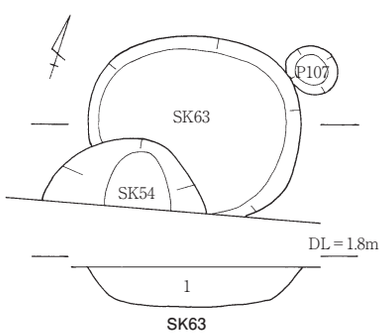


1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（1～4㎝大の円礫、橙色土粒、炭化物を含む。）

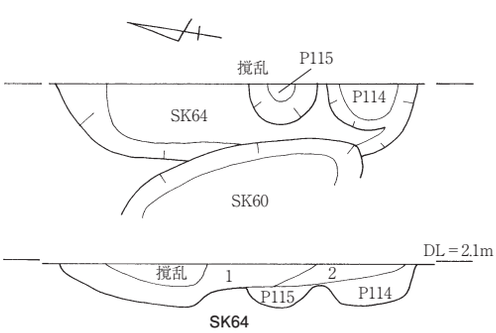


1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.5～3㎝大の円礫を含む。炭化物を少量含む。）

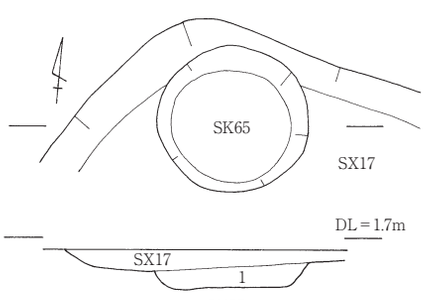




1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.3～1㎝大の円礫を含む。炭化物を少量含む。）



1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.5～1㎝大の円礫を少量含む。炭化物と橙色土粒を少量含む。）
2層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～1㎝大の円礫を少量含む。）



1層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト（0.3～1㎝大の円礫を含む。炭化物を含む。）

0　1m

Fig.137　SK57 ～ 60・63 ～ 65平面図・セクション図・エレベーション図

SK58（Fig.137）

調査区南東部に位置する。平面形は隅丸方形で、検出規模は長軸2.04m、短軸1.70m、深さ20㎝を測る。床面は平坦で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中に円礫を多量に含んでいる。

出土遺物は、土器細片１点である。SK58の時期の詳細は不明である。

SK59（Fig.137）

調査区南東部に位置する。北側と東側が撹乱を受けるため規模、形態とも不明であるが、検出規模は南北残存長0.74m、東西残存長0.68m、深さ20㎝を測る。床面は平坦で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は、尾戸焼とみられる陶器細片１点、磁器細片１点である。

遺物量が少なく年代の特定は難しいが、SK59の廃絶年代は17世紀後半～18世紀の間とみられる。

SK60（Fig.136・137）

調査区南部に位置する。平面形は不整楕円形で、検出規模は長軸1.36m、短軸0.82m、深さ12㎝を測る。断面形態は皿状で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では、東側にSK64と接するが前後関係は不明である。

出土遺物は、磁器（中碗２・猪口１・瓶１）、陶器（中碗４・小皿１・中皿１）、土器（小皿１・蓋１）である。図示したものは、肥前産の白磁菊花形小皿（1273）である。

遺物量が少なく年代の特定は難しいが、SK60の廃絶年代は17世紀後半～18世紀の間とみられる。

SK63（Fig.137）

調査区南東部に位置する。平面形は楕円形で、検出規模は長軸1.14m、短軸0.98m、深さ21㎝を測る。断面形態は皿状で、床面は平坦である。埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では18世紀のSK54に切られる。出土遺物は、肥前産の青磁中皿体部片１点である。

遺物量が少なく年代の特定は難しいが、SK63の廃絶年代は17世紀後半～18世紀の間とみられる。

SK64（Fig.137）

調査区南部に位置する。東部側が撹乱を受けるため全体の規模は不明であるが、南北長1.90m、東西残存長0.40m、深さ22㎝を測る。断面形態は不整形で、壁は緩やかに斜め上方に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトと灰黄褐色シルトである。切り合い関係ではP114・115を切っており、また西に接するSK60との前後関係は不明である。

出土遺物は、確認できていない。

SK65（Fig.137）

調査区南東部に位置する。平面形は円形で、検出規模は径0.80m、深さ12㎝を測る。床面は平坦で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では18世紀後半のSX17に上面を切られている。

出土遺物は無く、年代の詳細は不明であるが、SX17との切り合い関係から、18世紀後半以前に位置付けられる。

SK66（Fig.138）

調査区東部に位置する。北側をSK68に切られ、西側が撹乱を受けるため、全体の規模、形態は不明であるが、南北残存長1.26m、東西残存長1.40m、深さ16cmを測る。床面は平坦で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトであり、埋土中に炭化物と橙色粒を含んでいる。切り合い関係では18世紀後半のSK68に切られる。また、東に接するSK71との前後関係は不明である。

出土遺物は、磁器（中碗5・小碗2・小皿又は五寸皿1・鉢1・猪口1・蓋物1）、陶器（中碗3・鉢1・擂鉢2・不明1）、土器（小皿13）、鉄製品（釘1）、瓦であり、肥前産の染付丸碗、肥前産の白化粧土刷毛目碗、尾戸焼碗、備前焼擂鉢等が出土している。

SK68との切り合い関係から、SK66は18世紀に比定される。

SK67（Fig.138・139）

調査区東部に位置する。南東部以外が撹乱を受けるため、規模、形態とも不明であるが、東西残存長1.10m、南北残存長0.60m、深さ36cmを確認している。埋土は褐色シルトである。切り合い関係では18世紀後半のSK68を切っている。

出土遺物は、磁器（中碗2・小皿1・不明2）、陶器（中碗2・鉢1・灯明受皿1）、土器（小皿3）、瓦であり、肥前産の染付丸碗、鉄釉の灯明受皿備前焼擂鉢の体部片等が出土している。図示したものは1284・1285・1287である。1284は土師質土器片で外面に銘印をもち、焜炉か。1285は備前焼の焼締め陶器で、急須の把手か。1287は石臼の上臼である。

SK67は19世紀に比定される。

SK68（Fig.138・139）

調査区東部に位置する。北側を別遺構に切られ、西側が撹乱を受けるため、全体の規模、形態は不明であるが、南北残存長1.80m、東西残存長1.84m、深さ32cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は１層：灰黄褐色シルト、２層：にぶい黄褐色シルト、３層：にぶい黄褐色シルト質砂である。切り合い関係では18世紀のSK66を切り、18世紀後半のSK50と19世紀のSK67に切られている。

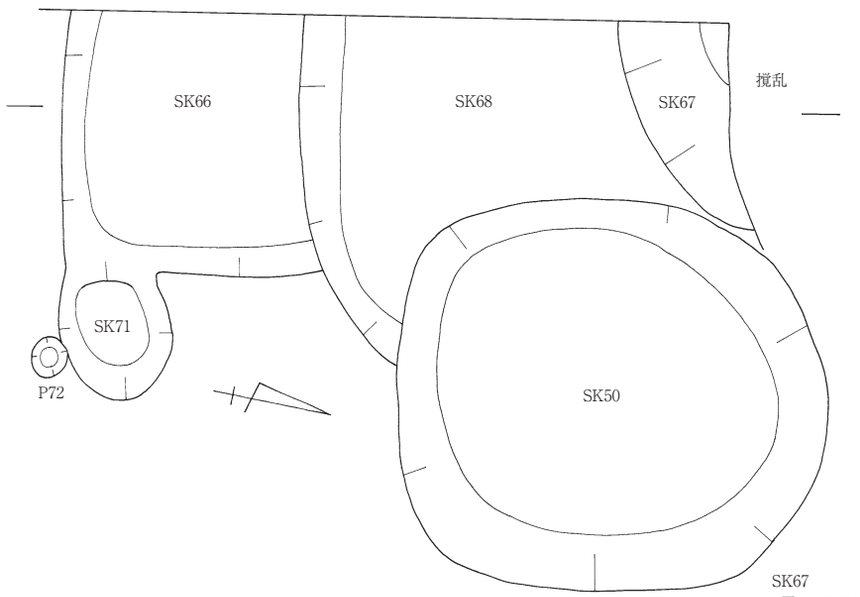
出土遺物は、磁器（中碗・小碗・小皿・五寸皿・中皿・鉢・猪口・碗蓋・香炉）、陶器（中碗・小碗・水注）、土器（焜炉）、石製品（石臼）、瓦で、遺物中には二次被熱を受けるものが含まれる。

図示したものは、1274～1283・1286・1288である。1274～1282は磁器で、1277は中国産、その他は肥前産である。1274は丸形中碗で、内外面に雲龍文を描く。1275は丸形小碗で、外面は草花文、高台内は略化した「大明年製」銘である。1276は青磁染付の猪口。1277は中国景徳鎮窯系の青花皿で、内面は人物文、高台内は「天啓年製」銘である。1278は青磁皿で、内面に片切彫りによる陰刻文様を施す。釉は二次被熱を受け変質している。1279は中皿で、内面に流水文、外面に唐草文が見える。1280は碗蓋、1281は白磁の鉢、1282は青磁の香炉又は火入れである。1283は陶器で、京都系の半筒形灰釉碗である。1286は滑石製の石製品。1288は平瓦で、厚手である。

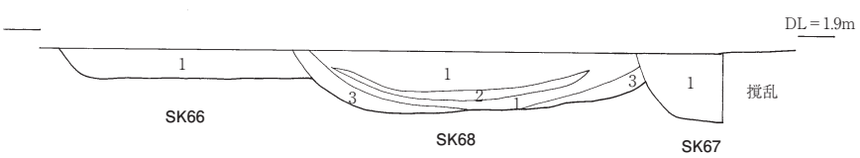
SK68は18世紀後半に比定される。

SK69（Fig.138・140）

調査区南東部に位置する土坑で、落ち込み状の遺構SX17の床面で、埋土の共通するSK69・79が並んで検出されたものである。南側が撹乱を受けるため規模は不明であるが、南北残存長0.68m、

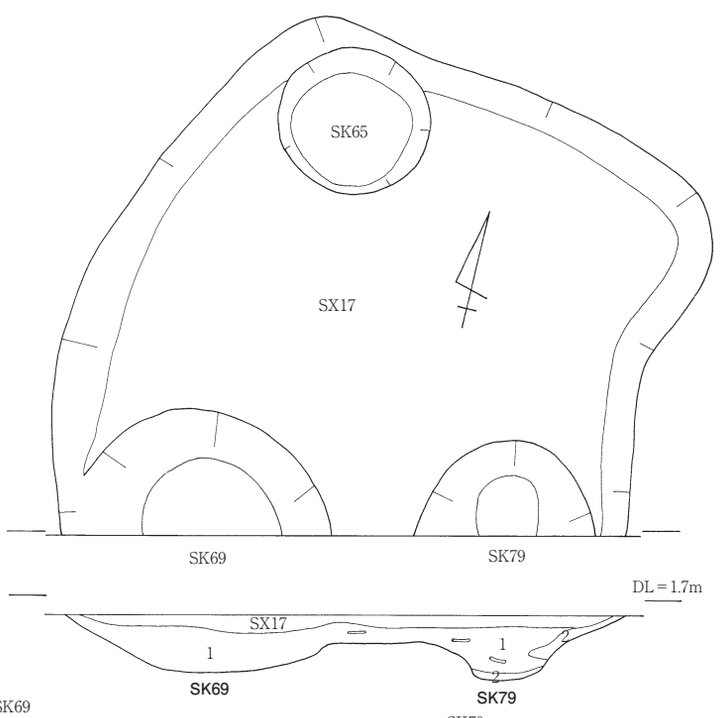


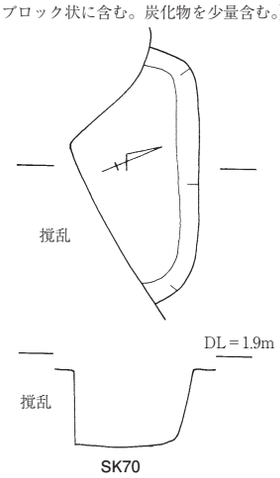
SK67
1層：10YR4/4褐色シルト（炭化物を含む。）

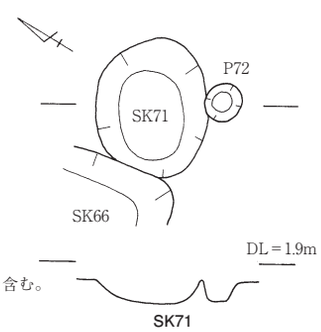


SK66
1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～2cm大の円礫を含む。
炭化物と橙色土粒を少量含む。）

SK68
1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5 ～ 2cm大の円礫を含む。炭化物と橙色土ブロックを含む。）
2層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト（0.5 ～ 1cm大の円礫を含む。炭化物を少量含む。）
3層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト質砂（黄褐色シルトをブロック状に含む。炭化物を少量含む。）







SK69
1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～3cm大の円礫を含む。
炭化物を多く含む。）

SK79
1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～3cm大の円礫を含む。
炭化物を多く含む。）
2層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト

0　1m

Fig.138　SK66 ～ 71・79・SX17平面図・セクション図・エレベーション図

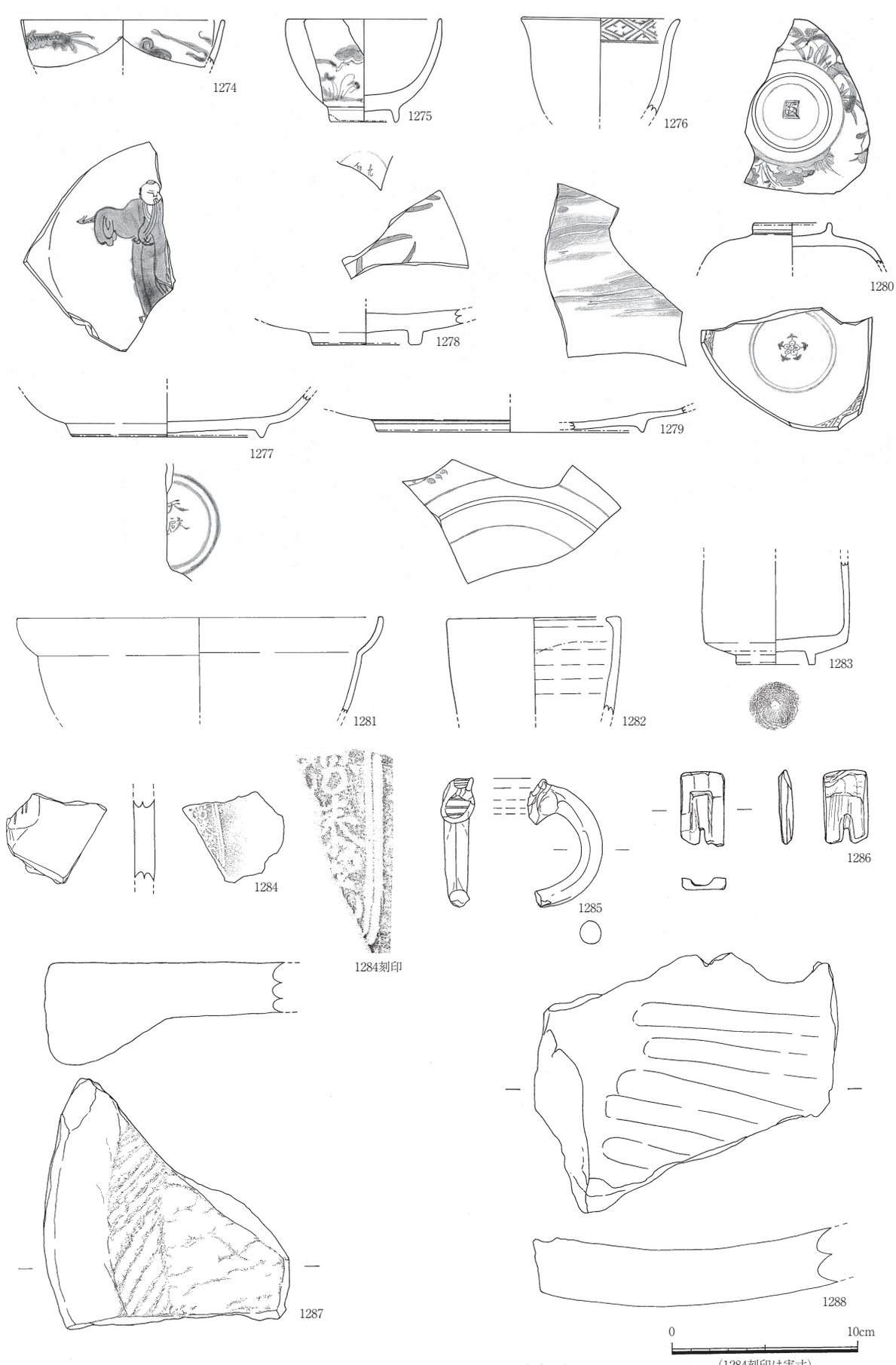


Fig.139　SK67・68出土遺物実測図

(SK67：1284・1285・1287、SK68：1274～1283・1286・1288)

東西確認長1.40m、深さ24cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中には多量の炭化物を含んでいる。他遺構との関係では18世紀後半のSX17に切られ、18世紀後半のSK79が隣接している。

出土遺物は、磁器（中碗4・小碗1・小杯1・鉢2・蓋1・瓶1・香炉1・火入れ又は香炉1・不明2）、陶器（中碗4・小皿3・擂鉢1・瓶1・甕2・溲瓶1・不明1）、土器（小皿4・不明1）である。

図示したものは1289～1295である。1289は肥前産の白磁鉢で、内面に型打成形による陽刻文様を施す。1290は肥前産の染付磁器で、器種不明。1291は灰釉の瓶。1292は信楽産の壺の底部である。1293は灰釉の溲瓶の把手か。1294は備前焼の焼締めの陶器で、獅子の置物か。手捏ね成形で、外面にナデ調整を施しヘラ彫りで造形する。1295は土師質土器の火鉢又は焜炉。たたら成形で、四隅に面取りを施す。この他、唐津系灰釉陶器小皿、肥前産の網目文碗、雨降り文小碗、灰釉丸碗、備前焼擂鉢、京都系の灰釉碗等が出土している。

出土遺物からは時期の詳細がつかめないが、SK79との関係性も考慮すると、SK69の廃絶年代は18世紀後半とみられる。

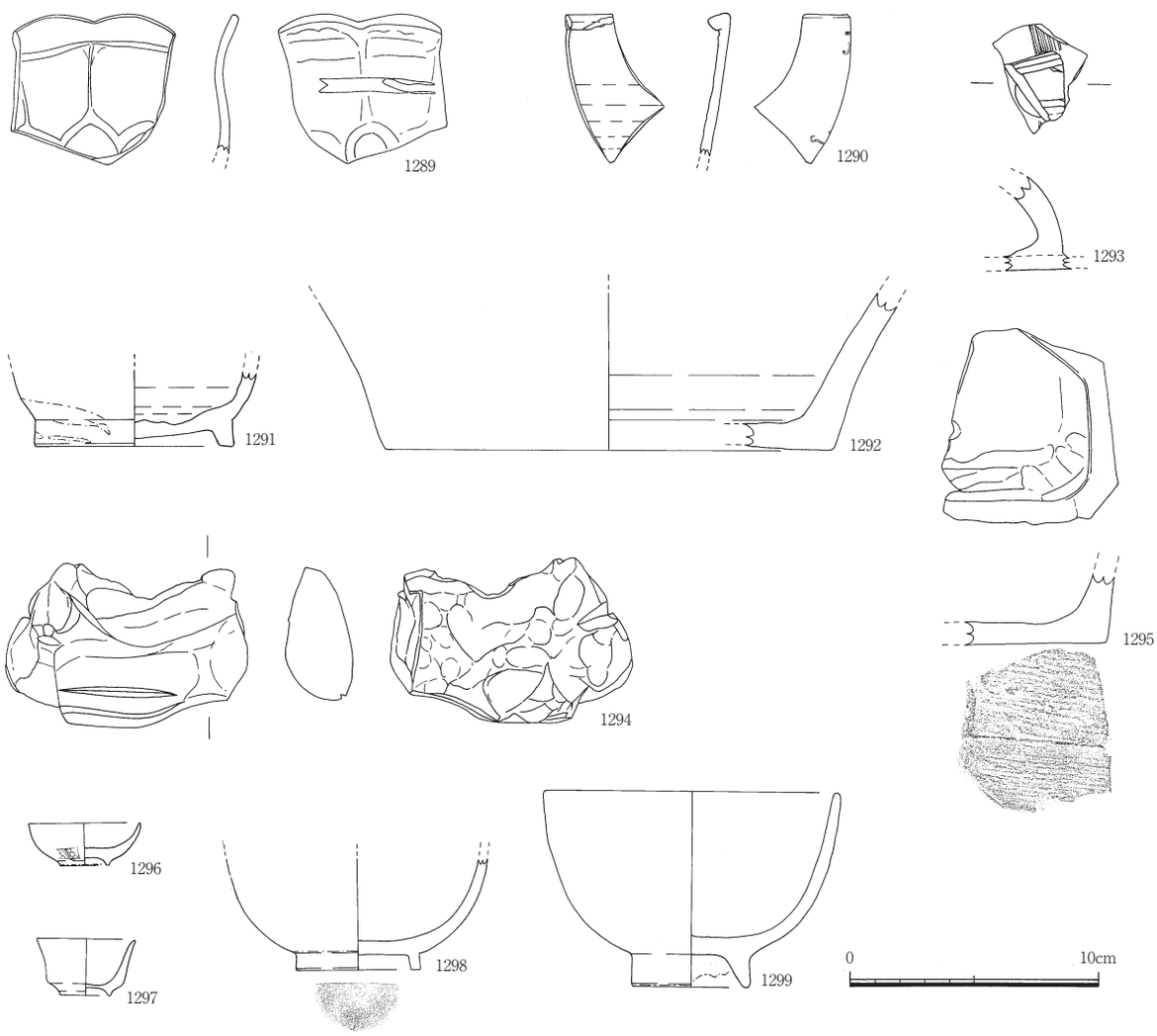


Fig.140　SK69・70出土遺物実測図
（SK69：1289～1295、SK70：1296～1299）

SK70（Fig.138・140）

調査区東部に位置する。南側が撹乱を受けるため規模と形態は不明であるが、東西長1.34m、南北残存長0.70m、深さ40㎝を測る。埋土は褐色シルトで埋土中には炭化物を含んでいる。

出土遺物は、磁器（中碗1・小杯2・小皿1・猪口1・蓋物1・段重1・瓶1）、陶器（中碗2・鉢1・土瓶蓋1）、土器（小皿6・焙烙1）である。

図示したものは1296～1299で、何れも肥前産である。1296は染付の丸形小杯、1297は白磁小杯である。1298は京焼風陶器碗。1299は高台施釉の灰釉丸碗である。この他、SK70では絵唐津小皿、灰釉の土瓶蓋、関西系焙烙等が出土している。

SK70は18世紀後半に比定される。

SK71（Fig.138）

調査区東部に位置する。平面形は楕円形で、検出規模は長軸0.74m、短軸0.60m、深さ12㎝を測る。断面形態は皿状で、埋土は黒褐色シルトである。西に接するSK66とP72との前後関係は不明である。

出土遺物は、土器（小皿1・焙烙1）、鉄製品（釘2）、瓦である。

SK71の時期の詳細は不明である。

SK72（Fig.141・142）

調査区東部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.72m、短軸1.08m、深さ56㎝を測る。断面形態はU字状である。埋土は暗褐色シルト、褐色シルト、にぶい黄褐色シルトであり、最下層には炭化物を多く含んでいる。切り合い関係では18世紀前半のSK51と18世紀のSK75を切り、18世紀末～19世紀初頭のSK43に切られる。

出土遺物は、磁器（中碗2・小杯2・小皿1・鉢1・猪口2・蓋1・蓋物蓋1・紅皿1・水滴1）、陶器（中碗2・小皿1・中皿1・鉢1）、土器（小皿2・火鉢1）、鉄製品（釘1）、石製品（碁石1）で、17世紀後半から18世紀末までの遺物が含まれる。

図示したものは、1300～1303である。1300～1302は肥前産の染付磁器。1300は丸碗で、外面に花文を描く。1301は中皿。1302は蓋物の蓋か。1303は碁石で、粘板岩製である。図示したものの他にも、肥前産の染付広東形碗、肥前産の京焼風陶器碗、刷毛目皿、尾戸焼碗、志野焼の体部片などが出土している。

SK72は18世紀末～19世紀初頭に比定される。

SK73（Fig.141）

調査区東部に位置する。南部側が撹乱を受けるため全体の規模、形態は不明であるが、東西長0.64m、南北残存長0.34m、深さ22㎝を測る。埋土は褐色シルトである。

出土遺物は無く、年代観は不明である。

SK74（Fig.141・142）

調査区東部に位置する。平面形は長方形で、検出規模は長軸1.30m、短軸0.70m、深さ28㎝を測る。断面形態は不整形で、南側にテラス状の高まりをもつ。埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では19世紀のSK78、時期不明のP112を切っている。

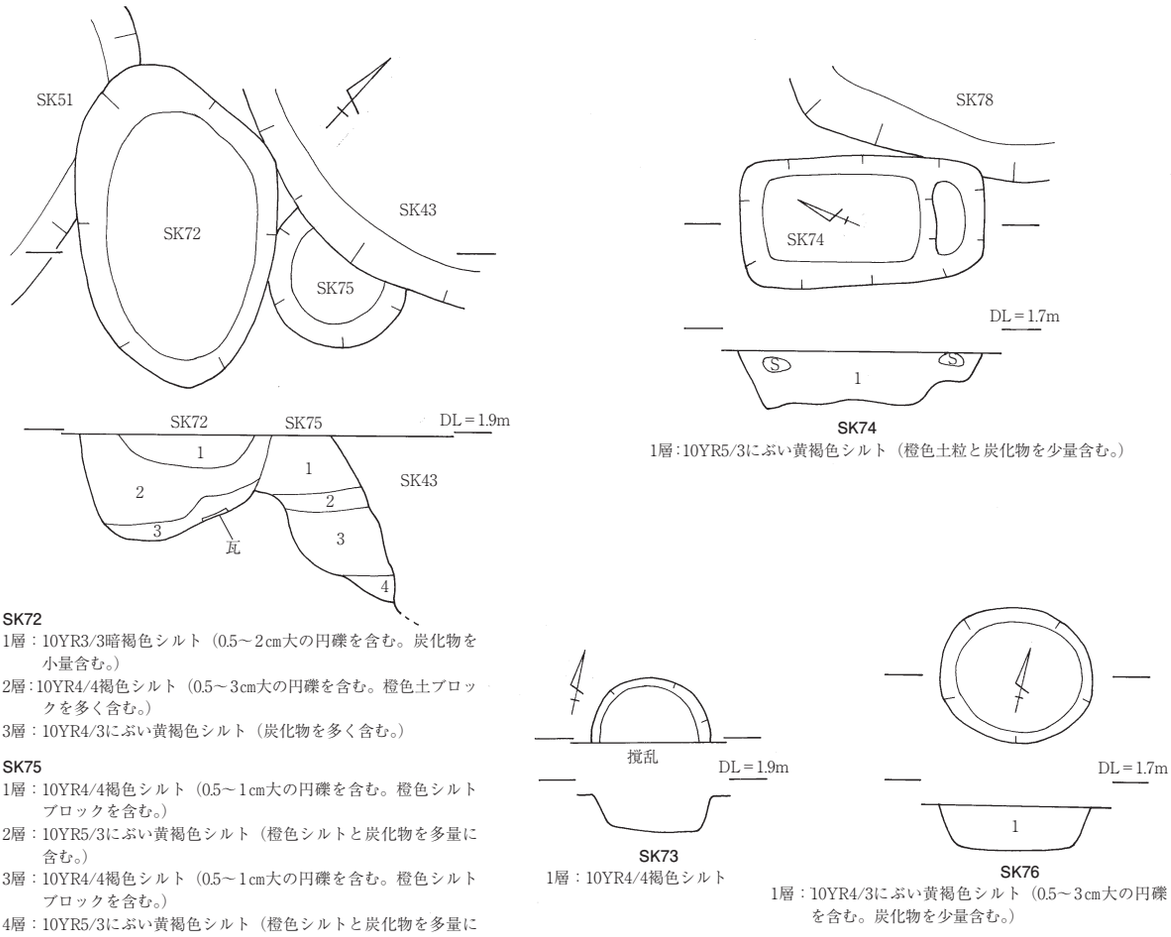


Fig.141　SK72～76平面図・セクション図・エレベーション図

出土遺物は、磁器（皿又は鉢1）、陶器（中碗2）、土器（小皿1・焙烙1）、銅製品（不明1）である。図示したものは、1304・1305である。1304は尾戸窯の灰釉碗で、白象嵌による暦手文を施す。1305は用途不明の銅製品である。

SK74は19世紀前半～中葉に比定される。

SK75（Fig.141）

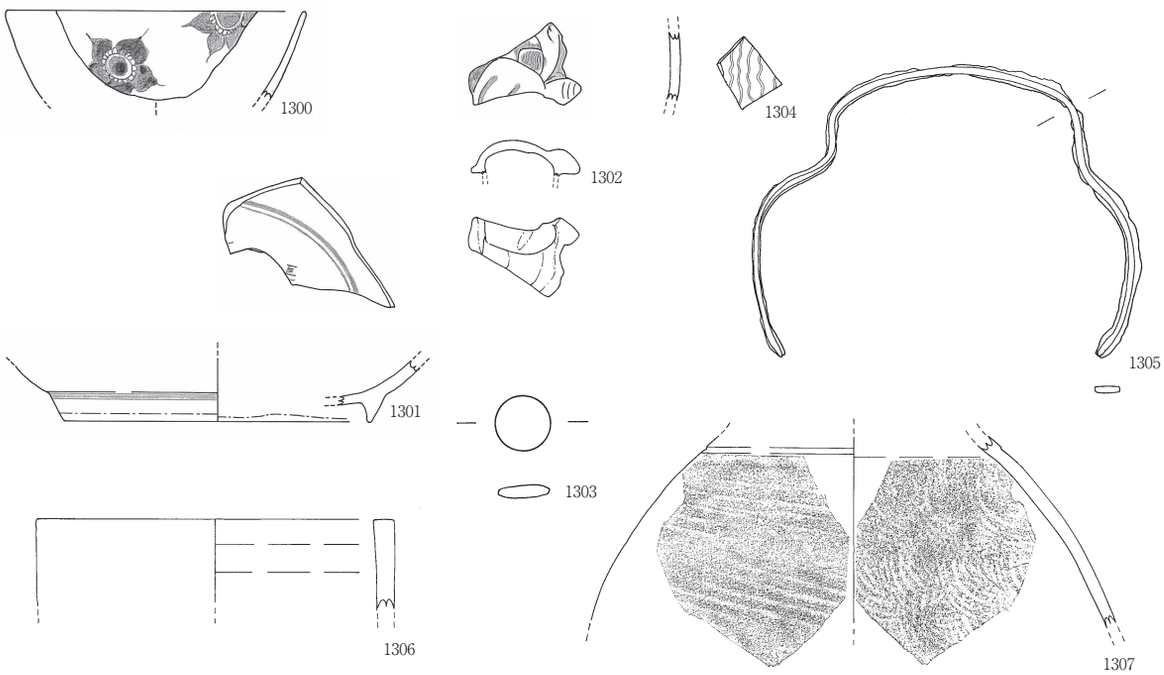
調査区東部に位置する。東側を別遺構によって切られるため規模と形態は不明であるが、検出規模は東西長0.80m、南北残存長0.70m、深さ90㎝を測る。埋土は褐色シルトとにぶい黄褐色シルトであり、埋土中に橙色シルトのブロックと炭化物を多く含んでいる。切り合い関係では、18世紀末～19世紀初頭のSK43とSK72に切られている。

出土遺物は、磁器（中碗1）、陶器（中碗3）、土器（小皿2）、瓦であり、尾戸焼の灰釉碗等が含まれている。

SK75は18世紀に比定される。

SK76（Fig.141・142）

調査区東部に位置し、検出規模は長軸0.82m、短軸0.72m、深さ24㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では19世紀中葉のSK42に上面を切られている。また、近接するSK78とは遺物片の接合関係があり、同時期に機能したことが分かる。



0　10cm

Fig.142　SK72・74・76出土遺物実測図

（SK72：1300～1303、SK74：1304・1305、SK76：1306・1307）

出土遺物は、磁器（中碗2）、陶器（中碗1・甕1・土瓶1・不明1）、土器（小皿2）、瓦片である。

図示したものは、1306・1307である。1306は尾戸窯の灰釉陶器。内面施釉で、灰白色を帯びる透明の釉を施す。1307は鉄釉の壺又は甕で、16世紀末～17世紀初頭の福岡の製品か。外面に並行叩き、内面に同心円状の当て具痕が残る。図示したものの他にも、尾戸焼の灰釉碗、器種不明の尾戸焼体部片、青磁碗の体部片、鉄釉土瓶等が出土している。

SK76は19世紀前半～中葉に比定される。

SK77（Fig.143・144）

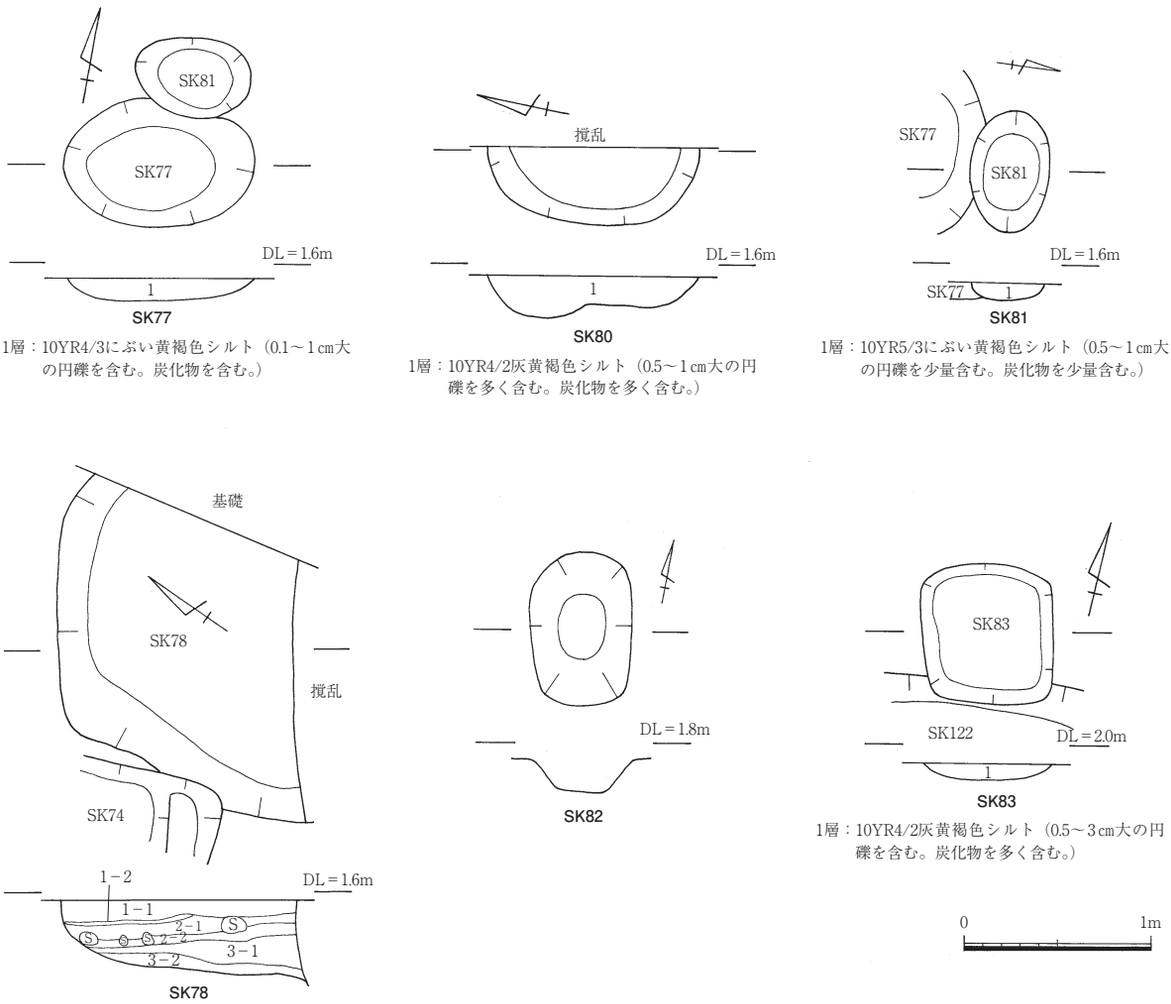
調査区東部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.02m、短軸0.68m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では18世紀のSK81に切られる。

出土遺物は、陶器（小皿1・瓶1）、土器（小皿2）である。図示したものは、備前焼の瓶の底部（1317）である。図示したものの他にも、砂目積みの唐津系灰釉陶器小皿、灰釉碗の体部片、など17世紀から18世紀までの遺物が出土している。

SK77は18世紀に比定される。

SK78（Fig.143・144）

調査区東部に位置する。東側が撹乱を受けるため全体の規模は不明であるが、南北の残存長2.20m、東西の残存長1.50m、深さ40cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトとにぶい黄褐色粘質シルトである。切り合い関係では19世紀のSK74に切られる。また、近接するSK76とは遺物片の接合関係があり、同時期に機能した土坑であったことが分かる。



1－1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.5～1㎝大の円礫を含む。炭化物を含む。）
1－2層：炭化物（にぶい黄褐色シルトに炭化物を多量に含む。）
2－1層：10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト
2－2層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.5～1㎝大の円礫を多量に含む。）
3－1層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト（橙色土をブロック状に多量に含む。）
3－2層：10YR5/3にぶい黄褐色シルト

Fig.143　SK77・78・80・81～83平面図・セクション図・エレベーション図

出土遺物は、磁器（中碗2）、青花（皿1）、陶器（大皿2・中皿1・土瓶蓋1・小壺1・瓶1・灯明受皿1）、土器（小皿2・焙烙1）である。

図示したものは、1308～1316である。1308は初期伊万里の半筒形碗で、鎬による区画間に四方襷と七宝文を描く。1309は草花文の小碗で、高台周囲に灰白色の粗砂と小礫が付着する。1610年代～1630年代に生産されたもので、草創期の肥前磁器である。1310は中国景徳鎮窯系の青花皿である。

1311・1313～1316は陶器。1311は灰釉小壺で、外底回転糸切り、灰オリーブ色の釉を施す。二次被熱を受け釉は変質している。瀬戸14世紀～15世紀の製品で、伝世品か。1313は唐津系灰釉陶器の皿で、内面に胎土目痕が残る。1314は肥前内野山窯の銅緑釉大皿である。1315は肥前産の刷毛目二彩手の大皿で、内面中央に波状の刷毛目を施し、周囲に鉄錆と緑釉で草文を描く。内面に胎土目痕が残る。1316は灯明受皿で、錆釉を施す。1312は讃岐御厩系の瓦質土器焙烙である。図示したものの他にも、砂目積みの唐津系灰釉陶器小皿、焼き締めの瓶、灰釉碗の体部片などが出土している。

SK78は19世紀前半～中葉に比定される。

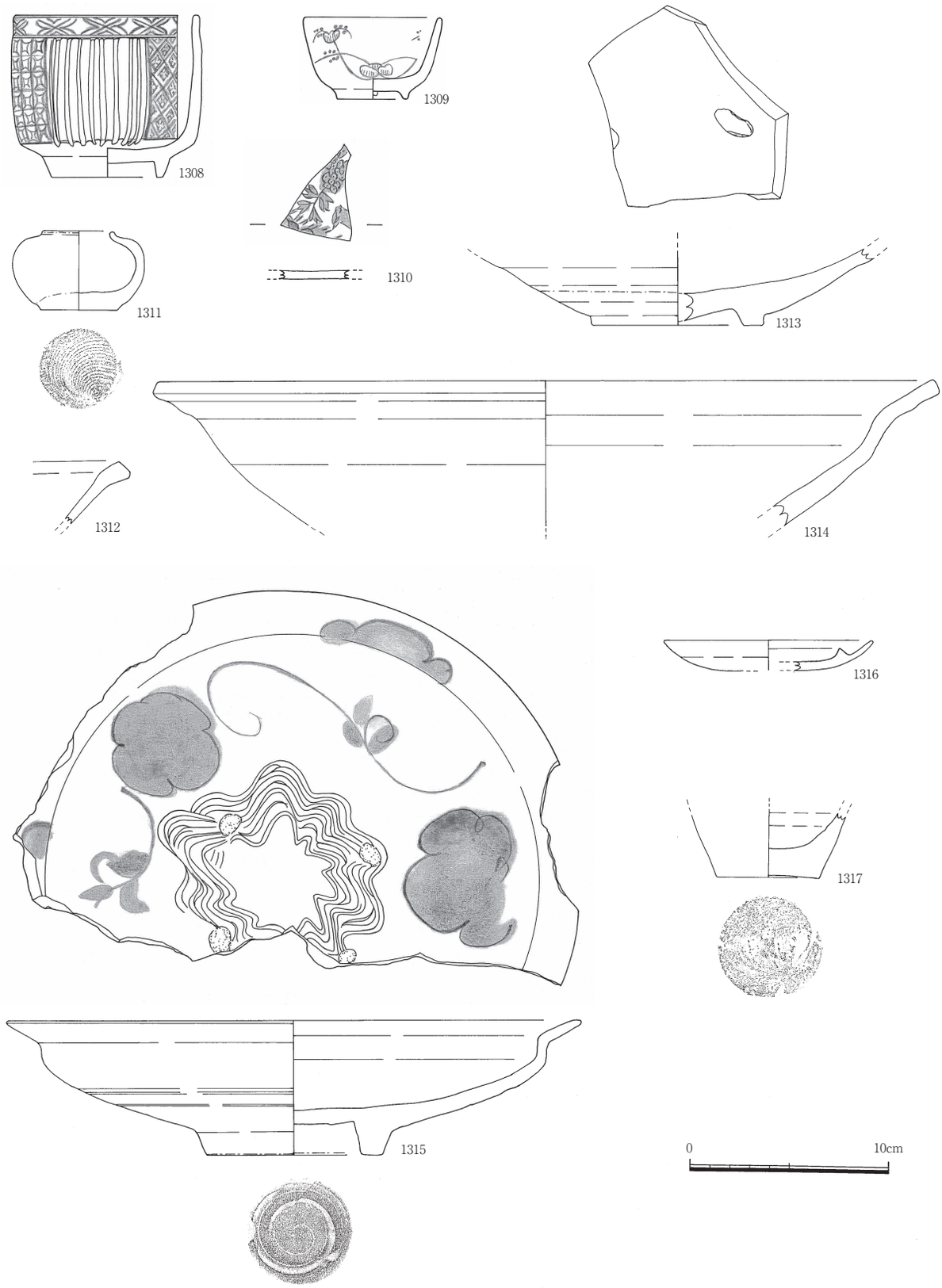


Fig.144　SK77・78出土遺物実測図

（SK77：1317　SK78：1308～1316）

SK79（Fig.138）

調査区南東部に位置する土坑で、落ち込み状の遺構SX17の床面で、埋土の共通するSK69・79が並んで検出されたものである。南側が撹乱を受けるため規模は不明であるが、南北残存長0.50m、東西確認長0.98m、深さ28cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中には多量の炭化物を含んでいる。切り合い関係では18世紀後半のSX17に切られている。

出土遺物は、磁器（中碗8・小碗1・小皿1・中皿2・猪口1・碗蓋1・蓋1・香炉1）、青花（皿1）、陶器（中碗2・中皿1・鉢1・瓶1・土瓶1・灯明受皿3・不明3）、土器（小皿8・不明1）、石製品（石臼1・不明1）、瓦であり、錆釉の灯明受皿、肥前産の白化粧土刷毛目碗など17世紀から18世紀後半までの遺物を含む。

SK79は18世紀後半に比定される。

SK80（Fig.143・145）

調査区東部に位置する。東側が撹乱を受けるため全体の形状は不明であるが、検出規模は南北長1.14mm、東西残存長0.40m、深さ21cmを測る。床面は北側が低く、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中には炭化物を多く含んでいる。

出土遺物は、磁器（小碗1・猪口2・蓋物蓋1・紅皿1・水滴1）、陶器（中碗2・小碗1・不明1）、土器（小皿2・焼塩壺1）である。図示したものは、1318～1322である。1318は肥前産又は肥前系の染付蓋物の蓋。1319は肥前産の白磁菊花形紅皿。1320は白磁小杯である。1321は白磁の腰折形中碗。1322は京都・信楽系の半球形小碗で、外面に錆絵を描く。

SK80は18世紀後半に比定される。

SK81（Fig.143・145）

調査区東部に位置する。平面形は楕円形で、検出規模は長軸0.66m、短軸0.42m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では18世紀のSK77を切っている。

出土遺物は、磁器（小皿1）、陶器（中碗1・小皿1・水滴1）、土器（小皿1）である。図示したものは1323である。1323は尾戸焼の灰釉碗で、外面に白象嵌による暦手文と印花文、鉄錆の象嵌による二重圏線を施している。図示したものの他にも、唐津系灰釉陶器小皿、陶器色絵の水滴等、17世紀から18世紀の遺物が出土している。

SK81は18世紀に比定される。

SK82（Fig.143）

調査区東部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.82m、短軸0.56m、深さ18cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は褐色シルトである。

出土遺物は、下層より出土した土師質土器小皿１点のみであり、遺構の年代観等については詳細がつかめない。

SK83（Fig.143・145）

調査区東部に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、検出規模は長軸0.75m、短軸0.70m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は灰黄褐色シルトで、埋土中に炭化物を多く含んでいる。

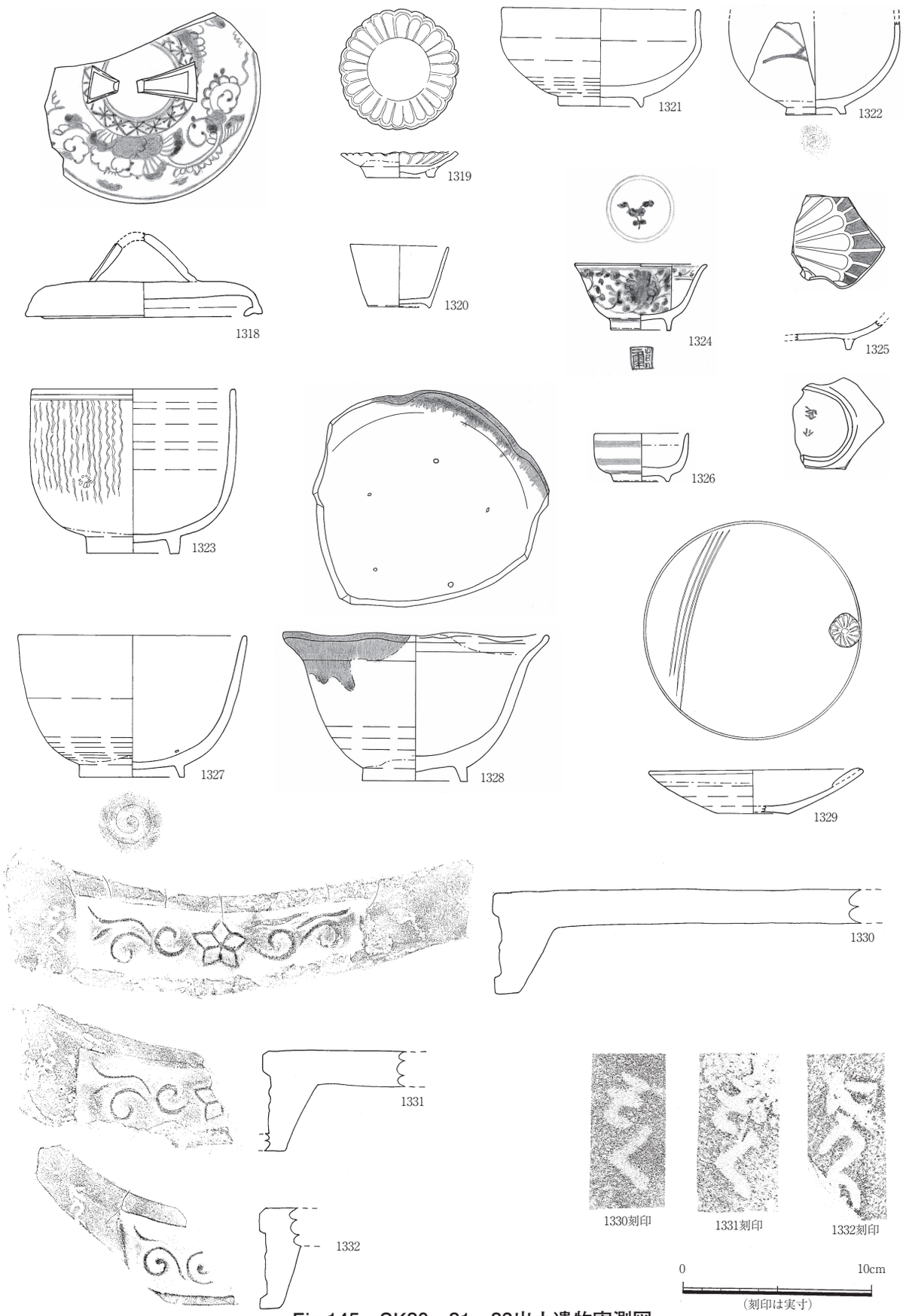


Fig.145　SK80・81・83出土遺物実測図

（SK80：1318～1322、SK81：1323、SK83：1324～1332）

切り合い関係では、17世紀前葉のSK17とSK122を切り、19世紀中葉のSK39に切られる。

出土遺物は、磁器（中碗3・小碗3・小皿2・五寸皿1・鉢1・碗蓋1・猪口1・蓋物1）、陶器（中碗4・小杯1・小皿1・擂鉢1・瓶1・火鉢1・火入れ1・灯明受皿1）、土器（小皿2）、瓦である。

図示したものは、1324～1332である。1324は青花小碗で、中国景徳鎮窯19世紀前半の製品である。1325・1326は国産磁器。1325は肥前有田産の変形形小皿で、貼付高台。内面に型による菊花の陽刻文様を施し、高台内に銘をもつ。1326は蓋物である。1327～1329は陶器。1327は尾戸窯の灰釉丸碗で、高台内に渦状の鉋痕が残る。1328は尾戸窯の灰釉鉢。ロクロ成形の後、口縁部を輪花形に変形させる。口縁の一部に鉄釉を流し掛けする。1329は京都系の灯明受皿で、型作りによる菊花を貼付する。1330～1332は軒平瓦。1330・1331は「とく」銘印をもち、徳王子（高知県香南市徳王子）の製品である。1332は「にろ□」銘印をもつ。

この他にも、染付広東形碗の蓋、備前焼擂鉢、鉄絵燗徳利の体部片、灰釉半球形碗の体部などが出土している。また、磁器では、肥前産の広東形碗は含まれるが、瀬戸・美濃産の染付端反形碗や能茶山窯産磁器は確認できていない。

SK83は18世紀末～19世紀前葉に比定される。

SK84（Fig.146～176）

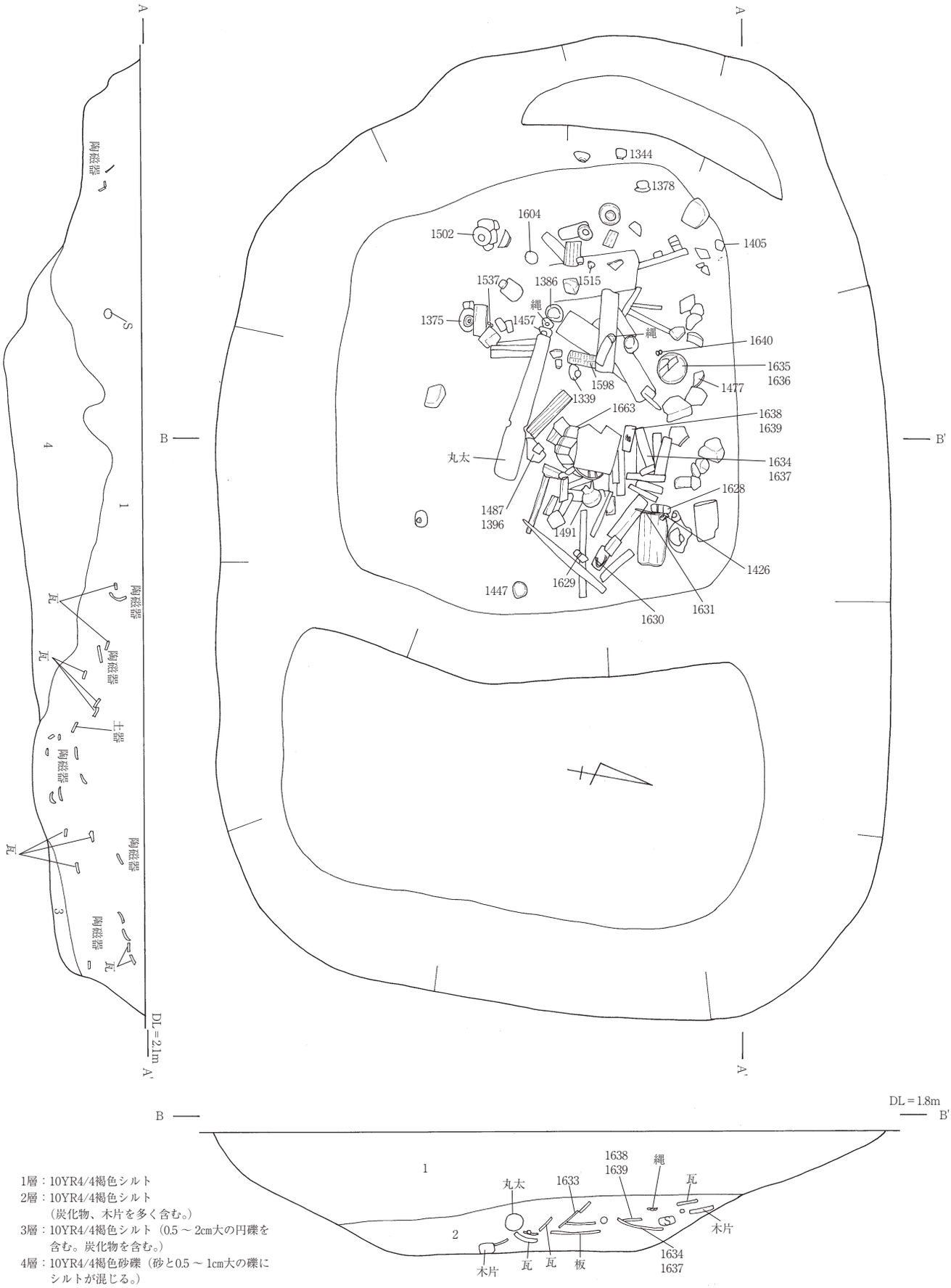
調査区東部に位置する。平面形は不整形で、検出規模は長軸7.20m、短軸4.70m、深さ80～100cmを測る。床面は西側がやや低く、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は1～3層が褐色シルト、4層が褐色砂礫であり、1～3層内には瓦片と土器・陶磁器類を多量に含む。また西側の下層に堆積する2層埋土中には、土器、陶磁器、瓦片とともに炭化物、木片、木製品が多量に含まれている。切り合い関係では、17世紀前葉のSK17と18世紀中葉のSK52、及びSD4・8を切る。

出土遺物は、磁器（中碗156・小碗71・小杯52・うがい茶碗1・小皿五寸皿86・中皿2・大皿2・鉢24・猪口18・碗蓋49・瓶15・神酒徳利6・蓋物17・合子5・段重11・鬢油壺5・紅皿15・水滴2・仏飯器3・香炉4・火鉢1・ミニチュア1・不明5）、陶器（中碗59・小碗24・小杯1・小皿41・中皿6・鉢9・擂鉢26・捏鉢7・片口1・鍋行平26・鍋蓋9・青花（蓋1）・土瓶急須25・燗徳利1・水注6・瓶11・壺1・甕22・蓋2・蓋物9・合子1・香炉2・火入れ2・灯明受皿34・火鉢4・水鉢2・植木鉢4・餌鉢1・鳥の水入れ4・柄杓4・ミニチュア3・不明11）、土器（椀1・杯3・小皿28・白土器小皿13・羽釜2・焙烙11・胡麻煎り5・火消壺3・焜炉20・火鉢4・竈5・型1・泥面子1・人形1・ミニチュア1）、窯道具（ハマ6・トチン1・匣鉢2）、銅製品（煙管雁首1・匙1・簪2・不明1）、鉄製品（釘29・不明10）、古銭（寛永通宝2）、石製品（硯2）、木製品、木片、瓦片で、19世紀を中心に、17世紀初頭から19世紀中葉までの遺物が含まれる。

図示したものは、1333～1641である。

1333～1437は磁器。1435は中国産、1333～1337・1341・1344～1346・1370～1374・1391・1392・1394～1396・1412は能茶山窯産、1339・1383は瀬戸・美濃産、1340・1352～1357・1365・1368・1369・1381・1399は関西系、1385・1431・1432・1437は産不明、その他は肥前産又は肥前系である。

1333～1339は中碗である。1333～1335は能茶山窯の広東形碗で、1333は角枠内「茶」、1334は「サ」銘をもつ。1336・1337は能茶山窯の端反形碗で、1336は「能茶山製」、1337は角枠内「茶山」



1層：10YR4/4褐色シルト
2層：10YR4/4褐色シルト
（炭化物、木片を多く含む。）
3層：10YR4/4褐色シルト（0.5 ～ 2cm大の円礫を含む。炭化物を含む。）
4層：10YR4/4褐色砂礫（砂と0.5 ～ 1cm大の礫にシルトが混じる。）

Fig.146　SK84平面図・セクション図・遺物出土状況図

銘をもつ。1340～1343は碗蓋。1344～1357は小碗。1344・1345は能茶山窯の丸形小碗で「サ」銘、1346は角枠内「茶」銘をもつ。1347は色絵染付の丸形小碗で、呉須絵と赤の上絵付による寿字文を描く。1348は色絵の丸形小碗で、揃いのものが4個体出土している。1351は赤の上絵付で網目文を描くものである。1352～1357は関西系の小碗である。1354は蛍手の素地に赤・薄赤・黄・黒の上絵付で花文を描くもので、揃いで数個体が出土している。1358～1369は小杯及び薄手酒杯である。

1370～1387・1389は皿。1370～1374は能茶山窯産の輪花形皿で、1370は角枠内「茶」、1371～1373は「サ」、1374は角枠内「茶山」銘をもつ。1379は肥前有田の芙蓉手の小皿。1380は色絵染付の小皿で、呉須による圏線と赤・薄緑・黒の上絵付で松文を描く。1382は陽刻型打成形の白磁菊花形皿で、内面に陽刻の菊花を施す。1383は瀬戸・美濃産の白磁皿で、陰刻による文字文を施す。1385は方形の小皿で、瑠璃釉を施す。1388は色絵の大皿又は大鉢で、内面に黄・黒・その他による文様を、外面に雲を描く。1390は青磁の皿又は鉢である。

1391～1393は猪口。1394～1400は鉢。1401～1407は蓋物の蓋、1408・1409は合子の蓋である。1410・1411は段重。1412～1414は蓋物。1415は白磁の合子で、外面に陽刻による蓮弁文と菊弁を施す。1416は火鉢。1417～1419は髪油壺。1417・1418は草花文、1419は赤の上絵付で文様を描く。1420～1424は瓶。1425・1426は仏飯器。1427はうがい茶碗で内面に山水文を描く。1428は白磁の菊花形紅皿。1429・1430は白磁のミニチュアである。1431・1432は蓋物か。型押し成形で内面にユビオサエとユビナデ痕が残る。外面には型による粒状と花弁状の陽刻文様が施される。1433・1434は水滴。1433は上面に菊花の陽刻文様を施す。葉は呉須、菊は鉄錆で塗り分ける。1435は中国景徳鎮窯の青花で、蓋か。方形で、周縁に円形の透かしを施し、中央には呉須と釉裏紅で草花文を描く。18世紀第4四半期～19世紀中頃の製品である。1436は筆立てか。外面に縞状の文様を描き、中位に透かしを巡らす。1437は白磁の戸車である。

1438～1537は陶器。1438～1447は中碗である。1438～1445は尾戸窯の灰釉碗で、1438は白土と鉄錆で花文を描き、高台内に渦状の鉋痕を残す。1439・1441～1445は高台内を深く平坦に削り出すものである。1439は広東形碗で、外面に鉄錆で略化した笹文を描く。1440～1445は腰張形碗。1440は略化した錆絵を描き、光沢の強い透明の釉を施す。1444は灰色の胎土に白化粧を施した後、灰白色の釉を施している。1446·1447は唐津系灰釉陶器の碗で、16世紀末～17世紀初頭の製品である。1448は尾戸窯の端反形小碗。碁笥底で、灰白色の白濁した釉を施す。1449は信楽産の端反形小碗で、口縁部に緑釉を施す。1450～1454は灰釉小碗。1452は鉄錆と白土で宇治橋と「通圓」の文字を描く。1454は舞子焼の小碗で、片面に白化粧土を掛け分けた後、灰釉を施す。胎土中には黒色粒を多く含む。1455は陶器未成品又は土師質土器か。外面に鉄錆と赤色顔料で花文が描かれる。

1456～1467は皿。1456・1457・1459は尾戸窯の灰釉小皿で、見込みを蛇の目釉剥ぎし、外面に錆絵の笹文を描く。1458・1460・1461は能茶山窯の鉄釉蛇の目釉剥ぎ小皿である。1462は端反形の灰釉小皿で、白土のイッチン描きによる文様を施す。1463は蛇の目高台の灰釉皿で、呉須で草文を描く。1467は尾戸窯の灰釉中皿で、見込み蛇の目釉剥ぎし、内面の三方に鉄錆で宝珠を描く。1465は備前の焼締めの小皿で、内面に型による陽刻文様をもつ。1466は口縁部輪花形の灰釉皿である。

1468は口縁部輪花形の灰釉鉢で、尾戸窯産か。外面に別個体の口縁部片が溶着している。1469は

変形形の皿又は鉢。ロクロ成形の後、口縁部を切り取り、花状の透かしを入れる。にぶい黄色の半透明の釉を施す。1470は志野焼で、向付か。16世紀末～17世紀初頭の製品である。1471・1472は瀬戸・美濃産の鉢又は碗である。1473は黒色の鉄釉を施し、高台に抉りを入れる。

1474は捏鉢。1475～1477は擂鉢である。1476は瀬戸・美濃産の擂鉢で、灰白色の胎土に施す。1477は明石系の擂鉢である。1478は能茶山窯産の片口で、鉄釉を施す。1479は大鉢で、内外面に白化粧土刷毛目と打刷毛目を施す。1480～1482は鍋、1483・1484は行平、1485・1486は鍋蓋である。1480～1482は鉄釉の鍋で、能茶山窯産か。1485は飛鉋を施し、白土と緑釉による菖蒲文と白土イッチン描きによる文様を描く。1486は多段の沈線と白土イッチン描きによる文様を施している。

1487～1492は土瓶、1493～1498は土瓶又は急須の蓋である。1491・1498は後手の雲助形土瓶と蓋で、灰釉を施し、呉須で草花文と蝶を描く。1493は二重の底部をもつものである。把手は中空で、体部に円孔を穿ち、外側の底部内につながる構造をもつ。体部は非常に薄手で、灰釉を施す。文様は白化を盛上げるように塗り、その上へ鉄錆、呉須、緑釉で人物と巻物を描く。1500は壺類の蓋か。1501・1502は後手の水注。1501は尾戸窯の灰釉水注で、錆絵で略化した文様を描く。1502は京都系の水注。淡黄色を帯びる透明の釉を施し、鉄錆で半菊文様を描いている。

1504～1509は甕。1504～1508は能茶山窯産の鉄釉甕で、底部1508は内底に棒状の焼台痕が残る。1510～1513・1515は瓶類。1510・1511は鉄釉の小瓶、1512は灰釉の小瓶である。1513は尾戸窯の花生か。1515は灰釉の小瓶で、上半に銅緑釉を施す。1516は円筒形の灰釉花生で、口縁部から緑釉を流し掛けする。1514は瀬戸・美濃産の灰釉の植木鉢である。

1517～1522は灯明受皿。1523は台付灯明受皿で、灰白色の胎土に鉄釉を施す。尾戸窯又は能茶山窯の製品とみられる。1524は焜炉。外面に多条の沈線を巡らせ、鉄釉を施す。1525は火入れで、外面に白化粧土施釉の後、灰釉を施す。口縁部に敲打痕が残る。1526は手焙りで、灰釉を施し青白色の釉と鉄釉を部分的に流し掛けする。

1527・1528は京都・信楽系の灰釉蓋物と蓋である。1529は灰釉の合子蓋で、鉄錆と呉須で紅葉を描く。1530は水注類か。1531・1532は京都・信楽系の灰釉柄杓で、内面の中位に鉄錆で圏線を巡らす。1533は焼締めで部分的に灰黄褐色の釉を掛け分ける。1534・1535は尾戸窯の製品で、灰釉の水指と蓋か。1536は灰白色を帯びる透明の釉を施し、外側面に錆釉を施す。側面には透かしが施される。1537は織部焼で、瓢箪形のミニチュア製品である。鉄錆で梅花と格子文を描き部分的に緑釉を施す。1538は素焼きで、未成品か。1539～1541は窯道具で、近辺に所在する尾戸窯からもたらされたものか。1539はトチンで、窯印をもつ。1540・1541はハマである。

1542～1574・1576・1577は土師質土器、1575・1578は瓦質土器である。1542は杯、1543～1545は小皿で口径6㎝台の小型のものである。1546～1555は尾戸窯の白土器小皿で、1546～1551は寿字文、1552・1553・1555は高砂文、1554は松竹梅鶴亀文の陽刻文様をもつ。1555は輪高台をもつもので、陽刻文様も違いが認められる。

1556～1558は関西系の焙烙。1559～1562は胡麻煎りで、外面に型押しによる陽刻文様を施す。1563は羽釜。1564は蓋か。練り込み手の胎土をもち、天井部に円孔を穿つ。1565～1575・1578は焜炉。1565・1566は丸形の焜炉で、口縁部内面に型作りによる突起を貼付する。1567～1574は筒形の焜

炉で、1569～1574は体部前方の下位に窓をもつ。1567は口縁部内面に手捏ねによる突起を貼付するもの、1569・1572・1573は体部内面下位に断面三角形の突帯を貼付するもの、1574は段を設けるものである。1570は白色系の胎土をもつもので、内部施設をもち、口縁部内面に箱形の突起を貼付する。1571は外面に赤彩を施す。1575・1578は瓦質土器の箱形の焜炉で、体部前方の下位に方形の窓をもつ。1578は外面に印花文を施し、松笠形の双耳を貼付する。1576·1577は焜炉のさなである。1579～1581は竈。1582は焜炉又は竈か。底部を持たず、内面下位に突帯を貼付する。1583・1584は火消壺。1585～1589は瓦質土器の火鉢である。1589は外面に粒状の文様と印花文を施し、獣面の双耳を貼付する。

1590・1591は施釉土器で、焜炉と土瓶のミニチュアである。1592は南瓜などを表した蓋物や香合の蓋にあたるものか。手捏ねで成形した後、ヘラ彫りと刺突で細部を表現している。胎土は緻密で、摘み部分に橙色、蓋部分に浅黄色の粘土を使い分けている。1593は面子状の土製品で玩具類か。1594は型である。1595は土師質土器の人形。型押し成形貼り合わせで、中空である。

1596～1598は石製品。1596・1597は硯。1596は粘板岩製で、砥石に転用している。両面に釘彫を認める。1597は凝灰岩製で、海部を欠損する。1598は用途不明の棒状製品で、全面に斜方向の刻み痕が残る。

1599～1604は銅製品。1599は煙管の雁首。1600・1601は棒状の銅製品で、簪の一部とみられる。1602は扁平棒状で、円形の頭部をもつ。頭部には円孔が穿たれる。1603は板状、1604は薄い円盤状の銅製品である。1605・1606は鉄製品。1605は鉄釘、1606は刀子の一部か。1607～1611は寛永通宝である。

1612～1620は軒平瓦、1621は丸瓦、1622は平瓦である。1617・1619・1623・1624は「とく」、1622は角枠内「トク周」銘印をもち、徳王子産（高知県香南市徳王子）、1625は「安喜」銘印をもち、安芸産（高知県安芸市）である。この他、1620は「□子定」、1626は「御瓦□」銘印をもち、1618・1621も銘印を認める。

1627～1641は木製品。1627～1630は下駄で、1627～1629は草履下駄、1630は連歯下駄である。1629は全長15.0cm幅4.8cmの小型品で、子ども用か。1630は棕櫚縄の鼻緒を伴って出土する。1631は箸。1632は用途不明の板状製品で、表裏に赤漆と黒漆を施す。

1633は桶の底板。出土時には高さ25.5cm厚さ１cmの側板12枚を伴って完形で出土しており、底径約30cm、器高25.5cmの桶となる。側板の一枚には底部付近に穴が穿たれ、ここに径４cmの木製の栓がはめ込まれていた。1634と1637は同一個体で、桶の底板と側板である。出土時には底部と高さ28.5cm厚さ1.2cmの側板11枚がまとまって出土しており、本来は底径29～30cm、器高28.5cmの桶であったとみられる。1635と1636は手桶の底板と側板である。出土時には底部に、高さ18.5cm厚さ1.0cmの側板11枚と、柄の部分になる高さ26.0cm厚さ1.0cmの側板１枚が組み合わさり、完形で出土している。1640は用途不明の板状製品。板を粗く削り取り、瓢箪形に整形している。1641は板状製品。両面に墨書が残り、片面には馬の絵が描かれる。

SK84は19世紀中葉（幕末）に比定され、建物の取り壊し等に伴う廃棄土坑と考えられる。

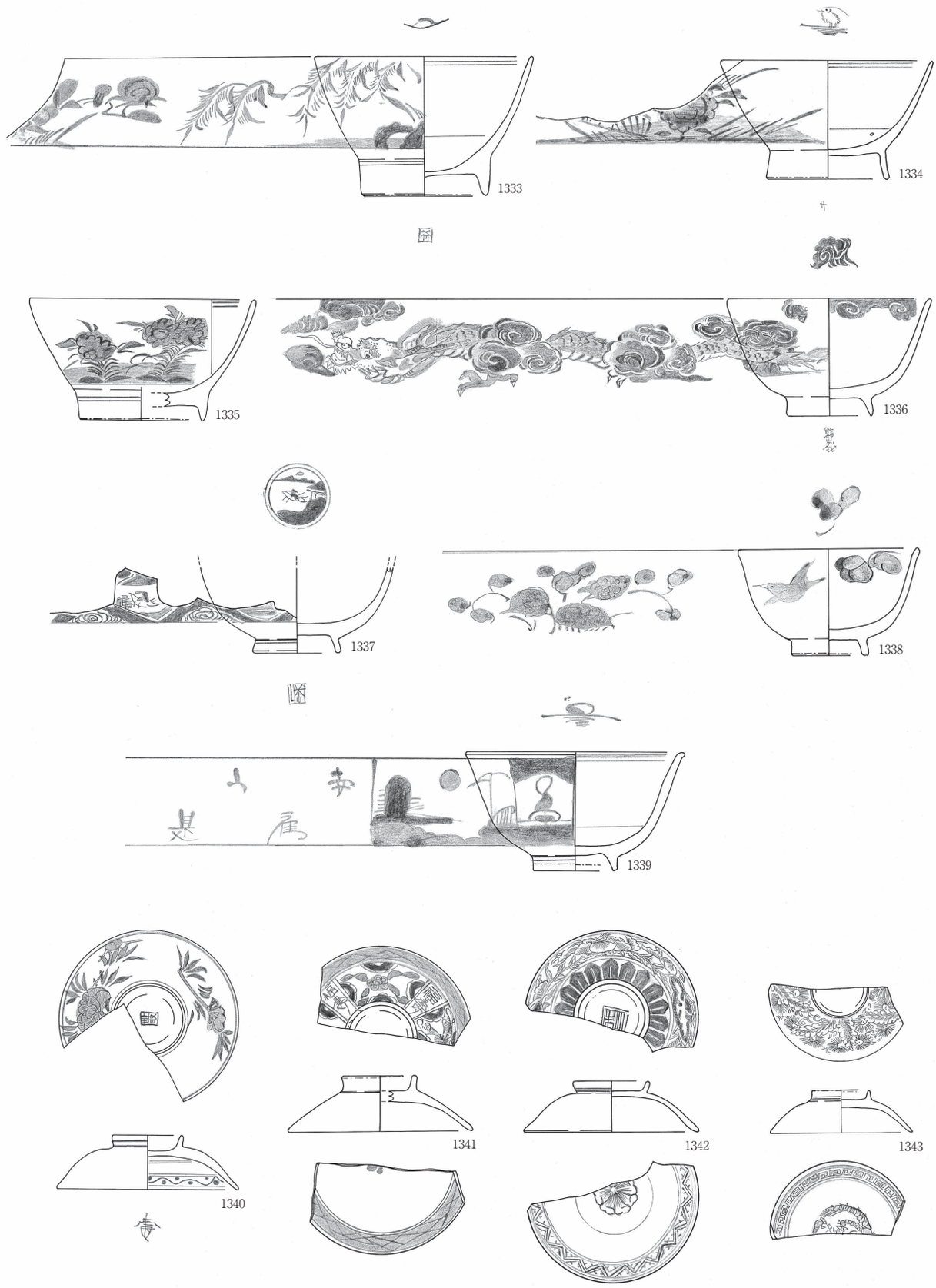


Fig.147　SK84出土遺物実測図（1）

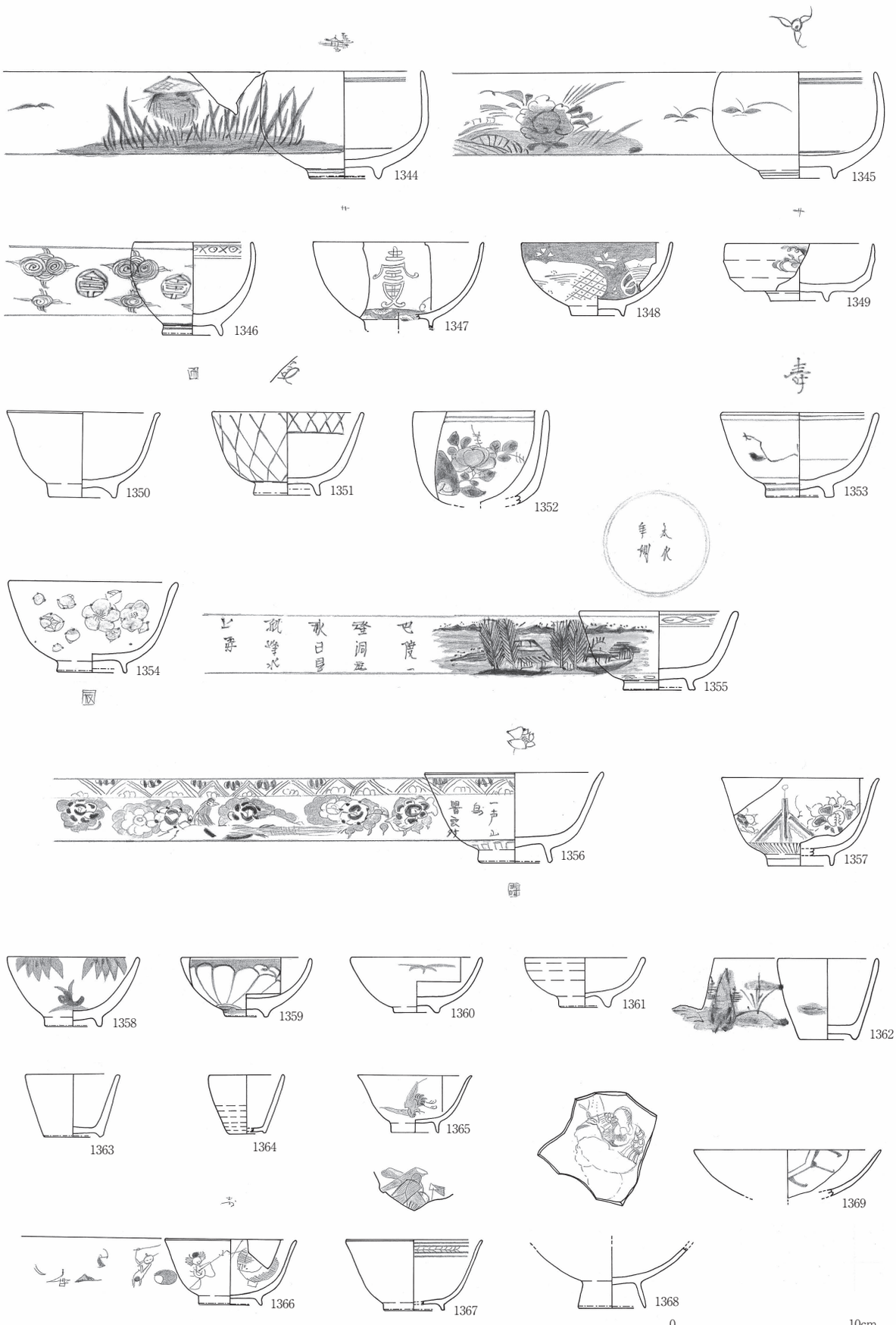


Fig.148　SK84出土遺物実測図（2）

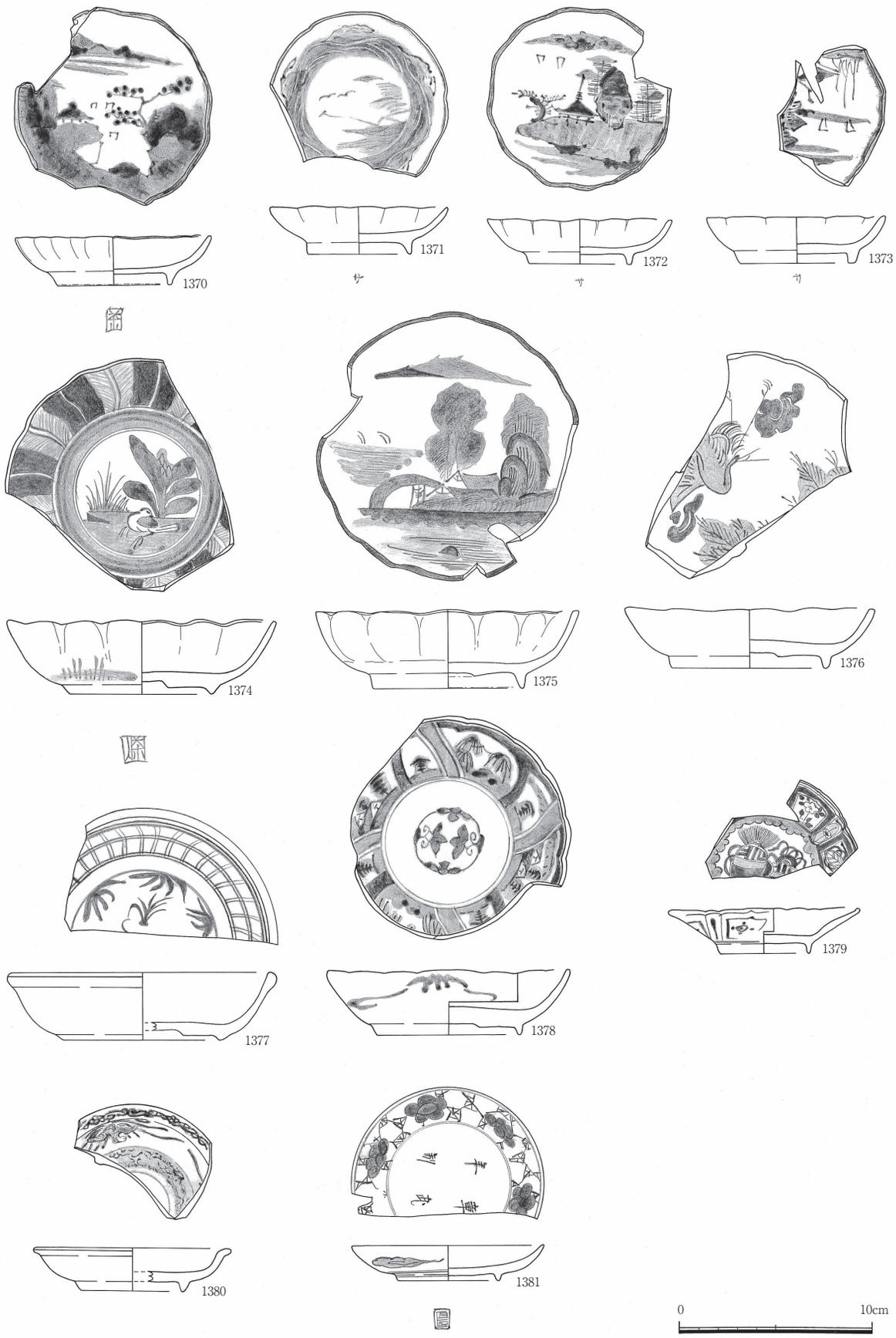


Fig.149　SK84出土遺物実測図（3）

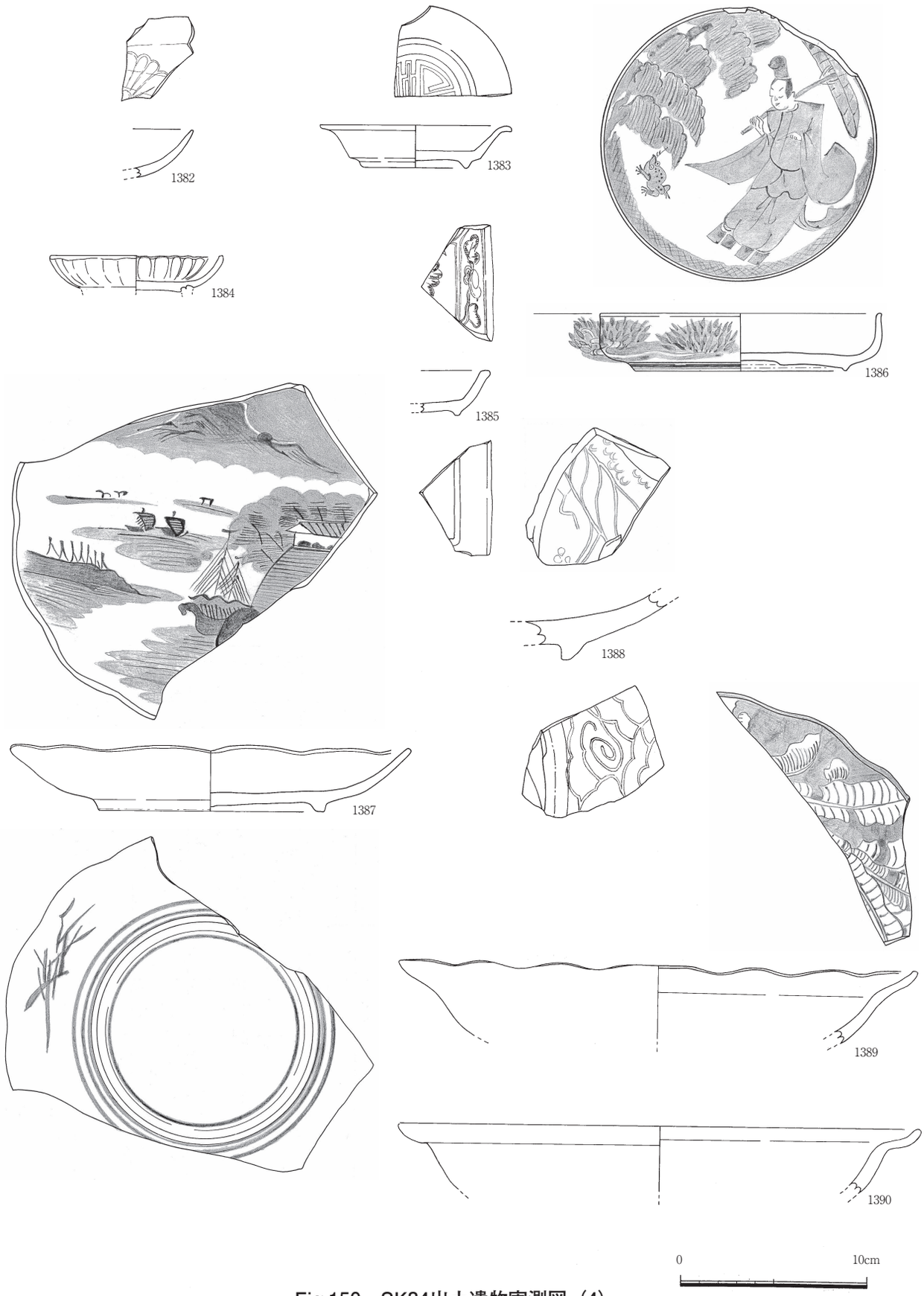


Fig.150　SK84出土遺物実測図（4）

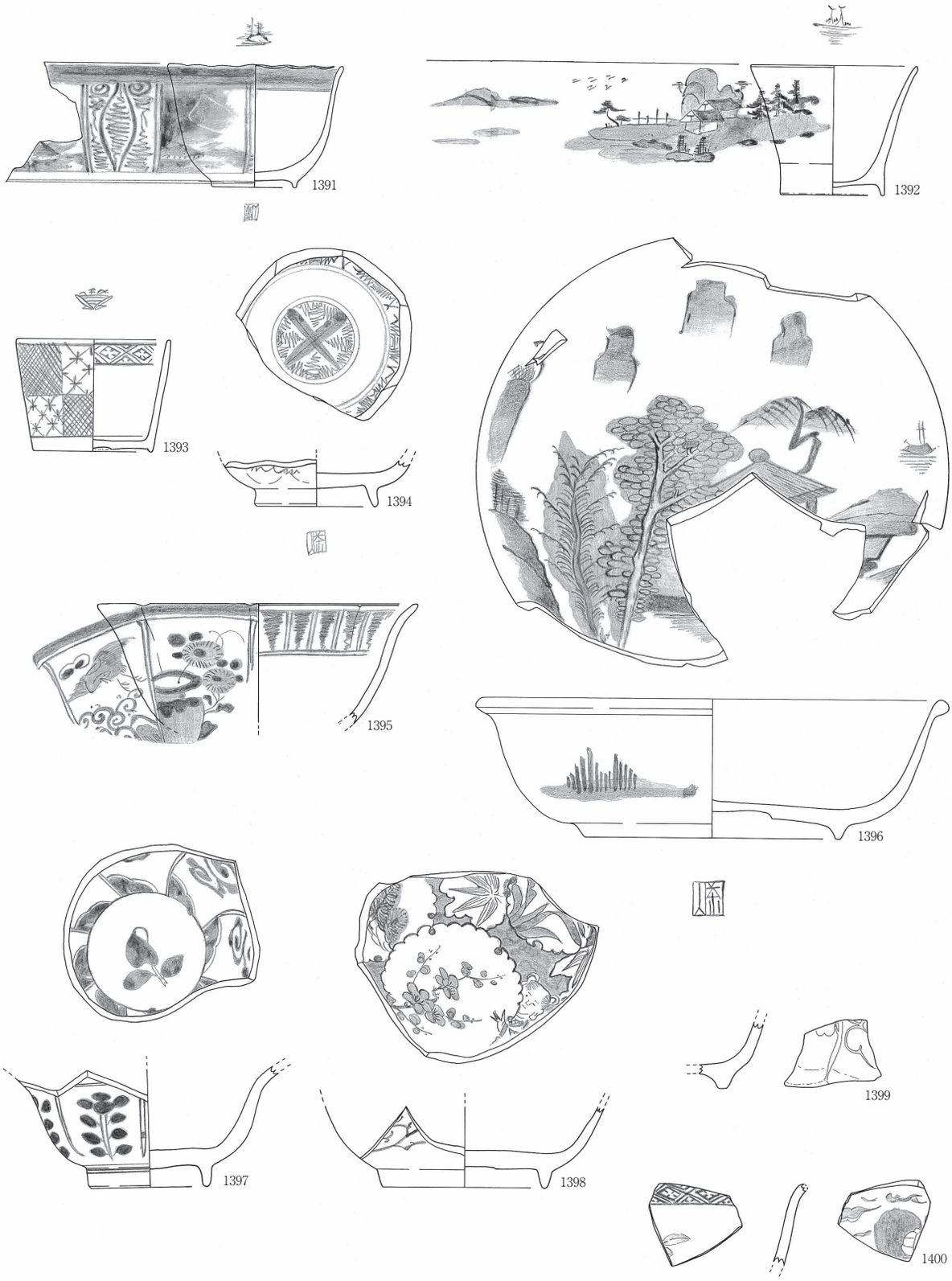


Fig.151　SK84出土遺物実測図（5）

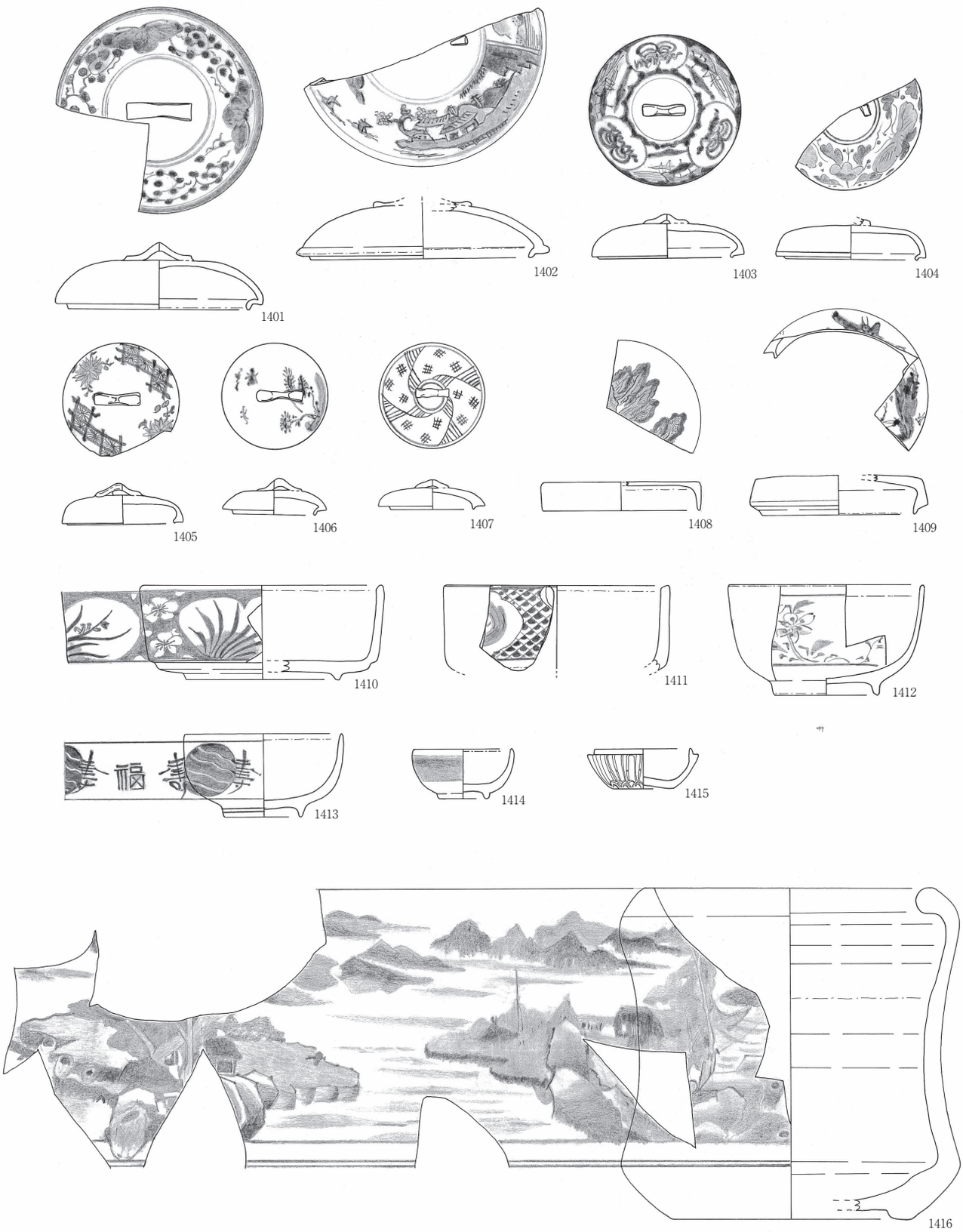


Fig.152　SK84出土遺物実測図（6）

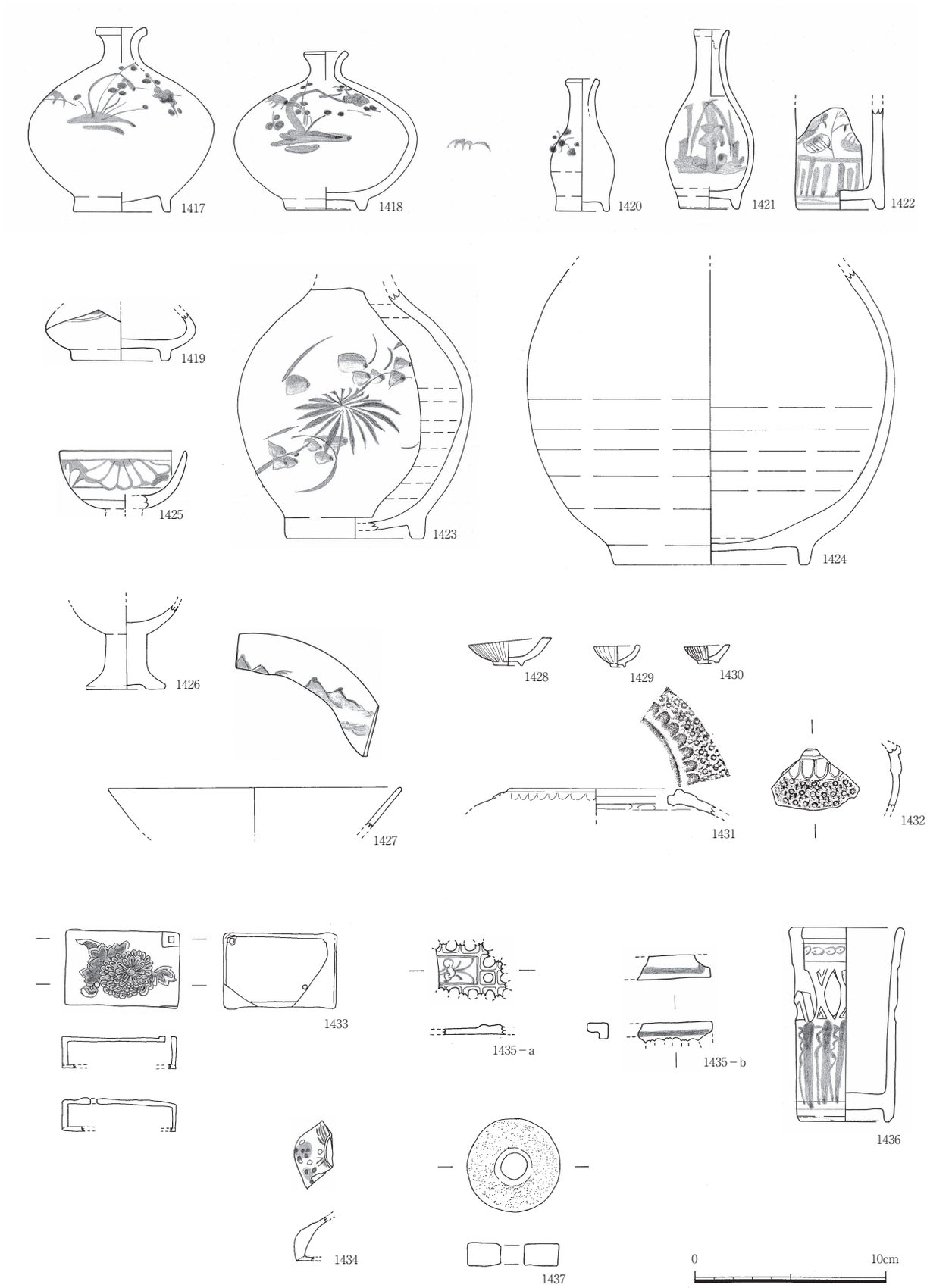


Fig.153　SK84出土遺物実測図（7）

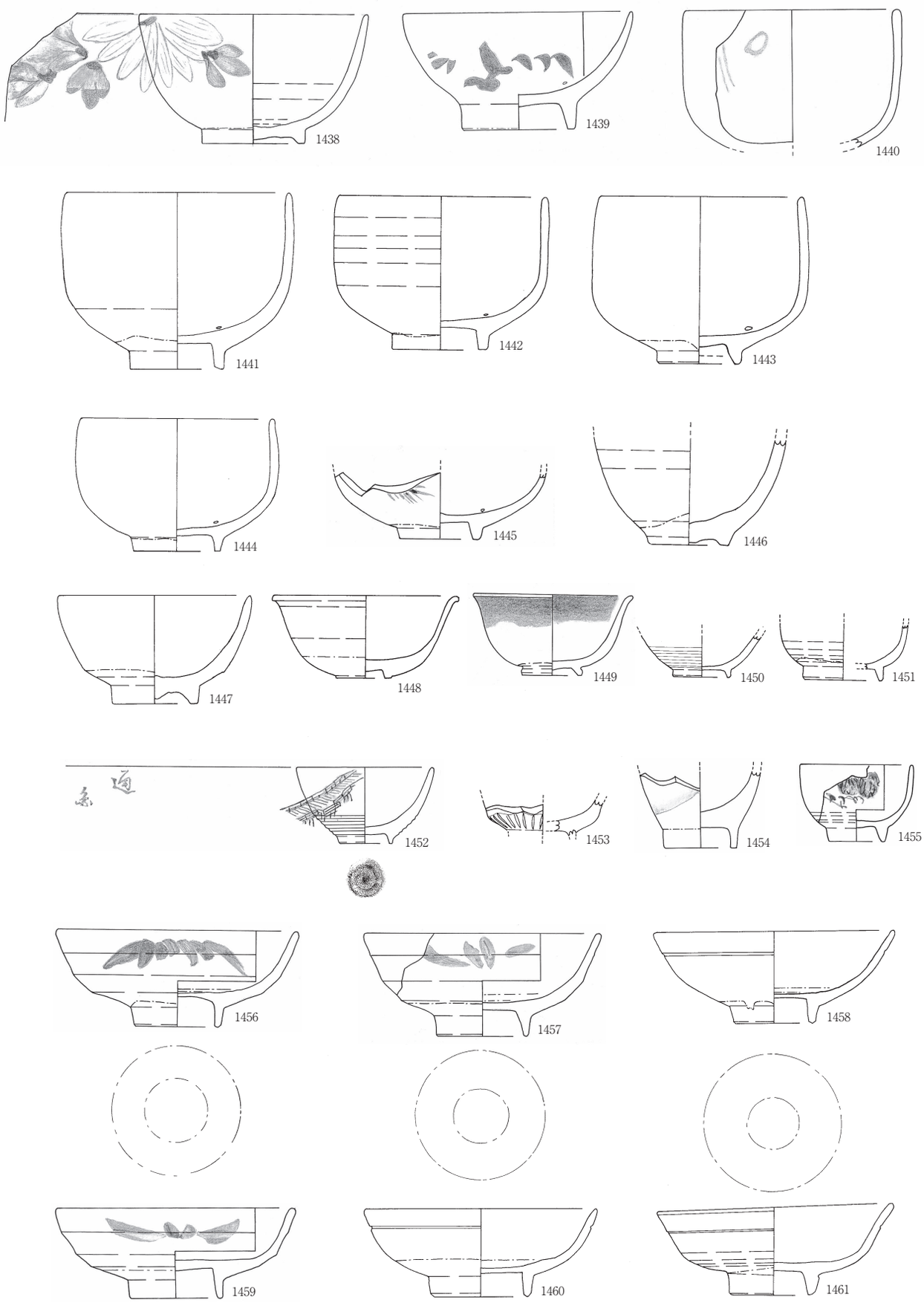


Fig.154　SK84出土遺物実測図（8）

0　10cm

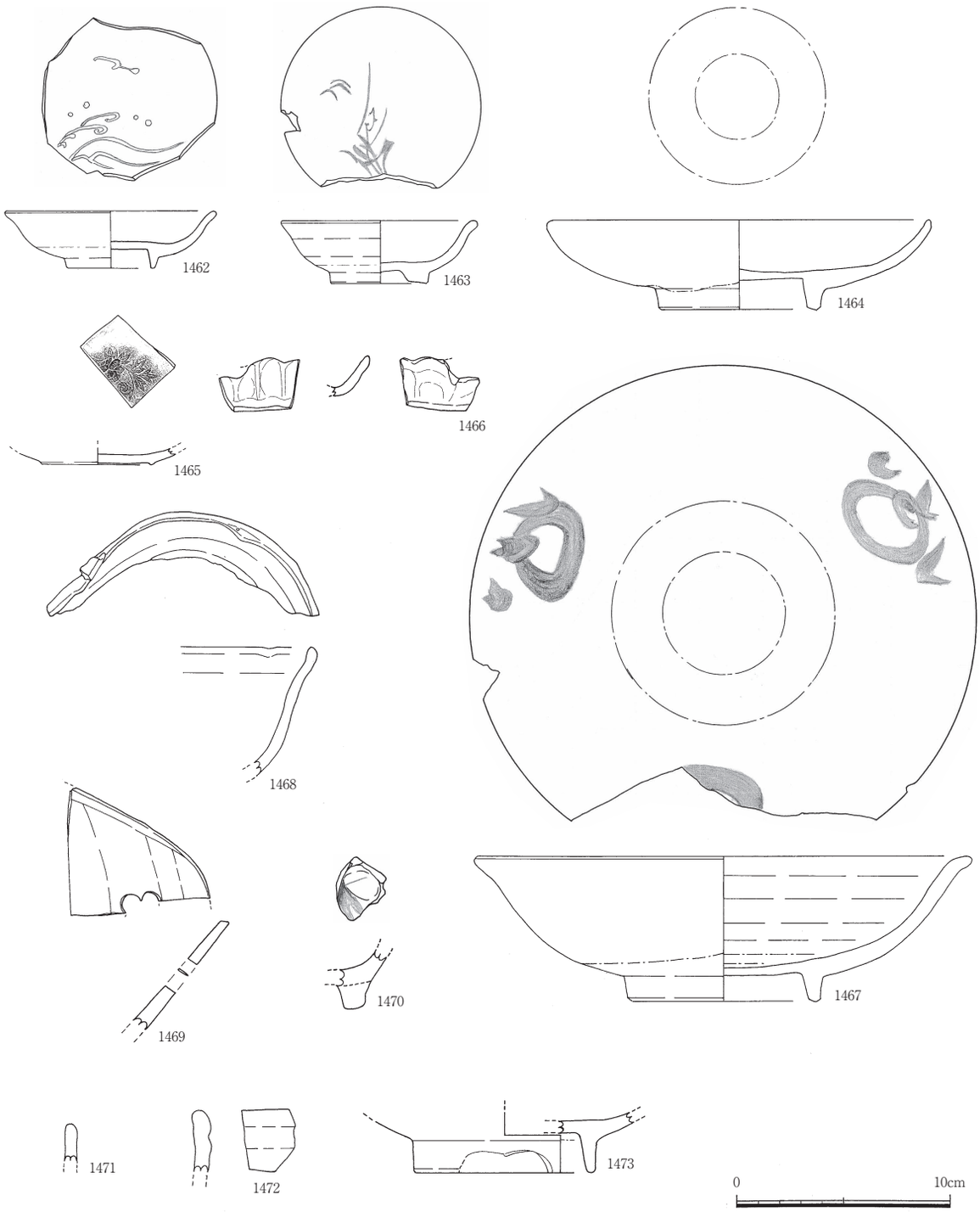


Fig.155　SK84出土遺物実測図（9）

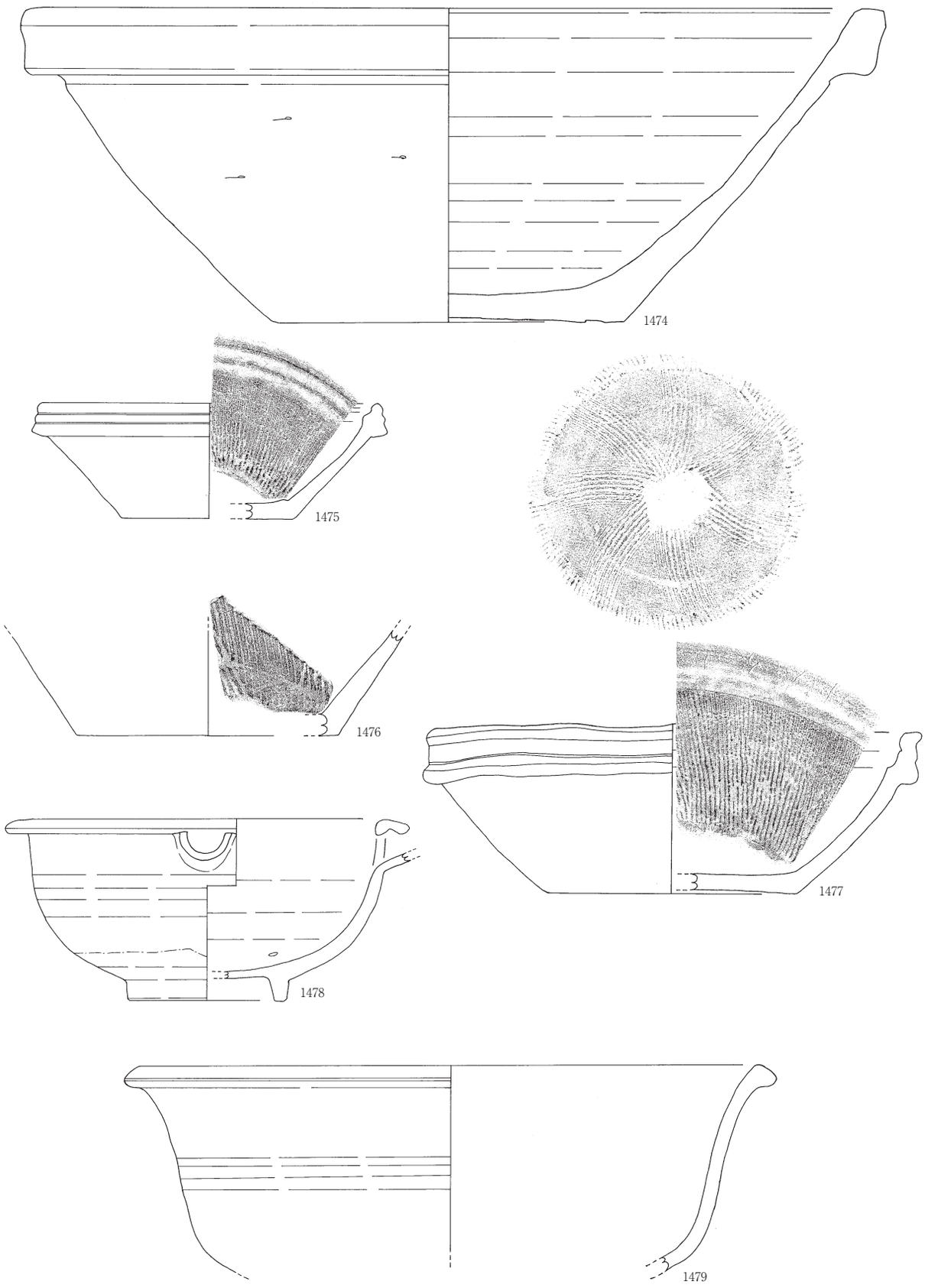


Fig.156　SK84出土遺物実測図（10）

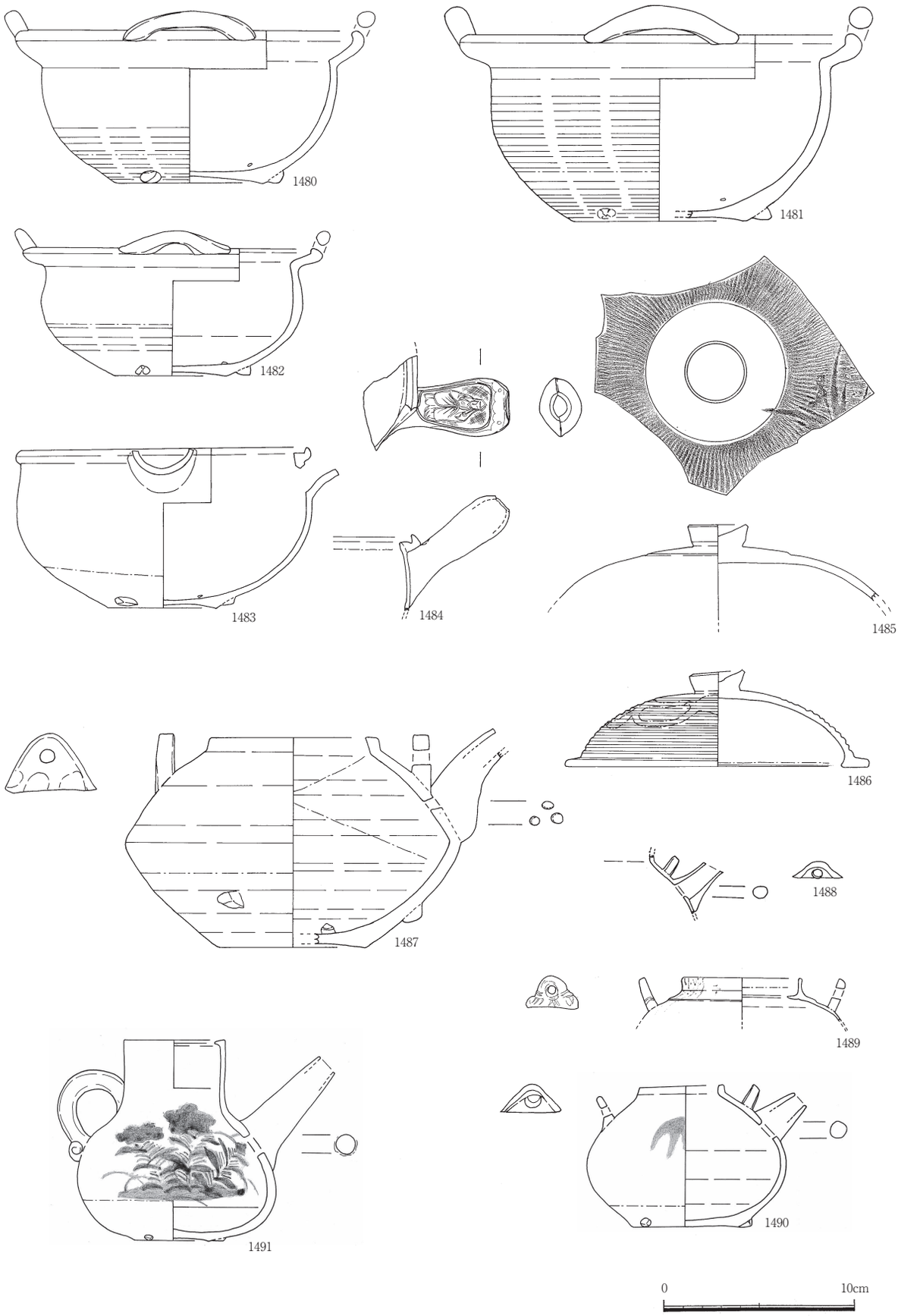


Fig.157　SK84出土遺物実測図（11）

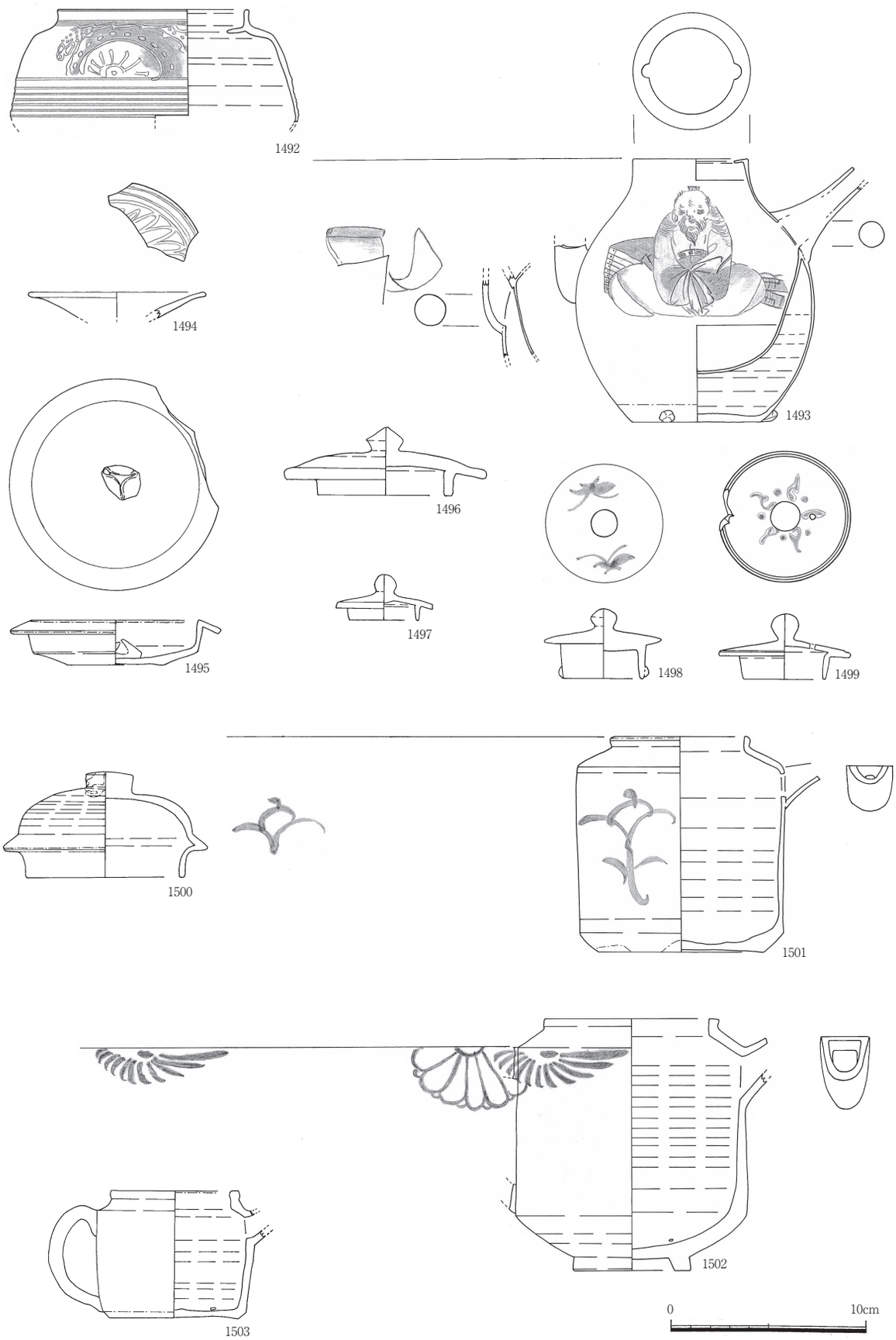


Fig.158　SK84出土遺物実測図（12）

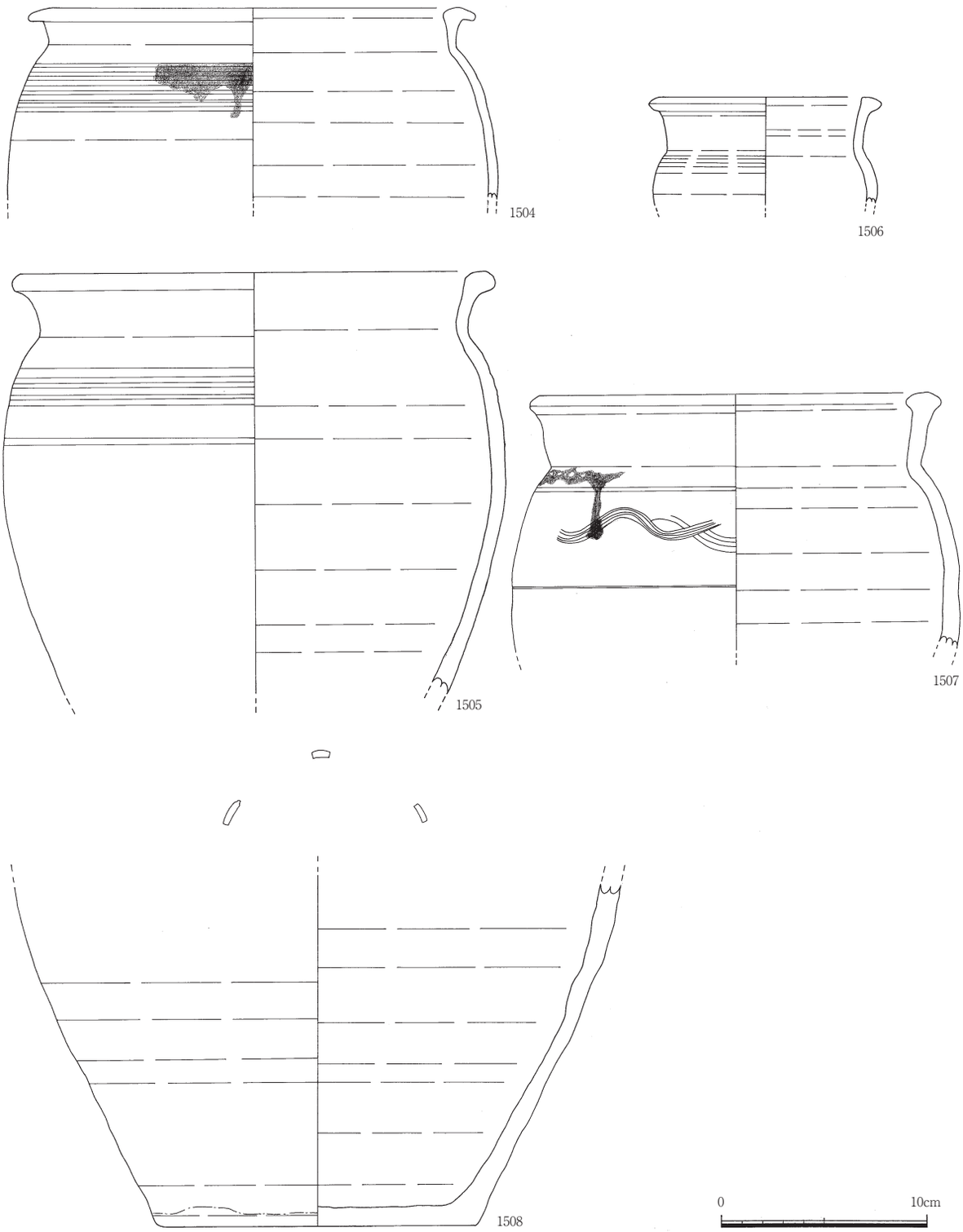


Fig.159　SK84出土遺物実測図（13）

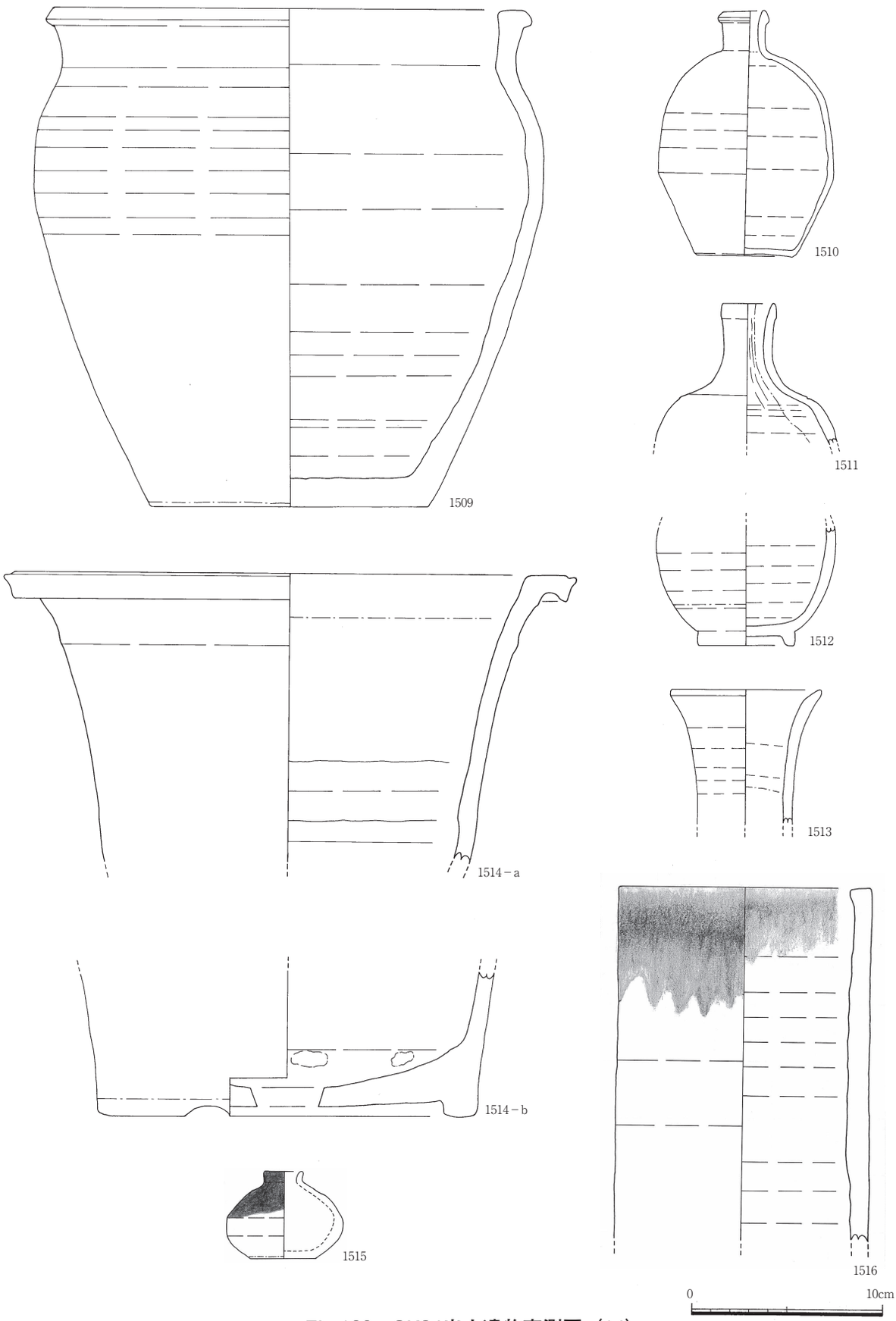


Fig.160　SK84出土遺物実測図（14）

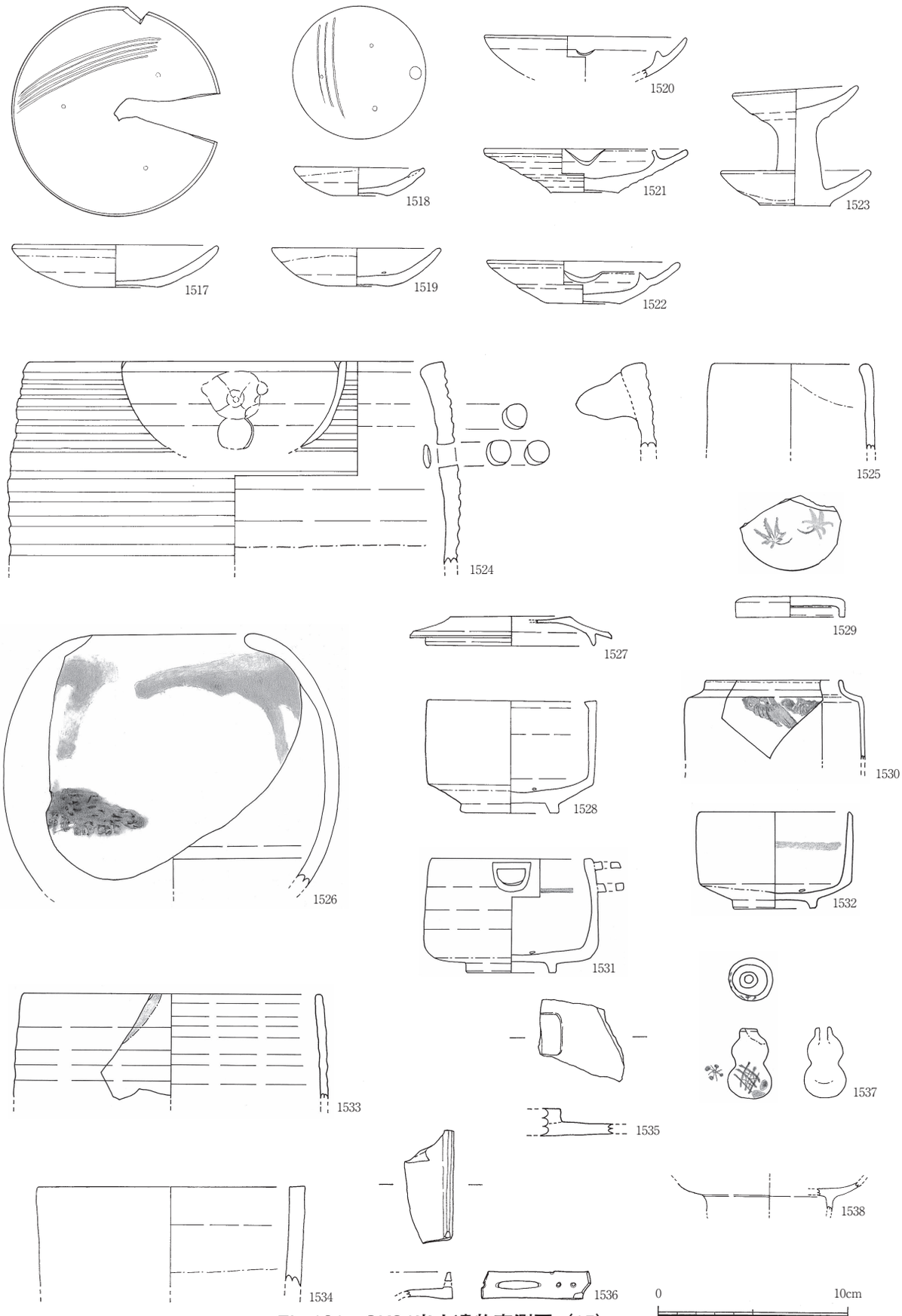


Fig.161　SK84出土遺物実測図（15）

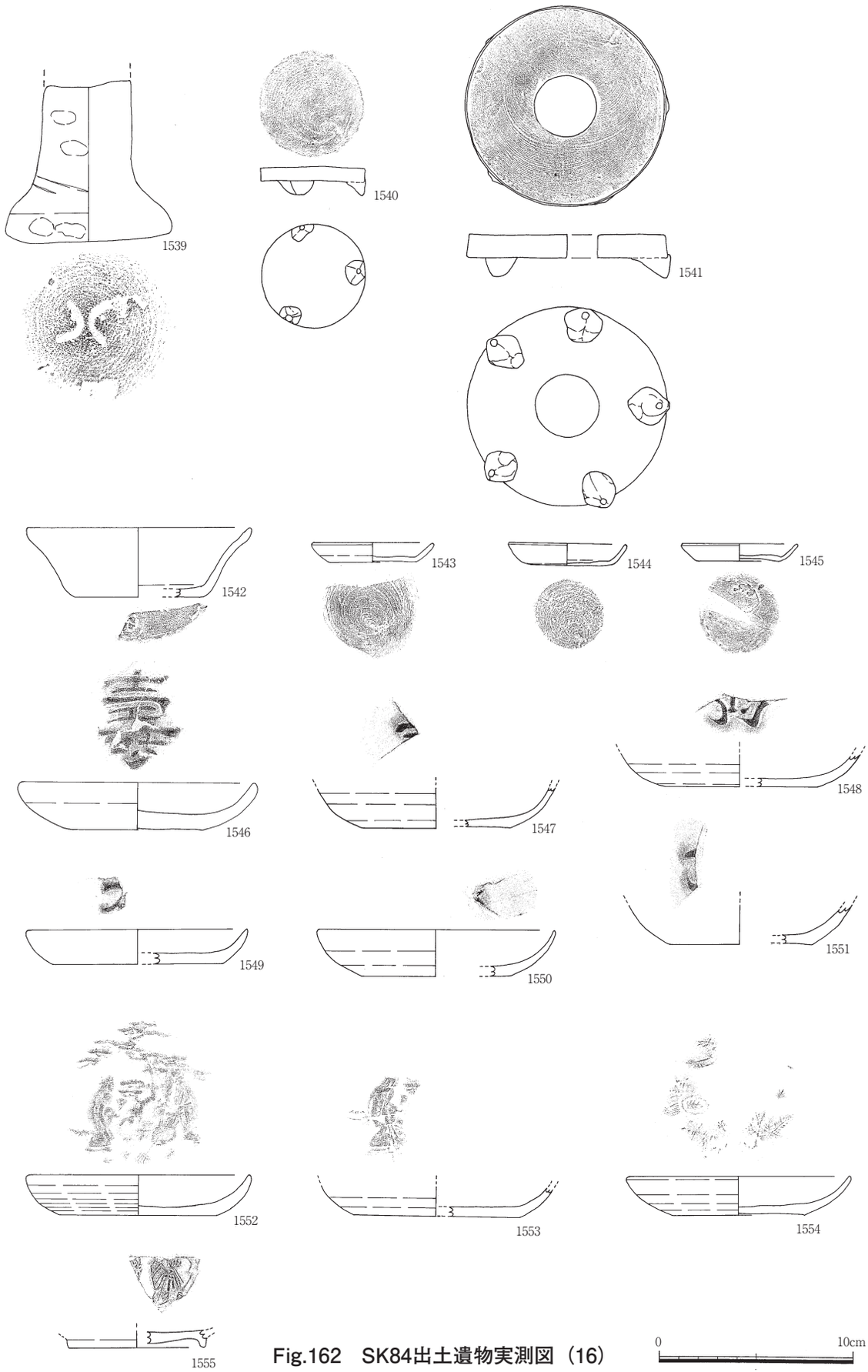


Fig.162　SK84出土遺物実測図（16）

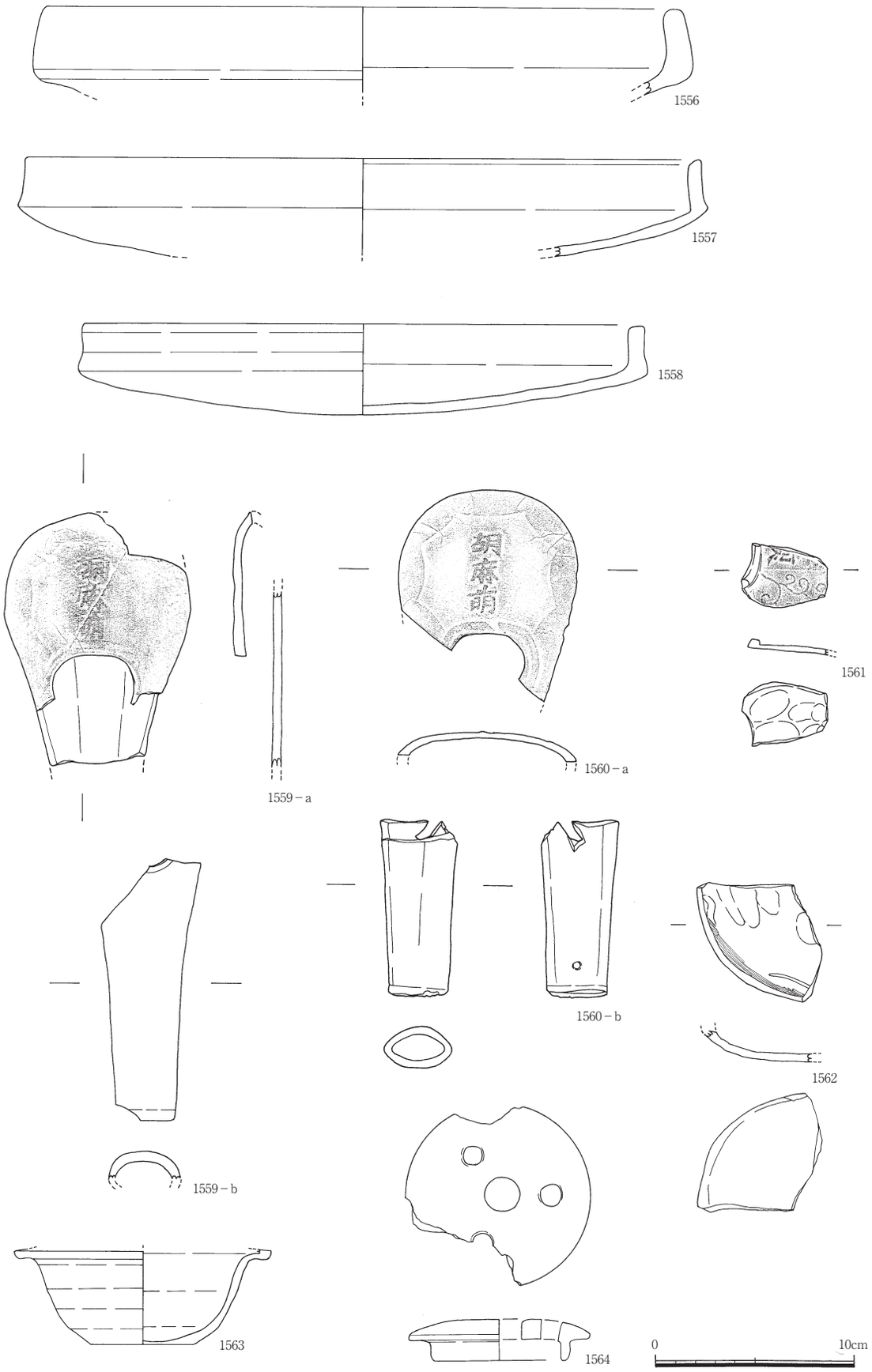


Fig.163　SK84出土遺物実測図（17）

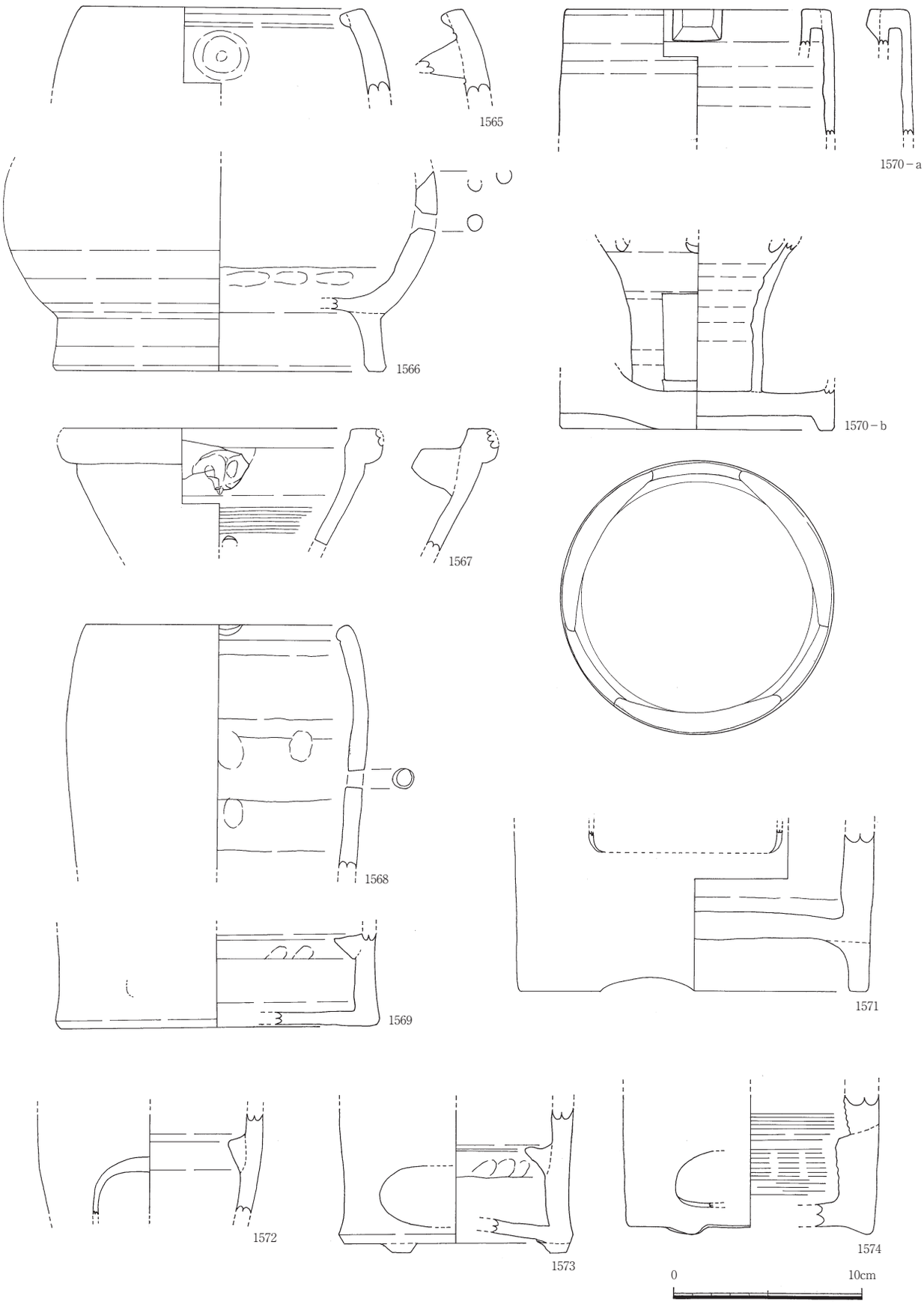


Fig.164　SK84出土遺物実測図（18）

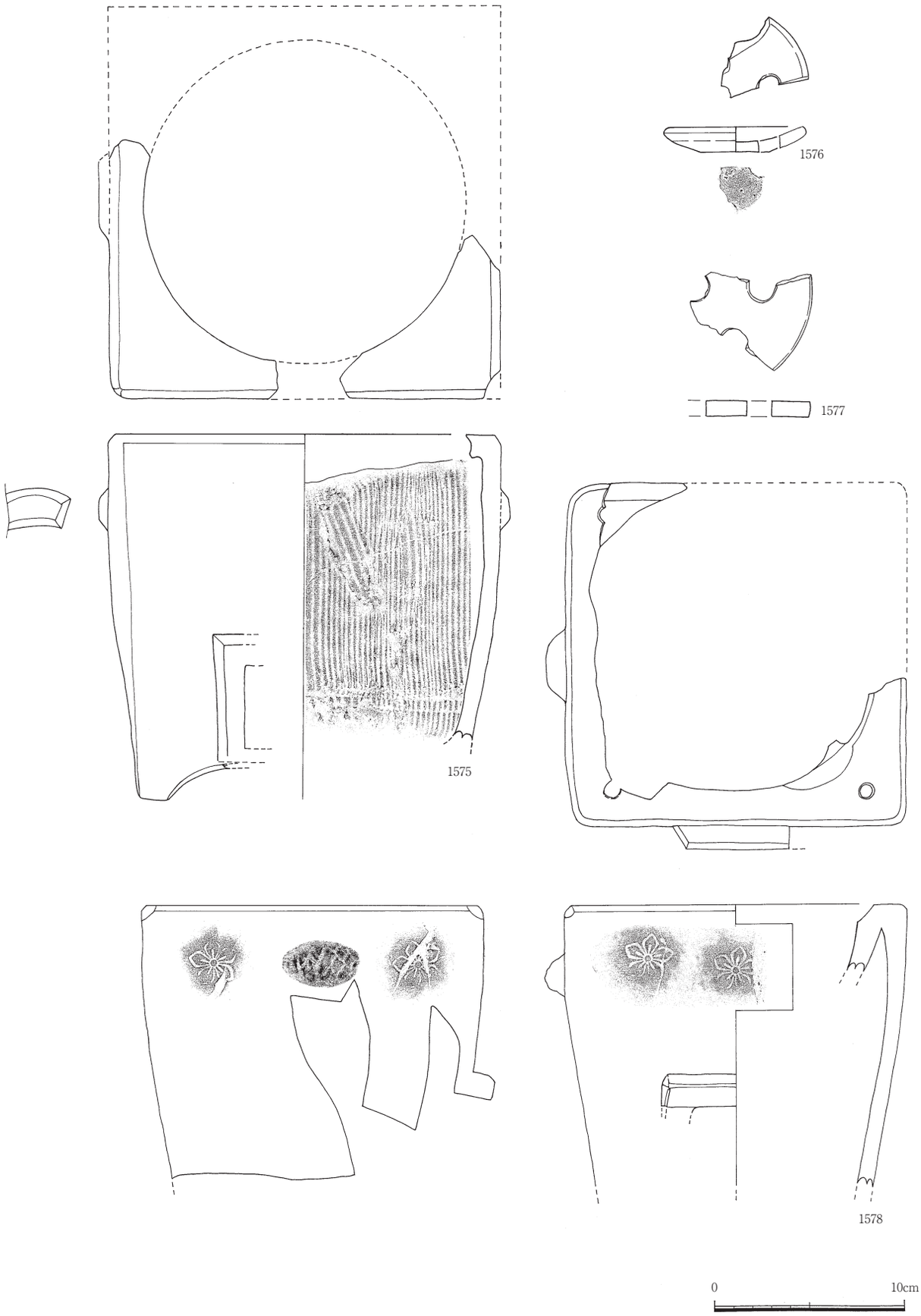


Fig.165　SK84出土遺物実測図（19）

Fig.166　SK84出土遺物実測図（20）

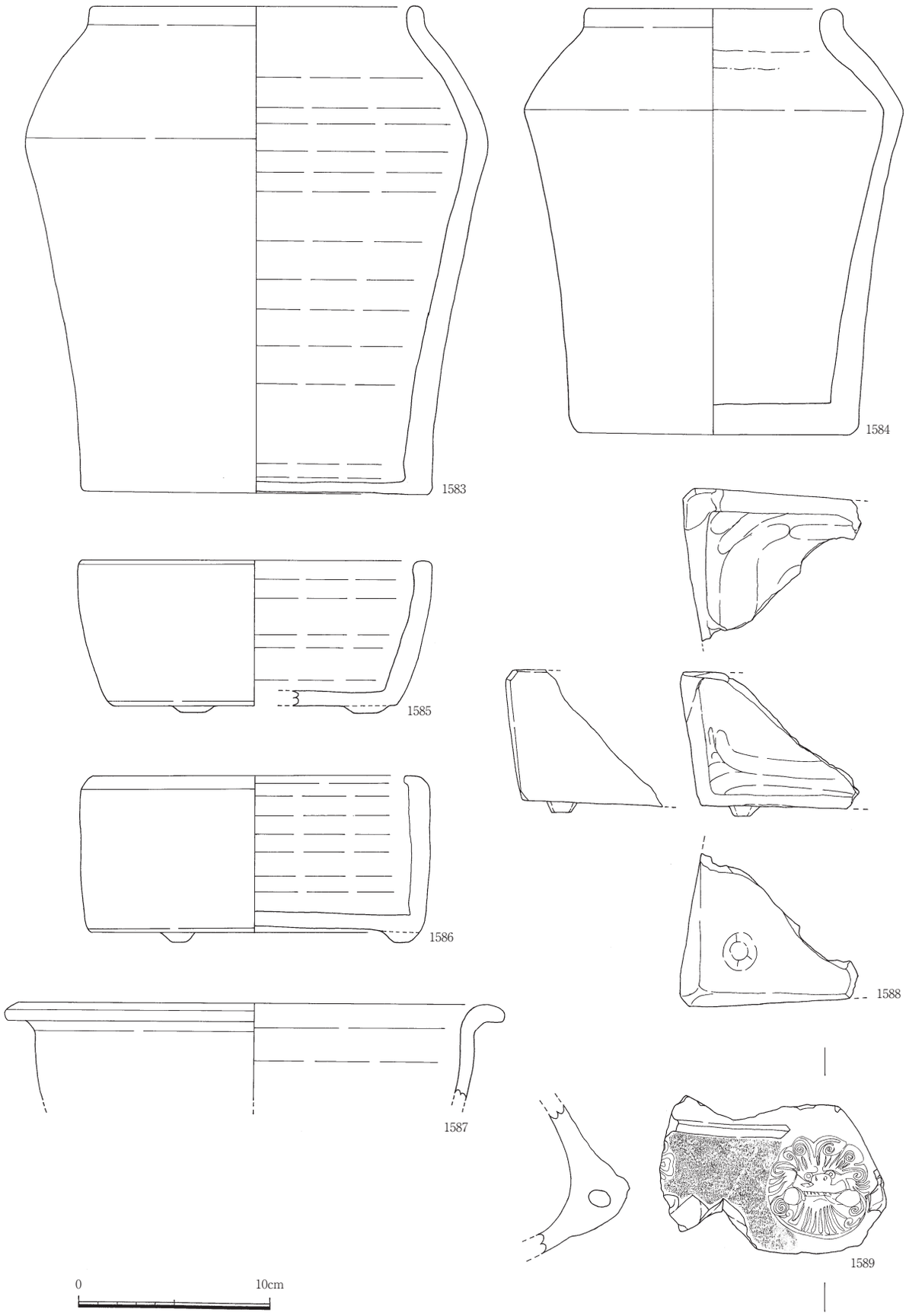


Fig.167　SK84出土遺物実測図（21）

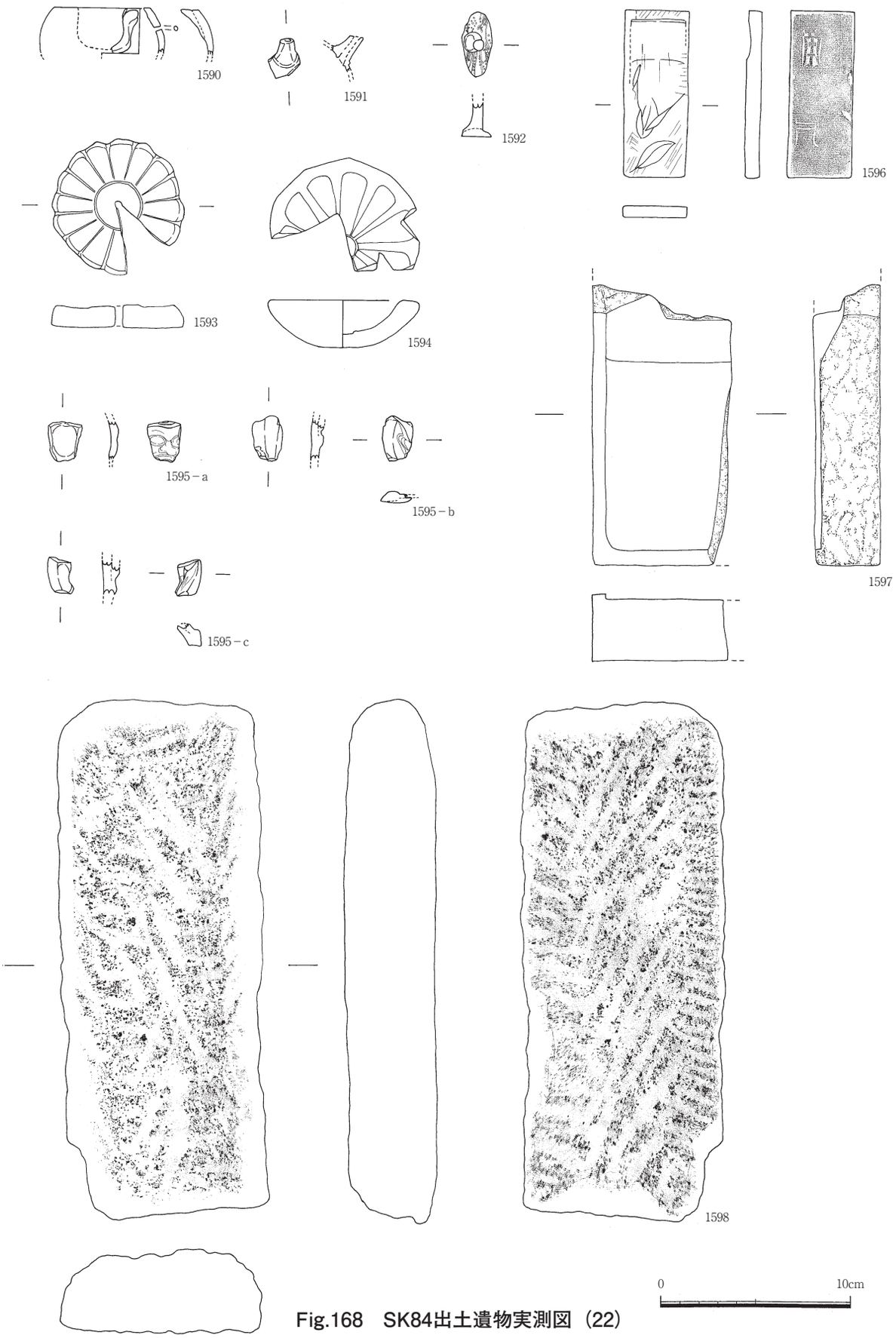


Fig.168　SK84出土遺物実測図（22）

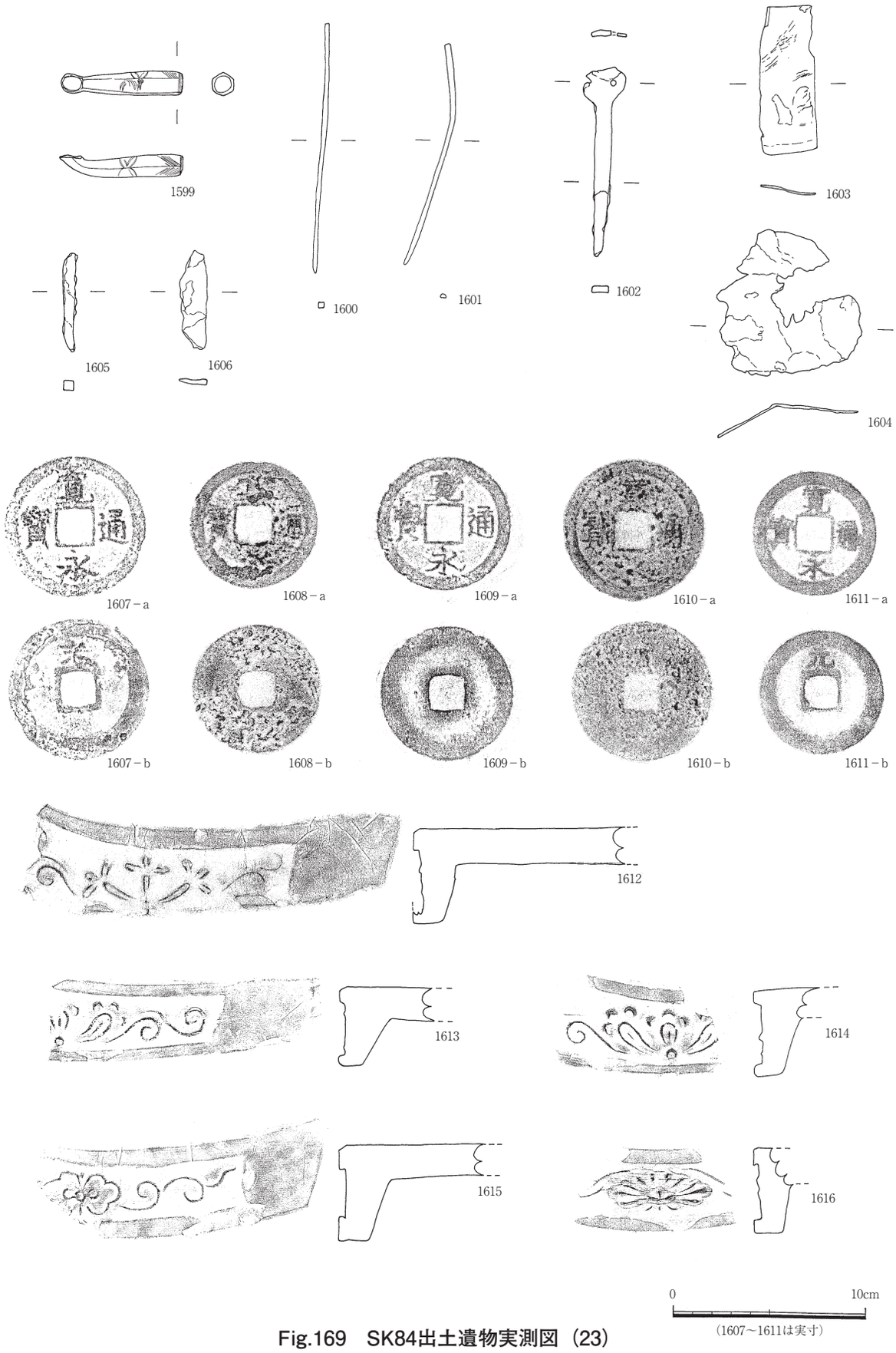


Fig.169　SK84出土遺物実測図（23）

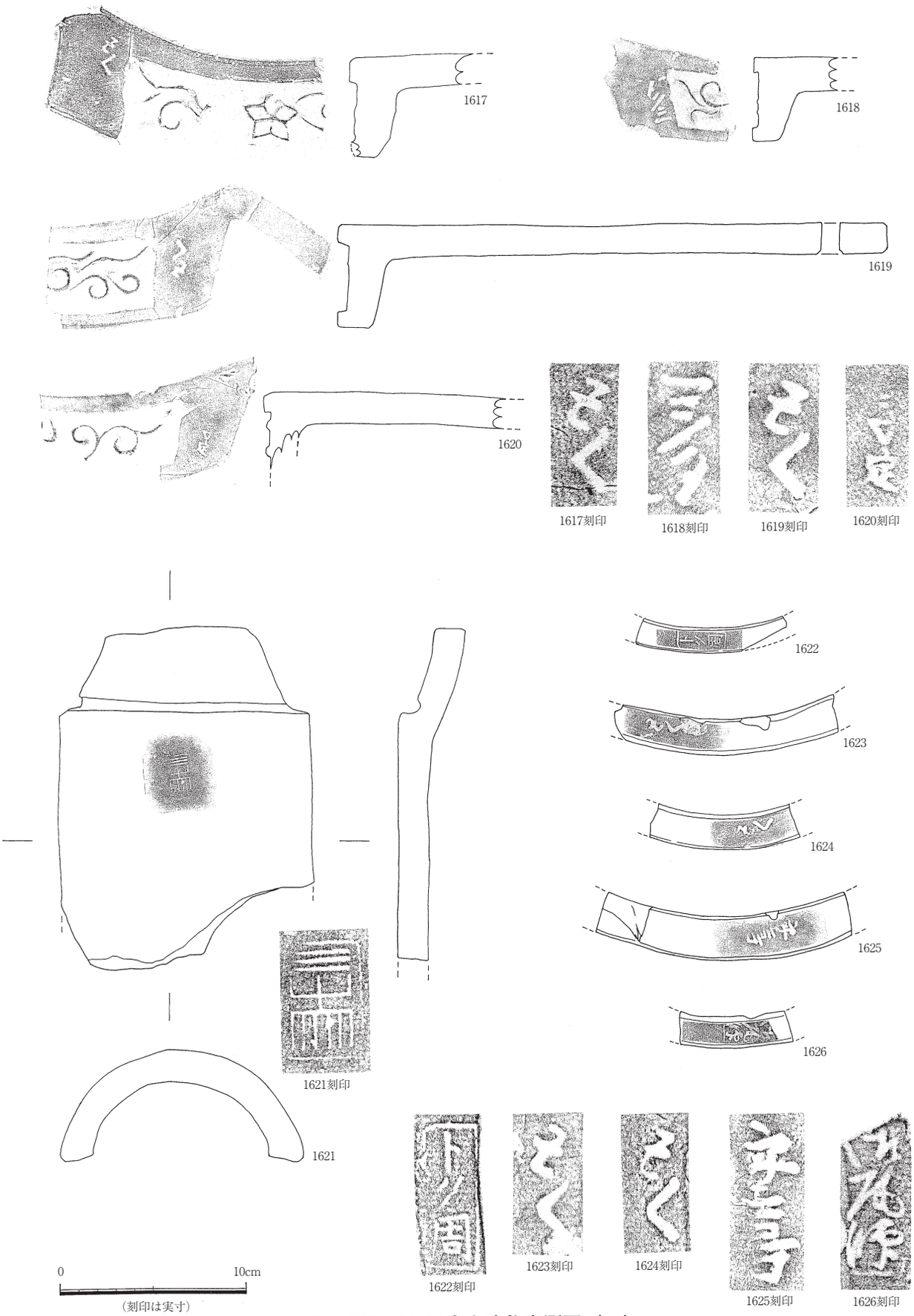


Fig.170　SK84出土遺物実測図（24）

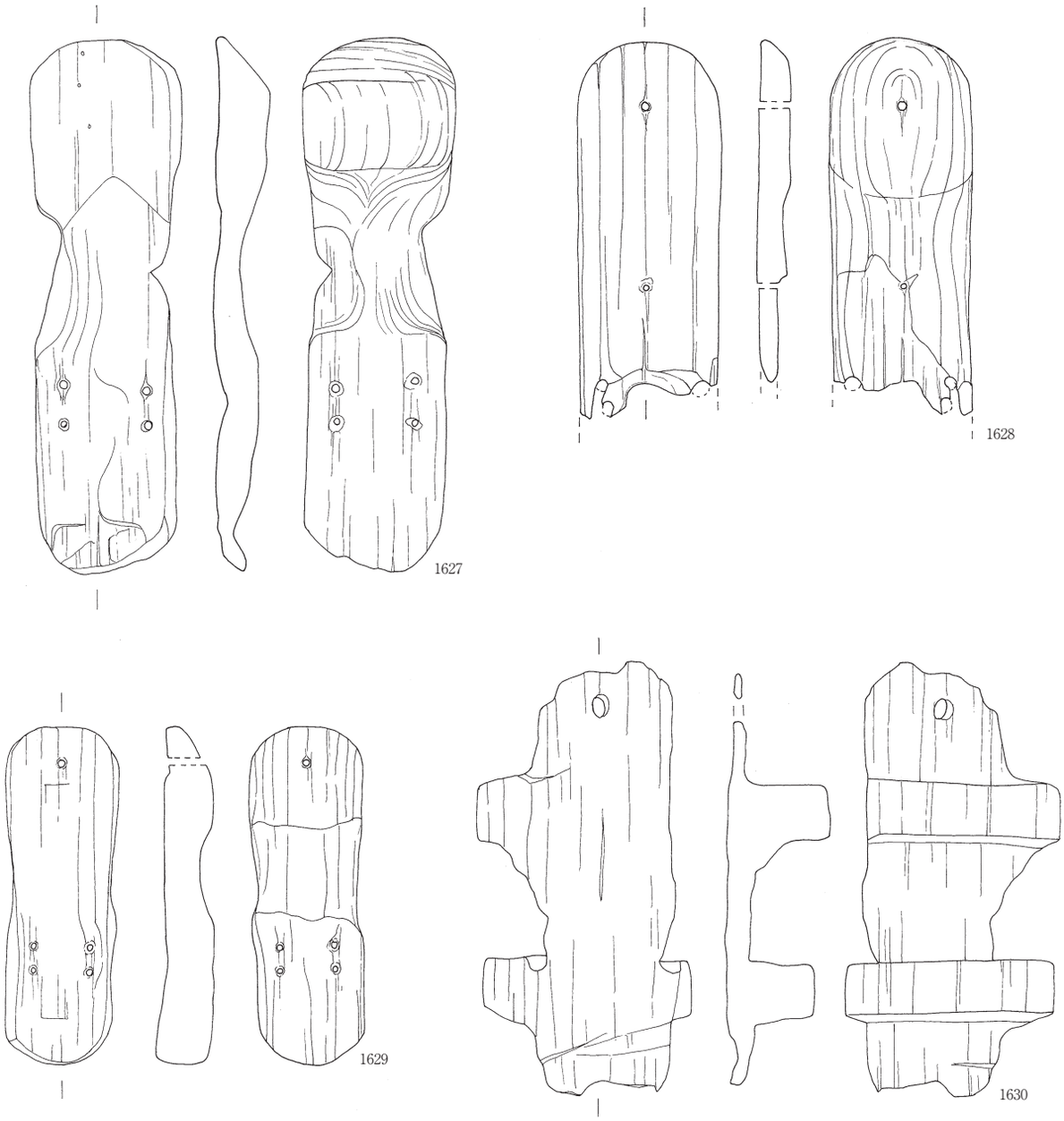


Fig.171　SK84出土遺物実測図（25）

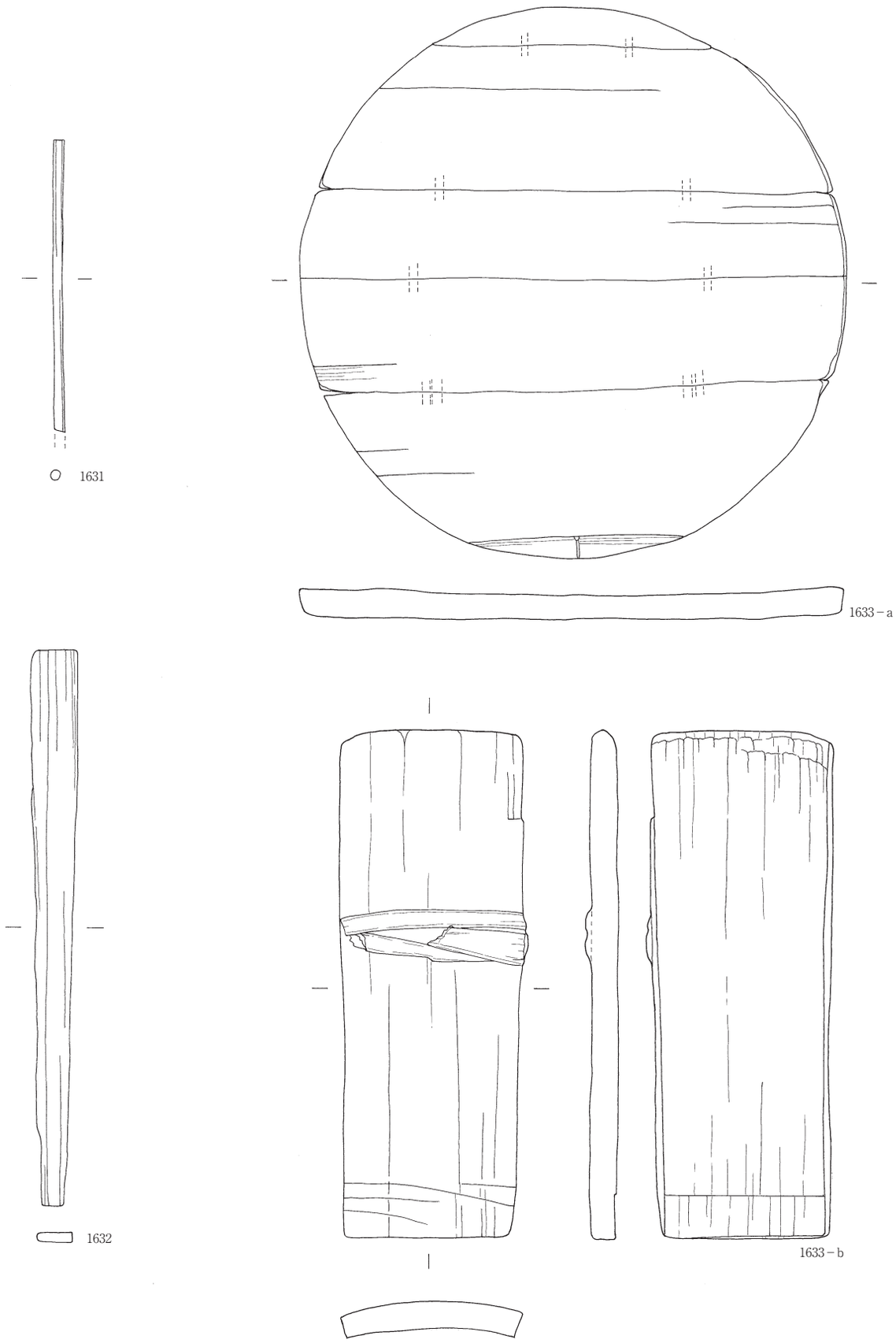


Fig.172　SK84出土遺物実測図（26）

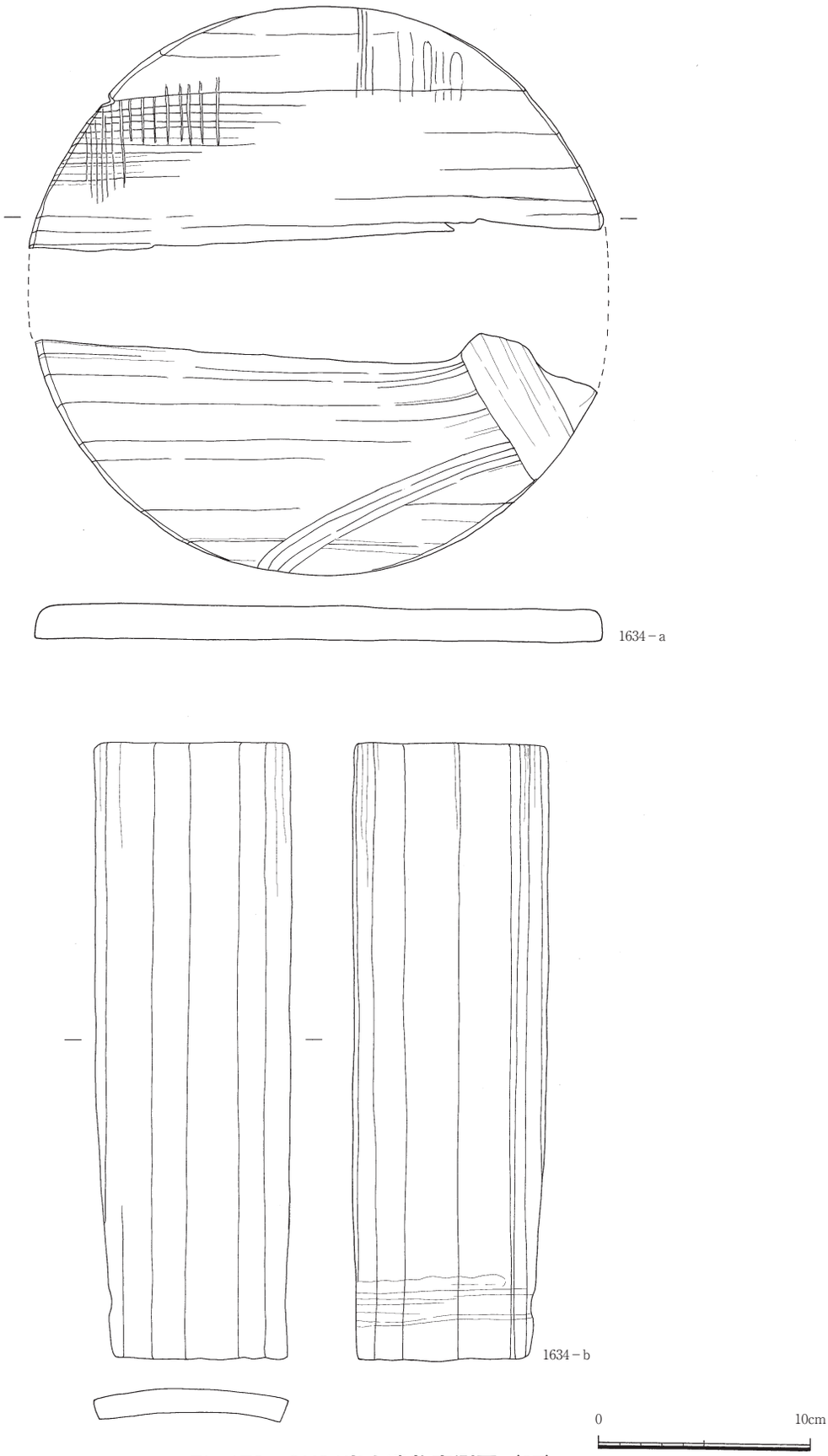
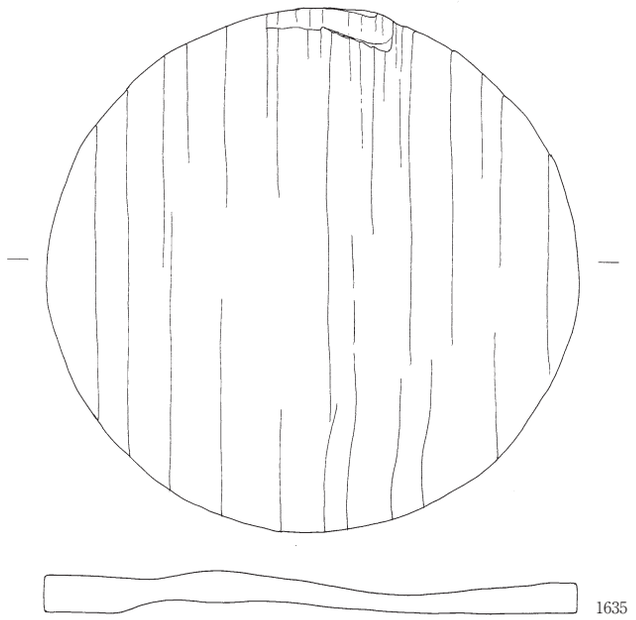
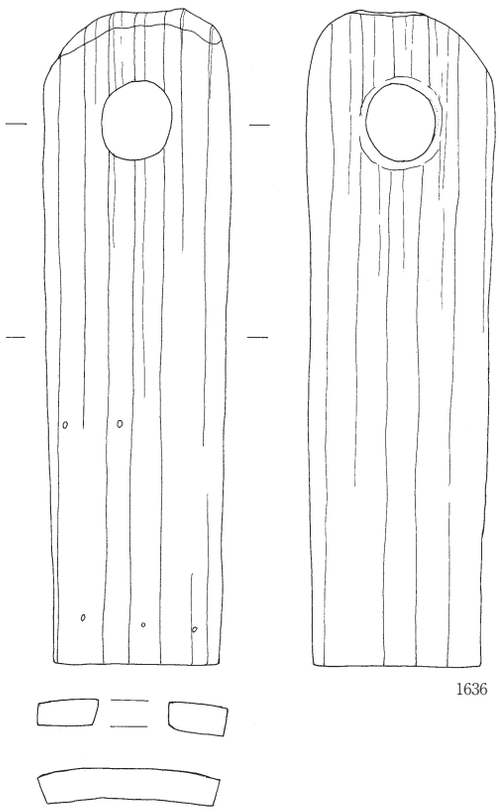


Fig.173　SK84出土遺物実測図（27）





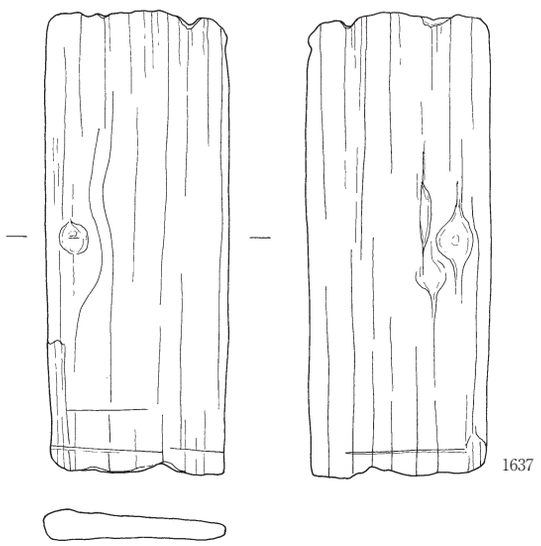


Fig.174　SK84出土遺物実測図（28）

Fig.175　SK84出土遺物実測図（29）

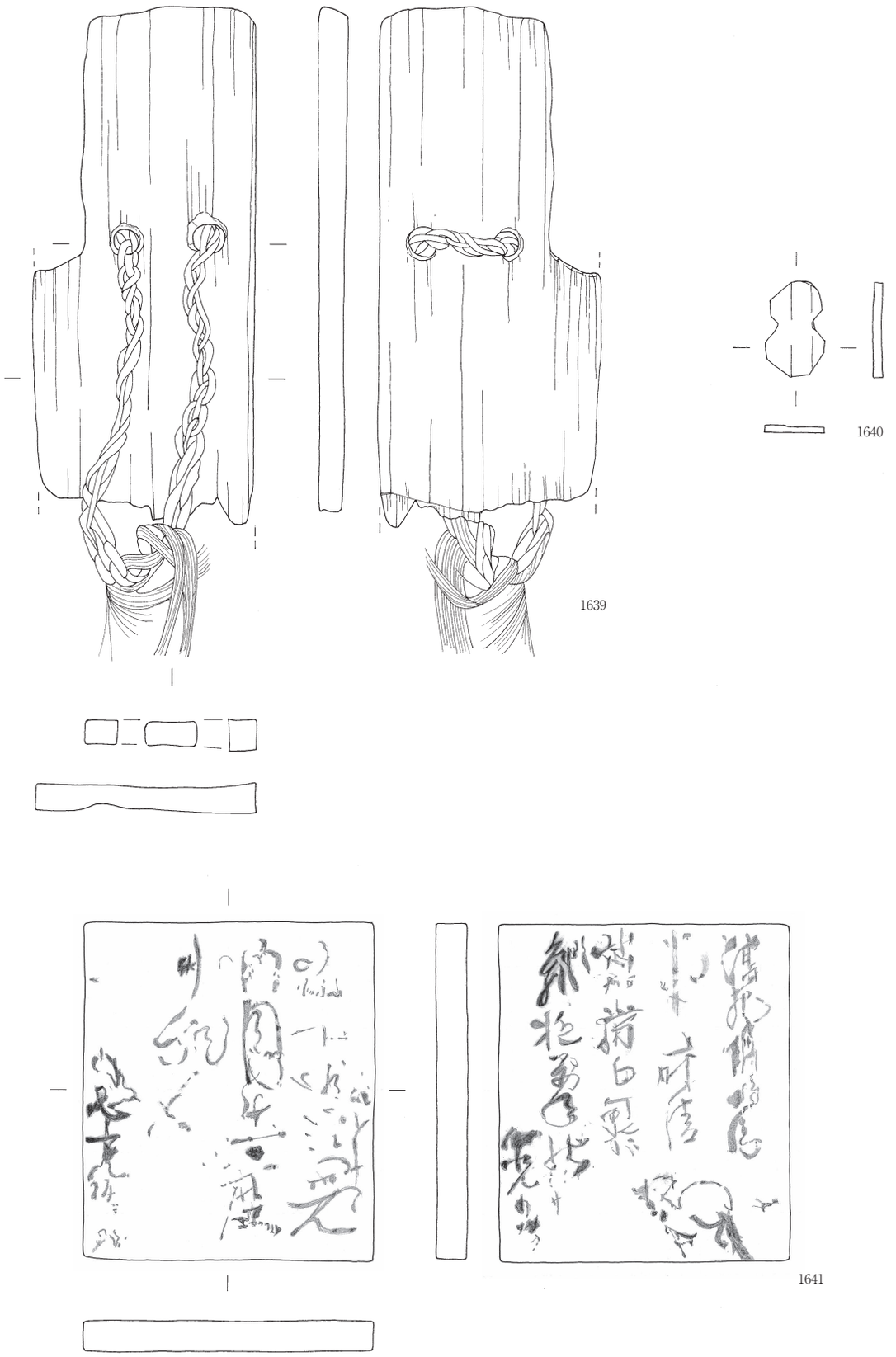


Fig.176　SK84出土遺物実測図（30）

SK85（Fig.177・178）

調査区の南部に位置する。東部側が撹乱を受けるため全体の規模は不明であるが、平面形は楕円形とみられ、検出規模は南北長1.94m、東西の残存長0.70m、深さ36cmを測る。床面は南側が低く、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルトとにぶい黄褐色シルトであり、埋土中には炭化物や橙色土粒を多く含んでいる。切り合い関係では時期不明のP122に切られる。

出土遺物は、磁器（中碗2・小碗1・小杯1・五寸皿1・猪口2）、陶器（中碗1）、土器（小皿2・白土器小皿1）、石製品（温石か1）である。また、ここでは被熱した染付鉢の体部片1点も出土している。図示したものは、1642～1645である。1642は肥前産の白磁猪口。1643は尾戸窯の灰釉碗で、外面に強いロクロ目を施す。1644は尾戸窯の白土器小皿で無文のものである。1645は箱形の石製品で、温石か。粘板岩製で、周縁に円孔を穿ち、表面に陰刻文様をもつ。

SK85は18世紀に比定される。

SK86（Fig.177）

調査区南部に位置する。平面形は円形を呈し、検出規模は径0.72m、深さ17cmを測る。断面形態

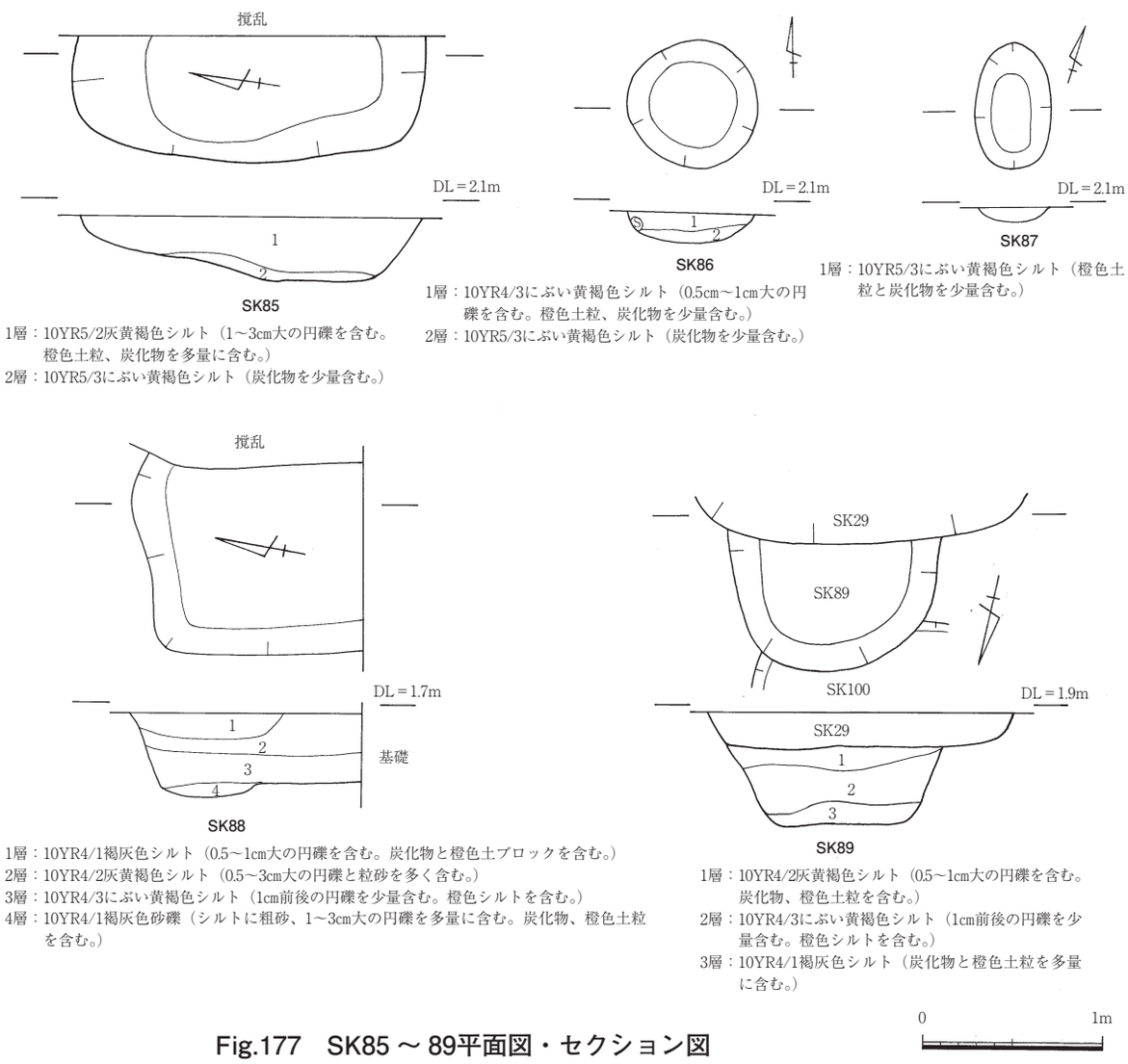


Fig.177　SK85～89平面図・セクション図

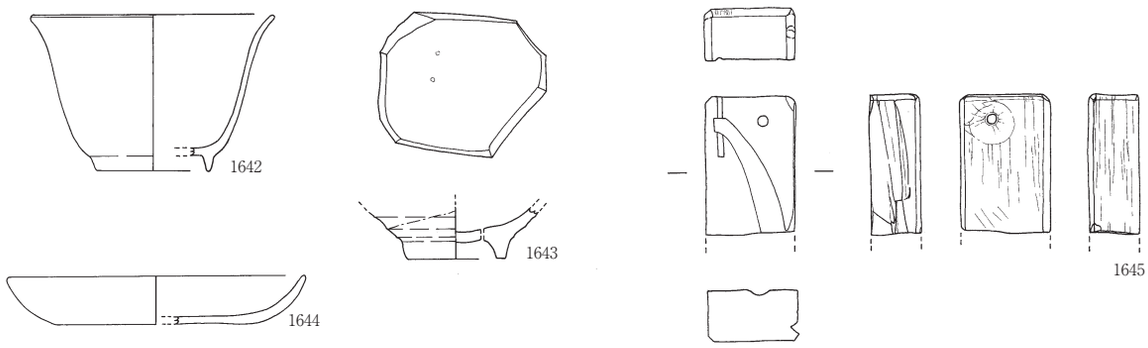


Fig.178　SK85出土遺物実測図

0　10cm

は皿状で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は、肥前産の灰釉丸碗１点と土師質土器小皿１点である。

遺物量が少なく、廃絶年代の詳細は不明である。

SK87（Fig.177）

調査区の南部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.72m、短軸0.42m、深さ８cmを測る。断面形態は皿状で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は、肥前産の染付細片１点である。遺物量が少ないため、廃絶年代の詳細は不明である。

SK88（Fig.177・179）

調査区東部に位置する。南部と東部が撹乱を受けるため全体の規模と形態は不明であるが、南北残存長1.30m、東西残存長1.06m、深さ46cmを測る。床面はほぼ平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。埋土は褐灰色シルト他である。切り合い関係では18世紀中葉のSK52を切る。また近接するSK89とは出土遺物の接合関係があり、同時期に機能した廃棄土坑とみられる。

出土遺物は、磁器（中碗14・小碗４・小杯３・小皿６・碗蓋１・猪口３・鉢１・蓋物３・蓋物蓋２）、陶胎染付（火入れ1）、陶器（中碗７・小碗２・中皿１・鉢１・捏鉢１・擂鉢３・灯明受皿５）、土器（小皿６・焜炉１・火鉢１）で、17世紀から19世紀の遺物が出土している。また、被熱した個体３点が含まれる。

図示したものは、1646～1654である。1646は肥前産の染付猪口、1647は薄手酒杯である。1648は志野焼。1649は尾戸窯の灰釉中碗。1650は京都・信楽系の半球形小碗で、鉄錆で注連縄文を描く。1651は灰釉中皿で、尾戸窯の製品か。内面に呉須絵を描きオリーブ黄色を帯びる半透明の釉を施す。1652は灰釉の灯明受皿である。1653は瓦質土器の火鉢で、体部外面に印刻文様を施す。底部から三足にかけて貫通する穿孔をもつ。1654は土師質土器の焜炉で、内面のみに炭素吸着を施す。外底に角枠内「深草一古」銘印をもつ。

SK88は19世紀中葉に比定される。

SK89（Fig.177）

調査区東部に位置する。南部側を別遺構によって切られており全体の規模は不明であるが、検出規模は東西長1.20m、南北残存長0.74m、深さ44cmを測る。断面形態は逆台形で、平坦な床面から

壁が斜め上方に立ち上がる。埋土は灰黄褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、褐灰色シルトで、最下層には炭化物と橙色土粒を多量に含んでいる。切り合い関係では、18世紀中葉のSK52と19世紀中葉のSK100を切り、19世紀中葉のSK29に切られている。

出土遺物は、磁器（中碗2・小碗1・小杯1・小皿2）、土器（小皿1）であり、肥前産の染付丸碗、波佐見産青磁小皿、その他、尾戸焼碗の体部片などが出土している。

SK89は19世紀中葉に比定される。

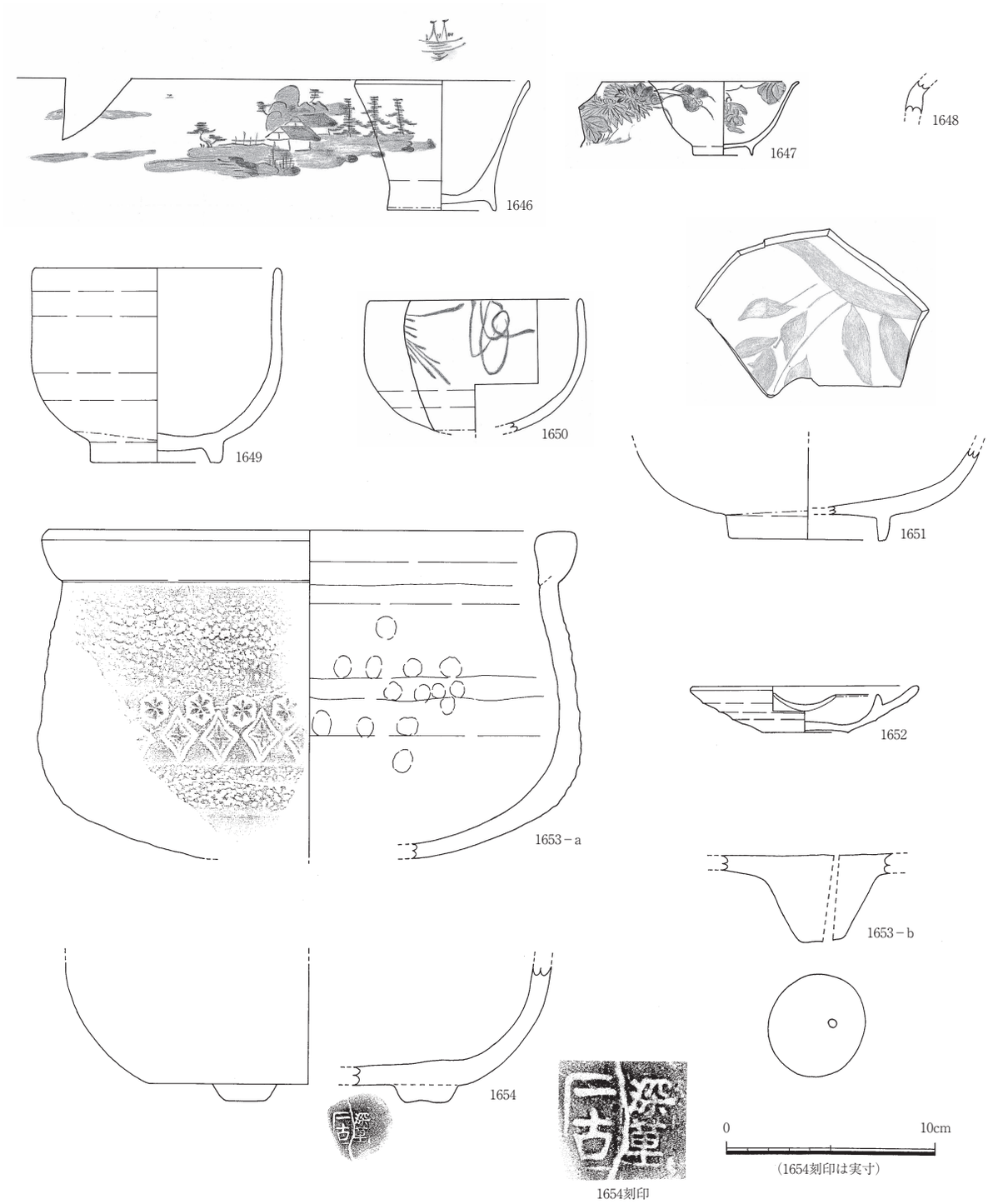


Fig.179　SK88出土遺物実測図

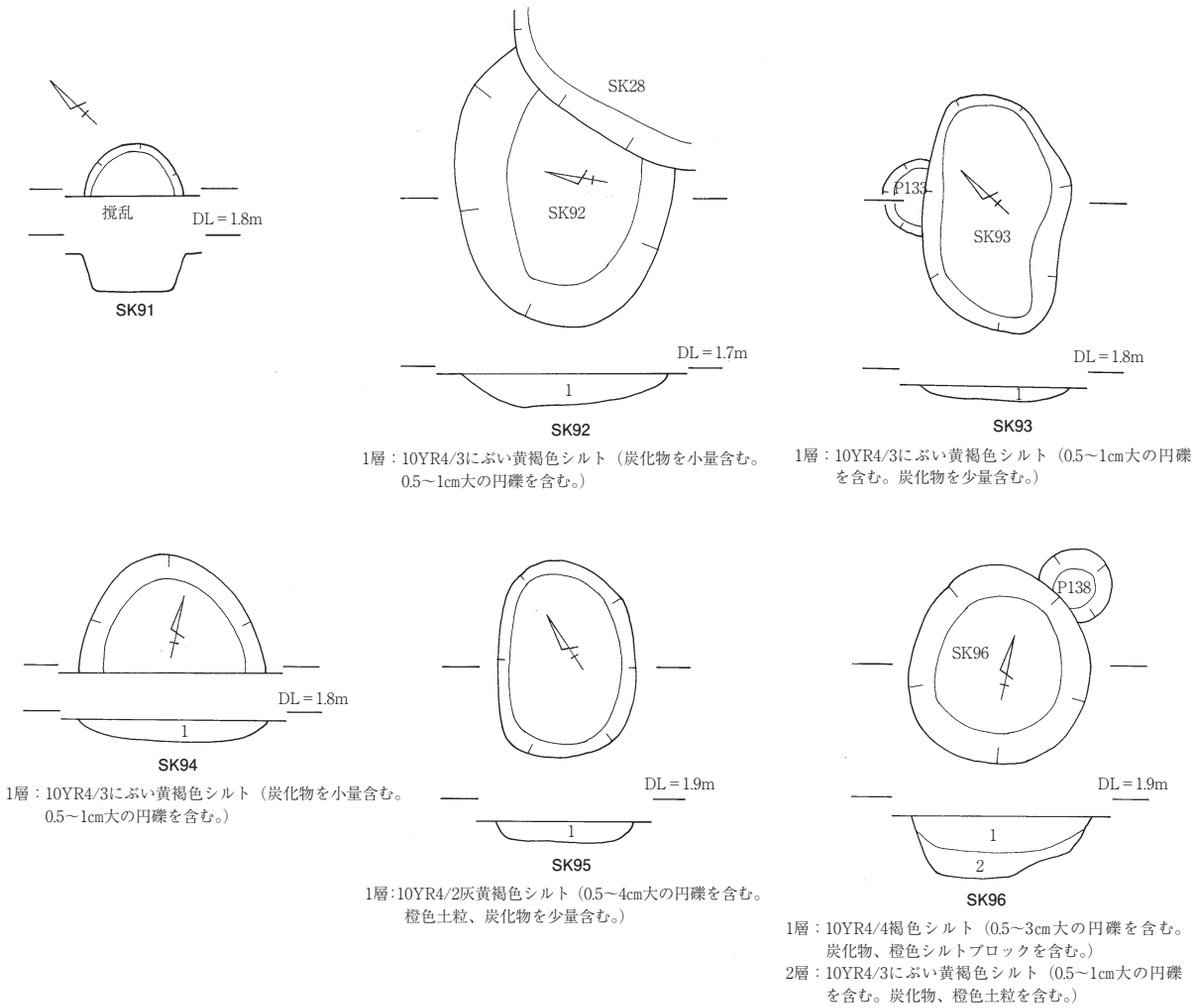


Fig.180　SK91 ～ 96平面図・セクション図・エレベーション図

0　1m

SK91（Fig.180）

調査区東部に位置する。南部側が撹乱を受けるため規模、形態とも不明であるが、検出規模は東西長0.54m、南北残存長0.28m、深さ20cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は無く、廃絶年代等の詳細は不明である。

SK92（Fig.180・181）

調査区東部に位置する。東部側が別遺構によって切られるため全体の規模は不明であるが、平面形は楕円形を呈し、検出規模は南北長1.18m、東西残存長1.50m、深さ18cmを測る。断面形態は皿状で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では18世紀のSK28に切られる。

出土遺物は、陶器（小皿1・不明1）、土器（杯2・小皿8）であり、陶器には志野焼の口縁部片１点、唐津系灰釉陶器の小皿１点が含まれる。

図示したものは1655～1659である。1655は唐津系灰釉陶器の小皿。1656～1658は土師質土器の杯、1659は杯又は小皿である。

SK92は17世紀前葉に比定される。

SK93（Fig.180・181）

調査区東部に位置する。平面形は不整形を呈し、検出規模は長軸1.30m、短軸0.80m、深さ８cmを

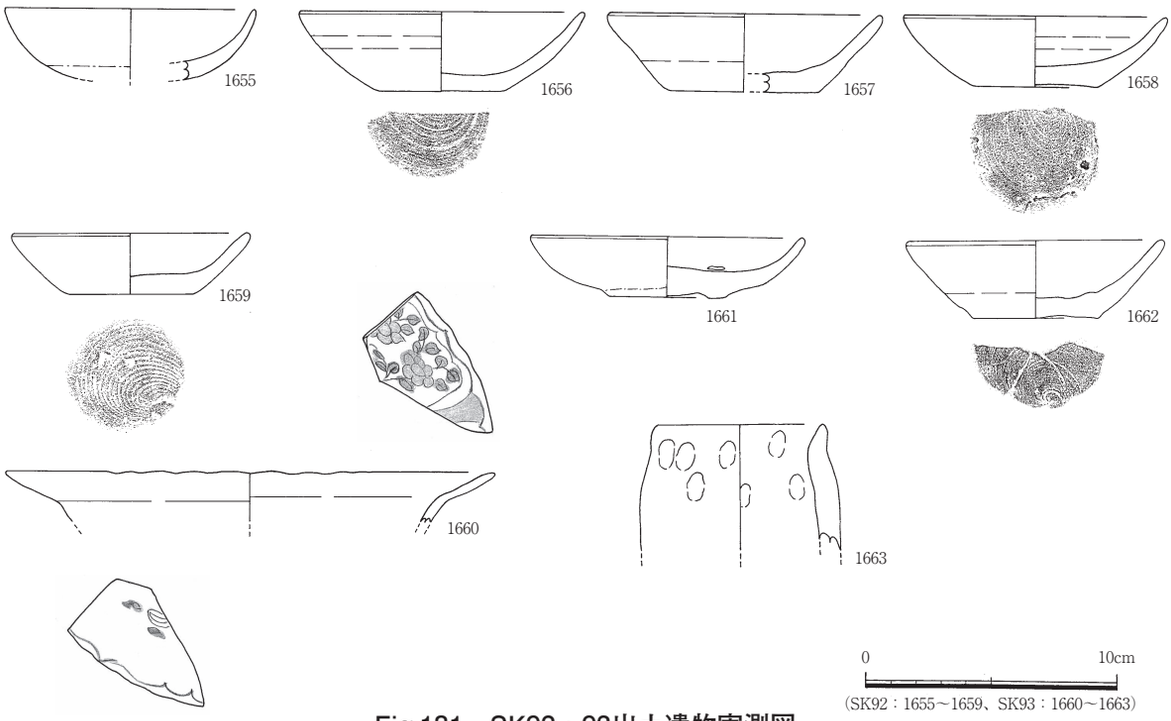


Fig.181　SK92・93出土遺物実測図

測る。断面形態は皿状で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では時期不明のP133を切っている。

出土遺物は、青花（皿1）、陶器（小皿1）、土器（杯2・小皿1・焼塩壺1）である。

図示したものは、1660～1663である。1660は景徳鎮窯系の芙蓉手青花皿。1661は瀬戸の灰釉丸皿。1662は土師質土器杯。1663は焼塩壺である。

SK93は17世紀前葉に比定される。

SK94（Fig.180・182）

調査区東部に位置する。南部側が撹乱を受けるため全体の規模は不明であるが、検出規模は東西長1.00m、南北残存長0.62m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は、磁器（碗1）、陶器（中碗1）、土師質土器（小皿1・人形1）であり、初期伊万里碗、京都系の灰釉碗、土人形等が出土している。図示したものは、初期伊万里の丸形中碗（1664）、土師質土器の人形（1665）である。

遺物量が少なく年代の詳細はつかめないが、SK94は17世紀後半～18世紀に比定される。

SK95（Fig.180・182）

調査区東部に位置する。平面形は楕円形で、断面形態は皿状を呈する。検出規模は長軸1.06m、短軸0.74m、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は、陶器（鉢1・不明1）、土器（小皿1）である。

図示したものは、織部焼の向付（1666）、絵唐津の体部片（1667）である。

SK95は17世紀前葉に比定される。

SK96（Fig.180・182）

調査区東部に位置する。平面形は円形で、検出規模は長軸1.05m、短軸0.98mm、深さ32cmを測る。埋土は褐色シルトとにぶい黄褐色シルトで、埋土中に橙色シルトのブロックと炭化物を含んでいる。切り合い関係では18世紀前葉のP138を切っている。

出土遺物は、磁器（中碗1・碗又は鉢1・壺1・不明1）、陶器（中碗1・小皿2）、土器（小皿2）で、唐津系灰釉陶器皿、肥前産の灰釉丸碗など17世紀の遺物が出土している。

図示したものは1668～1670である。1668は青磁中碗で、肥前産1630～1640年代の製品である。1669は染付の瓶で、外面に削り出しによる縦筋を施す。肥前産17世紀前半の製品である。1670は灰釉中皿である。

SK96は17世紀に比定される。

SK97（Fig.183～185）

調査区東部に位置する。西部側が撹乱を受けるため全体の形状は不明であるが、検出規模は南北長1.96m、東西残存長1.21m、深さ56cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトとにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では19世紀中葉のSK117と時期不明のSD9を切っている。

出土遺物は、磁器（中碗19・小碗5・小皿9・中皿1・鉢3・碗蓋7・燗徳利1・蓋物3・蓋物蓋5・段重3・香炉1）、陶器（中碗1・小杯1・小皿4・中皿1・鉢1・捏鉢1・片口1・擂鉢1・鍋2・鍋蓋2・土瓶3・土瓶蓋2・蓋物1・甕3・灯明受皿5・火鉢1・植木鉢1・鳥の水入れ1・不明1）、土器（小皿6・焙烙3・焜炉3・火鉢2・型1・泥面子1）、銅製品（不明1）、及び瓦片である。

図示したものは、1671～1688である。1671～1673は磁器。1671は陽刻型打成形の青磁小皿で、関西系。1672は肥前系の染付段重。1673は関西系の染付燗徳利で、花の部分は白土で塗り分ける。1674～1677は陶器。1674は能茶山窯産の鉄釉片口。1675は尾戸窯の灰釉瓶で、鉄錆で「□□神」

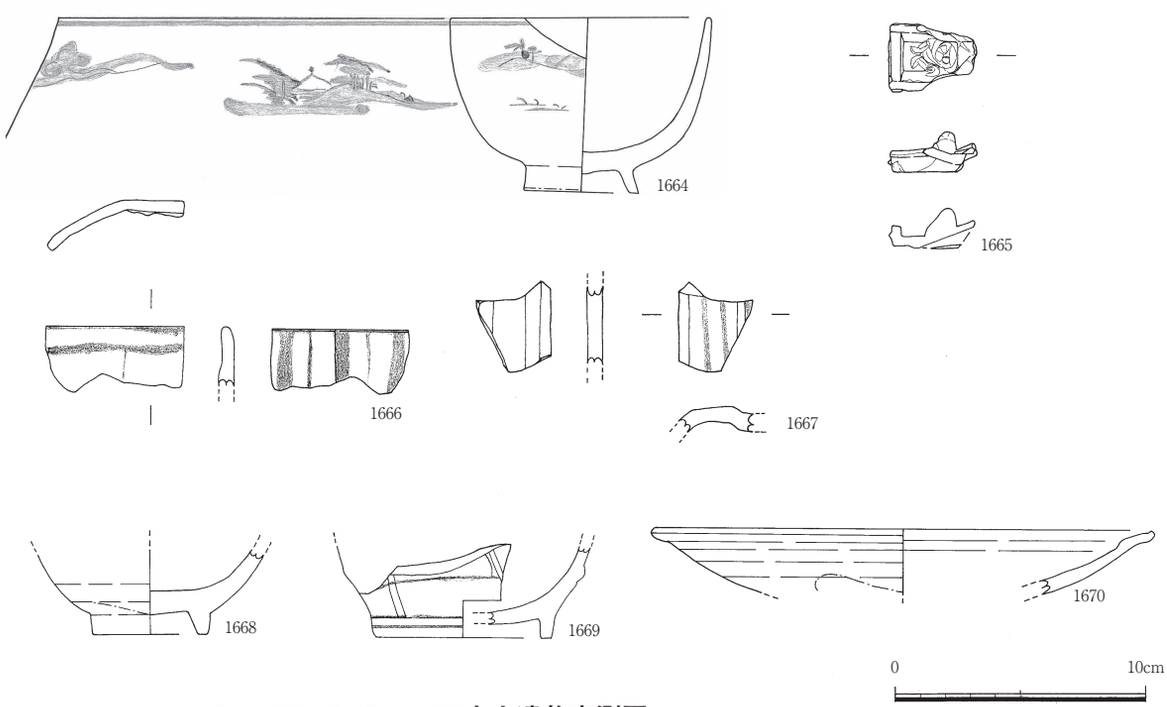


Fig.182　SK94～96出土遺物実測図　（SK94：1664・1665、SK95：1666・1667、SK96：1668～1670）

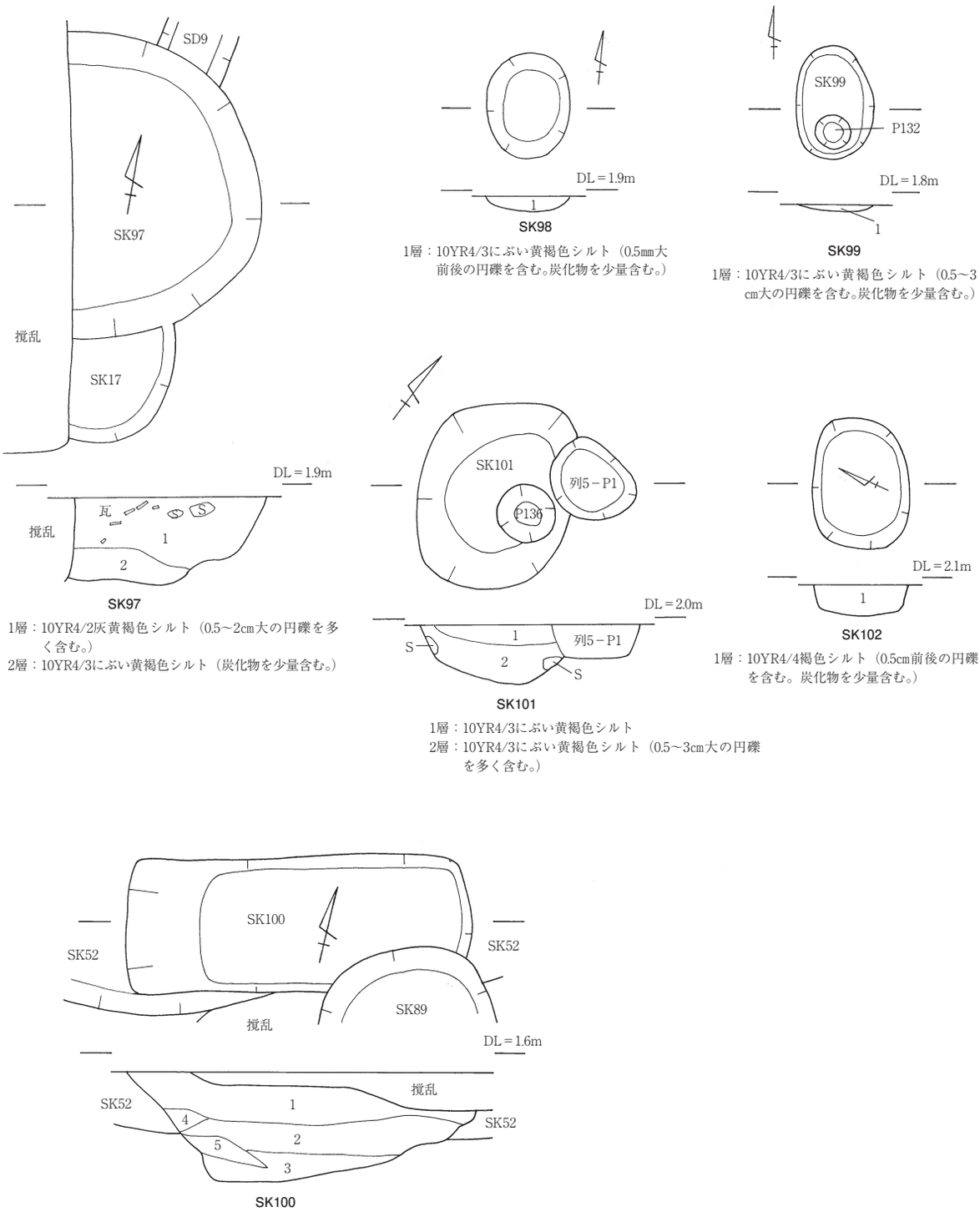


Fig.183　SK97 ～ 102平面図・セクション図

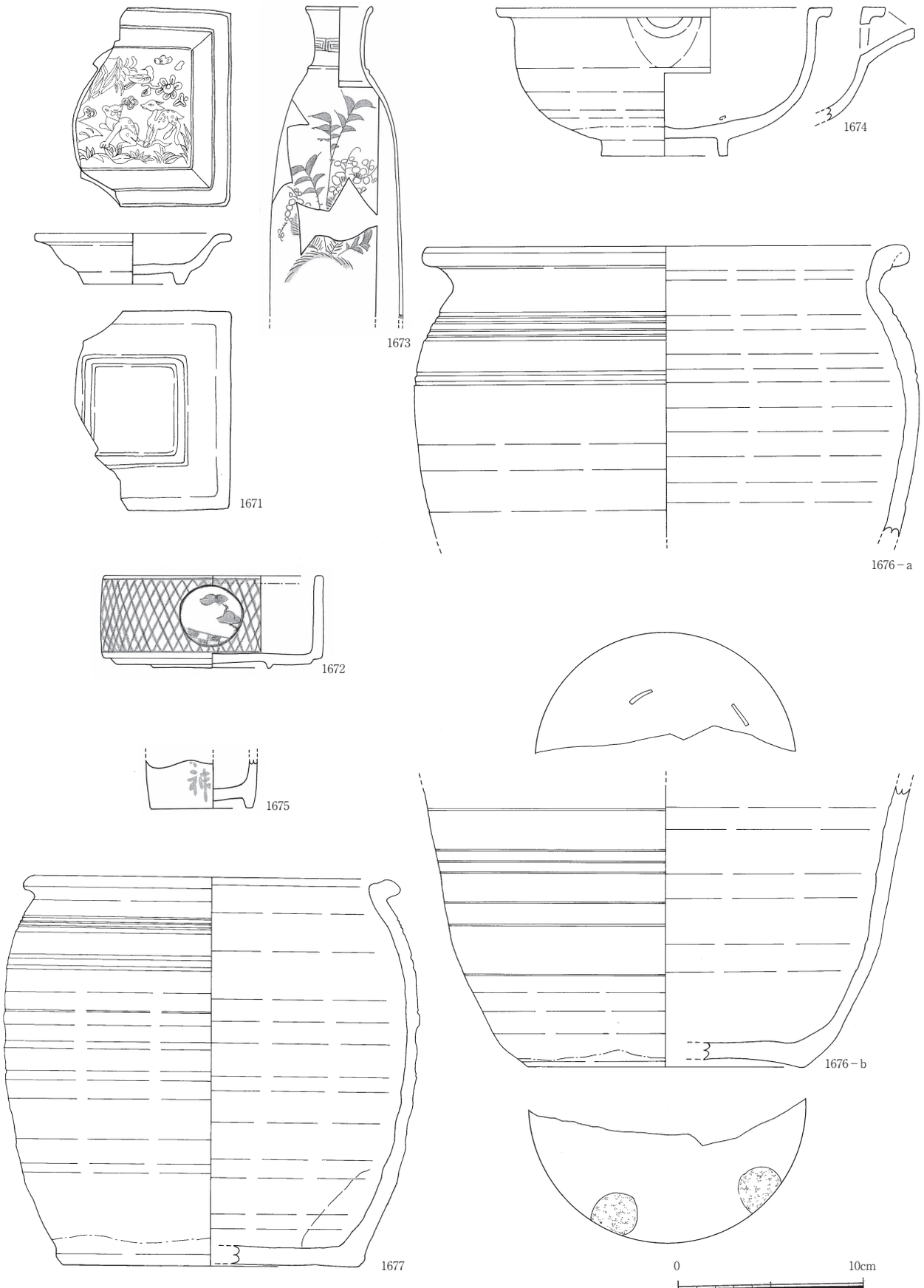


Fig.184　SK97出土遺物実測図（1）

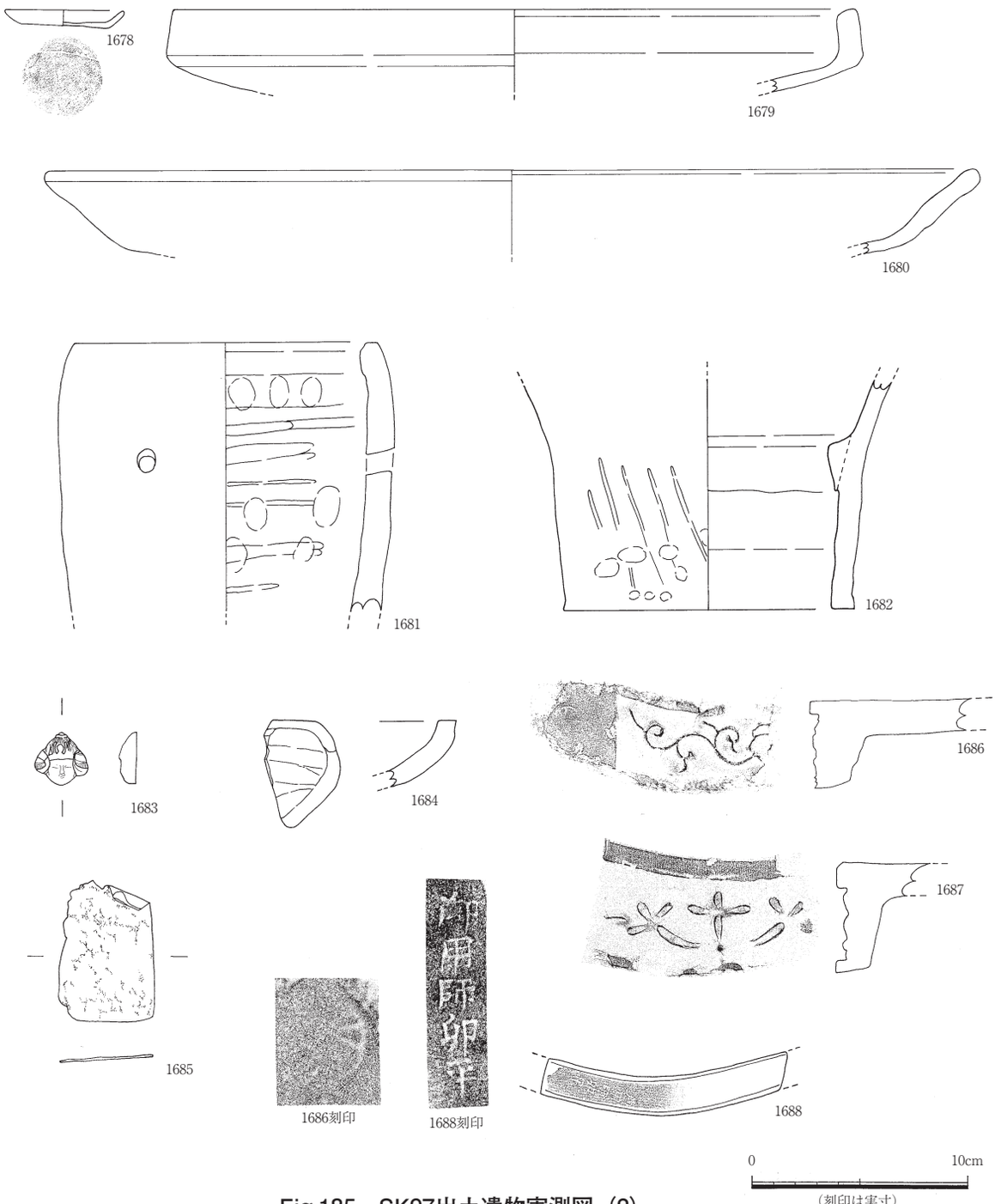


Fig.185　SK97出土遺物実測図（2）

字を描く。1676・1677は能茶山窯産の鉄釉甕で、1676は内底に棒状の焼台痕、外底に団子状の胎土目剥離痕が残る。1678・1680～1684は土師質土器、1679は瓦質土器である。1678は土師質土器小皿。1679は関西系の焙烙、1680は讃岐岡本系の焙烙である。1681は筒型の焜炉で、体部中位に円孔をもつ。1682は内面に断面三角形の突帯を貼付するもので、焜炉の内部施設か。1683は泥面子。型押し成形によるもので、胎土中に金雲母を含み関西の製品とみられる。1684は型である。1685は薄い板状の銅製品で、用途不明。1686～1688は瓦。1686･1687は軒平瓦で、1686 は瓦当に丸枠内「堺」とみられる銘印をもち、大阪府堺の製品か。1688は平瓦で、「御用師卯平」銘印をもつ。図示したものの他にも、能茶山窯の蛇の目釉剥ぎ鉄釉小皿、行平鍋、甕、火鉢、産不明の青土瓶などが出土している。

SK97は19世紀中葉（幕末）に比定される。

SK98（Fig.183）

調査区東部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.68m、短軸0.54m、深さ８㎝を測る。断面形態は皿状で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は土師質土器片２点のみである。

SK98は17世紀に比定される。

SK99（Fig.183）

調査区東部で検出された土坑で、P132を切っている。平面形は楕円形で、検出規模は長軸0.72m、短軸0.50m、深さ６㎝を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は土師質土器小皿１点、磁器細片１点のみである。SK99の時期の詳細は不明である。

SK100（Fig.183・186・187）

調査区東部に位置する。平面形は長方形を呈し、検出規模は長軸2.20m、短軸0.88m、深さ70㎝を測る。断面形態は不整形で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルト他で、埋土中に炭化物を少量含む。切り合い関係では18世紀中葉のSK52を切り、19世紀中葉のSK89に切られる。

出土遺物は、磁器（中碗８・小碗２・小皿６・鉢１・猪口１・瓶１）、陶器（中碗４・小皿３・中皿１・捏鉢１・擂鉢１・瓶１・香炉又は火入れ２）、土器（小皿２・白土器小皿１）、及び瓦片である。

図示したものは1689～1708である。1689～1699は磁器。1689・1692は能茶山窯産、その他は肥前産又は肥前系である。1689は能茶山窯の端反形中碗で、外面に山水文、高台内に角枠内「茶」銘を描く。1692は能茶山窯の輪花形小皿で、外面に草文、内面に宝文、高台内に「サ」銘を描く。1693は陽刻型打成形の皿又は鉢で、外面に如意頭文を描き、内面に陽刻文様を施す。1694は色絵染付の輪花形鉢。内外面に呉須と金・赤・緑・黄・黒の上絵付で草花文を描く。1695は内面に草文を描くもので、紅猪口か。1696は白磁の菊花形紅皿である。1697は蓋物の蓋。1698・1699は人形又は水滴で、1698は動物、1699は魚を型取ったものとみられる。

1700～1703は陶器。1700は尾戸窯の灰釉中碗で、高台施釉。高台内に渦状の鉋痕が残る。1701は尾戸窯の灰釉小皿。外面に強いロクロ目を巡らせ、鉄錆で笹文を描く。1702は香炉又は火入れ。焼締めで、外面に宝文他の陰刻文様を施す。1703は堺・明石系の擂鉢である。

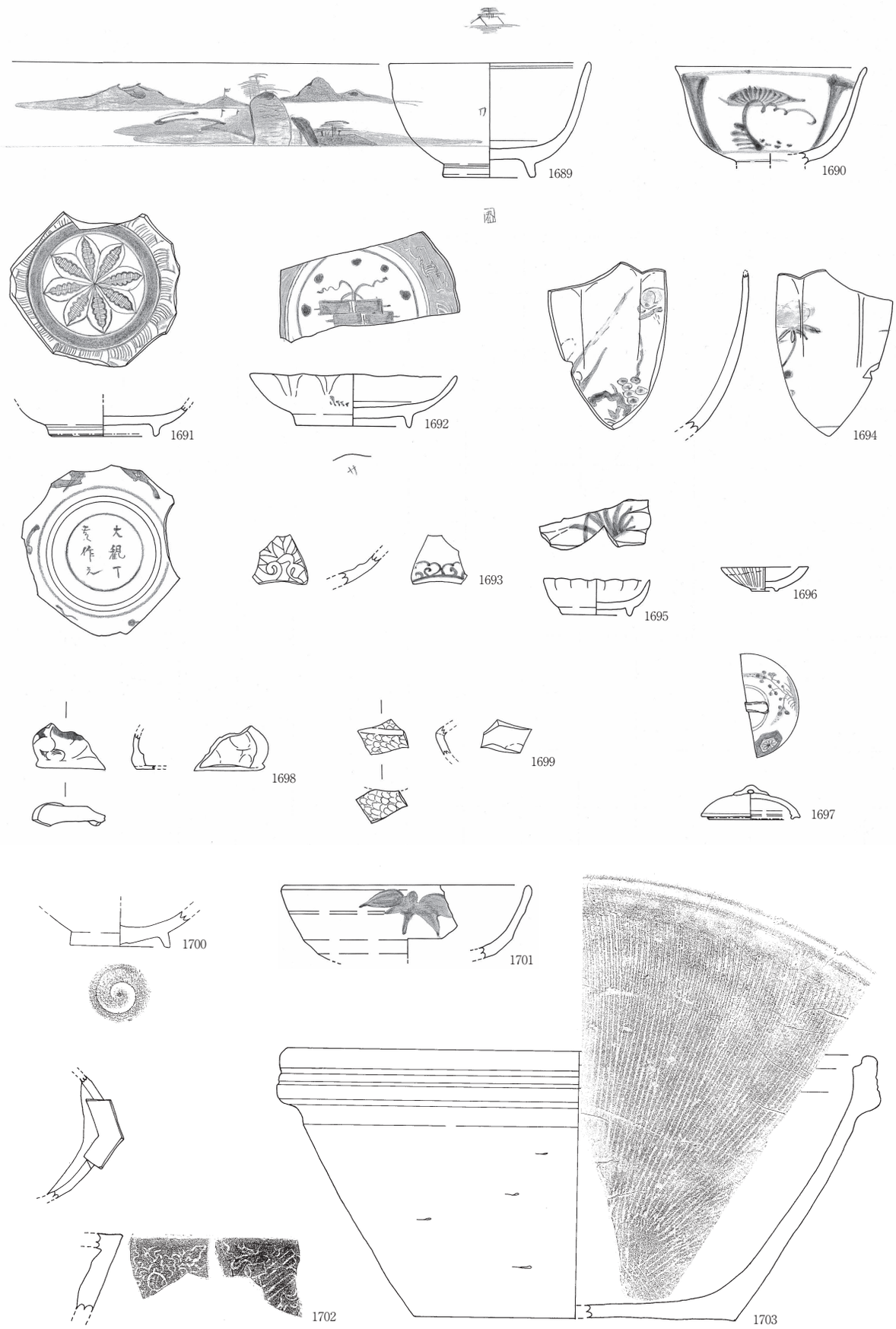


Fig.186　SK100出土遺物実測図（1）

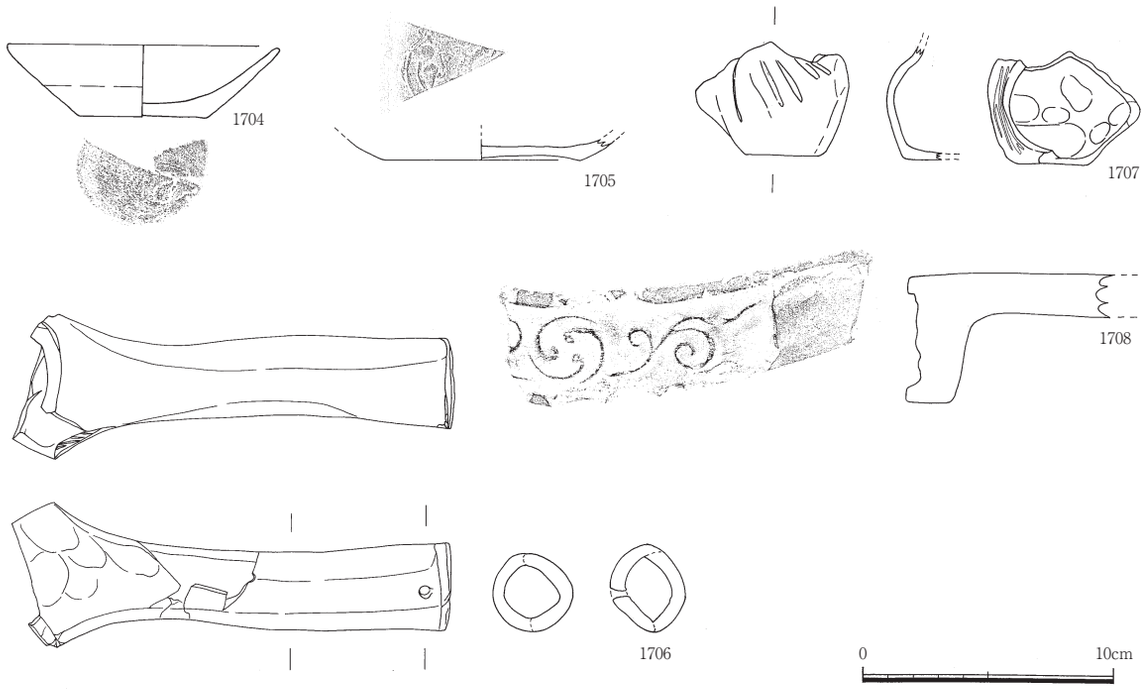


Fig.187　SK100出土遺物実測図（2）

1704～1707は土師質土器。1704は土師質土器杯。1705は尾戸窯の白土器小皿で、陽刻による高砂文を施す。1706は胡麻煎りの把手である。1707は人形で、型押し成形前後貼り合わせで中空である。1708は軒平瓦である。

SK100は19世紀中葉に比定される。

SK101（Fig.183）

調査区東部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.20m、短軸1.00m、深さ36cmを測る。断面形態は皿状である。埋土はにぶい黄褐色シルトで、埋土中に焼土塊を含む。切り合い関係では、18世紀前葉のSX22に上面を切られ、18世紀のピット列5－P1とP136に切られる。

出土遺物は、磁器（五寸皿1・皿又は鉢1）、陶器（中碗1・鉢1）、土器（小皿2）、銅製品（吸口1）、及び瓦片であり、瀬戸・美濃産の灰釉鉢、被熱した肥前産の染付皿などが含まれる。また、瓦は厚手のものである。

出土遺物の内容及び、被熱資料や焼土塊などの共通性からみて、SK101は18世紀前葉の火災処理遺構との関連性が考えられる。

SK102（Fig.183・188）

調査区東部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.84m、短軸0.60m、深さ20cmを測る。断面形態はU字状で、壁は直立気味に立ち上がる。埋土は褐色シルトである。

出土遺物は、磁器（小皿1）、陶器（中碗1・小皿1）、土器（小皿１）、銅製品（不明1）である。

図示したものは、1709～1711である。1709は初期伊万里の染付小皿で、内面に草花文を描く。1710は灰釉中碗で、外面に回転削りによる稜を巡らせ、高台内に渦状の鉋痕が残る。1711は銅製の匙である。

SK102は17世紀に比定される。

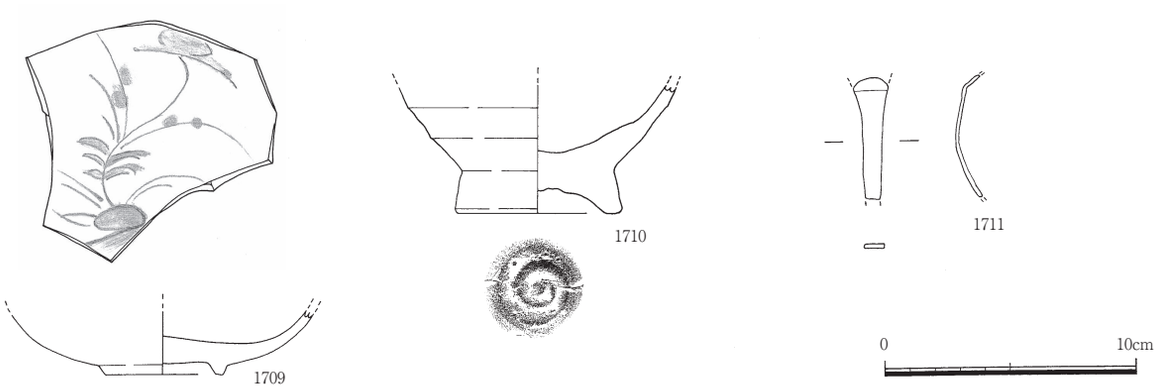


Fig.188　SK102出土遺物実測図

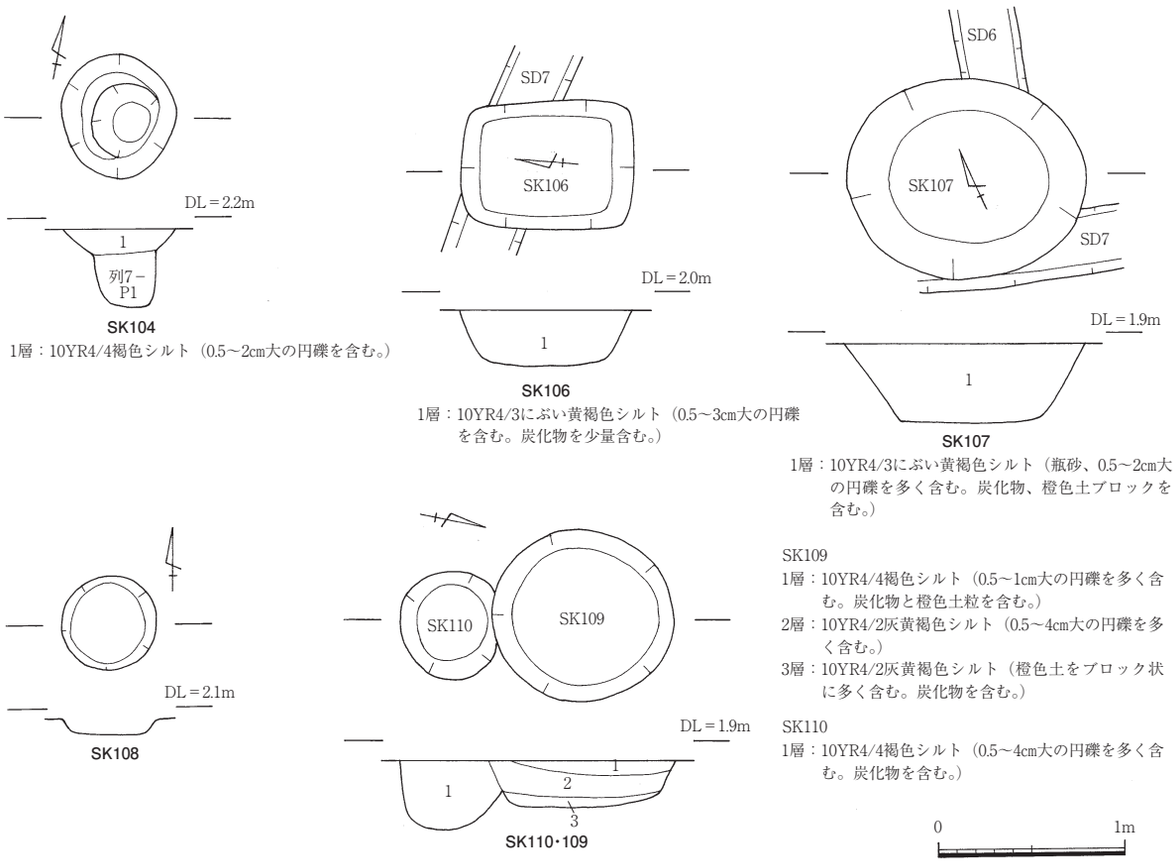


Fig.189　SK104・106～110平面図・セクション図・エレベーション図

SK104（Fig.189）

調査区東部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.70m、短軸0.60m、深さ14cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は褐色シルトである。切り合い関係ではピット列7－P1を切っている。出土遺物は無く、年代は不明である。

SK106（Fig.189）

調査区東部に位置する。平面形は長方形を呈し、検出規模は長軸0.92m、短軸0.68m、深さ30cmを測る。断面形態は逆台形で、平坦な床面から壁が斜め上方に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係ではSD7を切っている。

出土遺物は、磁器（中碗1・小皿1・紅皿1）、陶器（中碗1・土瓶蓋1）、土器（小皿1）、瓦片である。またこの他にも、陶器甕、土器焜炉の体部片が出土している。

SK106は19世紀前葉～中葉に比定される。

SK107（Fig.189）

調査区東部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.26m、短軸1.06m、深さ42cmを測る。断面形態は逆台形で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係ではSD6・7を切っている。

出土遺物は、磁器（小皿1）、陶器（小皿1・鉢1）であり、肥前産の白磁菊花形小皿等が含まれている。またこの他には、軟質施釉陶器の体部細片、土器焜炉の体部片が出土している。

SK107は19世紀前葉～中葉に比定される。

SK108（Fig.189）

調査区東部に位置する。平面形は円形を呈し、検出規模は径0.50m、深さ８cmを測る。埋土は褐色シルトである。出土遺物は、陶器（灯明受皿1・火入れか1）、土器（小皿2）であり、黒褐色の胎土に錆釉を施した灯明受皿、灰釉の火入れ底部等が含まれている。

SK108の時期の詳細については不明である。

SK109（Fig.189）

調査区東部に位置する。平面形は円形を呈し、検出規模は径0.92～0.98m、深さ26cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は褐色シルトと灰黄褐色シルトである。切り合い関係では17世紀末～18世紀前半のSK110を切っている。

出土遺物は、磁器（人形又は水滴1）、陶器（小皿1）、土器（小皿2）であり、唐津系灰釉陶器小皿、色絵を施した人形又は水滴、肥前産の灰釉丸碗の体部片、土師質土器小皿等が含まれている。

出土遺物及びSK110との関係性からみて、SK109は17世紀末～18世紀前半に比定される。

SK110（Fig.189）

調査区東部に位置する。平面形は円形を呈し、検出規模は径0.58m、深さ38cmを測る。断面形態はU字状である。埋土は褐色シルトである。切り合い関係では、17世紀末～18世紀前半のSK109に切られている。

出土遺物は、磁器（碗1）、陶器（体部細片のみ）、土器（小皿1）であり、肥前産の染付雨降り文小碗の口縁部、肥前内野山窯の銅緑釉小皿の体部細片、尾戸焼の可能性をもつ灰釉碗の体部細片、

土師質土器小皿等が出土している。

SK110は17世紀末～18世紀前半に比定される。

SK112（Fig.190）

調査区東部に位置する。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸0.60m、短軸0.44m、深さ８㎝を測る。埋土は褐色シルトである。

出土遺物は無く、廃絶年代は不明である。

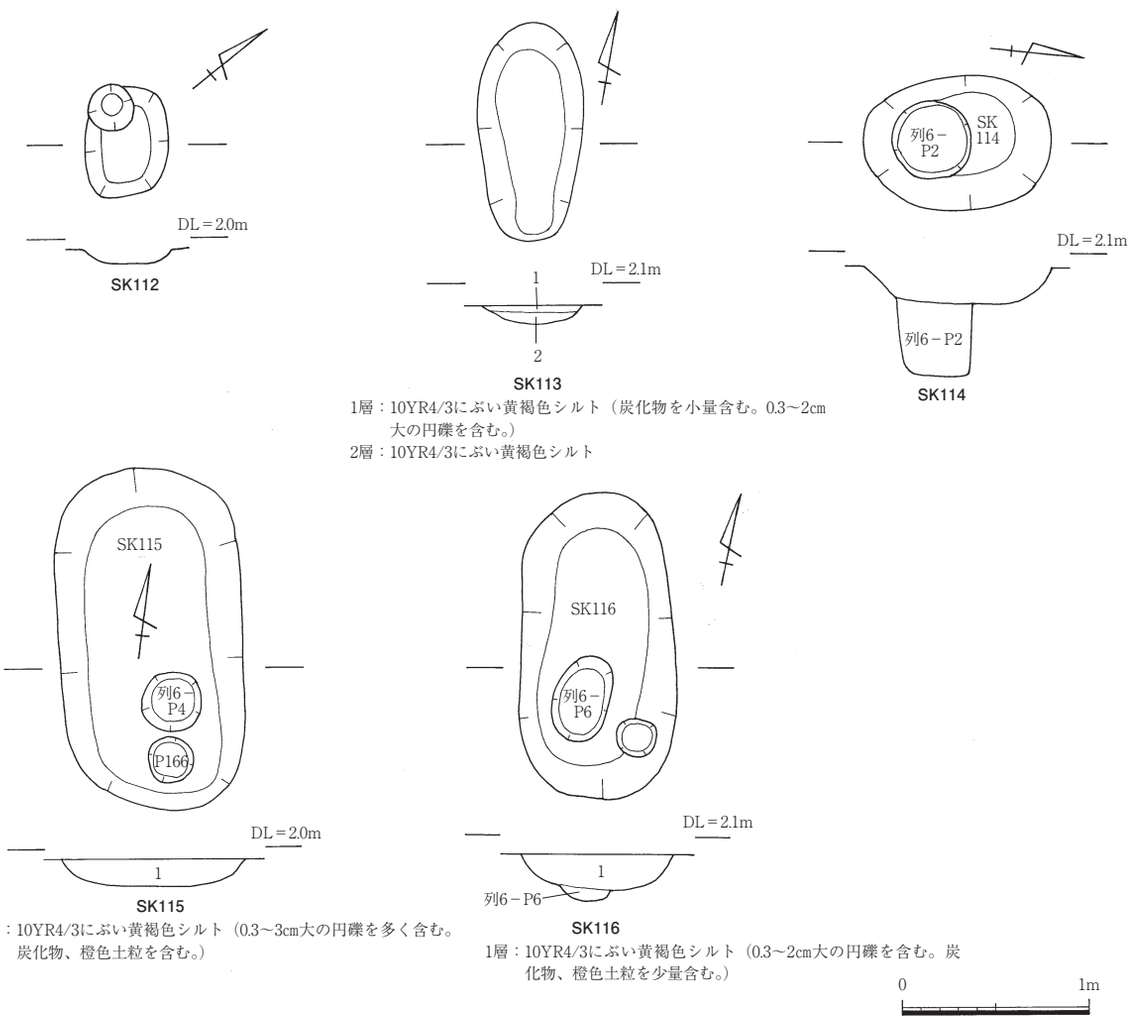


Fig.190　SK112～116平面図・セクション図・エレベーション図

SK113（Fig.190・191）

調査区東部に位置し、焼土溜まりSX22の下面で検出された。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.16m、短軸0.56m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。

出土遺物は、寛永通宝（1722）１点である。

SX22との前後関係からみて、SK113の廃絶年代は18世紀前葉以前に求められる。

SK114（Fig.190）

調査区東部に位置し、焼土溜まりSX22 の下面で検出された土坑である。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.00m、短軸0.71m、深さ20cmを測る。埋土は褐色シルトで、埋土中に炭化物と橙

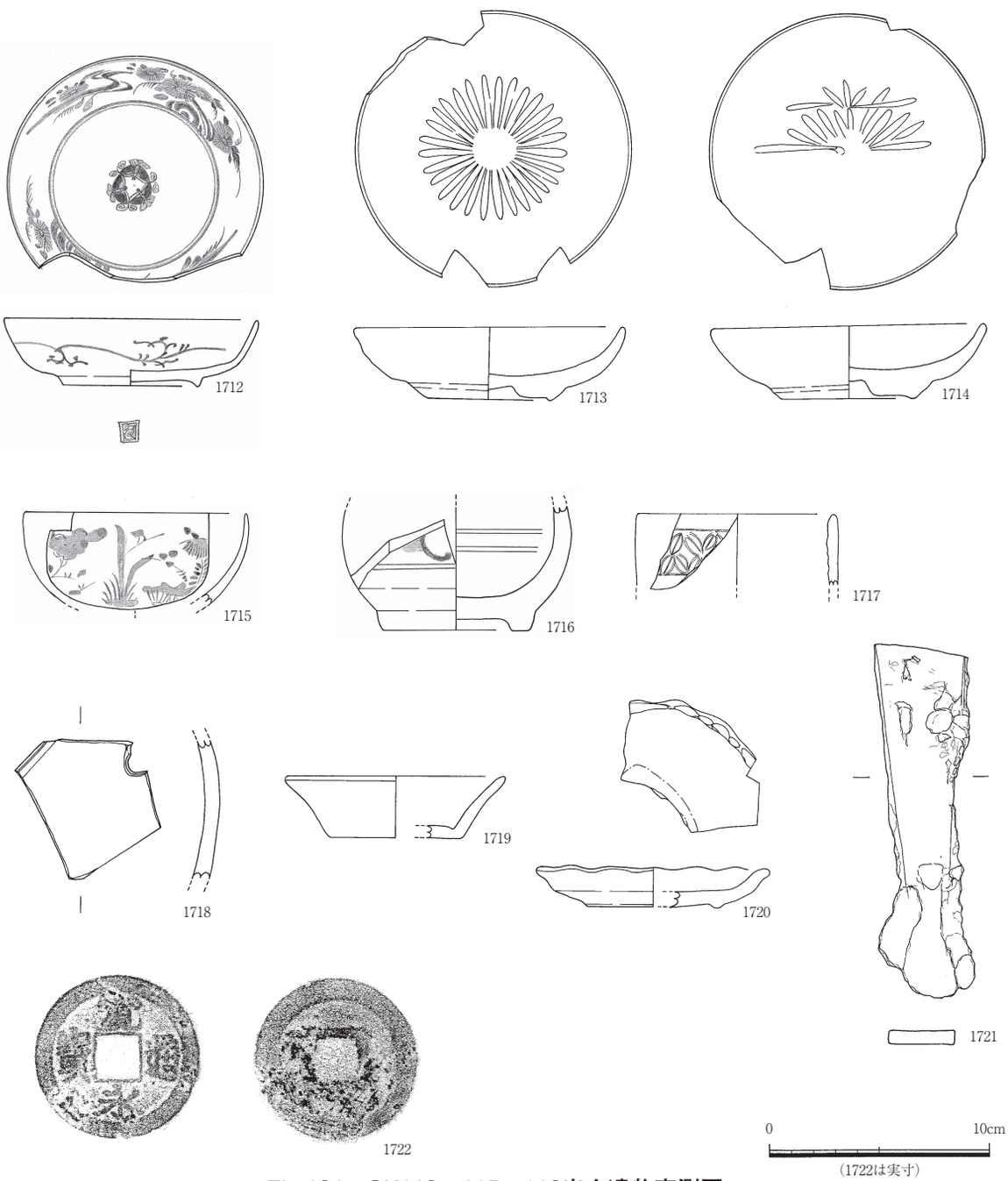
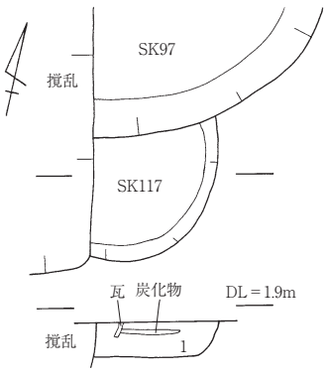


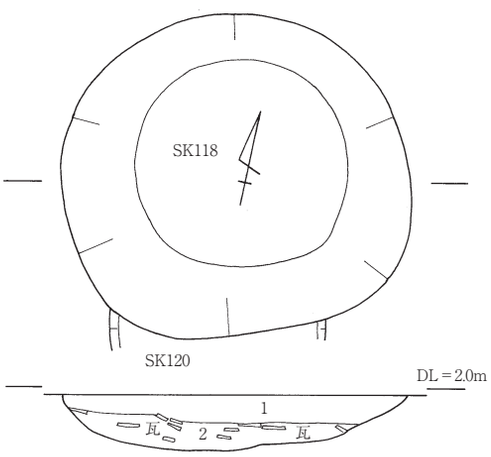
Fig.191　SK113・115・116出土遺物実測図

（SK113：1722、SK115：1712～1719、SK116：1720・1721）



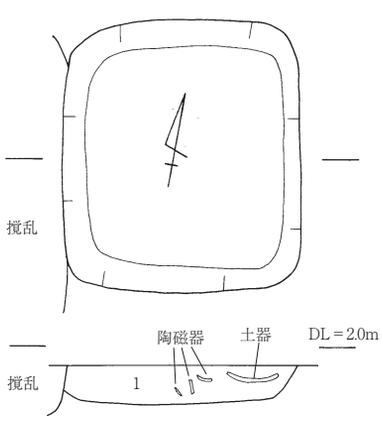
SK117

1層：10YR4/3にぶい黄褐色シルト（0.5～1cm大の円礫を含む。炭化物を含む。）



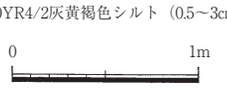
SK118

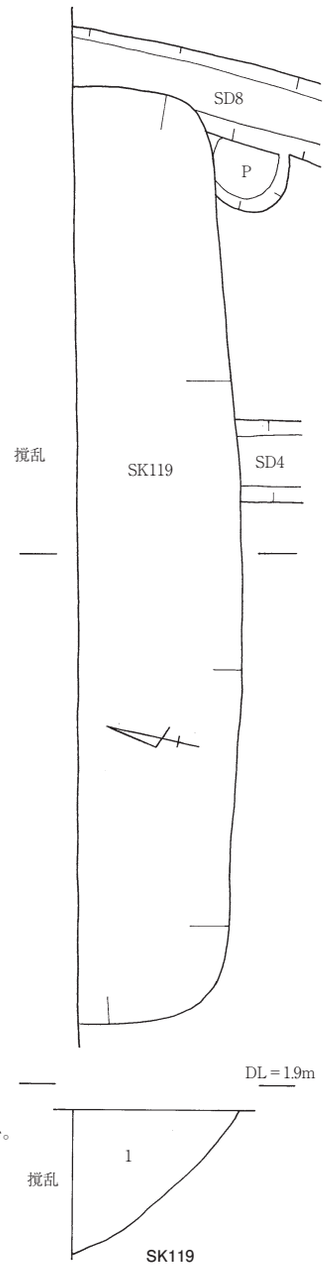
1層：10YR3/3暗褐色シルト（0.5～3cm大の円礫を含む。炭化物、焼土ブロックを含む。）
2層：10YR3/3暗褐色シルト（0.5～3cm大の円礫を含む。炭化物、焼土ブロックを多量に含む。瓦片を多く含む。）



SK121

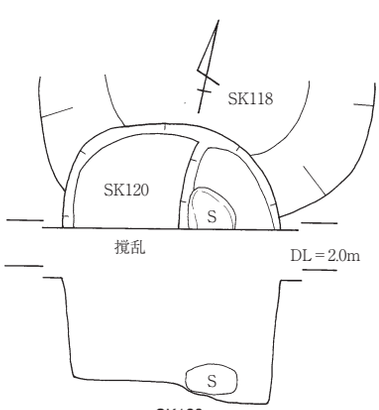
1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～3cm大の円礫を含む。炭化物を含む。）





SK119

1層：10YR4/2灰黄褐色シルト（0.5～3cm大の円礫を含む。炭化物を含む。）



SK120

1層：10YR3/4暗褐色シルト（粗砂に0.3～0.5cm大の礫を多く含む。下層に炭化物を多量に含む。）

Fig.192　SK117～121平面図・セクション図・エレベーション図

色土ブロックを含んでいる。切り合い関係ではピット列6－P2を切り、SX22に切られている。

出土遺物は、染付又は白磁の細片、灰釉皿の体部細片、土師質土器細片、及び瓦片であり、瓦片は二次被熱によって変色している。

出土遺物や埋土の状況、及びSX22との関連性からみて、SK114はSX22とほぼ同時期に掘削された、火災後の処理に伴う廃棄土坑と考えられる。SK114は18世紀前葉に比定される。

SK115（Fig.190・191）

調査区東部に位置し、焼土溜まりSX22の下面で検出された。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.83m、短軸0.98m、深さ14cmを測る。断面形態は皿状である。埋土はにぶい黄褐色シルトで、埋土中に炭化物と橙色土粒を含んでいる。切り合い関係ではピット列6－P4・P166を切り、18世紀前葉のSX22に切られる。

出土遺物は、磁器（中碗1・小碗1・小皿5・猪口1・瓶1）、陶器（中碗1・小皿1・中皿1・擂鉢2・皿又は鉢1）、土器（杯1・小皿1・ミニチュア1）、窯道具（匣鉢1）、瓦片である。

図示したものは、1712～1719である。1712は肥前産の染付小皿で、外面に如意頭連続唐草文、内面に菊水と蝶、高台内に角枠内渦「福」を描く。1713は蛇の目凹形高台の青磁小皿で、内面に丸彫りによる陰刻文様を施す。1715は草花文の染付丸碗。1716は瓶で、畳付に白色の粗砂が付着する。1717は尾戸窯の灰釉碗で、外面に白象嵌による七宝文を巡らせ、灰白色を帯びる半透明の釉を施す。1718は灰釉の鉢か。ロクロ成形の後、変形させて口縁を切り取り、透かしを施す。1719は土師質土器杯である。図示したものの他にも、備前焼擂鉢などが出土している。

SX22との切り合い関係及び出土遺物からみて、SK115は18世紀前葉に比定される。

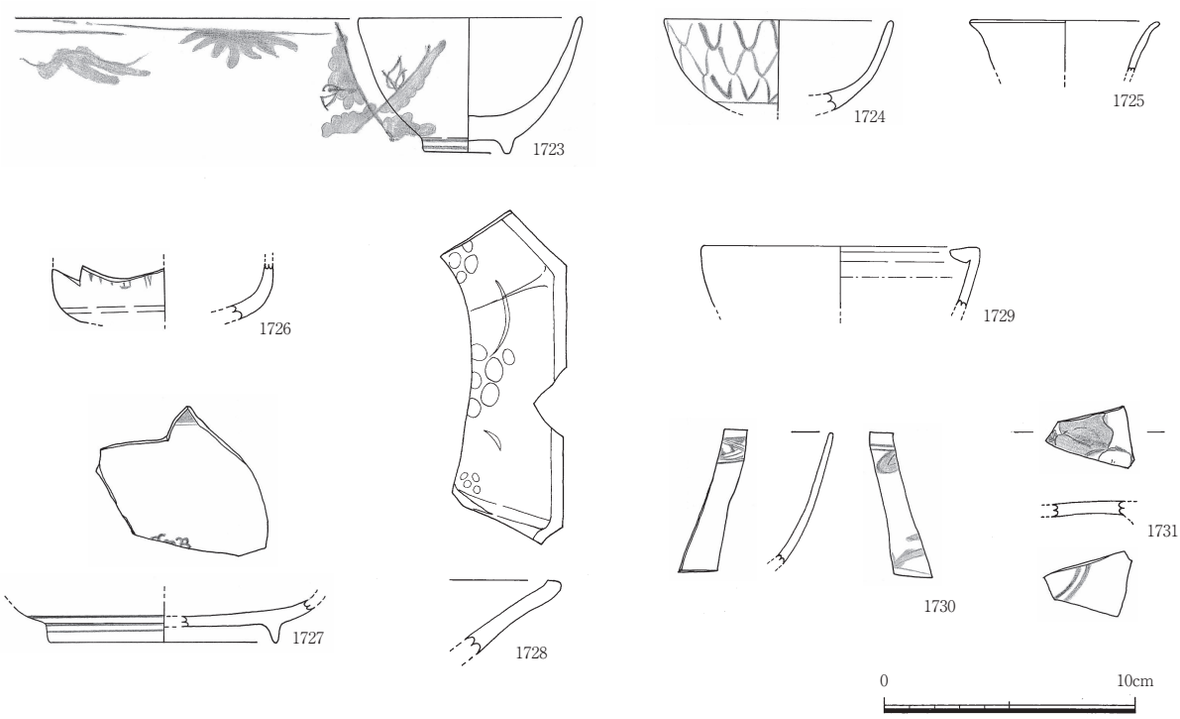


Fig.193　SK118出土遺物実測図

SK116（Fig.190・191）

調査区東部に位置し、焼土溜まりSX22の下面で検出された土坑である。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸1.62m、短軸0.84m、深さ20cmを測る。断面形態は皿状である。埋土はにぶい黄褐色シルトであり、炭化物と焼土粒、焼土塊を含んでいる。また、埋土中からは、二次被熱によって赤変した瓦片が出土している。切り合い関係ではピット列6－P6を切り、18世紀前葉のSX22に切られている。

出土遺物は、磁器（小杯1・小皿1・皿又は鉢1・瓶2・香炉1）、陶器（小皿2）、鉄製品（不明1）、瓦片である。図示したものは、褐釉小皿（1720）、鉄製品（1721）である。1720は瀬戸のひだ皿で、高台施釉。見込みと高台内に輪状の胎土目痕が残る。大窯期の製品である。図示したものの他にも、肥前産の染付瓶の体部片、青磁香炉、唐津系灰釉陶器小皿等が出土している。

出土遺物やSX22との前後関係によって、SK116は18世紀前葉に比定される。また、被熱遺物や埋土の状況からみて、SX22とほぼ同時期に掘削された、火災後の処理に伴う廃棄土坑と考えられる。

SK117（Fig.192）

調査区東部に位置する。北部側が別遺構によって切られ西部が撹乱されるため規模と形態は不明であるが、検出規模は東西残存長0.68m、南北残存長0.66m、深さ20cmを測る。床面は平坦で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では近世のSK97に切られる。

出土遺物は、磁器（中碗1・小皿1）、陶器（小皿1・鍋蓋1・土瓶蓋1）、土器（小皿1）、銅銭（寛永通宝1）、瓦片であり、肥前産の染付端反形碗、鉄釉の土瓶蓋、などが出土している。

SK117は19世紀中葉に比定される。

SK118（Fig.192・193）

調査区東部で検出された土坑で、焼土溜まりSX22の南西側に近接する。平面形は円形を呈し、検出規模は径1.86×1.72m、深さ30cmを測る。断面形態は皿状である。埋土は暗褐色シルトであり、埋土中には炭化物と焼土のブロックを多く含んでいる。また、最下層にあたる２層には被熱し赤変した瓦片が多く含まれる。切り合い関係では18世紀前葉のSK120を切っている。

出土遺物は、磁器（中碗2・小碗1・小杯1・小皿五寸皿3・鉢1・香炉1）、青花（碗1）、陶器（中

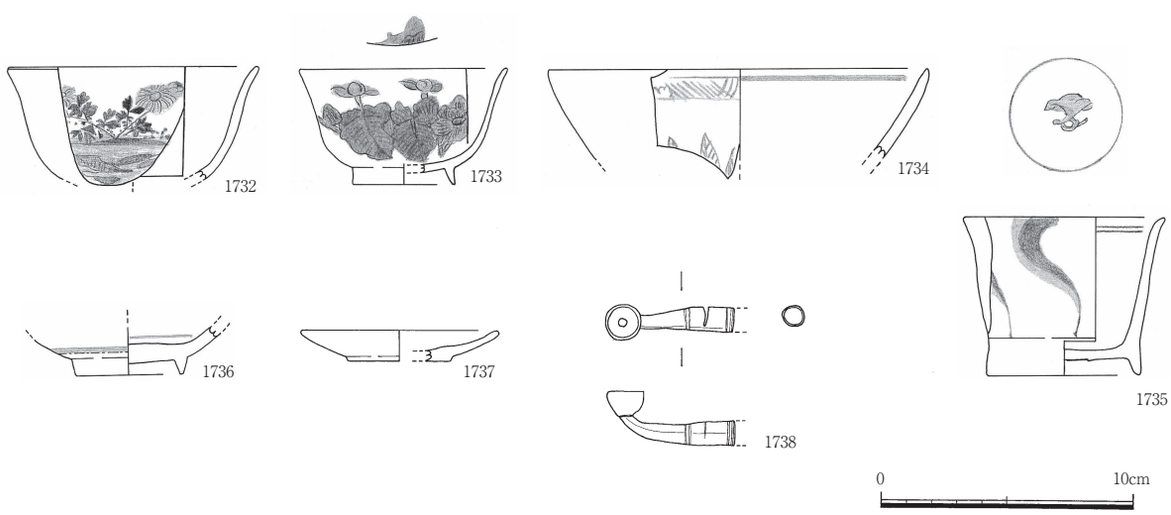
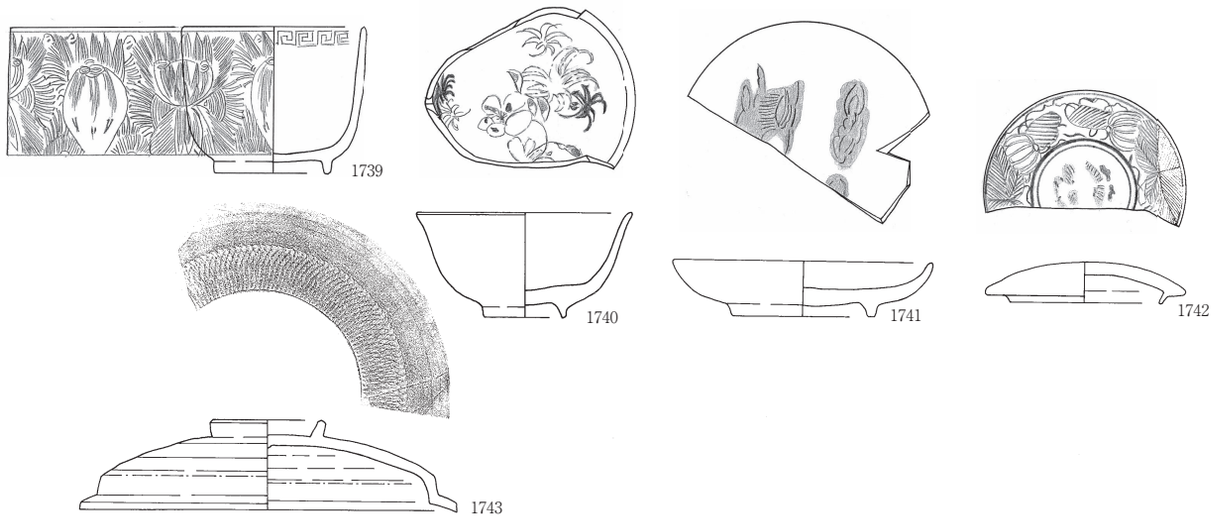
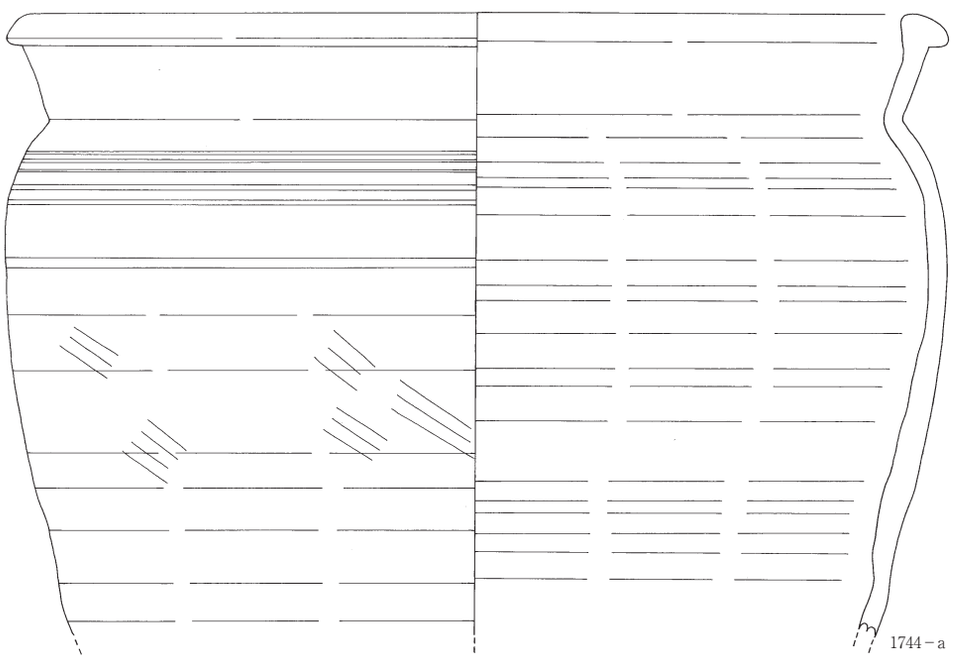
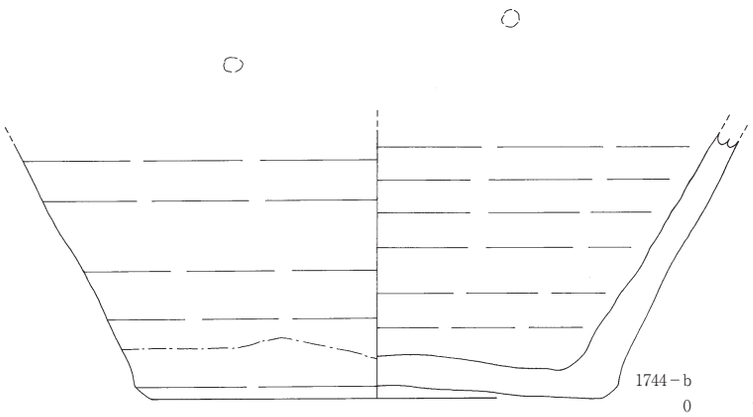


Fig.194　SK119・120出土遺物実測図（SK119：1732～1735、SK120：1736～1738）







0　10cm

Fig.195　SK121出土遺物実測図（1）

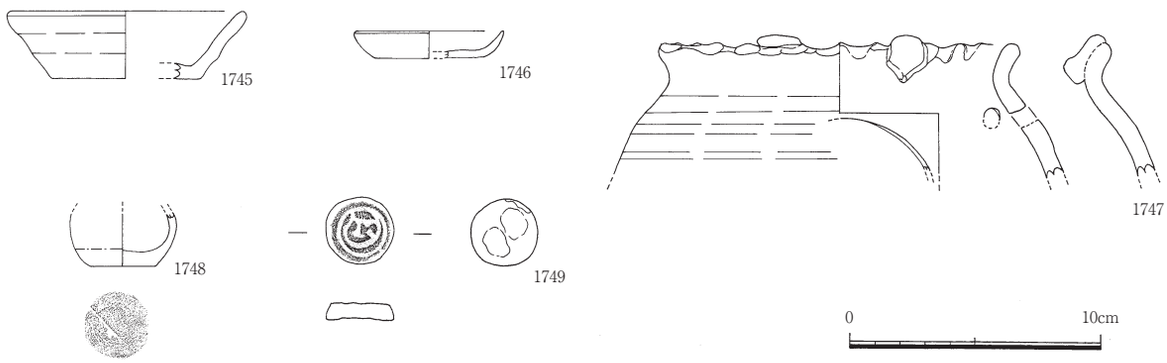


Fig.196　SK121出土遺物実測図（2）

碗2・小皿1・中皿1）、土器（小皿5）、銅製品（煙管雁首1）、及び瓦片である。このうち瓦は厚手で被熱赤変したものが多くあり、被熱した磁器体部片２点も含まれる。

図示したものは、1723～1731である。1723～1729は肥前産、1730・1731は中国産である。1723・1724は染付の丸形碗。1725は白磁小碗。1726は色絵磁器の碗とみられ、赤の上絵付で文様を描く。1727は染付皿で、内面にコンニャク印判による五弁花文を施す。1728は八角形の青磁鉢で、内面に陽刻文様を施す。1729は青磁の香炉又は火入れである。1730は景徳鎮窯系の青花碗で、口縁端部の釉が虫食い状に剥がれる。1731は景徳鎮窯系の青花皿で、古染付。内面に人物文が描かれる。この他にも、肥前産の灰釉丸碗、尾戸焼の体部片などが出土している。また、瓦は厚手のものが多い。

SK118は18世紀前葉に比定される。また、出土遺物の内容や埋土の状態からみて、SX22と同時期頃に機能した、火災後の片付けに伴う廃棄土坑と考えられる。

SK119（Fig.192・194）

調査区東部に位置する。北側の大部分が撹乱を受けるため規模、形態は不明であるが、東西確認長5.0m、南北残存長0.86m、深さ78cmまでを検出している。南壁を確認したが床面までは達しておらず、径５m前後の大型土坑であった可能性が高い。埋土は灰黄褐色シルトである。切り合い関係では18世紀末～19世紀のSD4と18～19世紀のSD8を切っている。

出土遺物は、磁器（中碗3・小碗2・小皿五寸皿2・猪口2・段重1）、青花（碗1）、陶器（中碗1・小皿1・捏鉢1・擂鉢1・土瓶1・蓋物蓋1）である。

図示したものは、1732～1735である。1732は肥前産の端反形染付中碗。1733は関西系の端反形小碗で、外面にヘラ彫りによる陰刻文様と呉須を施す。1734は青花碗で、外面に波濤文と芭蕉葉、内面に圏線を描く。1735は肥前産の染付猪口である。図示したものの他、京信楽系の蓋物蓋、備前焼擂鉢、瀬戸・美濃産の染付小碗等が出土している。

SK119は19世紀前葉～中葉に比定される。

SK120（Fig.192・194）

調査区東部に位置し、SK118の床面で検出された土坑である。また、焼土溜まりSX22の南西に近接している。南部側が調査区外に出ているため全体の形状は不明であるが、検出規模は東西長1.16m、南北確認長0.56m、深さ62cmを測る。断面形態は逆台形である。埋土は暗褐色シルトであり、下層には多量の炭化物と被熱赤変した瓦片を含んでいる。また、床面からは径30cm前後の礫が出土

している。切り合い関係では18世紀前葉のSK118に切られる。

図示したものは1736～1738である。1736は中国漳州窯系の青花碗で、乳濁色の釉を施し、呉須は緑灰色に発色する。1737は土師質土器小皿。1738は煙管の雁首である。

被熱遺物や埋土の状況からみて、SK120は火災後の処理に伴う廃棄土坑と考えられ、SK118やSX22との関連性が窺われる。SK120は18世紀前葉に比定される。

SK121（Fig.192・195・196）

調査区東部に位置する。西側を僅かに撹乱されるが、平面形は方形で、検出規模は南北長1.46m、東西長1.26m、深さ21cmを測る。断面形態は皿状で、床面はほぼ平坦である。埋土は灰黄褐色シルトである。

出土遺物は、磁器（中碗1・小碗3・小皿2・中皿1・蓋物蓋1・神酒徳利1）、陶器（小皿1・行平1・鍋蓋1・燗徳利1・甕1・蓋物2・植木鉢1）、土器（小皿2・焜炉6・泥面子1・小壺か1）、鉄製品（不明1）、瓦片6である。

図示したものは、1739～1749である。1739～1742は磁器。1739は肥前産の染付筒丸形小碗。1740は肥前産の色絵小碗で、赤・黒・その他の上絵付による花文を描く。1741は関西系の染付小皿で、ヘラ彫りによる陰刻文様と呉須で文様を描く。1742は肥前産の蓋物蓋である。1743・1744は陶器。1743は能茶山窯産の鍋蓋。外面に飛鉋を施し、内外面に灰釉を刷毛塗りする。1744は能茶山窯産の

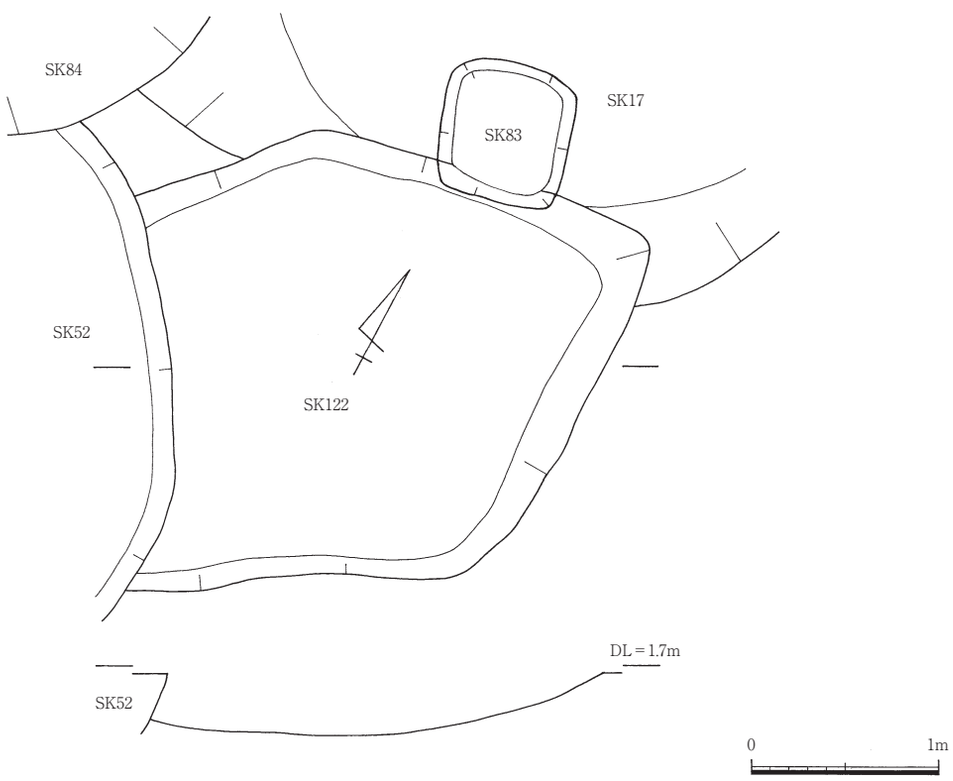


Fig.197　SK122平面図・エレベーション図

鉄釉甕で、内底に灰褐色の目痕が残る。1745～1747・1749は土師質土器。1745は杯。1746は小皿で、口縁部に灯芯油痕が残る。1747は京都系の焜炉で、灰白色の胎土をもつ。1749は泥面子である。1748は施釉土器で明黄褐色の低火度釉を施す。図示したものの他にも、能茶山窯産の行平、植木鉢、瀬戸・美濃産の白磁小皿などが出土している。

SK121は19世紀中葉に比定される。

SK122（Fig.197・198）

調査区東部に位置する。西部側が別遺構によって切られるため全体の規模は不明であるが、平面形は不整形とみられ、検出規模は南北長2.40m、東西残存長2.64m、深さ32cmを測る。断面形態は皿状で、壁は斜め上方へ緩やかに立ち上がる。埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では17世紀前葉のSK17を切り、19世紀中葉のSK52に切られる。また、18世紀末～19世紀前葉のSK83に上面を切られている。

出土遺物は、陶器（小皿4・鉢2）、土器（杯1・小皿5）、石製品（硯1）である。図示したものは、1750～1753である。1750・1751は唐津系灰釉陶器の小皿。1752は織部焼の向付で、内外面に錆絵を描き、白濁した釉を施す。内面には布目痕が残る。1753は絵唐津の変形形中皿である。図示したものの他にも、志野焼の細片が出土するが、磁器片は確認できていない。

出土遺物及びSK17との前後関係からみて、SK122は17世紀前葉に比定される。

SK123（Fig.199）

調査区東部に位置する。東側が調査区外に出ており、全体の規模、形態は不明であるが、南北長1.3m、深さ48cmを確認している。埋土はにぶい黄褐シルトで、下層には炭化物と焼土のブロックを多量に含んでいる。切り合い関係では18世紀のSK126を切っている。出土遺物は確認できていない。

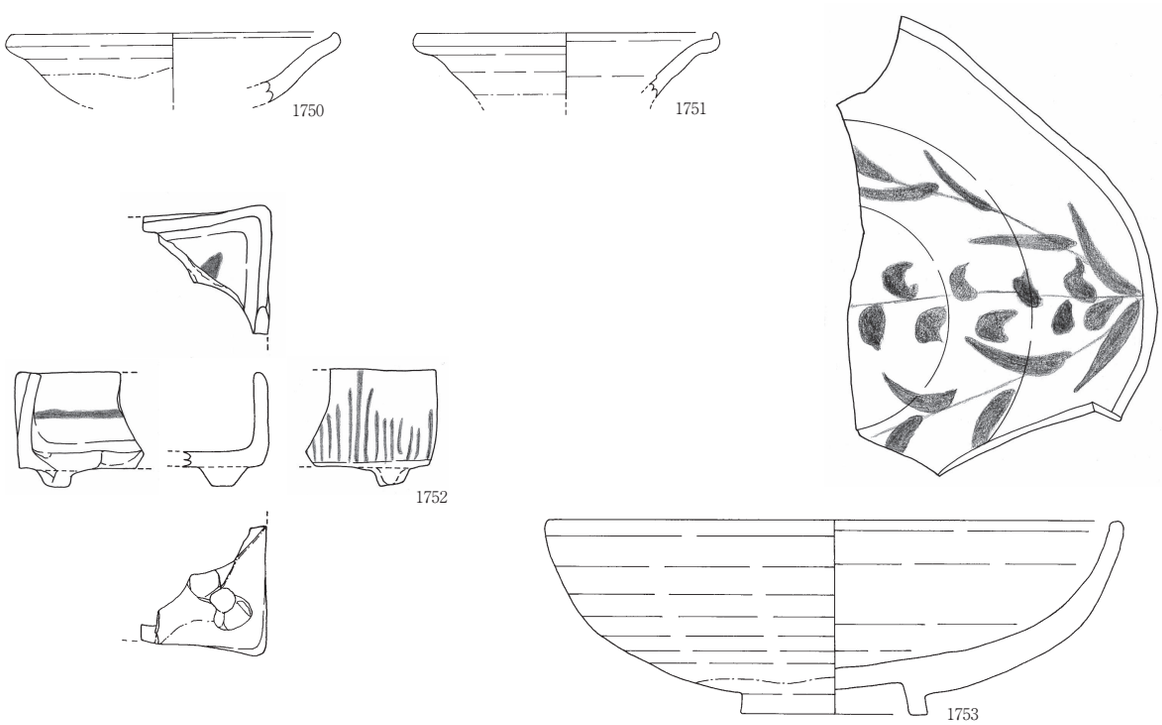


Fig.198　SK122出土遺物実測図

0　10cm

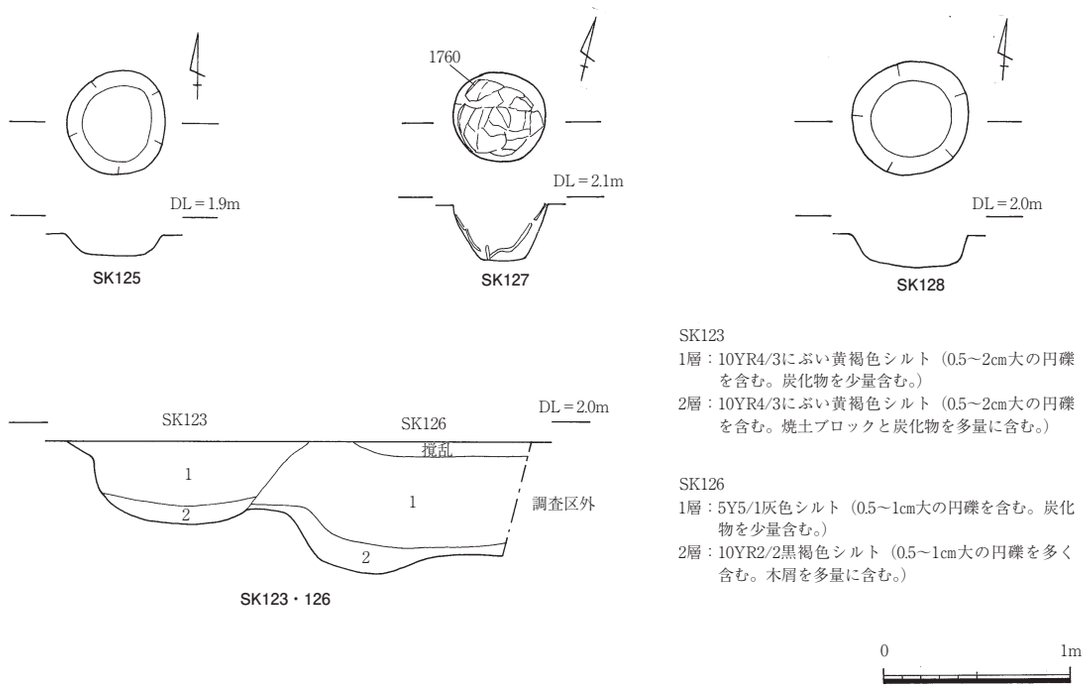


Fig.199　SK123・125～128平面図・セクション図・エレベーション図・遺物出土状況図

廃絶時期の詳細は不明であるが、埋土の共通点等からみて、近接する18世紀前葉の火災処理遺構SK118・120・SX22との関連性も考えられる。

SK124（Fig.200・207）

調査区南部に位置し、瓦溜２と石列３の下面で検出された。平面形は楕円形で、検出規模は長軸の残存長2.64m、短軸0.9m、深さ58cmを測る。床面は北側がやや深い。埋土は灰黄褐色シルトであり、埋土中に炭化物を含んでいる。切り合い関係では19世紀中葉の瓦溜２と石列３に切られる。

出土遺物は、磁器（中碗10･小碗２･小皿３･猪口１･碗蓋２）、陶器（中碗５･小碗３･小杯１･小皿１･中皿１・擂鉢３・鍋３・土瓶３・土瓶蓋１・急須１・燗徳利１・甕４・瓶１・火入れ１・火鉢１・植木鉢１・不明１）、土器（小皿７・焙烙１・火消壺１）である。

図示したものは、1755～1759である。1755は丹波焼の甕で、肩部に２条の凹線を巡らせ外面に灰オリーブ色の釉を施す。1756は体部前方に楕円形の窓をもち、鉄釉を施す。尾戸窯の製品とみられる。1757は焼締めの土瓶。手捏ね成形で、内外面にユビオサエ痕が顕著に残る。外底に布目痕を認める。1758は焼締めの鍋の把手か。1759は能茶山窯の柳川鍋で、黒褐色の釉を施す。図示したものの他にも、肥前系の染付広東形碗、瀬戸･美濃産の染付碗。能茶山窯産の鍋、行平、甕、火入れ、植木鉢、産不明の青土瓶等が出土している。

SK124は19世紀中葉に比定される。

SK125（Fig.199）

調査区東部に位置する。平面形は円形で、検出規模は径0.53～0.56m、深さ10cmを測る。埋土は褐色シルトである。出土遺物は無く、年代は不明である。

SK126（Fig.199・200）

調査区東壁で検出された土坑である。東側が調査区外に出ており、全体の形態は不明であるが、

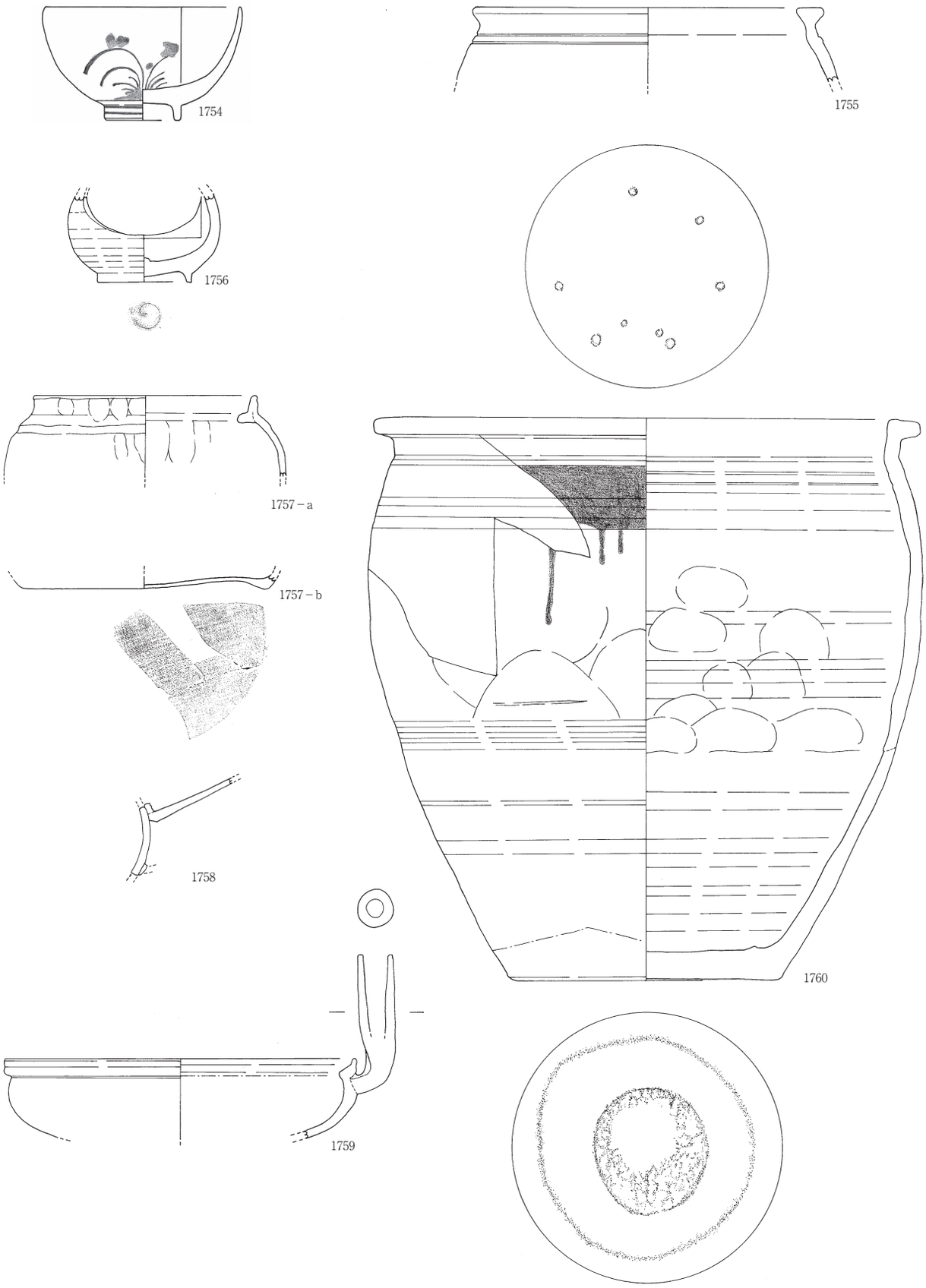


Fig.200　SK124・126・127出土遺物実測図

（SK124：1755 ～ 1759、SK126：1754、SK127：1760）

（1760はS＝1/4）

南北の確認長1.54m、深さ60cmを確認している。断面形態は不整形で、壁は斜め上方に立ち上がる。埋土は１層が灰色シルト、２層が黒褐色シルトで、２層内には木屑を多量に含んでいる。切り合い関係では、SK123に切られる。

出土遺物は肥前産の染付草花文丸碗（1754）である。

SK126は18世紀に比定される。

SK127（Fig.199・200）

調査区中央部で検出された埋甕遺構で、円形の掘り込み内に陶器製の鉄釉甕（1760）が据え置かれた状態で出土したものである。甕は上面を削平されており、径0.5m、深さ30cmを確認している。

図示したものは能茶山窯産の鉄釉甕（1760）で、法量は口径40cm、器高40cm、最大径39cmを測る。内面中位に粘土帯接合痕が観察でき、接合部付近に当て具痕が残る。

SK127は19世紀前半～中葉に比定される。

SK128（Fig.199）

調査区東部で検出された埋甕遺構である。平面形は円形で、上面は削平を強く受けており、径0.6m、深さ20cmを確認している。土坑内には陶器製の鉄釉甕が据えられているが、年代の詳細は不明である。

(2) 溝状遺構

溝状遺構は、10条を検出した。これらは、A群：N－11°－Wの軸方向をもつ南北溝（SD1・2・4・5）、B群：N－11°－Eの軸方向をもつ南北溝（SD6・8～10）とそれに直角に交わるN－79°－Wの東西溝（SD7）、C群：他とややずれをなす軸方向N－2°－Wの南北溝（SD3）、に大きく分かれる。A群としたSD1・2・4・5の軸方向は、現在の東側道路の軸とほぼ一致している。また、今次調査区では、塀や柵の可能性をもったピット列２～８とも軸が一致している。しかし、各溝とも下層の砂の堆積等は認められず、また検出長も短いことから、引水・排水溝としての機能は考え難いものであった。

各々の特徴と出土遺物及び年代的な検討を以下に述べる。

SD1（Fig.201・202）

調査区の南東部を南北方向にのびる溝である。軸方向はN－11°－Wで、北に位置する南北溝SD2・4・5と軸方向がほぼ一致している。検出規模は、幅75cm、深さ14cm、確認長は3mである。断面形態は逆台形を呈する。埋土は褐色シルトで、埋土中に炭化物と焼土粒を多量に含んでいる。切り合い関係では、17世紀末～18世紀前葉のSK56と時期不明のP51～54を切り、18世紀前葉のSX11に切られる。

出土遺物は肥前産の染付丸碗、染付皿、白磁小杯、肥前産の陶胎染付碗（1761）、尾戸窯の灰釉碗（1762）、唐津系灰釉陶器の小皿、備前焼の擂鉢（1763）、鉄釉瓶、丹波焼の甕、土師質土器小皿、寛永通宝（1764）である。SD1は18世紀前葉に比定される。

SD2（Fig.201）

調査区の東部を南北方向に延びる溝である。軸方向はN－11°－Wで、SD1・4・5と軸方向がほぼ一致している。検出規模は、幅75cm、深さ18cm、確認長は2.5mである。断面形態は逆台形で東側

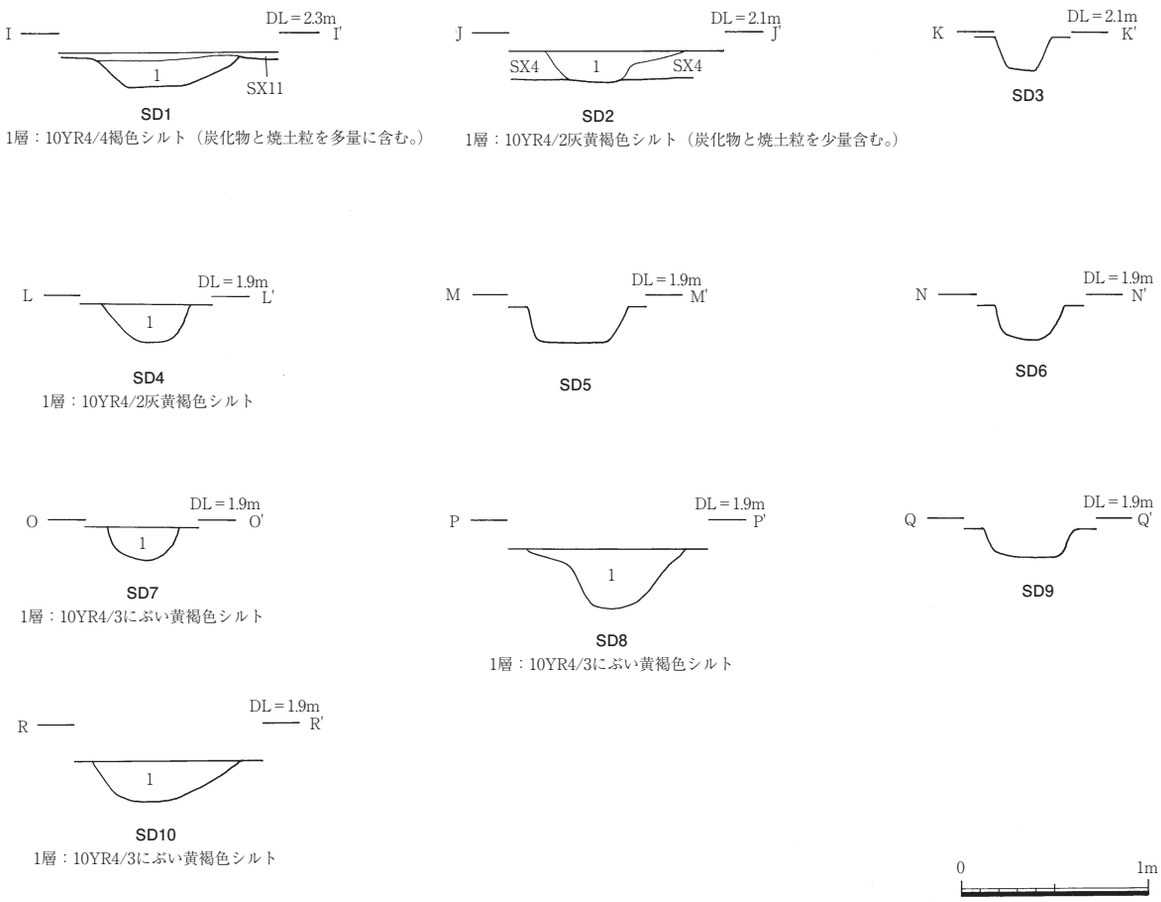


Fig.201　SD1～10セクション図・エレベーション図

にテラス状の高まりをもつ。埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物と焼土粒を少量含んでいる。切り合い関係では、17世紀前葉のSK17と18世紀前葉のSX4、時期不明のP4を切り、19世紀中葉のSK39に切られている。出土遺物は確認できていない。

SD3（Fig.201）

調査区の東部を南北方向に延びる溝である。軸方向はN－2°－Wで、周辺の南北溝SD1・2・4・5とは軸方向が僅かにずれる。検出規模は、幅30cm、深さ18cm、確認長は2mである。断面形態は逆台形で、埋土は灰黄褐色シルトである。切り合い関係では、18世紀末～19世紀初頭のSK25と時期不明のP88を切っている。出土遺物は肥前産又は肥前系の染付小碗と、瀬戸・美濃産の灰釉鉢である。

SD3の年代は18世紀末～19世紀初頭以降とみられる。

SD4（Fig.201）

調査区の東部を南北方向に延びる溝である。軸方向はN－11°－Wで、SD1・2・5と軸方向がほぼ一致している。検出規模は、幅44～48cm、深さ20～24cm、確認長は2mである。断面形態は逆台形で、埋土は灰黄褐色シルトである。切り合い関係では、19世紀前葉～中葉のSK119に切られている。出土遺物は肥前産の染付広東形碗、染付笹文小杯、染付蓋である。

SD4は18世紀末～19世紀に比定される。

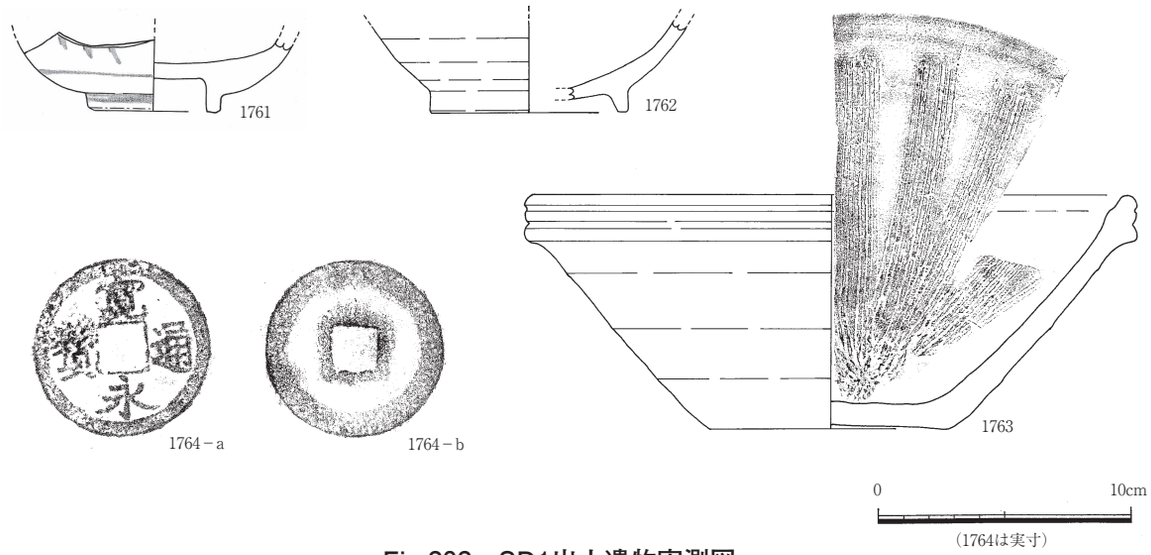


Fig.202　SD1出土遺物実測図

SD5（Fig.201）

調査区の東部を南北方向に延びる溝である。軸方向はN－11°－Wで、SD1・2・4と軸方向がほぼ一致している。検出規模は、幅45～52cm、深さ20cm、確認長は2mである。断面形態は逆台形で、埋土は灰黄褐色シルトである。出土遺物は確認できていない。

SD6（Fig.201）

調査区の東部を南北方向に延びる溝である。軸方向はN－11°－Eで、SD8～10と軸方向が一致し、東西溝SD7とは直角に交わる。検出規模は、幅37cm、深さ18cm、確認長は2.4mである。断面形態はU字形で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では、19世紀前葉～中葉のSK107に切られる。出土遺物は肥前産の染付皿の体部細片、灰釉陶器碗の体部片である。

SD7（Fig.201）

調査区の東部を東西方向に延びる溝である。軸方向はN－79°－Wで、南北溝SD6・9とは直角に交わる。検出規模は、幅38～40cm、深さ18～26cm、確認長は5mである。断面形態はU字形で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では、19世紀前葉～中葉のSK106・107、時期不明のP152に切られる。出土遺物は土師質土器細片のみである。

SD8（Fig.201）

調査区の東部を南北方向に延びる溝である。軸方向はN－11°－Eで、SD6・9・10と軸方向が一致する。検出規模は、幅85cm、深さ30cm、確認長は2mである。断面形態は不整形で、西岸にテラス状の高まりをもつ。埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では、19世紀前葉～中葉のSK119に切られる。出土遺物は肥前産の灰釉碗体部片である。

SD9（Fig.201）

調査区の東部を南北方向に延びる溝である。軸方向はN－11°－Eで、SD6・8・10と軸方向が一致し、東西溝SD7とは直角に交わる。検出規模は、幅48cm、深さ16cm、確認長は1.2mである。断面形態は逆台形で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。切り合い関係では、19世紀中葉のSK97に切られる。出土遺物は確認できていない。

SD10（Fig.201）

調査区の東部を南北方向に延びる溝である。軸方向はN－11°－Eで、SD6・8・9と軸方向が一致する。南部側は撹乱を受け未検出であるが、延長方向にSD8が延びており、両者が同一溝であった可能性がある。検出規模は幅80㎝、深さ22㎝、確認長は２ｍである。断面形態は皿状で、埋土はにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は確認できていない。

(3) ピット列

今次調査区の南部と東部では、ピットが多数検出されているが、このうち数個のピットが規則的に配列されるものをピット列として取り上げた。調査区東端部と南部西寄りで検出された南北列（ピット列２～８）については、柱間寸法が0.7～1.0m前後の狭いものが多く、同一地点で繰り返し建て替えられていること、軸方向が現在の東側道路とも一致することなどからみて、塀や柵など、屋敷地内あるいは屋敷地間の境界施設としての機能が考えられる。

一方、ピット列１については、柱間寸法が1.7～1.8mと前者に比べて長く、周辺に柱痕を伴うピットが多く分布することなども考慮すると、掘立柱建物に伴う柱穴列の可能性がある。また、建物としての明確な配列は確認できていないが、この他にも調査区東部側では柱痕や根石を伴うピットがいくつか見られ、複数の掘立柱建物が存在していたことが推定される。

ピット列１（Fig.203）

調査区の南東部に位置する。南北列のP5とP6の間には撹乱があり、梁間の柱穴数が特定できていないが、梁間１～３間×桁行３間の掘立柱建物になる可能性がある。検出規模は梁間3.2m×桁行5.4m、柱間寸法は桁行が1.7～1.8m、梁間はP4とP5の間が0.9mである。棟方向はN－79°－Eで、南北軸のピット列２～８とほぼ直角の軸をもつ。他遺構との切り合い関係では、P7が17世紀～18世紀のSK32に切られる。

柱穴はP1～7を検出した。柱穴の規模は、径33～42㎝深さ32～43㎝を測る。また、P2は床面に根石を伴い、P7は床面で径16㎝の柱痕を検出している。埋土は、P1～3は上層が焼土ブロックを多量に含む橙色シルト、下層が焼土粒と炭化物を含む褐色シルト。P4が炭化物を含むにぶい黄褐色シルト。P5～7がにぶい黄褐色シルトである。出土遺物は、P1下層から出土した鉄片１点である。

遺物が僅少で、遺構の年代は詳細がつかみ難いが、P1～3の埋土に周辺の火災処理遺構との共通性がみえることなどから、18世紀前葉の火災に伴って廃絶した可能性が考えられる。

ピット列２（Fig.203）

調査区の中央部に位置する柱穴列で、N－11°－Wの軸方向をもって南北方向に延びる。北部と中心部が撹乱を受けるが、南北8.7mの範囲を直線的に延びるピット列が確認できた。

柱穴はP1・3～8を検出し、P2は未検出である。柱穴の規模は、径25～44㎝、深さ10～35㎝と一様でない。各柱間の寸法は、0.7～0.8mと狭いが、全ての柱穴が同時期に機能していたのかどうかについては明らかでない。埋土は何れもにぶい黄褐色シルトである。遺物はP8から18世紀後半～19世紀の肥前産染付鉢の体部片と磁器細片１点が出土している。

ピット列２は18世紀後半～19世紀に比定される。

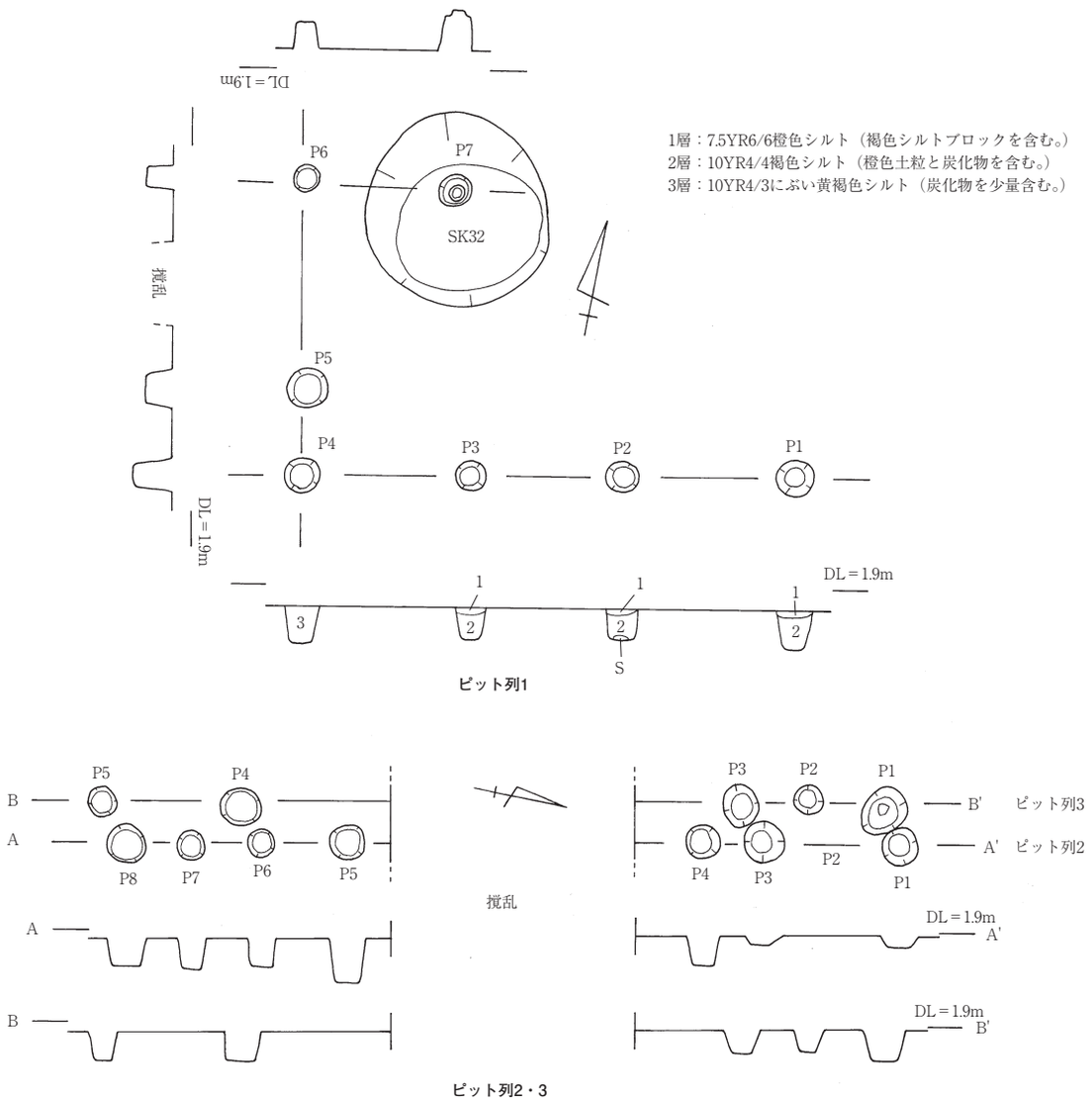


Fig.203　ピット列1～3平面図・セクション図・エレベーション図

ピット列３（Fig.203）

調査区の中央部に位置する柱穴列で、N－11°－Wの軸方向をもって南北方向に延びる。北部と中心部が撹乱を受けるため部分的な検出に止まっているが、南北8.7mの範囲を直線的に延びるピット列が確認できた。ピット列３の東側には、ピット列２が近接し並行して延びる。

柱穴はP1～４・６を検出し、P５は未検出である。各柱間の寸法は、0.7～0.8mで、柱穴の規模は、径25～50cm、深さ15～35cmと一様でない。埋土は何れもにぶい黄褐色シルトである。遺物はP３から18世紀～19世紀の肥前産染付小碗と灰釉の陶器細片１点、土師質土器細片２点が出土している。

出土遺物の内容からみて、ピット列３は18世紀～19世紀に比定される。

ピット列４（Fig.204）

調査区の東部に位置する柱穴列で、N－11°－Wの軸方向をもって南北方向に延びる。北部が撹乱を受け、南部は区外となるため部分的な検出に止まっているが、南北10.1mの範囲を直線的に延び

るピット列が確認できた。ピット列４の西側には、ピット列５～８が近接し並行して延びる。他遺構との切り合い関係では、P4がピット列５－P1を切っており、ピット列４が先行する。また18世紀前葉の焼土溜まりSX22に上面を切られる。

柱穴はP1・２・４・５・７を検出し、P3・６は未検出である。柱間寸法はP1・P2間が1.8mで、未検出のピットを含めると、中間寸法は1.8～2.0m前後になると推定される。柱穴の規模は、径32～46㎝、深さ15～30㎝と一様でない。埋土は何れも褐色シルトで、埋土中に焼土粒と炭化物を少量含む。

遺物はP1から白磁細片、灰釉小皿、備前焼擂鉢、土師質土器小皿。また、P2から肥前産の染付仏飯器、青磁中皿、肥前産の京焼風陶器碗、肥前内野山窯の銅緑釉小皿、唐津系灰釉陶器小皿、頁岩製の硯。P4から灰釉碗、焼締めの陶器体部片、土師質土器細片。P5から染付小皿の底部片。P7から肥前内野山窯の銅緑釉小皿と焼土塊が出土している。

図示したものは、P2出土の染付仏飯器（1767）、器種不明の把手（1768）、青磁中皿（1769）である。1768は手鉢等の把手か。外面に凹線を施し、灰オリーブ色の釉を施す。1769は肥前産の青磁中皿で、外面下位に丸彫りによる鎬を巡らす。

出土遺物の内容からみて、ピット列４は18世紀前半に比定される。また、埋土の特徴及び焼土塊の出土等からみて、火災前後に機能していた可能性が考えられる。

ピット列５（Fig.204）

調査区の東部に位置する柱穴列で、N－11°－Wの軸方向をもって南北方向に延びる。北部が撹乱を受け、南部は区外となるため部分的な検出に止まっているが、南北10.8mの範囲を直線的に延びるピット列が確認できた。ピット列５の東側にはピット列４が、西側にはピット列６～８が近接し並行して延びる。他遺構との切り合い関係では、P1がピット列４－P4に切られており、ピット列５が後続する。また18世紀のSK101を切り、18世紀前葉の焼土溜まりSX22に上面を切られる。

柱穴はP1・２・４～７を検出し、P3は未検出である。柱間の寸法はP1・P2間が1.5m、P4・P5間とP5・P6間が1.9m、P6・P7間が1.2mで、一定でない。柱穴の規模は、径30～50㎝、深さ18～25㎝である。埋土は何れも褐色シルトで、埋土中に焼土粒と炭化物を少量含む。また、P2・５～７では径16～18㎝の柱根痕を検出している。

遺物はP1から肥前産の初期伊万里小皿、染付丸形中碗、小碗、瓶、陶胎染付碗、肥前産の京焼風陶器碗、尾戸焼の灰釉碗と白土器小皿、土師質土器小皿、銅製品。P2から肥前産の染付小皿、瓦片。P4とP5から土師質土器小皿と細片。P6から磁器細片と瓦片。P7から肥前産の染付網目文碗と土師質土器細片が出土している。これらのうち、P7出土の染付網目文碗は二次被熱を受け釉が変質する。

図示したものは、P1出土の染付小碗（1765）、染付瓶（1766）である。1765は肥前産の染付丸碗で、コンニャク印判による桐文を巡らす。1766は肥前産の染付瓶。胎土は灰白色で、透明釉は白濁し粗い貫入が入る。

出土遺物の内容からみて、ピット列５は18世紀前半に比定される。また、埋土の特徴及び被熱遺物の出土等からみて、火災前後に機能していた可能性が考えられる。

ピット列６（Fig.204）

調査区の東部に位置する柱穴列で、N－11°－Wの軸方向をもって南北方向に延びる。北部が撹乱を受け、南部は区外となるため部分的な検出に止まっているが、南北６mの範囲を直線的に延びるピット列が確認できた。ピット列６の東側にはピット列４・５が、西側にはピット列７・８が近接し並行して延びる。他遺構との切り合い関係では、P2が18世紀のSK114に切られ、P4が18世紀のSK115に切られ、P6が18世紀前葉のSK116に切られる。また上面を18世紀前葉の焼土溜まりに切られる。

柱穴はP1・2・4・6を検出し、P3・5は未検出である。柱間寸法は、未検出のピットも含めると、1m前後である。柱穴の規模は、径31～40㎝、深さ18～38㎝である。埋土はP1・4・6が褐色シルト、P2がにぶい黄褐色シルトで、P2・4は埋土中に焼土粒と焼土塊、炭化物を多く含む。また、P2・5～7では径16～18㎝の柱根痕を検出している。

遺物は、P1・2・4から土師質土器片と被熱赤変した瓦片が出土している。

出土遺物内の被熱資料及び、埋土中の焼土塊等からみて、ピット列６は火災後に廃絶した可能性が高い。他遺構との切り合い関係から、ピット列６の廃絶年代は18世紀前葉に比定される。

ピット列７（Fig.204）

調査区の東部に位置する柱穴列で、N－11°－Wの軸方向をもって南北方向に延びる。北部が撹乱を受け、南部は区外となるため部分的な検出に止まっているが、南北５mの範囲を直線的に延びるピット列が確認できた。ピット列７の東側にはピット列4～6が、西側にはピット列８が近接し並行して延びる。他遺構との切り合い関係では、P1が時期不明のSK104に切られる。

柱穴はP1～3を検出した。柱間の寸法はP1・P2間が2m、P2・P3間が2.6mである。柱穴の規模は、径27～40㎝、深さ9～30㎝である。埋土は何れも褐色シルトである。

遺物は、P1から京都系の灰釉丸碗、唐津系灰釉陶器小皿、土師質土器細片、P2から肥前産の刷毛目二彩手の皿体部細片が出土している。

出土遺物の内容及び近接するピット列の年代観等から、ピット列７の廃絶年代は17世紀～18世紀前葉に比定される。

ピット列８（Fig.204）

調査区の東部に位置する柱穴列で、N－11°－Wの軸方向をもって南北方向に延びる。北部が撹乱を受け、南部は区外となるため部分的な検出に止まっているが、南北8.4mの範囲を直線的に延びるピット列が確認できた。ピット列８の東側にはピット列4～7が近接し並行して延びる。

柱穴はP1・3～7を検出し、P2は未検出である。柱間の寸法はP1・P2・P3・P4・P5間が各1.5m、P5・P6・P7間が0.9mである。柱穴の規模は、径28～50㎝、深さ12～35㎝である。埋土はP1・6が褐色シルト、P3がにぶい黄褐色シルト、P5・7が焼土を含むにぶい黄褐色シルトである。

遺物は、P1から肥前産の染付瓶の体部片、備前焼擂鉢、能茶山窯の鉄釉陶器体部片、土師質土器細片、瓦片。P6から肥前産の染付碗、灰釉碗、焼締めの陶器体部片。P7から土師質土器小皿が出土している。

出土遺物の内容及び近接するピット列の年代観等から、ピット列８の廃絶年代は18世紀前葉に比定される。

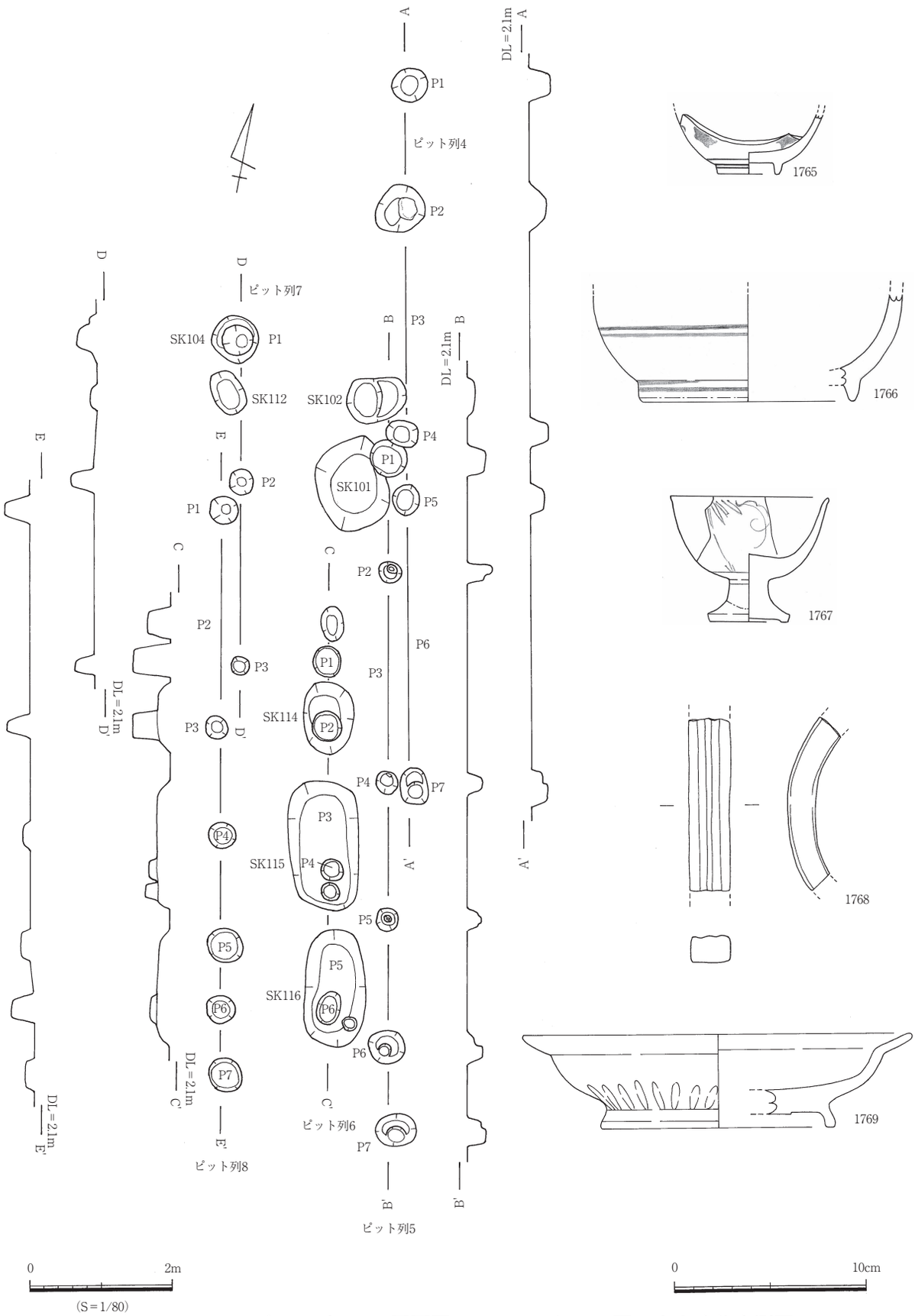


Fig.204　ピット列4～8平面図・エレベーション図・出土遺物実測図

（ピット列5：1765・1766、ピット列4：1767～1769）

(4) ピット

ピットは180個を検出している。先に述べたように、調査区の東部と南部、南西部では、塀や柵、掘立柱建物等に伴うとみられるピット列数列が確認されている。また調査区の東部には特にピットが集中する傾向がみえ、根石を伴うもの（P5・30・45・106・150・152・176）や柱痕を伴うもの（P29・37・56・64～66・103・146・156）も多く確認されている。このため、ピット集中の範囲には、今回、塀や掘立柱建物跡として報告し得なかったもの以外にも、塀や掘立柱建物に伴う柱穴が存在していた可能性がある。また、埋土中に焼土ブロックと炭化物を多く含み、火災によって廃絶した痕跡をもつもの（P106・165～167他）も複数あり、これは調査区東部の焼土溜まりSX22周辺に集中する傾向があった。

以下では、根石や柱痕を伴うものや、特徴的な出土遺物が得られたものなどを取り上げ、その概要を述べる。なお、本文中で触れることができなかったピットについては、出土遺物が得られたものや根石、柱痕が確認できたもの、他遺構との切り合い関係があるものなどを中心に抽出し、一覧表（Tab.4・5）にて補足しておく。

P45（Fig.205）

調査区東部に位置する。検出規模は径36cm、深さ15cm、埋土はにぶい黄褐色シルトで、上層には焼土粒と炭化物を含む。床面からは、径20cm、厚さ5cmの扁平なチャート角礫が出土している。

P54（Fig.205・206）

調査区南東部に位置し、18世紀前葉のSD1とSX11に上面を切られる。検出規模は径40cm、深さ30cm、埋土は灰黄褐色シルトである。埋土中からは、肥前産の白磁菊花形鉢（1770）と白化粧土刷毛目碗（1771）が出土している。出土遺物及び他遺構との切り合い関係からみて、P54は17世紀後半～18世紀初頭に比定される。

P61（Fig.205・206）

調査区南西部に位置し、18世紀前半のSK38を切る。検出規模は径34cm、深さ15cm、埋土は灰黄褐色シルトで、焼土粒を含む。埋土中からは、初期伊万里碗（1772）が出土している。SK38との切り合い関係からみて、P61は18世紀に比定される。

P106（Fig.205・206）

調査区東部に位置する。検出規模は径35×42cm、深さ30cm、埋土は暗褐色シルトで、埋土中には焼土ブロックと炭化物を多く含む。床面から扁平なチャートの角礫が出土している。出土遺物は鉄釉壺（1773）と青花皿（1774）で、1773は被熱し釉が変質する。埋土の特徴及び被熱遺物の出土等からみて、P106は火災に伴って廃絶した可能性がある。

P125（Fig.205・206）

調査区東部に位置する。検出規模は径38cm、深さ14cm、埋土はにぶい黄褐色シルトである。床面からは、砂岩製の石臼（1776）が出土している。

P129（Fig.205・206）

調査区東部に位置し、17世紀前葉のSK92・93が近接する。検出規模は径42cm、深さ30cm、埋土は褐色シルトで、埋土中に焼土と炭化物を多く含む。埋土中からは、志野焼（1775）の口縁部片が

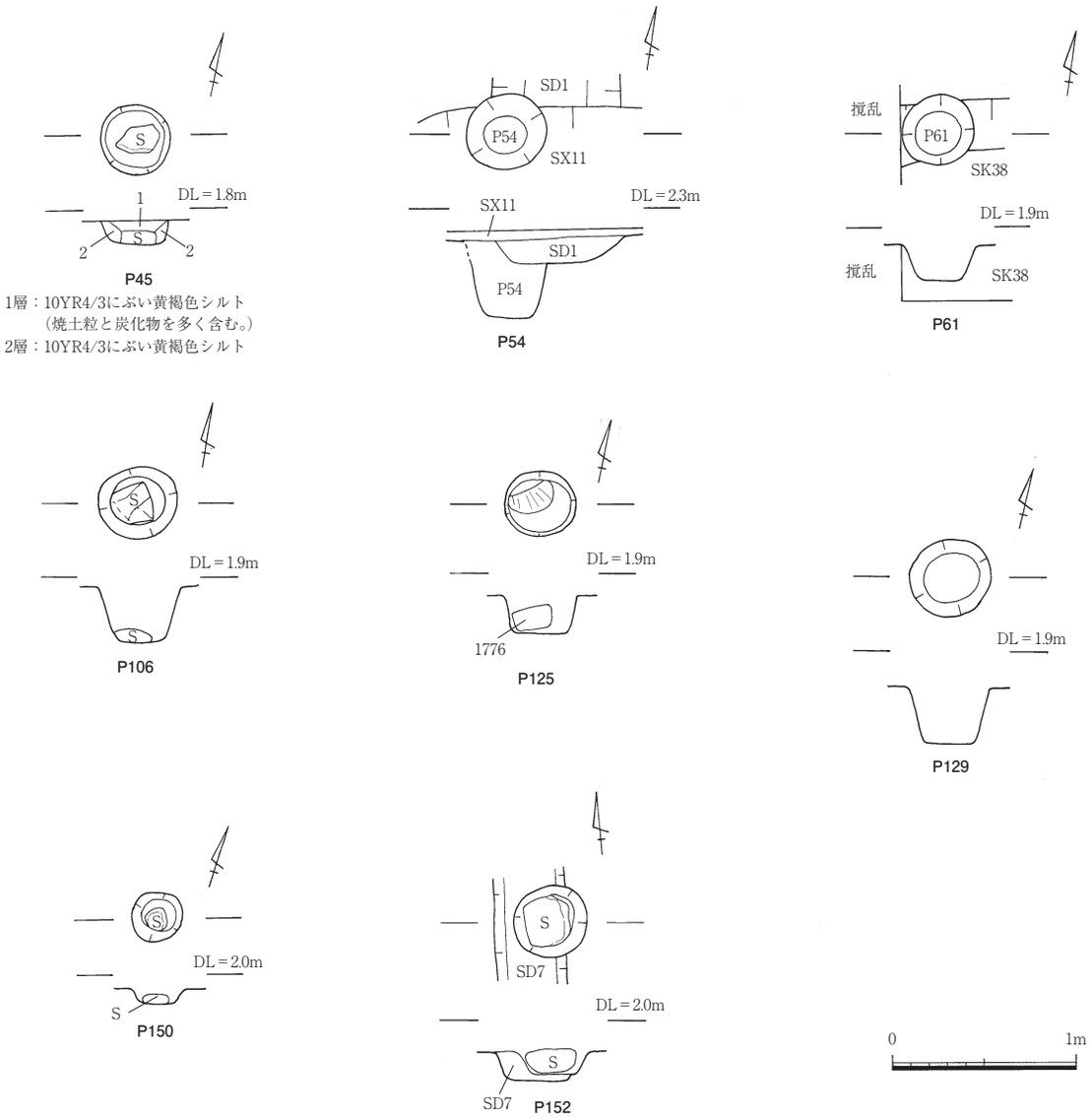


Fig.205　P45・54・61・106・125・129・150・152平面図・セクション図・エレベーション図

出土している。

P150（Fig.205）

調査区東部に位置する。周囲にはピット列４～８が近接し、また、前後に類例のピットが多く集中することから、P150も柱穴になる可能性がある。検出規模は径25cm、深さ10cm、埋土は褐色シルトで、埋土中に焼土と炭化物を少量含む。床面からは径14cmの石灰岩角礫が出土し、埋土中から磁器細片と土師質土器細片が出土している。

P152（Fig.205）

調査区東部に位置し、時期不明の溝SD7を切る。検出規模は径35cm、深さ13cm、埋土は褐色シルトで、埋土中に炭化物を少量含む。床面からは径23×29cm厚さ９cmの扁平なチャート礫が出土している。

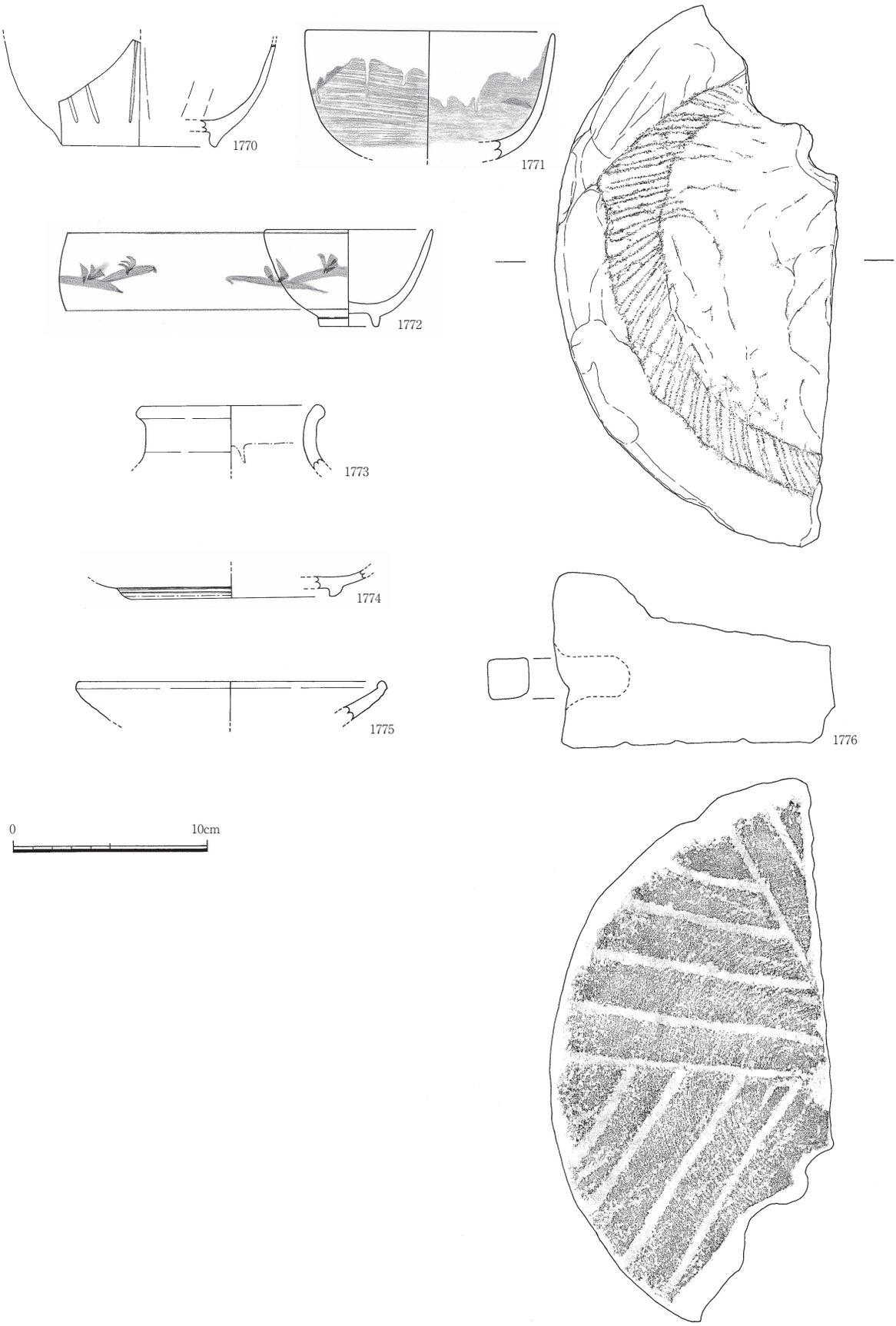


Fig.206　P54・61・106・125・129出土遺物実測図

（P54：1770・1771、P61：1772、P106：1773・1774、P125：1776、P129：1775）

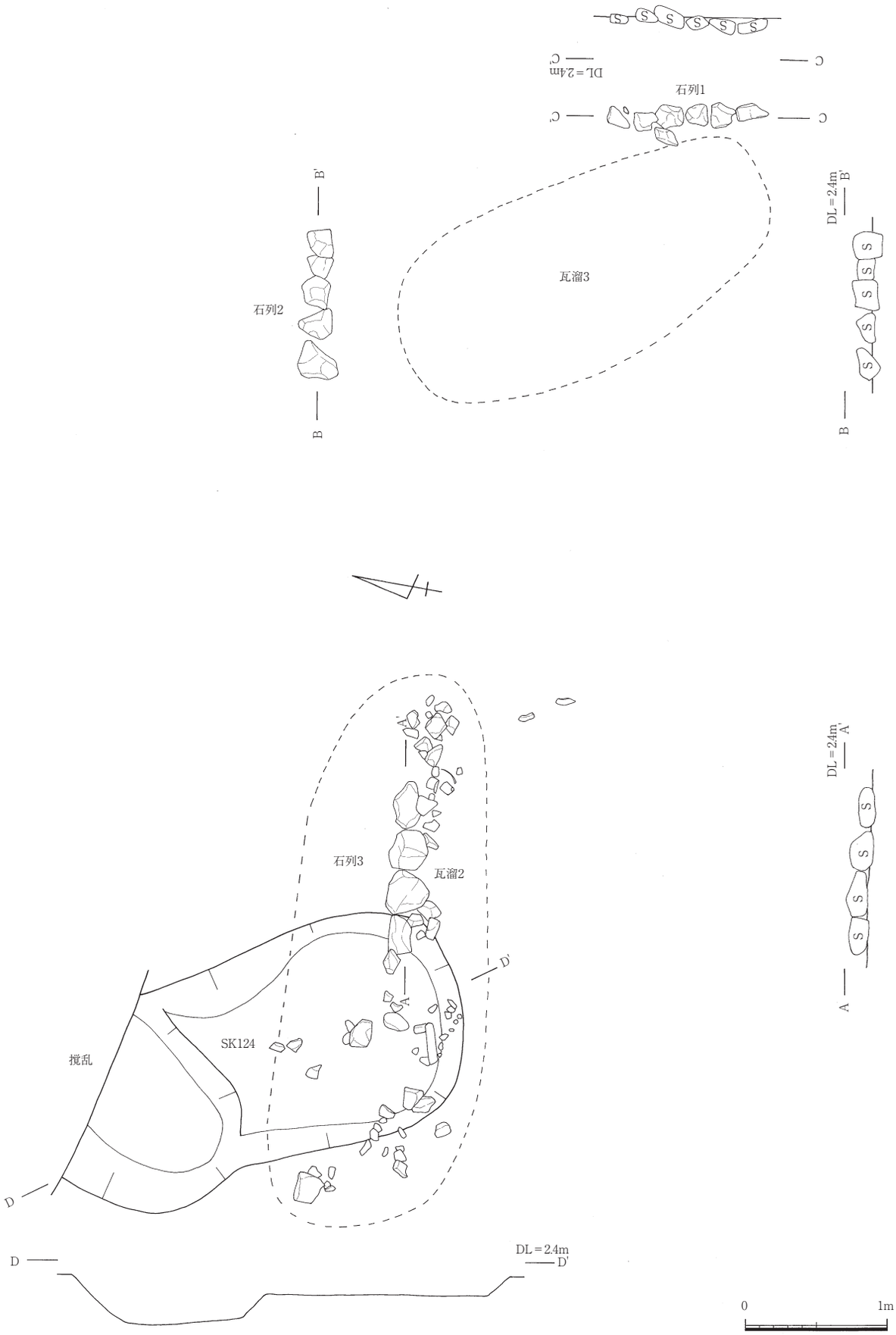


Fig.207　石列１～３・瓦溜１・２・SK124平面図・エレベーション図

(5) 石列

石列１～３（Fig.207）

調査区南部にて、南北方向の石列１、東西方向の石列２・３を検出した。石列は部分的に撹乱を受けているため、各々長さ1.0～1.3mが残存するのみである。軸方向は石列１がN－11°－W、石列２・３がN－79°－Eで、石列２・３が並行し、石列１がそれらに直角に交わるとみられる。検出レベルは何れも標高2.2～2.3mと揃っており、各々が軸方向を揃えて近接して並ぶことから、同時期に機能したものと推定される。石材は何れも石灰岩で、径20～30cm前後の不揃いな角礫が並ぶ。

石列間からの出土遺物は確認できていないが、石列３が19世紀の土坑SK124の上面を切っており、SK124内に能茶山窯産陶磁器が含まれることなどから、能茶山窯の開窯年代1820年以降に機能した石列と考えられる。また、幕末の遺物廃棄である瓦溜２と瓦溜３が石列１・３の上面にかかるようにして広がっていることなどから、石列群の廃絶時期も幕末に比定されよう。

(6) 性格不明遺構・焼土溜まり・瓦溜まり

ここでは、浅い掘り込みに遺物廃棄を伴う落ち込み状の遺構（SX12・13・16・17）や、焼土溜まり（SX4・11・22）、瓦と土器・陶磁器類を集中廃棄した遺物溜まり（瓦溜２・３）を取り上げた。

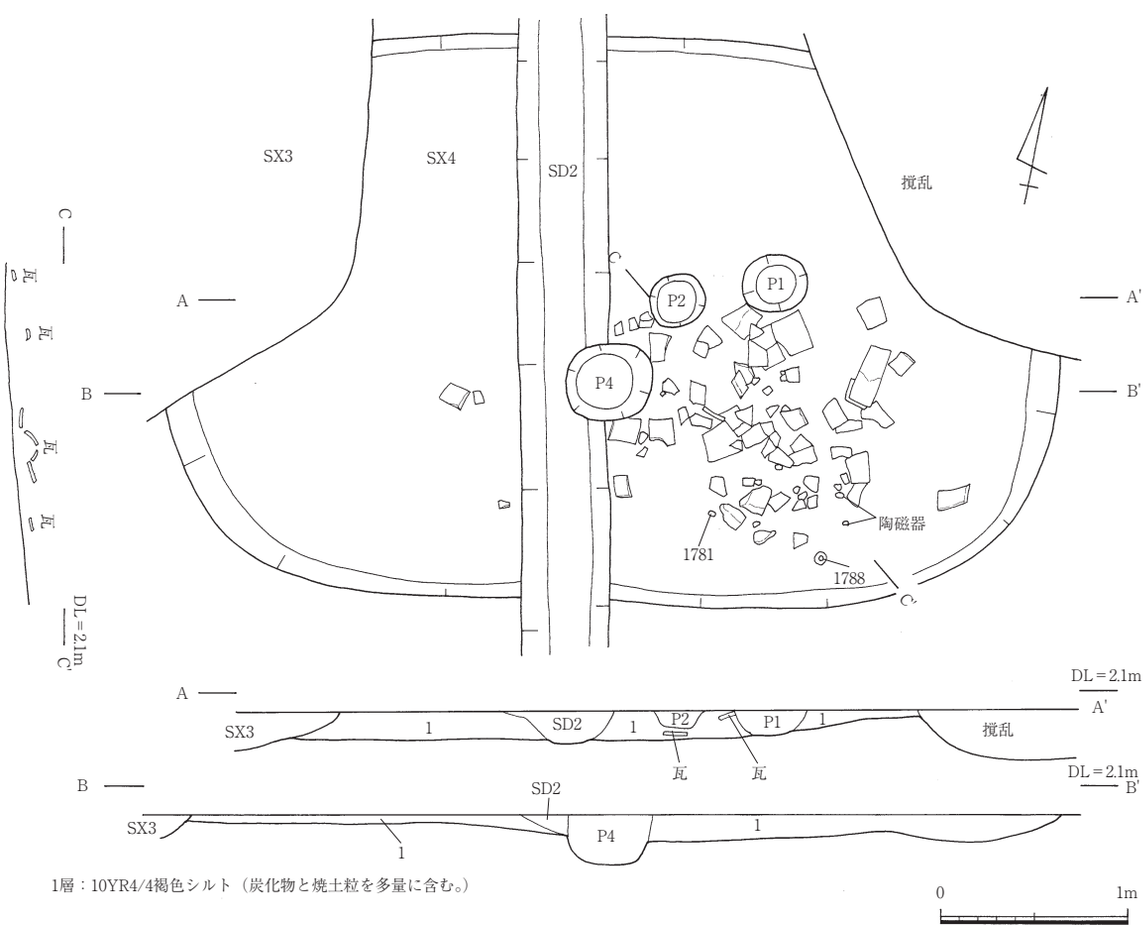


Fig.208　SX4平面図・セクション図・エレベーション図・遺物出土状況図

SX4（Fig.208・209）

調査区東部で検出された、浅い掘り込みを伴う焼土溜まりである。平面形は楕円形で、検出規模は東西長4.7m、南北長3.0m、深さ4～14cmを測る。床面は東側が緩やかに落ち込んでいる。埋土は褐色シルトで、埋土中に炭化物と橙色の焼土ブロックを多量に含む。切り合い関係では、17世紀前葉のSK17の上面を切っており、時期不明のSD2とP1・2・4に切られる。

出土遺物は、磁器（中碗2・小杯1・小皿五寸皿4）、陶器（中碗2・蓋物1）、土器（小皿5）、及び多数の瓦片である。このうち、瓦片には二次被熱によって赤変したものが多く含まれ、陶磁器にも被熱した個体（1779・1785・1787）が認められる。

図示したものは、1777～1788である。1777～1784は肥前産磁器。1777は染付の丸形中碗。1778は初期伊万里の碗で、外面に面取りを施し区画間に植物他の文様を描く。1610～1630年代の製品で上手のものである。1779は杉形の染付小杯で、雨降り文と柳を描く。18世紀第1四半期の製品である。1780は白磁小杯で、外面に丸彫りで鎬を施す。1781～1783は染付皿。1781・1782は肥前有田で生産された上手の五寸皿で、1782は柿右衛門窯の製品の可能性をもつ。1784は染付の蓋物蓋である。1785～1787は陶器。1785は尾戸窯の灰釉碗で、口縁部を歪ませる。外面に鉄錆で草花文を描き、高台内に渦状の鉋痕が残る。1786は唐津系灰釉陶器の小皿。1787は尾戸窯の灰釉蓋物。1788は土師質土器小皿である。

埋土及び被熱した遺物の状況などからみて、SX4は火災後の焼土や瓦礫を処理した廃棄遺構とみられる。また、廃棄された陶磁器は17世紀代のものが主体を占めるが、中に18世紀第1四半期に生

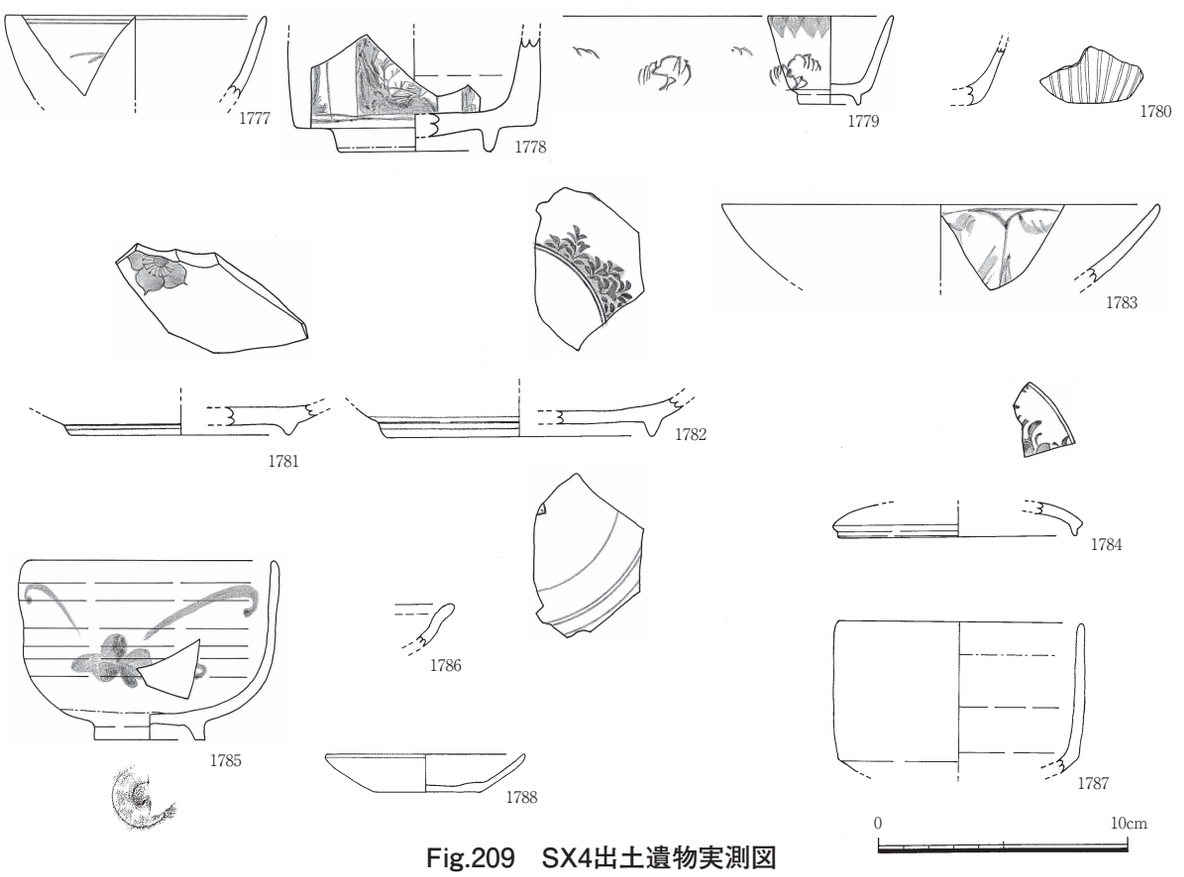


Fig.209　SX4出土遺物実測図

産された肥前産の染付小杯（1779）が含まれており、18世紀前葉頃の火災にともなう廃棄遺構と推定される。

SX11（Fig.210・211）

調査区東部で検出された、浅い掘り込みを伴う焼土溜まりである。平面形は楕円形で、検出規模は長軸4.4m、短軸2.3m、深さ5～10cmを測る。床面は東側が緩やかに落ち込んでいる。埋土は1層:褐色シルト、2層:焼土で、ともに炭化物と橙色の焼土ブロックを多量に含む。切り合い関係では、18世紀前葉のSK30・45・55・56・SD1、17世紀のSX16、時期不明のP42・44・49～54を切り、18～19世紀のP43に切られる。

出土遺物は磁器（中碗2・鉢1・蓋物3・壺2）、陶器（小碗1・甕1）、土器（小皿1）である。図示したものは1789～1794である。1789～1792は肥前産磁器。1789は陶胎染付碗で、外面に呉須絵を描く。1790は染付蓋付の鉢。1791は陽刻型打成形の白磁鉢で、内面に松の陽刻文様が施される。上手の製品で、有田柿右衛門窯の製品の可能性をもつ。1792は染付瓶である。1793は丹波焼の焼締めの甕で、外面に多段の凹線が巡らされる。1794は寛永通宝である。

埋土及び被熱した遺物の状況などからみて、SX11は火災後の焼土や瓦礫を処理した廃棄遺構と

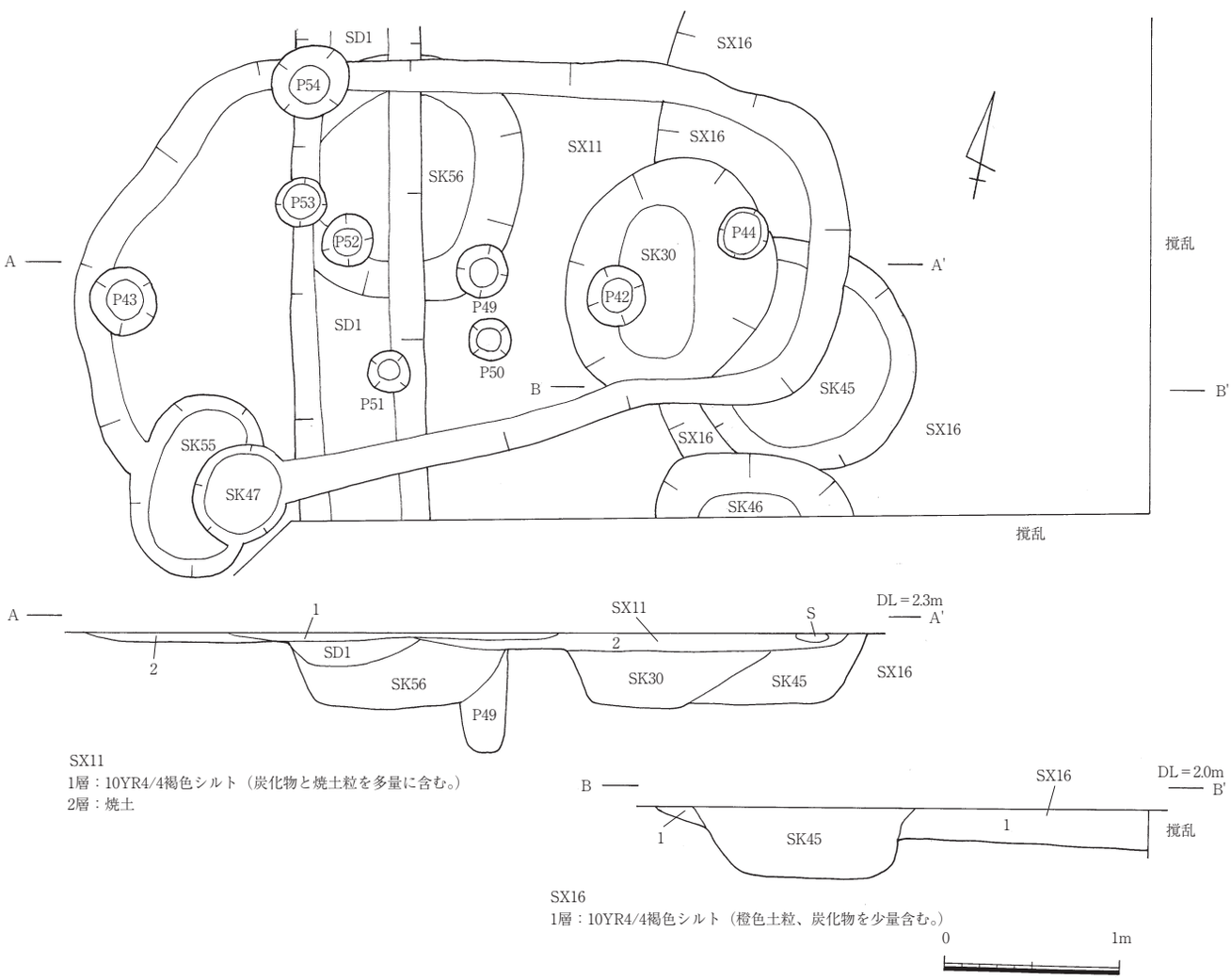


Fig.210　SX11・16平面図・セクション図

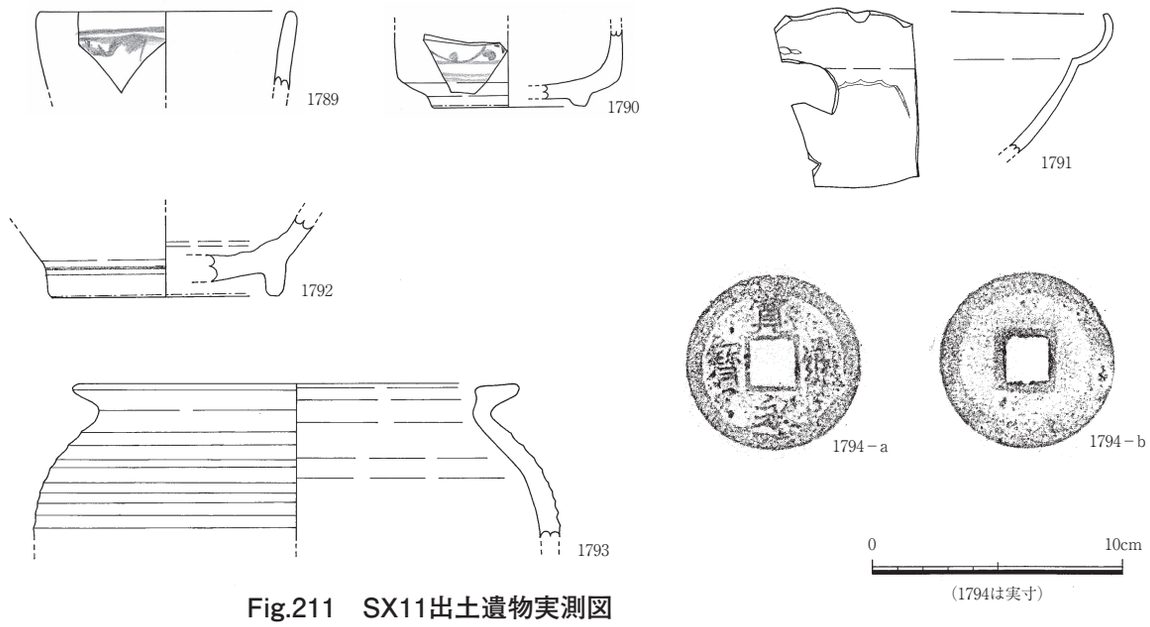


Fig.211　SX11出土遺物実測図

みられる。また、廃棄された陶磁器は17世紀代のものが多く占めるが、中に18世紀前半に生産された肥前産の陶胎染付碗（1789）が含まれており、SX4と同様に、18世紀前葉の火災にともなう廃棄遺構と推定される。

SX12（Fig.115・212）

調査区東部に位置する浅い落ち込み状の遺構で、大型の廃棄土坑SK43とSX13の上面に広がる。平面形は不整形で、検出規模は東西長２m、南北長２m、深さ30cmを測る。床面は平坦でなく、壁が緩やかに立ち上がる。埋土は橙色シルトで、褐色シルトのブロックを多く含む。また埋土中には漆喰のブロックが混じり、瓦片を多量に含む。切り合い関係では18世紀末～19世紀初頭のSK43とSX13を切っている。また、SX13とは遺物片の接合関係があり、同時期に遺物廃棄が行われた廃棄遺構と考えられる。

出土遺物は、磁器（中碗２・鉢１・碗蓋１・猪口１）、陶器（中碗４・小碗１・捏鉢１・鍋１・灯明受皿２・筆立１）、土器（杯５・小皿７・焜炉２・胡麻煎り１）、瓦片である。

図示したものは1795～1803である。1795は肥前産の染付望料碗で、外面に竹・雪輪・蓮弁文を描く。1796は肥前産の染付猪口である。1797は肥前系の灰釉中碗で、高台無釉。オリーブ黄色の釉を施し、内底に目痕が残る。1798は能茶山窯産の鉄釉半筒形碗。1799は灰釉の灯明受皿である。1800は土師質土器杯、1801は土師質土器小皿である。1802は軒平瓦。1803は平瓦で、1803は「け□□」銘印をもつ。

SK43との切り合い関係、及び能茶山窯産陶器の出土からみて、SX12は19世紀中葉に比定される。また、埋土中の漆喰、橙色土、瓦片の出土等からみて、建物や塀の取り壊しに伴う廃棄遺構と考えられる。

SX13（Fig.115・213・214）

調査区東部に位置する浅い落ち込み状の遺構で、大型の廃棄土坑SK43の上面に広がる。平面形は不整形で、検出規模は東西長５m、南北長４m、深さ12～56cmを測る。床面は中央が深く落ち込

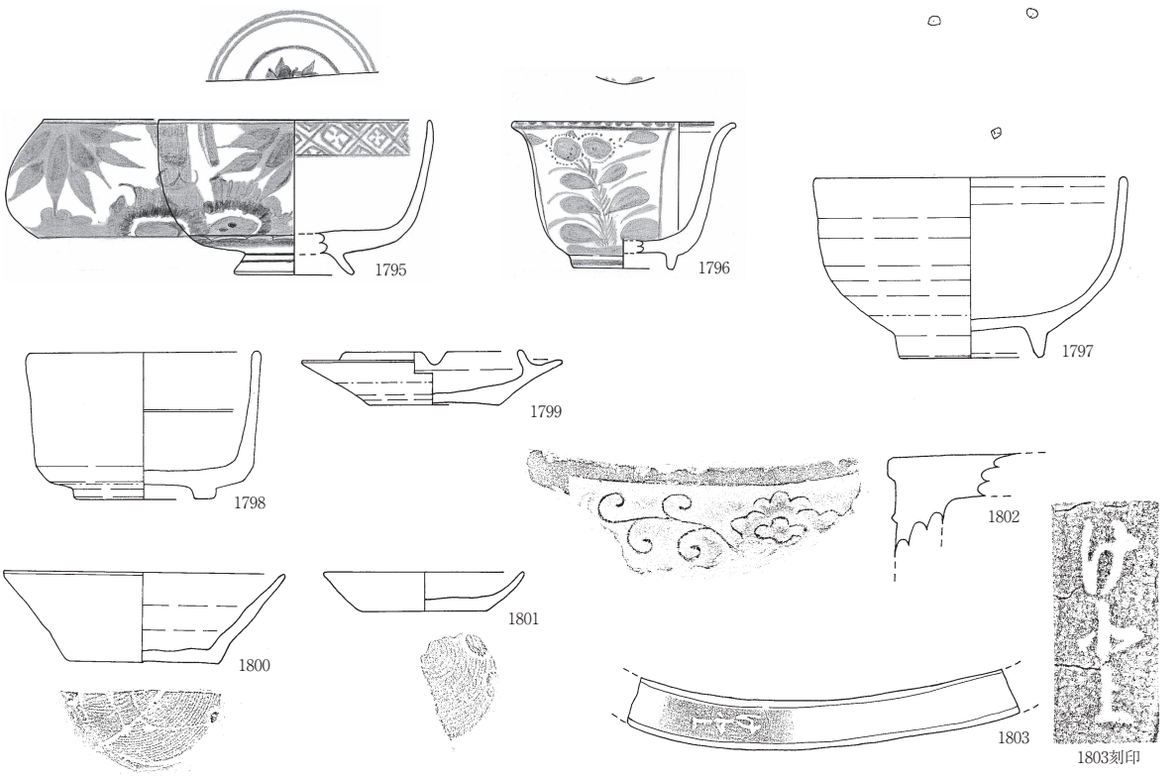


Fig.212　SX12出土遺物実測図

0　10cm
（刻印は実寸）

み、外側部分は浅くなる。埋土は褐色シルトで、埋土中には橙色土と漆喰をブロック状に多く含む。切り合い関係では18世紀末～19世紀初頭のSK43を切り、SX12に切られる。また、SX12とは遺物片の接合関係があり、同時期に遺物廃棄が行われたことが分かる。

出土遺物は、磁器（中碗16・小碗11・小杯2・小皿五寸皿6・中皿1・鉢3・猪口4・碗蓋4・神酒徳利1・鬢油壺1・瓶1・蓋物1・蓋物蓋1・香炉1）、陶器（中碗26・小碗3・小杯1・小皿8・中皿1・捏鉢1・擂鉢3・鍋5・土瓶2・土瓶蓋1・甕3・瓶4・水注1・柄杓1・灯明受皿4・火入れ2・火鉢1・不明4）、土器（杯5・小皿8・白土器小皿2・焙烙1・焜炉1・火鉢1・人形1・ミニチュア1）、銅製品（煙管3・不明1）、鉄製品（不明1）、石製品（砥石1）、瓦片である。

図示したものは1804～1838である。1804～1811は磁器。何れも肥前産である。1804は染付の望料碗、1807はその蓋である。1805は青磁染付の朝顔形碗で、外面に青磁釉、内面に四方襷と草花文を描く。1808はその蓋である。1806は染付の半筒形小碗で、外面に菊花文と氷裂文、内面に四方襷を描く。1809は青磁染付の朝顔形碗の蓋で、内面は手描きによる五弁花文と四方襷である。1810は青磁の香炉で、外面に陽刻の算木文を施す。1811は染付の辣韮形小瓶である。

1812～1832は陶器。1812～1817は尾戸窯の灰釉碗。1812は鉄錆で竹文、1813は宝文を描く。1814は口縁部外面に白象嵌の圏線を巡らせる。1815・1816は高台内に渦状の鉋痕が残る。1818は京都系の灰釉碗で外面に錆絵を描く。1819は京都系の灰釉半球形小碗である。1820は京焼の灰釉皿で、呉須で水仙を描く。高台内に円圏状の段と銘印（「清」か）をもつ。1821は志野焼の底部片で、内面に錆絵を描く。1822は京焼の色絵で、火入れ又は香炉か。灰釉を施し、外面に赤その他の上絵付で

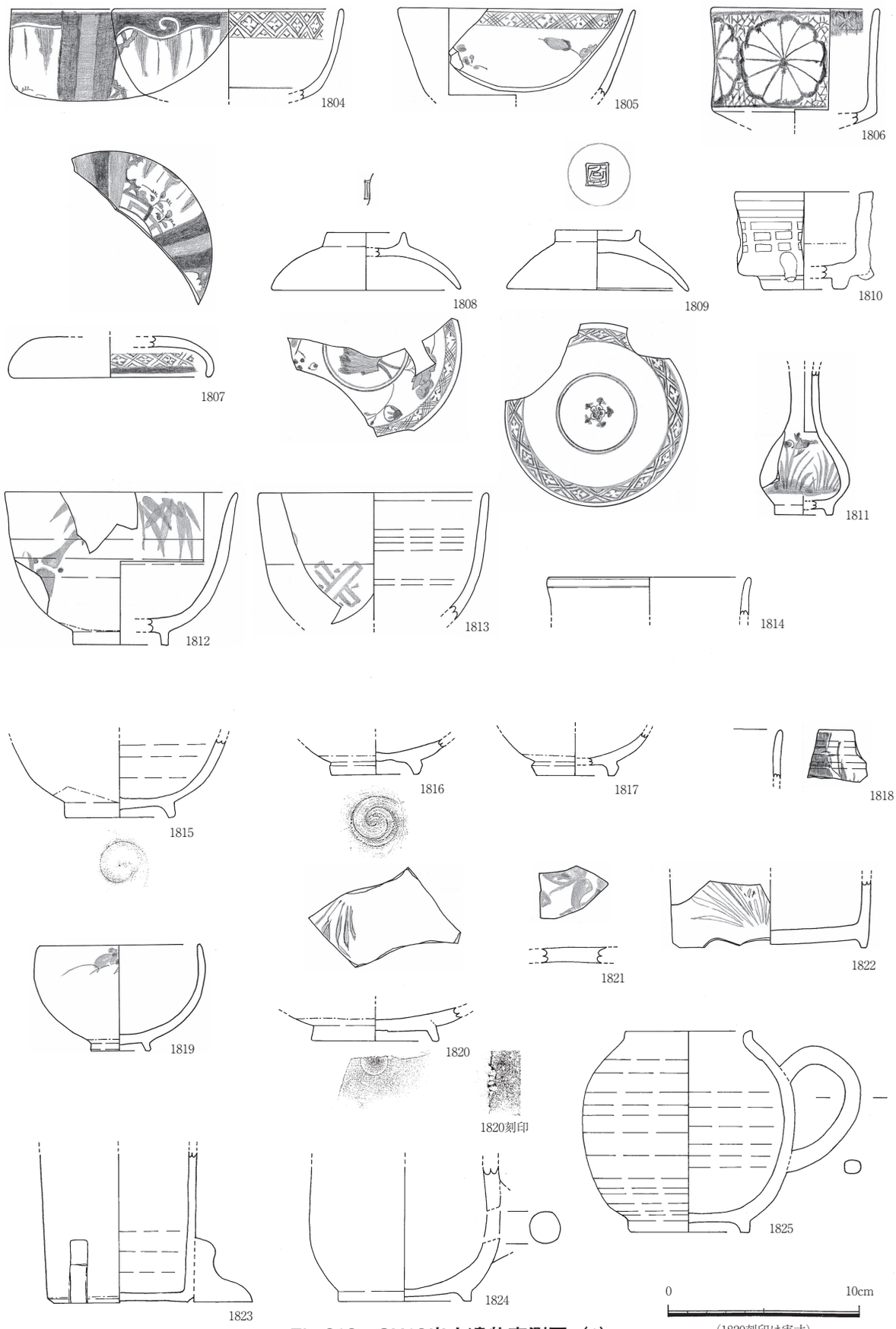


Fig.213　SX13出土遺物実測図（1）

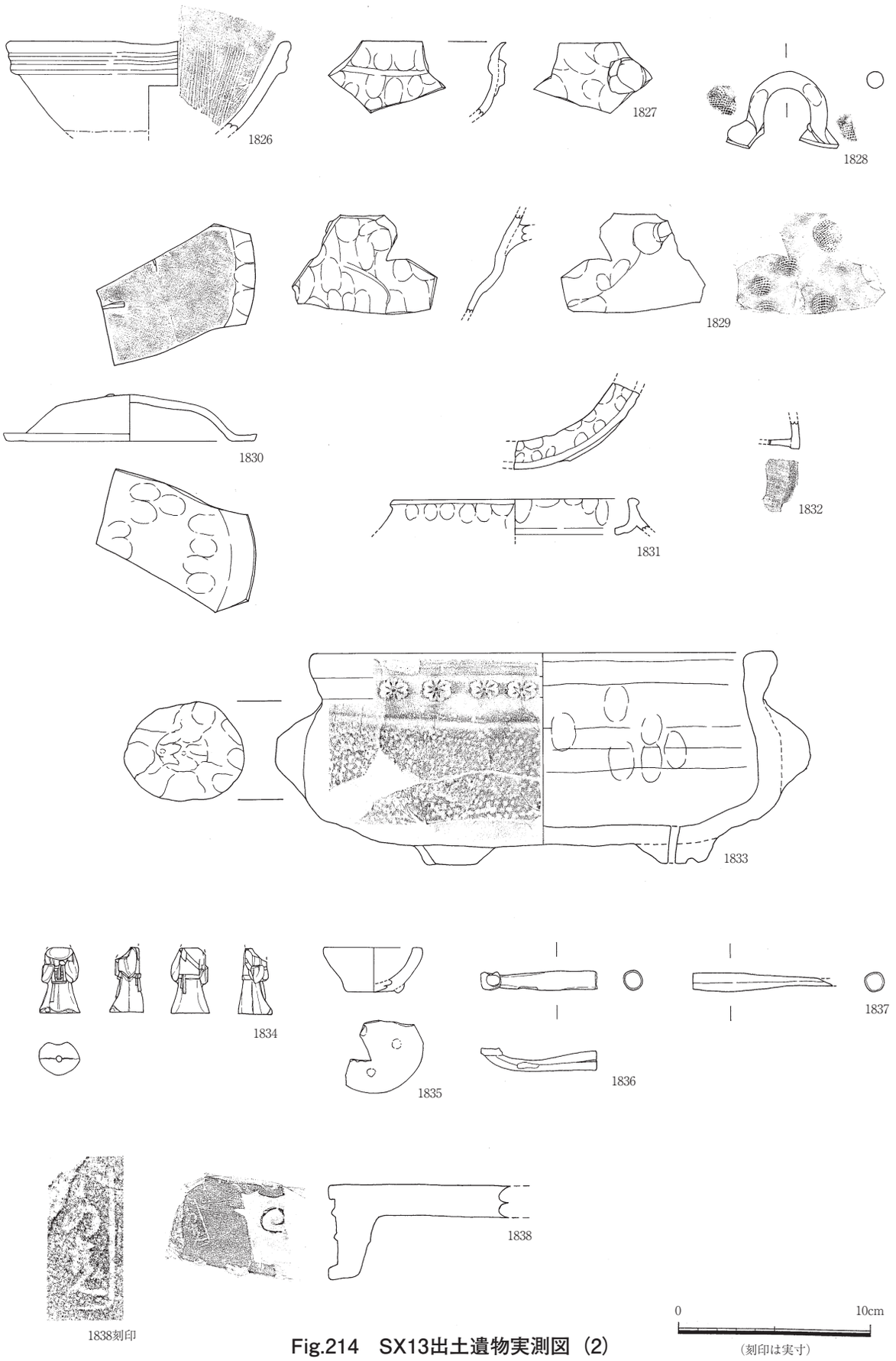


Fig.214　SX13出土遺物実測図（2）

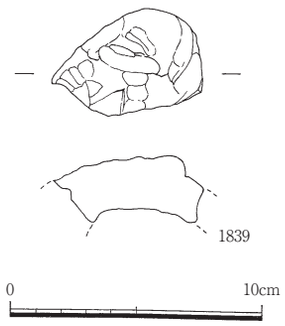


Fig.215　SX16出土遺物実測図

菖蒲文を描く。1823は灰釉の線香筒又は筆筒である。1824・1825は尾戸窯の陶器で、水注か。1826は瀬戸の擂鉢で、外面と口縁部内面に褐色の釉を施す。1827～1832はたたら作りと手捏ね成形による焼締め陶器で、煎茶に関わる道具か。1827～1829は鍋、1830は蓋、1831は土瓶、1832は土瓶の底部とみられるものである。何れも胎土は緻密で灰黄色を呈する。

1833は瓦質土器、1834・1835は土師質土器である。1833は瓦質土器の火鉢で、関西産。1834は土人形で虚無僧。型押成形前後貼り合わせで中実。外底に径２㎜の穿孔をもつ。1835は土師質土器のミニチュアで、鉢か。1836は煙管の雁首、1837は吸口である。1838は軒平瓦で、角枠内「小の□」銘印をもつ。

遺物内容及びSX12との関係性からみて、SX13は19世紀中葉に比定される。また、埋土中の漆喰、橙色土、瓦片の出土状況がSX12に共通することからみて、SX12と同時期に機能した、建物や塀の取り壊しに伴う廃棄遺構と考えられる。

SX16（Fig.210・215）

調査区東部に位置する、浅い落ち込み状の遺構である。西側以外の三方が撹乱を受け、全体のプランがつかみ難いが、東西残存長2.8m、南北残存長2.8m、深さ20㎝を測る。壁は外上方へ緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。埋土は褐色シルトで、埋土中に橙色土と炭化物を少量含んでいる。包含する遺物片はごく少量である。切り合い関係では18世紀前葉のSK30・45・46とSX11に切られる。

出土遺物は、磁器（小杯1）、陶器（碗1・向付1）、鞴の羽口1、及び瓦片であり、これには被熱赤変した瓦片、肥前産の灰釉丸碗、織部焼の向付口縁部片、灰釉土瓶の口縁部が含まれている。

図示したものは鞴の羽口(1839)である。1839は灰白色の胎土をもち、外面に自然釉が厚く掛かる。

出土遺物が僅少で年代の詳細をつかみ難いが、遺物及び他遺構との切り合い関係により、SX16は17世紀～18世紀前葉の間に比定される。

SX17（Fig.138・216）

調査区南東部に位置する、浅い落ち込み状の遺構である。南部側が撹乱を受け、全体の規模は不明であるが、東西長3.1m、南北確認長2.7m、深さ８～10㎝を測る。壁は外上方へ立ち上がり、床面は緩やかな高低差をもつ。埋土はにぶい黄褐色シルトで、埋土中に橙色土粒を少量含む。切り合い関係では時期不明のSK65と18世紀後半のSK69・79を切る。

出土遺物は、磁器（中碗3・小碗3・小杯1・小皿9・中皿2・鉢1・猪口4・瓶1・蓋物1・蓋物蓋2）、陶器（中碗4・小皿1・中皿2・擂鉢1・土瓶又は急須1・瓶1・甕2・火入れ又は香炉1）、土器（羽釜1・焜炉1）、瓦片である。また、この中には被熱した陶磁器片２点と瓦片１点を含む。

図示したものは1840～1848である。1840は肥前産の染付蓋物で、外面に圏線とコンニャク印判による藤花を施す。1841は肥前産の色絵染付の皿又は鉢で、内面に呉須と赤・緑・黒の上絵付で菊

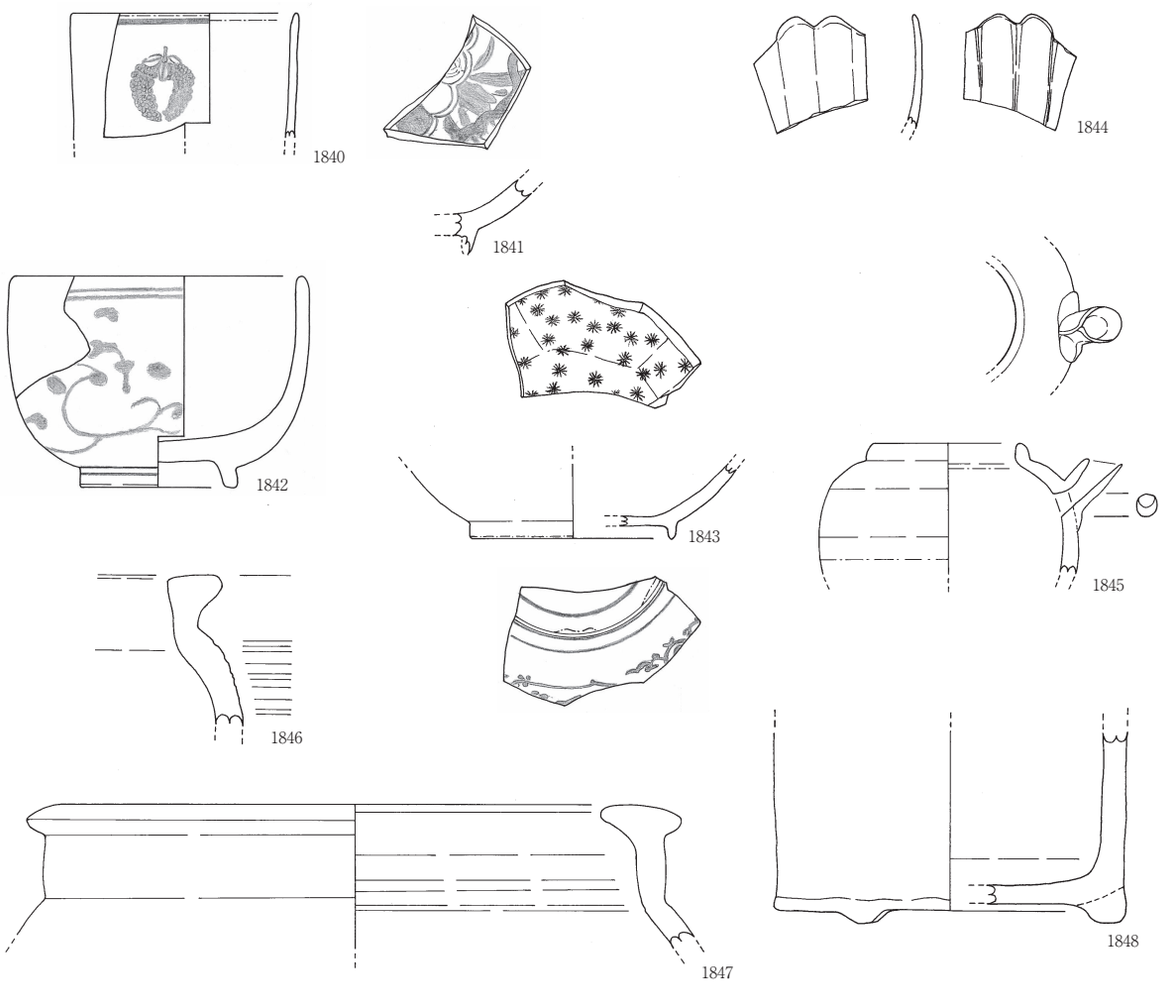


Fig.216　SX17出土遺物実測図

0　10cm

花と植物を描く。1842は肥前産の陶胎染付碗で、呉須で唐草文を描く。被熱し透明釉は変質する。1843は肥前産の染付皿又は鉢。型打成形で、内面に六角形の面取りが施される。外面に花唐草文、内面に松葉文を描く。1844は京都系又は京焼の灰釉菊花形鉢で、灰白色の釉を施す。1845は鉄釉の土瓶又は急須で手捏ねによる注口を貼付する。1846は鉄釉の甕で、外面に多段の強いロクロ目を巡らせる。外面に黒褐色の釉を施し、内面に鉄錆を施す。1847は灰釉の甕で口縁端部無釉である。1848は京都系の焜炉で、灰白色の胎土をもつ。

図示したものの他、肥前内野山窯の銅緑釉小皿、尾戸焼碗の体部片等が出土している。

SX17は18世紀後半に比定される。

SX22（Fig.217・218）

調査区東部で検出された、浅い掘り込みを伴う焼土溜まりである。東側が調査区外に出ており全体の規模は不明であるが、検出規模は南北長6.4m、東西確認長２～2.4m、深さ８㎝を測る。床面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は褐色シルトで、炭化物と橙色の焼土ブロック、焼土塊を多量に含む。切り合い関係では、18世紀前葉のSK114・115・116、時期不明のSK113とピット列４・５・６を切っている。また、周辺には類似した焼土溜まりが点在し、埋土中に焼土を含む

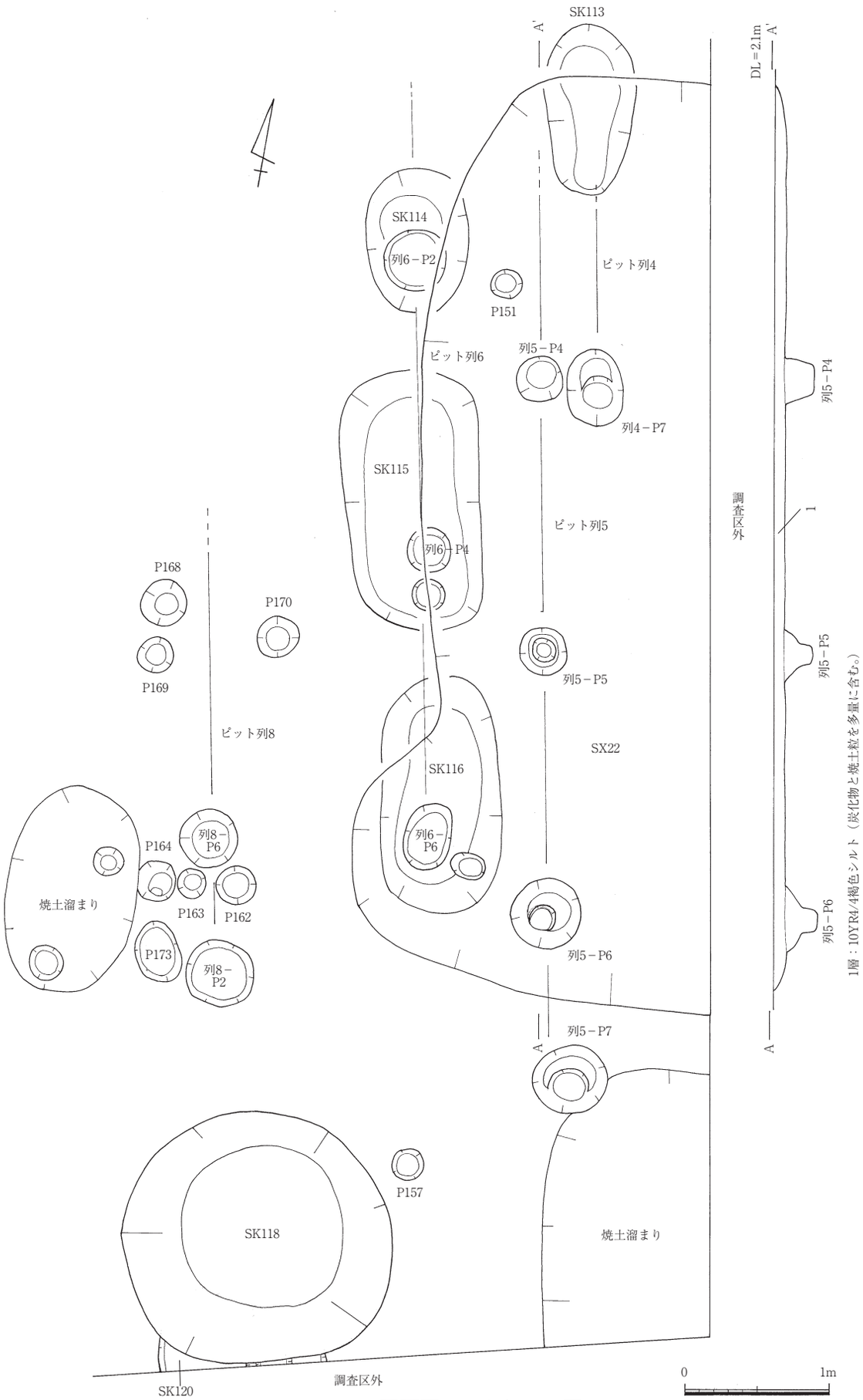


Fig.217　SX22平面図・セクション図

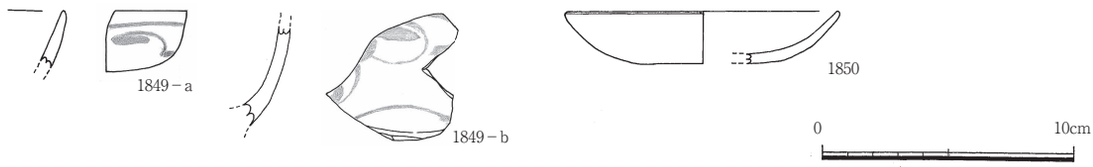


Fig.218　SX22出土遺物実測図

SK118・120が近接する。

出土遺物は磁器（中碗1）、陶器（中碗1・灯明受皿1）、土器（小皿2）、瓦片であり、ここには被熱赤変した瓦片、被熱し釉が変質した染付碗が含まれる。図示したものは1849・1850である。1849は初期伊万里の碗で、外面に唐草文を描く。被熱し透明釉は変質している。1850は灯明受皿又は小皿。黒褐色の鉄釉を施し、外面無釉である。

埋土及び被熱した遺物の状況などからみて、SX22は火災後の焼土や瓦礫を処理した廃棄遺構とみられる。また、出土遺物は僅かであるが、他遺構との切り合い関係も考慮すると、SX4・11に類似した18世紀前葉の火災に伴う廃棄遺構と推定される。

瓦溜２（Fig.207・219～221）

調査区南部に位置する瓦溜まりで、東西方向に延びる石列３の周辺に、陶磁器、土器、角礫と瓦片からなる遺物溜まりが広がる。他遺構との前後関係では、石列３に瓦溜２が掛かっており、石列３の廃絶に伴って廃棄された遺物群であることが分かる。また、下面では19世紀のSK124が検出されている。

出土遺物は磁器（中碗55・小碗10・小杯24・小皿29・中皿３・鉢11・猪口８・碗蓋11・瓶１・徳利１・燗徳利１・神酒徳利２・壺１・うがい茶碗１・鬢油壺１・蓋物７・蓋物蓋10・段重４・紅皿４・仏飯器１・香炉３・不明１）、中国産青磁（碗１）、陶器（中碗24・小碗９・小杯１・小皿６・捏鉢８・片口２・擂鉢10・鍋13・鍋蓋10・土瓶７・土瓶蓋３・急須１・水注類１・壺１・甕７・瓶１・燗徳利３・仏花器１・灯明受皿３・火鉢２・火入れ２・水鉢１・餌猪口１・不明10）、土器（杯１・小皿７・白土器小皿３・焙烙９・羽釜１・焜炉６・竈３・人形１）、石製品（硯１・石臼１）、銅製品（寛永通宝２）、及び多量の瓦片である。

図示したものは1851～1883である。1851～1864は磁器。1851～1854は能茶山窯産の染付碗で、透明釉は貫入が入る。1851は高台内に銘、1853・1854は角枠内「茶山」銘をもつ。1855～1864は肥前産磁器。1855は染付の薄手酒杯。1856は白磁の桶形小杯である。1857は陽刻型打成形の青磁小皿。1858はうがい茶碗で、内面に草花文を描く。1859は染付猪口で、内外面に略化した山水文を描く。1860は口縁部輪花形の鉢で、外面に白抜きの花唐草文と窓に山水文、内面に葡萄文と蒲公英を描く。1862は青磁の香炉で、片切彫りによる鎬を施す。釉は明オリーブ灰色に発色する。1863は神酒徳利。1864は仏飯器である。

1865～1873は陶器。1865・1866は尾戸窯の灰釉碗。1865は外面上半に白象嵌による圏線と列点文、印花による鉄錆の象嵌で丸文を施している。1866は高台内に渦状の鉋痕が残る。1867も尾戸窯の製品で、把手の部分か。手捏ね成形の後外面にヘラ彫りを施し、灰白色を帯び半透明の釉を施す。1868・1869は灰釉小碗で、舞子焼か。ともにオリーブ黄色の釉を施し、胎土は黄灰色で胎土中に黒

色粒を多量に含んでいる。1868は型押成形で、外面に型による陰刻文様が施される。1869は手捏ね成形で、内外面にユビオサエ痕が顕著に残る。外面に白土イッチン描きによる文字又は文様が施されている。1870は京焼で、鍋、土瓶類の底部か。外面に黄褐色を帯びる半透明の釉、内面に褐色の釉を施す。外底に角枠内「錦光山」銘印をもつ。1871は丹波焼の鉄釉甕で、口縁端部と体部外面に凹線を巡らす。1872は灰釉の仏花瓶で、鳥形の双耳を貼付する。1873は能茶山窯産の鉄釉提子で、暗褐色の釉を施す。

1874は瓦質土器、1875・1876・1879は土師質土器、1877・1878・1880・1881は施釉土器である。1874は瓦質土器の把手付きの焙烙。型作りで、内面は回転ナデ、外底はチヂレ目が残る。1875は関西系の焙烙、1876は讃岐岡本系の焙烙である。1877は施釉土器の筒型焜炉。焼成不良気味のにぶい橙色の釉を施し、白土・鉄錆・水色その他の上絵付で梅と鶯を描く。胎土は浅黄橙色を呈する。1878は施釉土器の竹形の焜炉で、外面に沈線を数段巡らせ竹を表現する。灰白色の胎土に薄緑色の低下度釉を施す。1879は箱形の焜炉で、外面に印花文を施す。1880は施釉土器のひょうそく。型押成形で、外面無釉。内面ににぶい橙色の低下度釉を施す。1881はミニチュアで、建物か。型押成形で、橙色の低下度釉を施し、白土と緑釉で部分的に彩色する。1882は軒丸瓦。1883は寛永通宝である。

瓦溜２は19世紀中葉（幕末）に比定される。

瓦溜３（Fig.207・222）

調査区南部に位置する。東側に石列１、北側に石列２が近接しており、これらの間に陶磁器・土器と瓦片からなる遺物溜まりが広がる。他遺構との前後関係では、石列１に瓦溜３がかかっており、石列１・２の廃絶に伴って廃棄された遺物群であることが分かる。

出土遺物は磁器（中碗13・小碗２・小皿11・中皿２・猪口５・碗蓋６・蓋物蓋２・段重２・合子１・紅皿２・水滴１・不明１）、陶器（中碗６・小碗３・小皿３・鉢３・捏鉢１・擂鉢２・鍋７・鍋蓋２・蓋１・土瓶３・燗徳利２・甕２・瓶１・灯明受皿１・火入れ２・火鉢１・水鉢１・鳥の水入れ１・不明１）、窯道具（ハマ１）、土器（小皿９・焙烙１・胡麻煎り１・焜炉５・火消壺１）、銅製品（寛永通宝１）、及び多量の瓦片である。

図示したものは1884～1888である。1884は肥前産の染付広東形碗で、外面と口縁部内面に暦手文を描く。1885は灰釉の合子蓋で、尾戸窯産か。外面に細く浅い線刻で波文を描くが、文様は読み取り難い。内面中央には印刻による「福」字を施す。灰釉は光沢の強い透明の釉で、部分的に白濁する。1886・1887は軒平瓦、1888は平瓦である。1888は「王子弥」銘印をもち、徳王子産（高知県香南市徳王子）か。

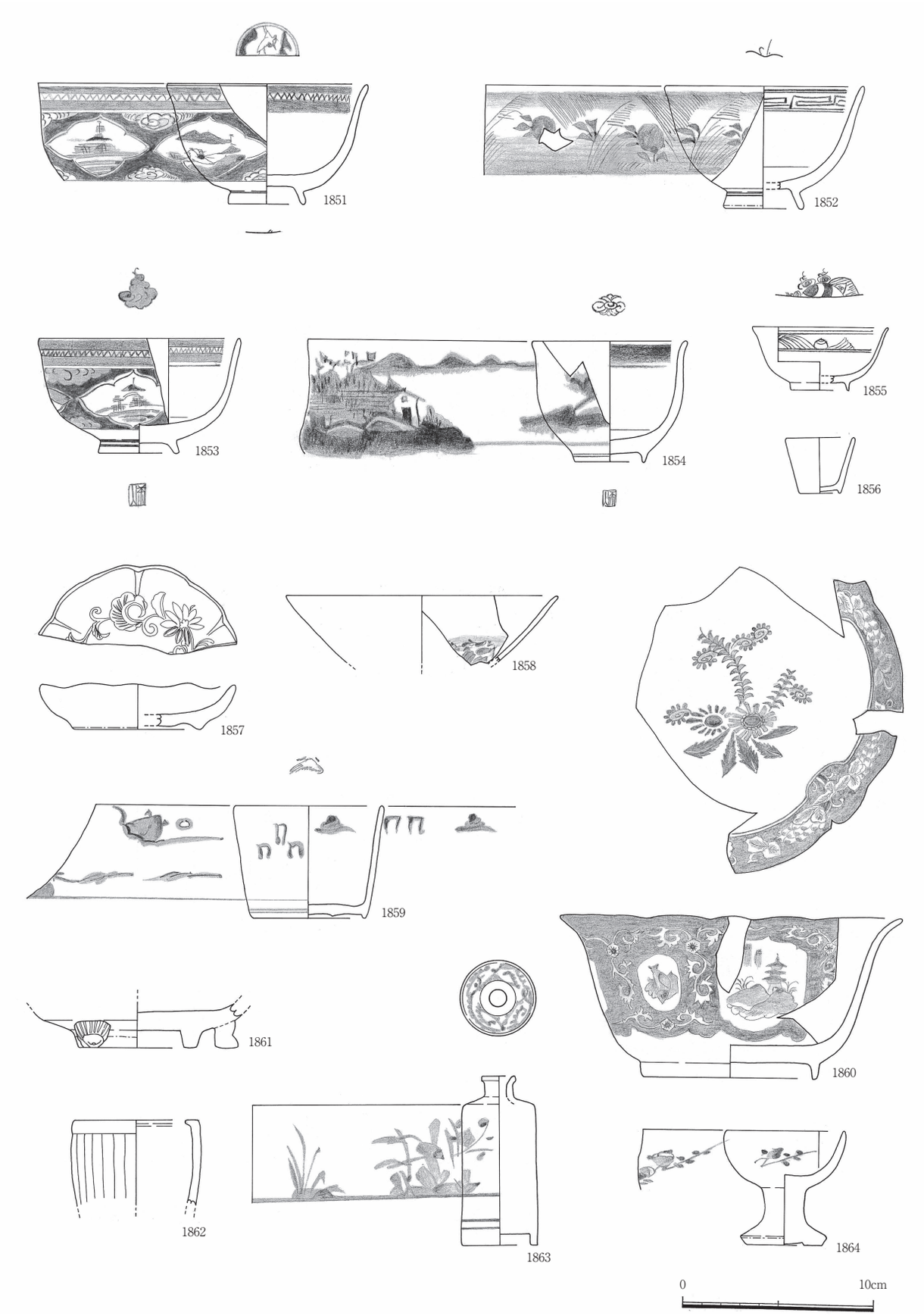


Fig.219　瓦溜2出土遺物実測図（1）

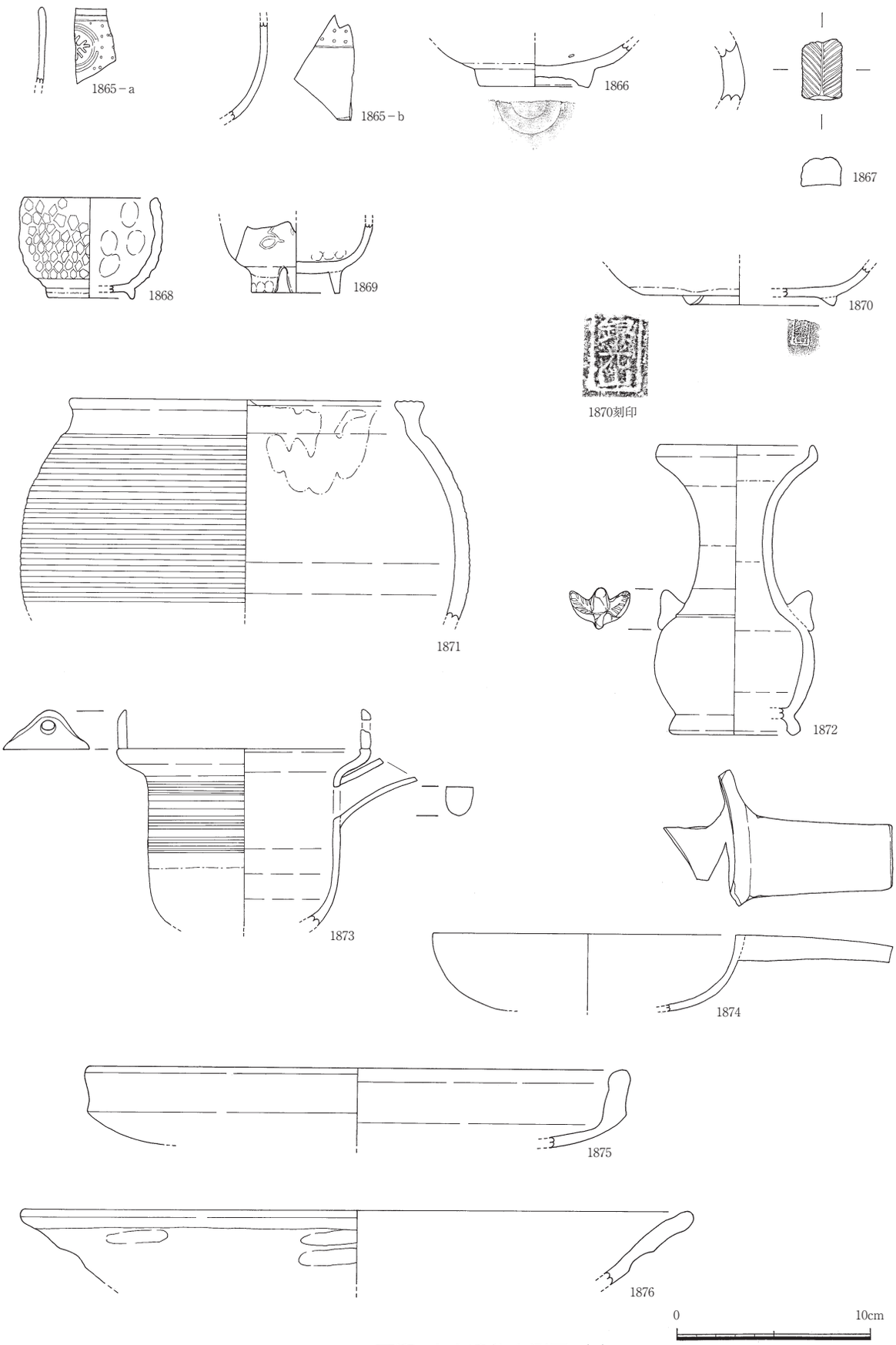


Fig.220　瓦溜2出土遺物実測図（2）

（1870刻印は実寸）

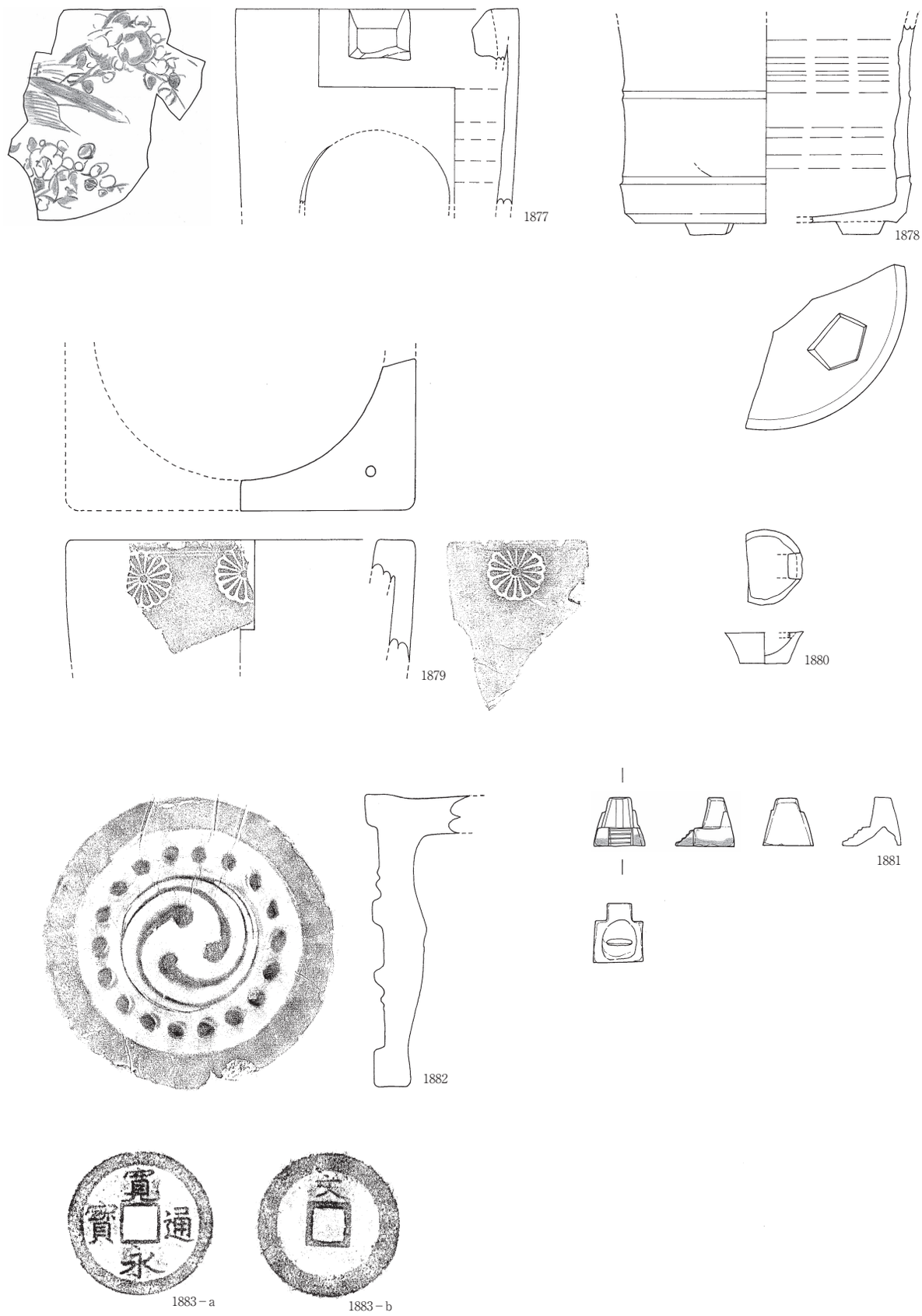


Fig.221　瓦溜2出土遺物実測図（3）

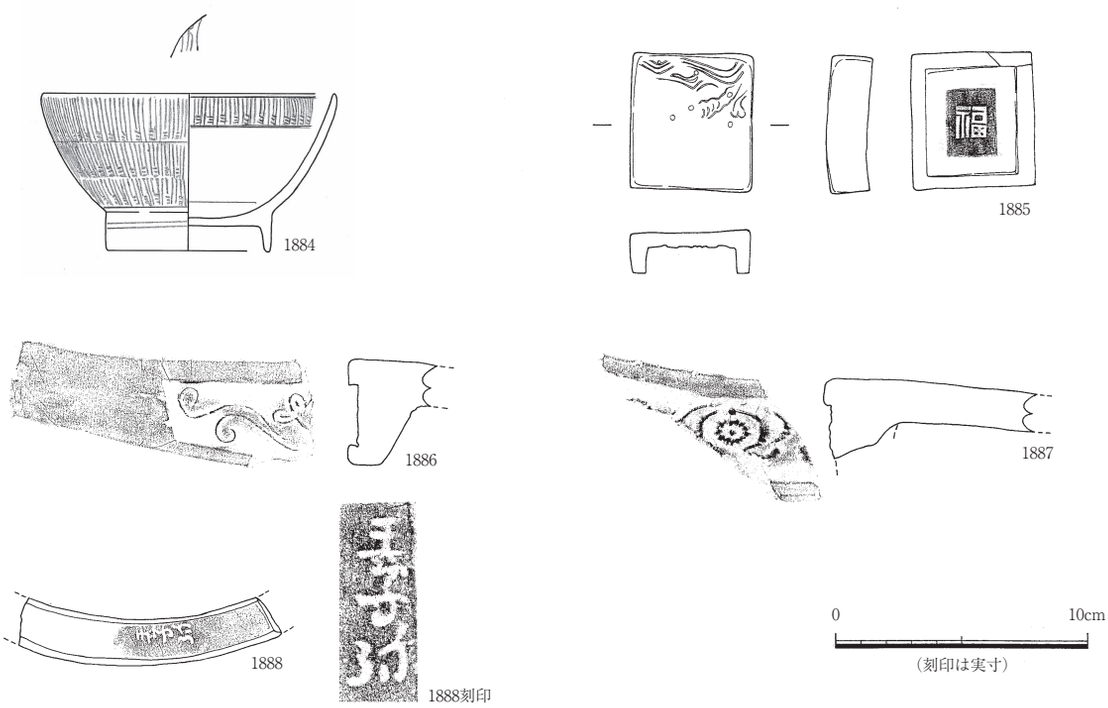


Fig.222　瓦溜3出土遺物実測図

(7) 包含層出土の遺物

近世の遺物は包含層Ⅱ層内からも多く出土し、また、近代以降の撹乱層内からも近世の遺物が多く含まれている。ここでは、このうち特徴的なものを取り上げた。図示したものは近世の1889～1916、現代の1917である。

①近世の遺物（Fig.223 ～ 225）

1889～1901は磁器。1889は染付小碗で、中国景徳鎮窯青花の文様意匠を模倣している。高台内に「□□製」銘（芭蕉製か）をもつ。肥前有田の製品で1650～1660年代に製作されたものである。1890は中国景徳鎮窯系の青花小杯で、高台内に「清雅」銘をもつ。1630～1640年代の製品である。1891も景徳鎮窯系の青花皿で、内面に草花文を描く。高台内に放射状の鉋痕が残る。16世紀末～17世紀初頭の製品である。

1892・1893は能茶山窯産の染付碗で、1820年代～幕末。1892は高台内に角枠内「茶」銘、1893は高台内に「サ」銘をもつ。1894は肥前産の小碗で高台内に銘をもつ。1895は肥前有田の色絵猪口で、赤・紫・緑・薄緑・黒の上絵付で岩と植物を描く。1690～1710年代の肥前有田の上手の製品である。1896は染付輪花形小皿で、山水文と釣り人を描く。肥前産1640～1650年代。1897は染付大皿で、内面に松竹梅、外面に唐草文を描く。肥前有田1650年代前後の製品である。1898は肥前産の白磁菊花形小杯。1899は肥前産の白磁紅皿。1900・1901は白磁のミニチュアである。

1901～1909は陶器。1902は志野焼の向付で、外面に錆絵を描く。16世紀末～17世紀初頭の製品である。1903は京都・信楽系の半球形碗で、呉須と鉄錆で注連縄文を描く。1904は尾戸窯の灰釉碗の体部片で、外面に白象嵌の暦手文と印花文を施す。1905も尾戸窯の製品で、用途不明。人物の顔を表したもので、型押し成形の後、ヘラ彫で目、口、髪等の細部を表現する。頭部に鉄錆を施し、

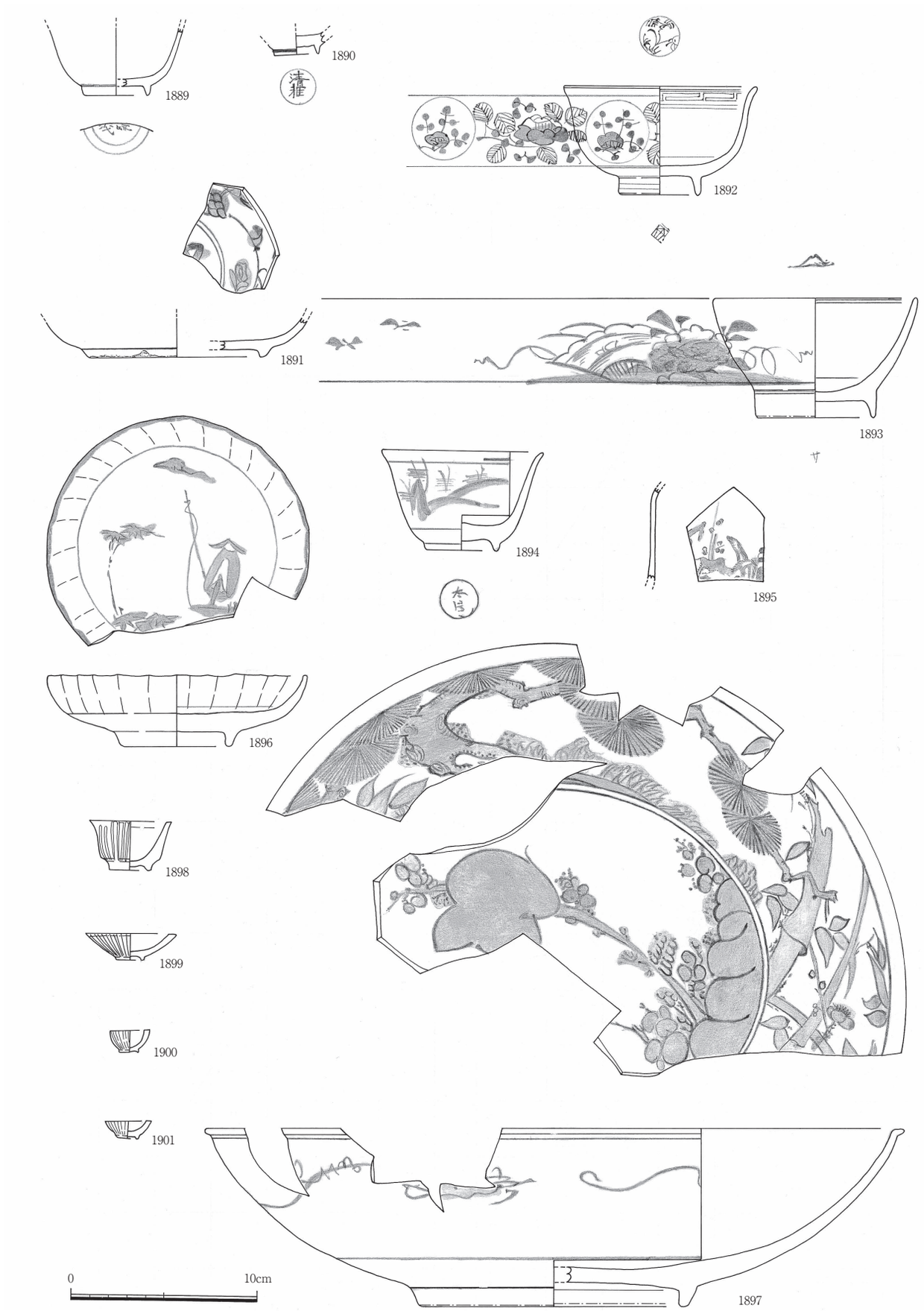


Fig.223　包含層出土遺物実測図（1）

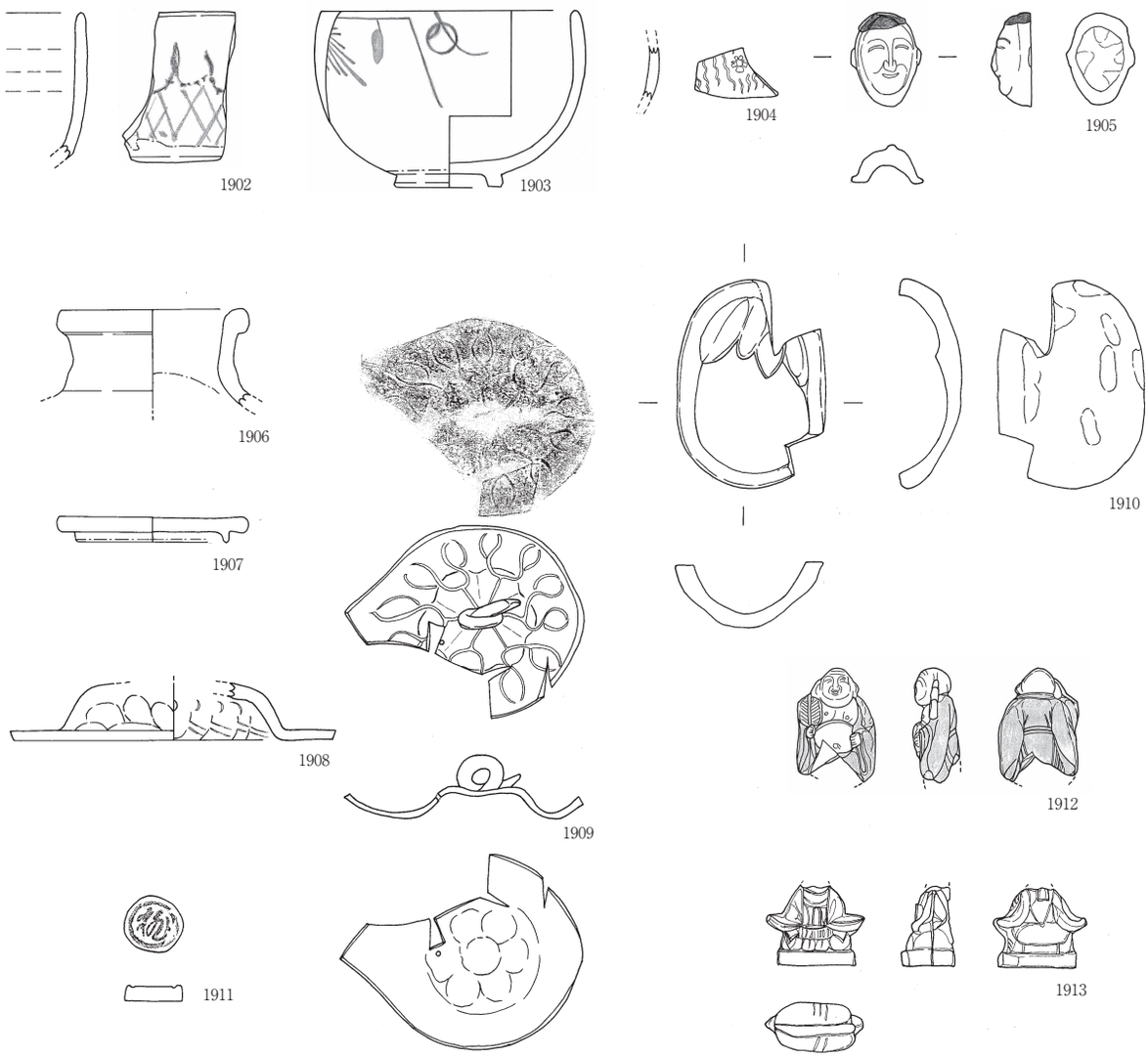


Fig.224　包含層出土遺物実測図（2）　0　10cm

外面に透明の釉を施す。1906は褐釉の壺で、オリーブ褐色の釉を施す。二次被熱を受け釉は変質している。17世紀のもので福岡周辺の窯の製品か。1907は珉平焼の蓋で、鮮やかなレモン色の釉を施す。1908はたたら作りと手捏ねによる焼締陶器で、土瓶又は急須の蓋か。1909も同様の焼締陶器で急須の蓋か。手捏ね成形の後、蔓を模倣した摘みを貼付し、上面には型による陽刻文様が施される。1908・1909は江戸後期の煎茶道具とみられる。

1910・1911は土師質土器、1912・1913は施釉土器である。1910は型で、茄子。1911は泥面子である。1912は人形で、布袋。型押し成形貼り合わせで中空である。外面には黄褐色と黄色の釉を施している。1913も人形で天神。型押し成形貼り合わせで中実。外面に緑と透明の低下度釉を施している。1914は粘板岩製の硯。裏面に釘彫り痕が残る。1915は寛永通宝。1916は棒状の銅製品で、火箸か。

②現代の遺物（Fig.225）

1917は撹乱層出土の資料で、終戦前後の廃棄遺物か。児童用の磁器碗で、黒・橙・黄・緑で戦闘機と日章旗を描いている。

［凡例］

○本文中に記載した出土遺物点数は、推定個体数である。個体数の算出は、口縁部点数と底部点数をもとに行った。この場合、複数の口縁部片でも形態・調整痕・釉調・胎土等の観察から同一個体とみられるものは１個体とみなしてカウントし、これに同一個体の口縁部を伴わない底部点数を加えている。ただし、土器小皿については底部点数から算出し、水滴、人形、土錘については別個体と判断できる体部片の点数を用いた。なお、個体数にカウントされなかった体部片でも、重要なものについては本文中に記載し補足している。

○土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版　標準土色帳」による。

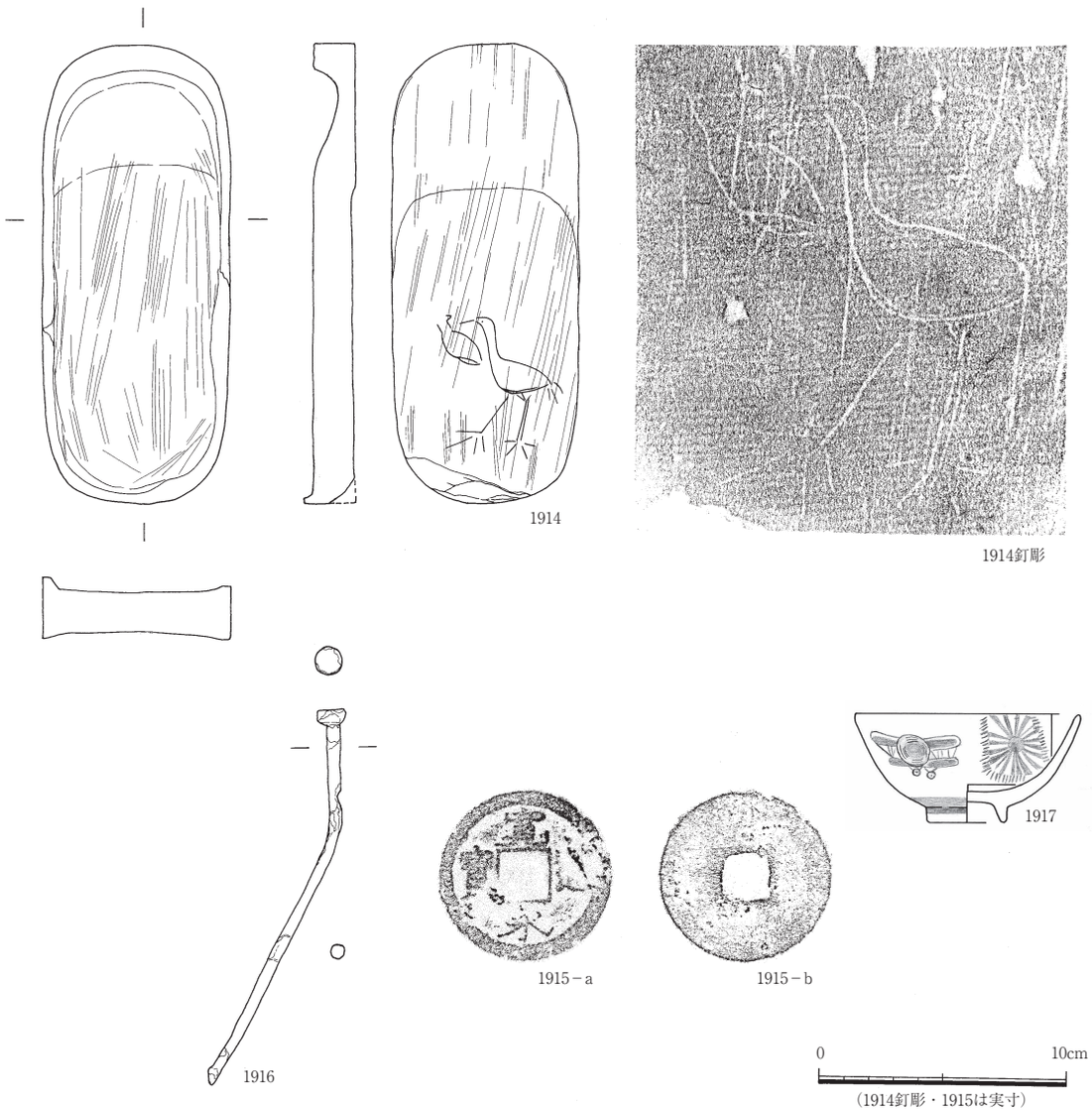


Fig.225　包含層・撹乱層出土遺物実測図

Tab. 1　土坑一覧表（1）

遺構番号	位置（小区）	形態	長径（m）	短径（m）	深さ（cm）	切り合い関係・同時期性	廃絶年代
SK1	1・31	—	1.52	残0.90	58	SK14を切る。	19世紀中葉（明治初頭）
SK2	2	楕円形	1.80	1.46	20	SK3を切る。	19世紀
SK3	2	不整形	残7.00	残3.80	60	SK2に切られる。SK3・6同時期。	17世紀末
SK4	8	—	残1.66	残1.12	26		幕末
SK5	13	楕円形	残1.90	1.62	26		18世紀中葉
SK6	16	楕円形	2.65	2.22	29	SK3・6同時期。	17世紀末
SK7	19	—	残3.44	—	90	SK7・12同時期。	19世紀中葉（幕末）
SK8	20	不整形	残2.20	1.60	38		18世紀前半
SK9	20	—	残1.16	残1.00	22		18世紀前半
SK10	28	—	残0.50	残0.43	54		19世紀前半
SK11	29・30	楕円形	残1.20	0.90	16		18世紀前半
SK12	19	楕円形	1.52	1.00	37	SK7・12同時期。	19世紀中葉（幕末）
SK13	31	楕円形	1.47	1.21	20		近世
SK14	31	—	残0.52	0.88	22	SK1に切られる。	近世
SK15	22	楕円形	残0.66	0.42	12	P5との切り合い不明。	近世
SK16	22	不整形	1.50	1.30	—		近代
SK17	3	不整形	残7.20	残6.50	40～80	SK39・83・84・122・SD2・P1・2・4・117～119・SX3・4に切られる。	17世紀前葉
SK18	51	円形	1.33	1.24	34		近世
SK19	0・40	不整形	5.90	残3.70	122		19世紀前葉
SK20	46	楕円形	3.42	2.20	40		18世紀前半
SK21	0・46	—	5.02	残1.84	53		19世紀中葉
SK22	51	楕円形	1.12	残0.60	66	P17に切られる。	18世紀後半～19世紀
SK23	21	円形	0.62	0.58	36		18世紀
SK24	52	楕円形	1.72	1.26	58		18世紀後半
SK25	47・48・54	不整形	4.60	2.14	76	SK43・P88を切る。SK26・SD3に切られる。	18世紀末～19世紀初頭
SK26	47	楕円形	1.48	0.94	14	SK25を切る。SK27に切られる。	19世紀
SK27	47	楕円形	0.94	0.78	20	SK26・P47を切る。	近代
SK28	3・47・48	不整形	3.72	2.96	40～50	SK34・52・92・P128を切る。	18世紀前半
SK29	48・3	隅丸方形	1.94	1.78	20	SK89を切る。	19世紀中葉
SK30	53	楕円形	1.42	1.12	32	SK45・P42・44を切る。SX11に切られる。	18世紀前葉
SK31	52	—	残0.90	残0.74	24		17世紀
SK32	52	円形	2.00	残1.80	26	P36・ピット列1-P7を切る。	17～18世紀
SK33	52	円形	1.16	残1.14	15		17～18世紀
SK34	47・48	長楕円形	残3.00	残0.74	16	SK28・P31に切られる。	17世紀後半～18世紀前半
SK35	47・54	楕円形	1.16	0.80	50		18世紀後半
SK36	56	長方形	1.66	0.96	34	SK38を切る。	19世紀前半
SK37	56・57	隅丸長方形	3.72	2.50	72		19世紀中葉
SK38	56	—	残3.52	残2.18	74	SK36・P61に切られる。	18世紀前半
SK39	3	長方形	4.17	1.30	60	SK17・83・SD2・P117を切る。	19世紀中葉（明治初頭）
SK40	58	楕円形	残0.72	0.98	8		19世紀
SK41	58	楕円形	残1.40	1.10	24	SX25に切られる。SK41・53が並ぶ。	18世紀前半
SK42	54	楕円形	残2.30	残1.34	54	SK76・P116を切る。	19世紀中葉

Tab. 2　土坑一覧表（2）

遺構番号	位置（小区）	形態	長径（m）	短径（m）	深さ（cm）	切り合い関係・同時期性	廃絶年代
SK43	54	不整形	3.50	3.22	90	SK25・SX12・13に切られる。SK72・75・P113を切る。	18世紀末～19世紀初頭
SK44	47	不整形	1.30	0.98	14		近世
SK45	53	楕円形	1.40	1.20	38	SX11・SK30・46に切られる。SX16を切る。	18世紀前葉
SK46	53	—	残1.10	残0.34	32	SK45・SX16を切る。	18世紀前葉
SK47	53	円形	0.57	0.57	12	SK55・SX11を切る。	19世紀中葉
SK48	55	—	1.02	残0.50	48		18世紀
SK49	55	—	確認3.54	残1.00	32	P76を切る。	18世紀
SK50	54	楕円形	2.26	2.12	48	SK68を切る。	18世紀後半
SK51	54	楕円形	残2.58	2.32	30	P65・85・86・127を切る。SK72に切られる。	18世紀前半
SK52	3	—	5.88	残2.40	92	SK122を切る。SK28・84・88・89・100に切られる。	18世紀中葉
SK53	58	円形	1.06	1.06	24	SX25に切られる。SK41・53が並ぶ。	18世紀前半
SK54	53	—	残0.44	0.90	33	SK63を切る。	18世紀
SK55	53	楕円形	1.04	0.72	22	SK47・SX11に切られる。	18世紀前葉
SK56	53	隅丸方形	1.40	1.28	22	SD1・SX11・P49・52～54に切られる。	17世紀末～18世紀前葉
SK57	21	—	残3.30	残2.36	22	P6を切る。	近世
SK58	48	隅丸方形	2.04	1.70	20		近世
SK59	48	—	0.74	0.68	20		17世紀後半～18世紀
SK60	59	不整楕円形	1.36	0.82	12	SK64との切り合い不明。	17世紀後半～18世紀
SK63	53	楕円形	1.14	0.98	21	SK54に切られる。	17世紀後半～18世紀
SK64	59	—	1.90	残0.40	22	SK60との切り合い不明。P114・115を切る。	近世
SK65	55	円形	0.80	0.80	12	SX17に切られる。	18世紀後半以前
SK66	54	—	残1.40	残1.26	16	SK68に切られる。SK71との切り合い不明。	18世紀
SK67	54	—	残1.10	残0.60	36	SK68を切る。	19世紀
SK68	54	—	残1.84	残1.80	32	SK66を切る。SK50・67に切られる。	18世紀後半
SK69	55	—	1.40	残0.68	24	SX17に切られる。	18世紀後半
SK70	54	—	1.34	0.70	40		18世紀後半
SK71	54	楕円形	0.74	0.60	12	SK66・P72との切り合い不明。	近世。
SK72	54	楕円形	1.72	1.08	56	SK51・75を切る。SK43に切られる。	18世紀末～19世紀初頭
SK73	54	—	0.64	残0.34	22		近世
SK74	54	長方形	1.30	0.70	28	SK78・P112を切る。	19世紀前半～中葉
SK75	54	—	0.80	残0.70	90	SK43・72に切られる。	18世紀
SK76	54	—	0.82	0.72	24	SK42に切られる。SK76・78同時期。	19世紀前半～中葉
SK77	54	楕円形	1.02	0.68	12	SK81に切られる。	18世紀
SK78	54	—	残2.20	残1.50	40	SK74に切られる。SK76・78同時期。	19世紀前半～中葉
SK79	55	—	0.98	残0.50	28	SX17に切られる。	18世紀後半
SK80	54	—	1.14	0.40	21		18世紀後半
SK81	54	楕円形	0.66	0.42	10	SK77を切る。	18世紀
SK82	3	楕円形	0.82	0.56	18		近世
SK83	3	隅丸方形	0.75	0.70	10	SK17・122を切る。SK39に切られる。	18世紀末～19世紀前葉
SK84	3	不整形	7.20	4.70	80～100	SK17・52・SD4・8を切る。	19世紀中葉
SK85	60	楕円形	1.94	残0.70	36	P122に切られる。	18世紀
SK86	60	円形	0.72	0.72	17		近世

Tab. 3　土坑一覧表（3）

遺構番号	位置（小区）	形態	長径（m）	短径（m）	深さ（cm）	切り合い関係・同時期性	廃絶年代
SK87	60	楕円形	0.72	0.42	8		近世
SK88	3	—	残1.30	残1.06	46	SK52を切る。SK88・89同時期。	19世紀中葉
SK89	3	—	残1.20	0.74	44	SK100・52を切る。SK29に切られる。SK88・89同時期。	19世紀中葉
SK91	3	—	0.54	残0.28	20		近世
SK92	3	楕円形	残1.50	1.18	18	SK28に切られる。	17世紀前葉
SK93	3	不整形	1.30	0.80	8	P133を切る。	17世紀前葉
SK94	3	—	残0.62	1.00	12		17世紀後半～18世紀
SK95	3	楕円形	1.06	0.74	10		17世紀前葉
SK96	3	円形	1.05	0.98	32	P138を切る。	17世紀
SK97	3	—	残1.21	1.96	56	SK117・SD9を切る。	19世紀中葉
SK98	3	楕円形	0.68	0.54	8		17世紀
SK99	3	楕円形	0.72	0.50	6	P132を切る。	近世
SK100	3	長方形	2.20	0.88	70	SK52を切る。SK89に切られる。	19世紀中葉
SK101	49	楕円形	1.20	1.00	36	SX22・P136・ピット列5-P1に切られる。	18世紀前葉か
SK102	49	楕円形	0.84	0.60	20		17世紀
SK104	49	楕円形	0.70	0.60	14	ピット列7-P1を切る。	近世
SK105	50	楕円形	0.90	0.60	—		近世
SK106	3	長方形	0.92	0.68	30	SD7を切る。	19世紀前葉～中葉
SK107	3	楕円形	1.26	1.06	42	SD6・７を切る。	19世紀前葉～中葉
SK108	49	円形	0.50	0.50	8		近世
SK109	3	円形	0.98	0.92	26	SK110を切る。	17世紀末～18世紀前半
SK110	3	円形	0.58	0.58	38	SK109に切られる。	17世紀末～18世紀前半
SK112	49	楕円形	0.60	0.44	8	ピットと切り合う。	近世
SK113	49	楕円形	1.16	0.56	10	SX22に切られる。	18世紀前葉以前
SK114	50	楕円形	1.00	0.71	20	ピット列6-P2を切る。SX22に切られる。	18世紀前葉
SK115	50	楕円形	1.83	0.98	14	ピット列6-P4・P166を切る。SX22に切られる。	18世紀前葉
SK116	50	楕円形	1.62	0.84	20	ピット列6-P6を切る。SX22に切られる。	18世紀前葉か
SK117	3	—	残0.68	残0.66	20	SK97に切られる。	19世紀中葉
SK118	50	円形	1.86	1.72	30	SK120を切る。	18世紀前葉
SK119	3	—	5.00	残0.86	78	SD4・8を切る。	19世紀前葉～中葉
SK120	50	—	1.16	確認0.56	62	SK118に切られる。	18世紀前葉
SK121	49	方形	1.46	1.26	21		19世紀中葉
SK122	3	不整形	残2.64	2.40	32	SK17を切る。SK52・83に切られる。	17世紀前葉
SK123	50	—	1.30	—	48	SK126を切る。	18世紀前葉か
SK124	41	楕円形	残2.64	0.90	58	瓦溜2と石列3に切られる。	19世紀中葉
SK125	54	円形	0.56	0.53	10		近世
SK126	50	—	確認1.54	—	60	SK123に切られる。	18世紀
SK127	17	円形	0.50	0.50	残30		19世紀前半～中葉
SK128	49	円形	0.60	0.60	残20		近世

Tab. 4　ピット一覧表（1）

遺構名	位置（小区）	径（cm）	深さ（cm）	出土遺物	備考	廃絶年代
P1	3	36	20	灰釉碗細片１	SX4を切る。	18世紀～19世紀
P2	3	22	10		SX4を切る。	
P4	3	42	25	なし	SX4を切る。	
P5	22	30	25	なし	床面から緑色の根石。	
P17	51	48	14	なし	SK22を切る。	
P29	48	50	13	土師質土器細片4	径15cmの柱痕を検出。	
P30	48	32	35	なし		
P36	52	30	20	なし	SK32に切られる。	17世紀
P37	52	34	36	なし	径20cmの柱痕を検出。	
P42	53	32	20	なし	SK30・SX11に切られる。	17世紀～18世紀前葉
P43	53	38	26	堺産擂鉢1	SX11を切る。	18世紀～19世紀
P44	53	26	10	なし	SK30・SX11に切られる。	17世紀～18世紀前葉
P45	47	36	15	土師質土器小皿１・磁器細片１	根石を伴う。	
P49	53	30	30	灰釉陶器細片1		
P50	53	28	34	土師質土器細片1		
P54	53	40	30	肥前産刷毛目陶器碗1・白磁鉢1・染付細片1・白磁又は染付の細片1		18世紀前半
P55	53	30	30	肥前産灰釉丸碗体部細片1		18世紀
P56	53	40	72	なし	径15cmの柱痕を検出。	
P59	53	36	36	灰釉陶器細片1		
P60	53	30	24	肥前産染付皿口縁部1・鉄釉陶器1		17世紀後半～18世紀
P61	56	34	15	肥前産染付小碗1・土師質土器細片5		18世紀
P64	54	40	55	土師質土器細片3・染付小杯1	径16cmの柱痕を検出。	18世紀～19世紀
P65	54	40	53	土師質土器小皿1	径17cmの柱痕を検出。	
P66	54	35	37	土師質土器細片9	径15cmの柱痕を検出。	
P68	53	32	33	土師質土器細片1		
P73	54	29	43	白色系の土師質土器小皿１・磁器細片1	SK51と切り合う。	
P74	54	30×34	42	肥前産染付皿体部片1・瀬戸・美濃産灰釉皿1・尾戸窯鉄釉灯明受皿1・灰釉陶器細片2・土師質土器小皿口縁部2		18世紀～19世紀
P76	55	30	32	なし	SK49に切られる。	
P85	54	27	25	肥前産染付猪口底部1・染付又は白磁小杯口縁部1・土師質土器小皿細片4・瓦片2	SK51・P73と切り合う。	
P91	54	33	16	鉄塊		
P93	54	26	30	白磁又は染付碗口縁部1・土師質土器細片2		
P99	54	38	25	肥前産白磁小杯1・染付小碗底部1・鉄釉甕体部1		
P103	54	29	12	菊花形灰釉鉢口縁部1・鉄釉陶器甕体部片1	径11cmの柱痕を検出。	
P106	54	42×35	30	青花皿底部1・二次被熱の鉄釉口縁部1・瓦片1・		

Tab. 5　ピット一覧表（2）

遺構名	位置（小区）	径（cm）	深さ（cm）	出土遺物	備考	廃絶年代
P109	54	17	復元45	なし	SK43に切られる。	
P110	54	13	復元45	なし	SK43に切られる。	
P111	54	28	復元36	なし	SK43に切られる。	
P113	54	26	13	灰釉陶器細片1・土師質土器細片1	SK43に切られる。	
P116	54	30	15	磁器細片1		
P117	3	48	44	染付碗底部1・灰釉蓋体部片1・灰釉皿口縁部1・土師質土器小皿口縁部1	SK39に切られる。根石を伴う。	18世紀か
P118	3	40	50	染付碗底部1・白磁又は染付鉢1・灰釉変形皿1・土師質土器小皿2・土師質土器羽釜1		19世紀
P121	60	25	12	白磁碗体部片1・土師質土器細片1		
P122	60	24	23	薄手酒杯1・灰釉陶器片1・土師質土器片 1		19世紀中葉
P125	3	38	14	石臼 1		
P126	3	26	15	灰釉皿口縁部1		19世紀か
P129	3	42	30	志野焼皿口縁部1・土師質土器細片1・鉄塊1		17世紀
P132	49	22	4	刷毛目皿口縁部1・焼締瓶体部1・灰釉陶器細片2・土師質土器小皿細片1	SK99に切られる。	18世紀か
P133	3	28	4	土師質土器小皿口縁部1	SK93と切り合う。	
P136	49	31	16	染付小碗1・土師質土器小皿底部1	SK103に切られる。 SK105を切る。	19世紀か
P137	3	29	5	土師質土器小皿口縁部1・底部1		
P138	3	38	20	色絵大皿※二次被熱	SK96に切られる。	18世紀前葉か
P143	49	23	15	染付碗体部1・鉄釉甕細片1・鉄釘1		18世紀か
P144	49	20	9	鉄塊 1		
P150	50	25	10	灰釉陶器細片 1	根石を伴う。	
P151	50	20	10	染付丸碗底部 1		
P152	3	35	13	なし	根石を伴う。	
P159	3	24	18	鉄釉陶器細片1		
P160	3	25	22	染付細片1・白土器の細片1・土師質土器細片1	SK112に切られる。	
P162	50	28	16	瓦1・土師質土器細片1		
P163	50	20	28	土師質土器細片1		
P166	50	25	18	土師質土器細片2	火災遺構。SK115に切られる。	
P176	50	40	40	なし	根石を伴う。	

Tab.6　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
1	SK1 上層	磁器 染付	中皿 丸形	16.8	2.9	9.2	—	外）白 断）白	文様不明	透明釉は白濁する。	肥前産
2	SK1 上層	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 7.6	—	かえり径6.4	—	外）白 断）白	外）花唐草文	内面施釉。かえり無釉。	肥前産 19世紀中葉
3	SK1	陶器	小皿	—	—	4.4	—	外）にぶい黄橙 10YR7/3 断）にぶい黄橙 10YR7/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に砂目。灰釉は焼成不良気味で白濁。	肥前産 17世紀初頭
4	SK1 上層	陶器	擂鉢	33.0	—	—	—	外）暗赤褐 5YR3/4 断）暗赤褐 5YR3/4	焼締め	口縁部外面に凹線。内面櫛目。体部内外面に強いロクロ目。口縁部外面に重ね焼きによる別個体の溶着痕。	備前産 17世紀
5	SK1 上層	陶器	擂鉢	—	—	19.6	—	外）にぶい黄橙 10YR6/4 断）にぶい黄褐 10YR5/4	焼締め	内面に斜方向の櫛目。体部外面回転ナデ。外底に凹凸。	備前産 16世紀末～17世紀初頭
6	SK1	陶器	土瓶又は急須	10.0	—	—	—	外）にぶい黄橙 10YR6/3 断）にぶい黄橙 10YR6/3	焼締め	手捏ね成形。内外面ユビオサエ・ナデ。口縁部外面に沈線。	
7	SK1	陶器	甕	15.8	—	—	—	外）暗褐10YR3/3 断）浅黄2.5Y7/3	外）鉄釉 内）灰釉	口縁部と体部内面にオリーブ灰色の釉を施釉。肩部から灰釉を流し掛け。	丹波産
8	SK1	土師質土器	杯	10.0	2.9	5.4	—	外）橙5YR6/6 断）橙5YR6/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に渦状の強いロクロ目後中央に直線方向のナデ。	
9	SK1	瓦質土器	焜炉箱形	—	—	—	—	外）黒N2/ 断）にぶい橙 7.5YR6/4		前方に方形の窓をもつ。底部の四隅に脚を添付し、アーチ状に面取る。外面ミガキ、内面内面ハケ・ナデ。接合部に強い指ナデ。	上面隅に銘印。
14	SK2	土師質土器	五徳か	22.8	6.6	17.0	—	外）にぶい褐 7.5YR5/4 断）にぶい褐 7.5YR5/4		内外面回転ナデ。	内面上位に煤。
15	SK3 上層	磁器 染付	中碗 丸形	11.4	7.2	4.4	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	外）草花文・圏線	高台内無釉。高台内兜巾状。透明釉は明緑灰色を帯びる。	肥前産 1640～1650年代
16	SK3 下層	磁器 染付	中碗 丸形	11.2	7.1	4.0	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）文字・圏線	高台無釉。高台内凸状。透明釉は灰白色を帯び貫入が入る。呉須は暗オリーブ灰色に発色。	肥前産 1640～1650年代
17	SK3 下層	磁器 染付	碗か	—	—	—	—	外）白 断）白	外）渦文		肥前産 17世紀前半
18	SK3 上層	磁器 染付	中碗 丸形	11.6	6.6	4.2	—	外）白 断）白	外）草花・岩 高台外）圏線	透明釉は貫入が入る。	肥前産
19	SK3	磁器 染付	中碗	—	—	3.4	—	外）白 断）白	外）雲龍文 内）荒磯文	畳付に粗い砂が付着。	肥前産 1650～1680年代
20	SK3 下層	磁器 染付	中碗 丸形	9.8	5.1	4.6	—	外）白 断）白	外）草文･二重圏線 高台外）二重圏線 高台内）銘		肥前産 17世紀後半～18世紀前半
21	SK3 下層	磁器 染付	中碗 丸形	11.4	6.0	4.6	—	外）白 断）白	外）山水文・帯線に白抜きによる流水文 高台外）二重圏線		肥前産
22	SK3 下層	磁器 染付	中碗 丸形	12.4	6.7	4.2	—	外）白 断）白	外）四方へ丸に龍・寿字・二重圏線 見込み）荒磯文 口縁内）圏線 高台内）圏線・「大明成化年製」		肥前産 17世紀後半～18世紀前半
23	SK3	磁器 染付	中碗 丸形	11.8	6.0	5.4	—	外）白 断）白	外）花・鳥・月・雲・二重圏線 高台外）二重圏線 口縁内）二重圏線 見込み）花文 高台内）「宣徳年製」銘		肥前産
24	SK3 下層	磁器 染付	中碗 丸形	11.2	5.7	4.2	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）竹・野菜 見込み）植物・二重圏線		肥前産 17世紀後半～18世紀前半
25	SK3 下層	磁器 染付	中碗 丸形	12.0	6.5	4.5	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）芙蓉手・二重圏線 高台外）二重圏線 高台内）圏線・「大明年製」銘か		肥前産
26	SK3 上層	磁器 染付	中碗 丸形	12.2	6.2	4.8	—	外）白 断）白	外）山水文・圏線		肥前産
27	SK3 下層	磁器 染付	中碗 丸形	13.5	—	—	—	外）白 断）白	外）不明・二重圏線		肥前産

Tab.7　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
28	SK3 下層	磁器 染付	中碗	—	—	4.2	—	外）白 断）白	外）窓・網目文 高台外）二重圏線		肥前産
29	SK3	磁器 染付	中碗	—	—	4.4	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/	外）不明・圏線	透明釉は白濁する。	肥前産
30	SK3 下層	磁器 染付	中碗	—	—	4.0	—	外）白 断）白	高台外）二重圏線 高台内）角枠内「福」・圏線		肥前産
31	SK3	磁器 染付	中碗	—	—	2.4	—	外）白 断）白	外）草文 断）植物 高台外）二重圏線		肥前産
32	SK3 下層	磁器 染付	中碗か	—	—	4.8	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）丸文	内面の一部無釉。高台内無釉。	肥前産
33	SK3 下層	白磁	中碗	12.2	—	4.8	—	外）白 断）白	外）線刻による植物・蓮弁・圏線		肥前産　有田 1650～1670年代
34	SK3	白磁	中碗 丸形	11.4	6.2	4.2	—	外）白 断）白	白磁釉		肥前産
35	SK3 上層	白磁	中碗 丸形	11.6	6.2	4.6	—	外）白 断）白	白磁釉		肥前産
36	SK3 下層	青花	中碗	12.0	—	—	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/1	外）波濤文・芭蕉葉 口縁内）圏線	呉須は青灰色。透明釉は灰白色を帯び貫入が入る。	中国　景徳鎮窯系 15世紀後半～16世紀前半
37	SK3 下層	白磁	小碗	10.0	6.3	4.4	—	外）白 断）白			肥前産
38	SK3	白磁	小碗	10.0	5.5	3.6	—	外）白 断）白		薄手。透明釉貫入が入る。	肥前産
39	SK3 下層	磁器 染付	小碗 丸形	8.6	5.8	3.8	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）不明・二重圏線	透明釉は灰白色を帯びる。	肥前産
40	SK3 下層	磁器 染付	小碗	9.0	—	—	—	外）明オリーブ灰2.5GY7/1 断）明オリーブ灰2.5GY7/1	外）帆掛船	透明釉は明オリーブ灰色を帯びる。	肥前産
41	SK3 下層	磁器 染付	小碗 端反形	9.4	5.0	3.4	—	外）白 断）白	外）圏線 高台外）二重圏線 見込み）宝文・二重圏線 高台内）角枠内「福」・圏線	口縁部輪花形。	肥前産
42	SK3 下層	磁器 染付	小碗	—	—	4.0	—	外）灰白N8/ 断）白	外）草花文 高台外）二重圏線 高台内）「大明年製」銘		肥前産
43	SK3 下層	磁器 染付	小碗	7.0	—	—	—	外）白 断）白	外）山水文か		肥前産
44	SK3 上層	磁器 染付	小碗 端反形	7.2	4.5	2.8	—	外）灰白N8/ 断）灰白N8/	外）草花文 高台外）二重圏線		肥前産
45	SK3	白磁	小碗	—	—	3.0	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）灰白N8/		外面ロクロ目。高台施釉。畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産
46	SK3 下層	磁器 染付	小杯 端反形	6.0	3.4	2.4	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白10Y8/1	外）草文	高台無釉。畳付に褐色の粗砂が付着。	肥前産 1630～1650年代
47	SK3 下層	磁器 染付	小杯 端反形	5.8	3.6	2.3	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白5Y8/1	外）寿字・丸彫りによる鎬	呉須は青灰色。高台内無釉。畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産 1630～1640年代
48	SK3 下層	白磁	小杯 端反形	5.6	—	—	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）灰白N8/	外）丸彫りによる鎬		肥前産 1630～1650年代
49	SK3	白磁	小杯	—	—	2.2	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）灰白N8/	外）丸彫りによる鎬	高台無釉。	肥前産 1630～1650年代
50	SK3 下層	白磁	小杯 端反形	6.0	4.0	2.4	—	外）白 断）白	白磁釉	高台無釉。	肥前産 1630～1650年代
51	SK3 上層	白磁	小杯 端反形	5.6	3.2	2.4	—	外）白 断）白	白磁釉	高台無釉。	肥前産 1630～1650年代
52	SK3 下層	磁器 染付	小杯	—	—	2.6	—	外）白 断）白	外）コンニャク印判による文様	呉須は暗青灰色。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
53	SK3	磁器 染付	小杯	—	—	2.6	—	外）白 断）白	外）唐草文		肥前産
54	SK3	青花	小杯	5.4	—	—	—	外）白 断）白	外）不明	口縁端部の釉が部分的に剥げる。	中国　景徳鎮窯系 17世紀前葉～中葉
55	SK3	磁器 染付	小皿 丸形	12.2	2.7	4.4	—	外）明緑灰10GY8/1 断）灰白N8/	内）草花文	透明釉は青色を帯びる。	肥前産 1640～1650年代

Tab.8　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
56	SK3 下層	磁器 染付	小皿 丸形	12.8	3.0	5.0	—	外）明緑灰10GY8/1 断）灰白N8/	内）草花文	透明釉は青色を帯びる。	肥前産 1640～1650年代
57	SK3	磁器 染付	小皿 丸形	12.6	3.3	4.8	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	内）山水文	畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産 1640～1650年代
58	SK3 下層	磁器 染付	小皿	—	—	4.4	—	外）明オリーブ灰2.5GY7/1 断）灰白N8/	内）唐草文	呉須は緑灰色。	肥前産 1640～1650年代
59	SK3 下層	磁器 染付	小皿	—	—	4.4	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）灰白N8/	内）草花文	高台内兜巾状。畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産 1640～1650年代
60	SK3 上層	磁器 染付	小皿	—	—	4.0	—	外）明オリーブ灰5GY7/1 断）灰白N8/	内）草花文	畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産 1640～1650年代
61	SK3 下層	磁器 染付	小皿	—	—	6.6	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	内）岩		肥前産 1640～1650年代
62	SK3 下層	磁器 染付	小皿	—	—	6.0	—	外）白 断）白	内）鹿・草・雲	透明釉は明緑灰色を帯びる。畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産 1640～1650年代
63	SK3 上層	磁器 染付	小皿	—	—	5.0	—	外）白 断）白	内）不明	透明釉は明緑灰色を帯びる。畳付に白色の粗砂が付着。	肥前産 17世紀前半
64	SK3 上層	磁器 染付	小皿 丸形	14.0	3.0	6.0	—	外）白 断）白	内）鹿・雲 口縁内）陽刻による波状文	畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産 1640～1650年代
65	SK3	磁器 染付	小皿	14.4	3.3	6.8	—	外）白 断）白	内）草花文	口縁部輪花形。口錆。透明釉は明緑灰色を帯びる。	肥前産 1640～1650年代
66	SK3 下層	磁器 染付	小皿	—	—	3.0	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	内）草花文	畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産 17世紀前半
67	SK3 下層	磁器 染付	小皿	—	—	5.6	—	外）白 断）白	内）捻子花文	透明釉は明緑灰色を帯びる。呉須は暗緑灰色。	肥前産 1630～1640年代
68	SK3 上層	磁器 染付	小皿 丸形	13.2	—	—	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	内）捻子花文		肥前産 1630～1640年代
69	SK3 上層	磁器 染付	小皿	—	—	5.6	—	外）白 断）白	内）文字と芭蕉葉か 高台内）二重圏線		肥前産 1680～1700年代
70	SK3 上層	磁器 染付	小皿 丸形	12.6	3.0	7.0	—	外）灰白2.5Y8/1 断）浅黄橙10YR8/3	内）椿		肥前産 1640～1660年代
71	SK3 下層	磁器 染付	皿	—	—	8.4	—	外）白 断）白	外）花唐草文 内）花文 口縁部内）四方襷 高台内）二重圏線		肥前産 17世紀後葉～18世紀初頭
72	SK3	磁器 染付	五寸皿 端反形	14.6	2.4	10.0	—	外）白 断）白	外）花唐草文 内）捻子文 高台外）二重圏線 高台内）圏線		肥前産 17世紀後葉～18世紀初頭
73	SK3 上層・下層	青磁	小皿 端反形	13.2	3.0	4.1	—	外）明緑灰7.5GY7/1 断）白	青磁釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台無釉。畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産　波佐見 17世紀後半～18世紀前半
74	SK3 上層	青磁	小皿 端反形	13.6	3.2	4.5	—	外）明緑灰10GY7/1 断）白	青磁釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台無釉。畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産　波佐見 17世紀後半～18世紀前半
75	SK3	青磁	五寸皿 折縁形	14.0	3.5	4.8	—	外）明緑灰10GY8/1 断）白	青磁釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台無釉。	肥前産　波佐見 17世紀後半～18世紀前半
76	SK3 上層	青磁	小皿 丸形	13.0	3.9	4.8	—	外）明オリーブ灰2.5GY7/1 断）灰白2.5Y8/2	青磁釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台無釉。釉は焼成不良で明オリーブ灰色に発色。見込みに別個体の高台痕が残る。	肥前産　波佐見 17世紀後半～18世紀前半
77	SK3 下層	青花	皿	—	—	—	—	外）白 断）白	内）植物	透明釉は貫入が入る。	中国　景徳鎮窯系 16世紀後半～17世紀初頭
78	SK3	青花	皿	—	—	9.0	—	外）白 断）白	不明	高台内に放射状の鉋痕。畳付両側に面取り。	中国　景徳鎮窯系 16世紀後半～17世紀初頭
79	SK3 上層	青花	皿	15.0	2.5	8.2	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）灰白N8/	口縁外）圏線 高台外）圏線 内）宝文	高台内に放射状の鉋痕。畳付に灰白色の粗砂が付着。	中国　景徳鎮窯系 16世紀後半～17世紀初頭
80	SK3	青花	小皿	—	—	—	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）灰白N8/	外）芭蕉葉 内）花鳥文か	碁笥底。透明釉は明緑灰色を帯びる。	中国　景徳鎮窯系 15世紀後半～16世紀前半
81	SK3 上層	五彩	皿	—	—	—	—	外）灰白7.5Y8/1 断）にぶい橙7.5YR7/4	内）上絵付（赤・その他）による文様	全面に白化粧土を施した後透明釉を施釉。	中国　漳州窯系 16世紀末～17世紀初頭
82	SK3	五彩	皿	—	—	—	—	外）灰白N8/ 断）灰5Y6/1	内）上絵付（赤・その他）による文様	全面に白化粧土を施した後透明釉を施釉。	中国　漳州窯系 16世紀末～17世紀初頭

Tab.9　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
83	SK3	磁器染付	中皿	—	—	10.5	—	外）白 断）白	内）山水文・釣人 高台外）三重圏線 高台内）圏線		肥前産　有田 1660～1680年代
84	SK3上層	磁器染付	中皿	—	—	12.0	—	外）白 断）白	内）桜 高台外）二重圏線 高台内）圏線		肥前産　有田 1670～1690年代
85	SK3下層	磁器染付	中皿	—	—	9.6	—	外）白 断）白	内）草花文	透明釉は灰白色を帯びる。呉須は暗青灰色。畳付に白色の粗砂が付着。	肥前産 17世紀前半か
86	SK3下層	青磁	中皿折縁形	21.1	4.8	6.2	—	外）明緑灰10GY7/1 断）白	青磁釉 内）丸彫りによる鎬文	青磁釉は明緑灰色を帯びる。	肥前産 1680～1740年代
87	SK3下層	青磁	中皿折縁形	22.0	—	—	—	外）明緑灰10GY7/1 断）白	外）2条の凹線 内）片切り彫りによる陰刻文	青磁釉は明緑灰色を帯びる。	肥前産
88	SK3下層	青磁	大皿	—	—	15.0	—	外）オリーブ灰10Y6/2 断）灰白N8/	内）印刻による算木文	高台全面施釉。高台内蛇の目釉剥ぎ後、鉄錆を刷毛塗り。青磁釉はオリーブ灰色を帯び貫入が入る。	肥前産 1650～1680年代
89	SK3下層	青磁	大皿	25.7	7.5	13.2	—	外）緑灰7.5GY6/1 断）白	青磁釉 外）片切り彫りによる草花文・圏線 口縁内）2条の凹線	蛇の目凹形高台。釉剥ぎ部に鉄錆を施す。	肥前産 1650～1680年代
90	SK3下層	青磁	大皿	—	—	16.4	—	外）明緑灰10GY7/1 断）白	内）ヘラ彫りによる竹文	高台全面施釉。高台内蛇の目釉剥ぎ。	肥前産
91	SK3上層	青磁	大皿端反形	36.0	—	—	—	外）灰オリーブ7.5Y4/2 断）灰白7.5Y8/1	内）ヘラ彫りによる陰刻文	青磁釉は濃いオリーブ色。	肥前産
92	SK3中層	磁器色絵染付	鉢端反形	16.0	—	—	—	外）白 断）白	外）蓮弁文・丸文、上絵付（赤・薄緑）の雲龍文 内）二重圏線、上絵付（赤・薄緑）の草花・桃 口縁内）四方襷		肥前産
93	SK3下層	磁器染付	猪口腰張形	9.3	6.7	5.0	—	外）白 断）白	外）草花・蝶・二重圏線 高台外）二重圏線 高台内）「□□年□」	透明釉は貫入が入る。	肥前産
94	SK3上層・下層	磁器	中碗半筒形	9.8	—	—	—	外）褐7.5YR4/4 断）白	鉄釉	内面施釉。褐色の釉。	肥前産 17世紀後半
95	SK3	青花	鉢か	—	—	—	—	外）白 断）白	外）不明		中国　景徳鎮窯系
96	SK3下層	磁器色絵染付	蓋物蓋	笠部径11.0	—	かえり径10.0	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）圏線、上絵付（黄・緑・黒）による草花文	上絵の輪郭は黒で描く。	肥前産
97	SK3上層	磁器色絵染付	蓋物半筒形	10.6	—	—	—	外）白 断）白	外）呉須による二重圏線、上絵付（赤・その他）による草花文 高台内）圏線	内面施釉。口縁部内面と端部無釉。	肥前産
98	SK3下層	磁器	香炉半筒形	10.0	—	8.6	—	外）上半灰白10Y7/ 断）灰白10Y7/ 外）下半褐7.5YR4/4 断）灰白10Y7/	外）下半に鉄釉・上半に透明釉	宝珠形の三足をもつ。内面ロクロ目。内面無釉。外底施釉。外底に砂が付着。	肥前産
99	SK3下層	青磁	壺	—	—	—	—	外）オリーブ灰10Y5/2 断）灰白N8/	外）陽刻による寿・福・花唐草文	頸部に獣面の双耳を貼付。型押成形。内面ユビオサエ・ユビナデ。内面無釉。	中国　龍泉窯 14世紀後半～15世紀中葉
100	SK3	白磁又は染付	壺	8.8	—	—	—	外）白 断）白		内面施釉。口縁部内面と端部無釉。	肥前産
101	SK3上層	磁器染付	壺	—	—	—	—	外）白 断）白	外）草花文		肥前産
102	SK3上層	青磁染付	壺か	—	—	10.0	—	外）オリーブ灰5GY8/1 断）灰白N8/	外）窓に文字、窓外側に青磁釉	青磁釉はオリーブ灰色に発色。	肥前産
103	SK3下層	磁器染付	瓶	—	—	2.8	4.9	外）白 断）白	外）蓮弁文・窓に草花・青海波文	内面無釉。	肥前産
104	SK3下層	磁器染付	瓶	—	—	4.0	7.6	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）蘭	碁笥底。透明釉は灰白色を帯びる。畳付に灰白色の粗砂が付着。高台内に別個体の陶器片が溶着。	肥前産　有田 広瀬窯 1630～1650年代
105	SK3	磁器染付	不明	—	—	—	—	外）白 断）白	外）草花文	内面施釉。かえり無釉。	肥前産
106	SK3下層	青磁	不明	—	—	6.0	—	外）明緑灰10GY8/1 断）灰白N8/	青磁釉	内面と高台無釉。明緑灰色の釉。	肥前産
107	不明	釉裏紅	瓶	—	—	—	—	外）明緑灰10GY8/1 断）白	外）赤紫色の釉	外面に辰砂を部分的に施釉。内面無釉。	肥前産　有田 1630～1640年代

Tab.10　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
108	SK3 上層	磁器 薄瑠璃釉	不明	—	—	—	—	内）白 外）薄青 断）白	外）薄瑠璃釉 内）透明釉		肥前産　有田 17世紀後半
109	SK3 上層	磁器 色絵	人形又は水滴	—	—	—	—	外）白 断）白	外）上絵付（黒）	婦人。中空。型押成形前後貼り合わせ。内面ユビオサエ。	肥前産
110	SK3 下層	磁器 染付	人形又は水滴	—	—	—	—	外）白 断）白	不明	型作り貼り合わせ。内面ユビオサエ・ユビナデ。	肥前産
111	SK3 下層	白磁又は染付	瓶か	—	—	—	—	外）白 断）白		頸部に双耳を貼付。内面ロクロ目。内面無釉。透明釉は明緑灰色を帯びる。	肥前産
112	SK3 下層	陶器	中碗 丸形	10.0	7.7	4.4	—	外）にぶい黄褐 10YR4/3 断）橙5YR6/6	鉄釉	高台無釉。釉は焼成不良でにぶい黄褐色に発色。	肥前産 17世紀前半
113	SK3 下層	陶器	中碗 丸形	10.0	7.2	4.6	—	外）黒褐7.5YR3/2 断）灰黄褐10YR5/2	鉄釉	高台内兜巾状。高台無釉。黒褐色の釉。	肥前産 17世紀前半
114	SK3	陶器	中碗 丸形	11.8	6.9	4.8	—	外）浅黄5Y7/3 断）灰白5Y8/1	灰釉	高台内兜巾状。高台施釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	肥前産
115	SK3 下層	陶器	中碗 丸形	—	—	4.8	—	釉）暗オリーブ 5Y4/3 外）褐7.5YR4/3 断）にぶい黄橙 10YR7/3	灰釉	外面下位無釉。暗オリーブ色の釉。露胎部に鉄錆を施す。	肥前産 17世紀前半
116	SK3 下層	陶器	中碗	—	—	4.8	—	外）オリーブ黄 5Y6/4 断）にぶい黄橙 10YR7/4	鉄釉	高台無釉。釉は焼成不良でオリーブ黄色に発色。	肥前産 17世紀前半
117	SK3 下層	陶器	中碗	—	—	4.2	—	外）にぶい黄褐 10YR4/3 断）にぶい橙 7.5YR6/4	鉄釉	高台内兜巾状。高台無釉。釉は焼成不良でにぶい黄褐色に発色。	肥前産 17世紀前半
118	SK3 上層	陶器	中碗	—	—	4.0	—	外）黒 断）にぶい黄橙 10YR6/3	鉄釉	外面下位無釉。黒色の釉。	肥前産 17世紀前半
119	SK3 下層	陶器	中碗	—	—	4.8	—	外）灰白10Y7/1 断）にぶい黄橙 10YR7/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面下位無釉。灰白色の釉。	肥前産 17世紀前葉
120	SK3 下層	陶器	中碗 丸形	12.8	—	6.0	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y8/1	灰釉	外面ロクロ目。高台内兜巾状。高台施釉。灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。	肥前産 17世紀後半
121	SK3 下層	陶器	中碗 丸形	12.2	8.0	5.8	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）淡黄2.5Y7/4	灰釉・緑釉	外面上位に緑釉を横方向へ流し掛け。高台施釉。高台内凸状。	肥前産 17世紀後半
122	SK3	陶器	中碗	—	—	6.0	—	外）浅黄2.5Y7/3 断）灰白2.5Y8/2	外）錆絵 灰釉	京焼風陶器。高台無釉。浅黄色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
123	SK3	陶器	中碗 丸形	10.6	7.5	5.4	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	外面に緩やかなロクロ目。高台内兜巾状。高台施釉。淡黄色の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
124	SK3 下層	陶器	中碗 丸形	11.2	8.1	5.4	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	高台内兜巾状。高台施釉。灰白色の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
125	SK3 上層	陶器	中碗 丸形	10.6	7.2	4.4	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y8/1	灰釉	高台施釉。浅黄色を帯びる透明の釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
126	SK3 上層	陶器	中碗 丸形	11.6	6.7	5.8	—	外）にぶい黄 2.5Y6/3 断）灰黄2.5Y7/2	外）呉須による山水文 灰釉	京焼風陶器。高台内に円圏状の段。高台無釉。	肥前産 17世紀後半 高台内に小判枠内「宝」銘印。
127	SK3 下層	陶器	中碗	12.0	—	—	—	外）灰黄2.5Y6/2 断）灰白2.5Y8/2	外）呉須による山水文 灰釉	京焼風陶器。灰黄色を帯びる透明の釉で貫入が入る。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
128	SK3 下層	陶器	中碗 丸形	13.1	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y8/1	灰釉	外面多段のロクロ目。灰白色を帯びる半透明の釉。	
129	SK3 上層	陶器	小碗 半筒形	—	—	6.0	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	高台施釉。浅黄色を帯びる透明の釉。	
130	SK3 下層	陶器	小碗 端反形	8.6	—	—	—	外）暗褐10YR3/4・黒10YR2/1 断）白	鉄釉	暗褐色～黒色の釉。	
131	SK3 下層	陶器	中碗 天目形	—	—	—	—	外）黒2.5Y2/1 断）灰白2.5Y8/1	鉄釉	釉は黒色で厚く掛かる。	瀬戸・美濃産
132	SK3 下層	陶器	小皿 端反形	13.2	3.0	5.8	—	外）灰オリーブ 7.5Y6/2 断）灰白N8/	灰釉	内底に円圏状の段。内底に砂目。高台内兜巾状。高台無釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。	肥前　内野山窯 1610～1640年代

Tab.11　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
133	SK3 下層	陶器	五寸皿 端反形	15.0	4.0	5.0	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	内底に円圏状の段。内底に砂目。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。	肥前産　内野山 1610～1640年代
134	SK3 下層	陶器	小皿 丸形	12.6	3.1	4.4	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白N8/	灰釉	内底に砂目。外面下位無釉。畳付に砂目痕。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。	肥前産　内野山 1610～1640年代
135	SK3 下層	陶器	五寸皿 端反形	14.5	3.5	5.1	—	内釉）緑 外釉）灰白7.5Y7/2 断）灰白N8/	外）灰釉 内）緑釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部分に砂目。畳付に砂目痕。高台内兜巾状。高台施釉。	肥前産　内野山 17世紀後半
136	SK3 下層	陶器	小皿 丸形	13.7	3.1	4.8	—	外）灰オリーブ 7.5Y6/2 断）灰白N8/	内）鉄錆による圏線 灰釉	見込み蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部分に粗砂が輪状に付着。畳付に粗砂が付着。高台内兜巾状。外面下位無釉。	肥前産
137	SK3 下層	陶器	小皿	—	—	4.0	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白7.5Y7/1	灰釉	内底に円圏状の段。内底に砂目。高台内兜巾状。高台無釉。灰白色を帯びる透明の釉で貫入が入る。	肥前産　内野山 1610～1640年代
138	SK3 下層	陶器	小皿	—	—	4.6	—	外）にぶい黄褐 10YR5/3 断）にぶい黄橙 10YR7/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に目痕なし。畳付の3箇所に砂目痕。外面下半無釉。灰白色を帯びる透明の釉。	肥前産 1610～1630年代
139	SK3 下層	陶器	小皿	13.2	3.0	4.8	—	釉）暗オリーブ灰 2.5GY4/1 外）にぶい黄褐 10YR5/3 断）灰白N7/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に砂目。灰釉を部分的に施釉する。外面無釉。畳付に砂が付着。	肥前産 1610～1630年代
140	SK3 上層	陶器	小皿	—	—	3.7	—	外）灰7.5Y6/1 断）灰白5Y7/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に胎土目。外面下半無釉。	肥前産 1590～1610年代
141	SK3 上層	陶器	小皿	—	—	4.4	—	外）灰黄褐10YR5/2 断）灰黄褐10YR5/2	灰釉	外底回転糸切り。内底に砂目。内面の釉を円形に釉剥ぎ。外面無釉。灰釉は焼成不良で白濁。	肥前系 17世紀前半
142	SK3 下層	陶器	皿 菊花形	—	—	7.4	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	高台施釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	
143	SK3 上層	陶器	皿	—	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y8/1	内）錆絵 灰釉	灰釉は灰白色を帯び貫入が入る。	
144	SK3 上層・下層	陶器	大皿	—	—	10.0	—	外）灰黄2.5Y6/2 断）灰黄2.5Y6/2	内）錆絵、算木文 灰釉	絵唐津。内底と高台に団子状の胎土目痕。高台無釉。底部付近が焼け崩れて歪む。外面に別個体の口縁部片が溶着。	肥前産 1590～1610年代
145	SK3 下層	陶器	大皿 折縁形	36.0	—	12.0	—	外）灰白5Y8/1 断）灰黄褐 10YR6/2	外）透明釉 内）白化粧土・緑釉と鉄錆による文様・透明釉	外面下半無釉。内底に砂目。	肥前産
146	SK3	陶器	中皿	20.8	4.8	7.4	—	外）灰白5Y8/1 断）褐灰7.5YR4/1	外）灰釉、鉄錆 内）白化粧土刷毛目・緑釉と鉄錆の流し掛け・透明釉	刷毛目二彩手。内底に段。内底と畳付に白土目痕。外面上半に灰釉、下半に鉄錆	肥前産 1630～1650年代
147	SK3 下層	陶器	中皿 折縁形	27.6	—	—	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）灰白2.5Y8/1	灰釉	淡黄色を帯びる透明の釉。	肥前産
148	SK3 下層	陶器	皿 折縁形	30.0	—	—	—	外）褐灰7.5YR5/1 断）褐灰10YR4/1	外）灰釉 口縁内）白象嵌蓮弁文 内）白象嵌花唐草文・白化粧土刷毛目	三島手。口縁部内面に印刻による白象嵌の蓮弁文。体部内面にヘラ彫りによる白象嵌の花唐草文。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
149	SK3 上層	陶器	皿	—	—	—	—	内）灰白5Y8/2 外）灰黄褐10YR4/2 断）灰黄2.5YR4/2	外）透明釉 内）白象嵌による帯線と印花文・白化粧土刷毛目・透明釉	三島手。	肥前産
150	SK3 下層	陶器	大皿 又は鉢 端反形	33.0	—	—	—	外）暗灰黄色 2.5Y5/2 断）灰黄2.5Y6/2	灰釉	灰釉は灰白色を帯びる。	肥前産
151	SK3	陶器	鉢 折縁形	37.6	—	—	—	外）灰黄2.5Y6/2 断）黄灰2.5Y6/1	外）白化粧土刷毛目 内）白化粧土刷毛目・波状の櫛刷毛目・緑釉流し掛け	刷毛目二彩手。口縁に2条の凹線。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
152	SK3	陶器	小鉢 変形形	11.2	7.2	4.2	—	外）灰黄褐10YR5/2 断）にぶい橙5YR6/4	外）錆絵 内）錆絵 灰釉	絵唐津。口縁部を方形に変形させる。高台内兜巾状。高台無釉。	肥前産 1590～1610年代
153	SK3 下層	陶器	向付	—	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	外）錆絵 内）錆絵 灰釉・緑釉	型作り。内面布目。外底無釉。	美濃　織部焼 17世紀初頭
154	SK3 上層	陶器	皿又は鉢	—	—	—	—	外）灰黄2.5Y7/2 断）灰白2.5Y8/2	内）錆絵 灰釉	手捏ねによる三足を貼付。外底施釉。	瀬戸・美濃産か
155	SK3 上層	陶器	向付か	10.7	3.0	4.6	—	外）にぶい黄橙 10YR6/3 断）灰白2.5Y7/1	焼締め	内底に放射状の櫛目。外底ケズリ。	備前 17世紀末

Tab.12　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
156	SK3 下層	陶器	捏鉢	17.0	9.8	8.4	—	外）褐灰10YR4/1 断）にぶい赤褐 5YR5/4	鉄釉	口縁端部無釉。外面下半無釉。	
157	SK3 上層・下層	陶器	擂鉢	28.2	—	13.8	—	外）灰黄2.5YR6/2 断）黄灰2.5YR6/1	焼締め	内面回転ナデ後櫛目。外面ユビオサエ後ヨコナデ。口縁端部凹状。外底に凹凸。	丹波 17世紀前半
158	SK3 下層	陶器	擂鉢	31.4	—	—	—	外）暗褐10YR3/3 断）浅黄橙10YR8/3	鉄釉	内面に櫛目。暗褐色の釉を施釉。	瀬戸・美濃産
159	SK3 下層・SK6 上層	陶器	擂鉢	30.0	—	—	—	外）にぶい赤褐 2.5YR5/4 断）にぶい黄褐 5YR5/4	焼締め	内面櫛目。外面に強いロクロ目。口縁部外面に凹線。	備前 17世紀
160	SK3 上層	陶器	擂鉢	—	—	—	—	外）褐灰5YR4/1 断）灰赤 2.5YR4/2	焼締め	内面に不定方向の櫛目。口縁部外面に凹線。	備前 16世紀末～17世紀初頭
161	SK3 下層	陶器	擂鉢	28.8	13.0	12.0	—	外）暗赤褐 5YR3/3 断）褐灰10YR6/1	焼締め	内外面に強いロクロ目。内面に櫛目。外底に凹凸。	備前 内面は使用により摩耗する。
162	SK3	陶器	瓶	9.6	—	—	—	外）にぶい黄褐 10YR4/3 断）灰5Y6/1	灰釉	内面無釉。にぶい褐色の釉。	
163	SK3 下層	陶器	瓶	5.2	—	—	—	外）黒褐 7.5YR3/1 断）黄灰2.5Y6/1	鉄釉	頸部内面施釉。	
164	SK3 上層	陶器	不明 瓶類か	—	—	3.6	—	外）にぶい黄橙 10YR7/4 断）灰5Y6/1	不明	外底回転糸切り。内面と外面下位無釉。	
165	SK3 上層	陶器	瓶類又は火入れ	—	—	5.1	—	外）灰オリーブ 5Y5/2 断）灰白5Y7/1	外）錆絵 灰釉	絵唐津。碁笥底。内面ロクロ目。内面と底部無釉。内底に自然釉が掛る。	肥前産 1590～1610年代
166	SK3 上層	陶器	不明	—	—	10.0	—	外）灰5Y6/1 断）灰白5Y7/1	灰釉	内面ロクロ目。外底ケズリ。内面施釉。外底無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で1㎜前後の貫入が入る。	
167	SK3	陶器	壺又は甕	—	—	17.0	—	外）灰褐5YR4/2 断）にぶい赤褐 5YR5/4	焼締め	粘土紐積み上げ成形。内外面叩き後ヨコナデ。外底ナデ。	肥前産か
168	SK3 上層	陶器	瓶	—	—	11.4	—	外）にぶい赤褐 2.5YR4/4 断）灰7.5Y6/1	錆釉	内面に強いロクロ目。外面と外底に鉄錆を刷毛塗り。内面無釉。	備前 17世紀前半
169	SK3 上層・下層	陶器	甕	32.2	—	—	—	外）暗赤褐 5YR3/4 断）灰褐5YR4/2	焼締め	粘土紐積み上げ成形。肩部に2条の縄状突帯を貼付。口縁部回転ナデ。体部外面ナデ。内面に同心円状の当て具痕。	肥前産 17世紀前半 169･254同一個体。
170	SK3 下層	陶器	不明	—	—	—	—	外）浅黄7.5Y7/3 断）灰白5Y8/1	灰釉	オリーブ黄色を帯びる透明の釉。	瀬戸・美濃産か
171	SK3 上層	陶器	灯明受皿	11.4	1.8	6.0	—	内）灰黄褐10YR5/2 外）灰黄褐10YR6/2 断）褐灰10YR6/1	灰釉	外底回転ケズリ。内面片側のみ施釉。外面無釉。灰黄褐色の釉。内底に灰白色の砂目痕。	口縁部に灯芯油痕。
172	SK3 上層	陶器	灯明受皿	9.4	1.5	4.0	—	外）にぶい黄橙 10YR7/3 断）にぶい黄橙 10YR7/3	焼締め	口縁部内面に円形文を貼付。内外面回転ナデ。外底回転ケズリ。	口縁部内外面に煤。
173	SK3	陶器	火入れ又は香炉	—	—	—	—	外）灰オリーブ 5Y6/2 断）灰白5Y7/1	灰釉	内外面ロクロ目。内面無釉。灰オリーブ色の釉。	
174	SK3 上層	陶器	不明	—	—	7.8	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	灰釉	外面に丸彫りによる多条の沈線。内面施釉。高台内無釉。	尾戸窯
175	SK3 上層	陶器	不明	—	—	—	—	外）灰5Y6/1 断）灰白5Y7/1	灰釉	把手か。灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。	尾戸窯か
176	SK3	窯道具	ハマ	径 7.0	全厚 1.2	—	—	外）にぶい黄橙 10YR7/4 断）にぶい黄橙 10YR7/4		手捏ね成形。	尾戸窯
177	SK3 上層	窯道具	ハマ	径 21.1	全厚 1.6	—	—	外）にぶい黄橙 10YR6/4		たたら成形。上面ハケ・ユビオサエ。上面の周縁に自然釉が掛る。	尾戸窯
178	SK3	窯道具	匣鉢	14.6	8.5	15.6	—	外）灰褐 7.5YR4/2 断）にぶい黄橙 10YR7/2		内外面強いロクロ目。外底回転糸切り。外面に自然釉。	尾戸窯
179	SK3 下層	土師質土器	白土器小皿	12.2	2.3	6.0	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	無文	内外面ヨコナデ。外底直線方向のナデ。	尾戸窯内底と外底に煤。

Tab.13　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
180	SK3 下層	土師質土器	白土器小皿	12.6	2.6	6.0	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	無文	内面回転方向のナデ。外面不定方向のナデ。	尾戸窯 口縁部に灯芯油痕。
181	SK3 下層	土師質土器	白土器小皿	—	—	7.4	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1		外面ヨコナデ、内面ナデ。外底ケズリ後ナデ。	尾戸窯
182	SK3 上層	土師質土器	白土器小皿	—	2.3	—	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2		内面回転方向のナデ。外面ヨコナデ。外底ナデ。	尾戸窯
183	SK3	土師質土器	小皿	8.8	1.6	4.4	—	外）浅黄橙10YR8/4 断）浅黄橙10YR8/4		内底に強い渦状のロクロ目。内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
184	SK3	土師質土器	小皿	9.2	1.6	4.0	—	外）橙7.5YR7/6 断）橙7.5YR7/6		内底に強い渦状のロクロ目。内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
185	SK2	土師質土器	小皿	10.2	2.2	4.6	—	外）にぶい橙7.5YR7/4 断）にぶい橙7.5YR7/4		内底に渦状のロクロ目。内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油痕。
186	SK3 上層	土師質土器	小皿	9.0	1.5	6.6	—	外）橙7.5YR7/6 断）橙7.5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に煤。
187	SK3 下層	土師質土器	焼塩壺	6.0	—	—	—	外）橙7.5YR7/6 断）にぶい橙7.5YR7/4		外面ナデ。口縁部内面ヨコナデ、体部内面板ナデ。	
188	SK3 上層・下層	土師質土器	焙烙	33.4	—	—	—	外）にぶい橙7.5YR6/4 断）にぶい橙7.5YR6/4		双耳に穿孔あり。外面回転ナデ後櫛目。内面回転ナデ。外底に凹凸。	関西産 外底に煤、内底に焦げ。
189	SK3 上層	瓦質土器	火鉢箱形	—	—	—	—	外）灰黄2.5YR6/2 断）灰5Y4/1		たたら成形。内底接合部に強いユビナデ。	
197	SK4	磁器染付	中碗端反形	10.6	6.0	4.6	—	外）白 断）白	外）草花文・蝶・圏線 高台外）二重圏線 口縁内）多重圏線 見込み）草花文	透明釉は白濁する。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に方形枠内「茶」銘。
198	SK4	磁器染付	小碗筒丸形	8.6	6.9	4.8	—	外）白 断）白	外）文字「孔子□」	胎土は透明感をもつ。	関西系
199	SK4	磁器染付	七寸皿	—	—	—	—	外）白 断）白	外）七宝結び文 高台外）櫛歯文 内）柳・太古石		肥前産　鍋島焼 1780～1860年代
200	SK4	磁器染付	燗徳利	3.5	18.5	4.6	6.2	外）白 断）白	外）宝珠繋ぎ・帯線・波・龍・富士	内面施釉。胎土は透明感をもつ。	関西系
201	SK4	磁器染付	餌猪口	4.8	2.5	4.6	—	外）白 断）白	外）縞	呉須は青灰色。	肥前産
202	SK4	陶器	小皿	12.8	4.8	4.6	—	外）暗赤褐5YR3/2 断）褐灰10YR4/1	鉄釉	見込蛇の目釉剥ぎ後白化粧土刷毛塗り。高台無釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
203	SK4	土師質土器	焙烙	—	—	—	—	外）にぶい橙7.5YR5/4 断）にぶい橙7.5YR5/4		口縁部内外面回転ナデ。外底にチヂレ目。	関西系
204	SK4	土師質土器	焙烙	—	—	—	—	外）橙7.5YR7/6 断）橙7.5YR7/6		口縁部外面回転ナデ。内面回転ナデ。外底にチヂレ目。	在地系
205	SK4	土師質土器	竈か	—	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 断）浅黄橙10YR8/3		外面ロクロ目。内面布目。	
206	SK4	土師質土器	竈	35.0	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 断）にぶい黄橙10YR7/3	外）列点文	外面上位にヘラによる列点文。口縁部内面ユビオサエ。体部内外面ナデ。	
207	SK4	土師質土器	竈	—	—	35.0	—	外）にぶい黄橙10YR7/4 断）浅黄橙10YR8/3		体部前方下位に窓をもつ。粘土紐積み上げ成形。外面回転ナデ、内面布目。	
208	SK4	土師質土器	鳩笛	全長5.8	—	全幅3.4	—	外）にぶい黄橙10YR7/ 4		鳩。型押成形左右貼り合わせ。中空。体部上面と尾の先端に穿孔。	
210	SK5 下層	磁器染付	中碗丸形	9.8	5.3	4.4	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）丸に菊花・蘭 高台内）渦「福」		肥前産 18世紀
211	SK5 上層	白磁	小杯桶形	4.8	3.4	3.2	—	外）白 断）白		透明釉は貫入が入る。	肥前産
212	SK5 下層	磁器染付	手塩皿盤形	5.6	1.5	3.0	—	外）白 断）白	外）扇 内）竹・雀	透明釉は貫入が入る。	肥前産
213	SK5	磁器染付	小皿平形	12.8	3.7	4.6	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	内）格子文	見込み蛇の目釉剥ぎ。高台施釉。呉須は暗緑灰色に発色。釉剥ぎ部に灰白色の砂が付着。	肥前産　波佐見 18世紀
214	SK5 下層	磁器染付	小皿平形	12.0	3.5	4.4	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	内）略化した不明文様	見込み蛇の目釉剥ぎ。外面下半無釉。呉須は暗緑灰色に発色。釉剥ぎ部に灰白色の砂が付着。	肥前産　波佐見 18世紀

Tab.14　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
215	SK5 上層	磁器 染付	小皿 丸形	13.6	3.4	8.0	—	外）灰白2.5GY8/1 断）灰白N8/	外）連続唐草文・圏線 高台外）二重圏線 内）不明・五弁花文 高台内）不明・圏線	内面に墨弾きによる文様とコンニャク印判による五弁花文。	肥前産 18世紀
216	SK5 下層	磁器 染付	水滴 変形形	—	—	—	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	建物	家形。上面に円孔あり。型作り貼り合わせ。内面ユビオサエ・ユビナデ。	肥前産
217	SK5 下層	陶器	中碗 丸形	12.8	—	—	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白5Y8/1	外）鉄錆による文字 灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で1mm前後の貫入が入る。	尾戸窯
218	SK5	陶器	碗	—	—	—	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白7.5Y7/1	灰釉	明オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	尾戸窯
219	SK5 下層	陶器	中碗 丸形	—	—	5.2	—	外）黄褐2.5Y5/3 断）灰黄2.5Y7/2	灰釉	体部外面に鉋痕が残る。高台施釉。灰釉は灰黄色を帯びる。	肥前産又は肥前系 18世紀
220	SK5	陶器	中碗 腰折形	10.8	4.8	3.8	—	外）明オリーブ 灰2.5GY7/1 断）灰白N8/	外）鉄錆と白土による花・垣 灰釉	せんじ碗。高台無釉。灰釉は明オリーブ灰色を帯び1mm前後の貫入が入る。内底に目跡3足。	京都・信楽系 18世紀中葉～後葉
221	SK5 上層	陶器	中碗 丸形	11.6	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で粗い貫入が入る。御本が入る。	
222	SK5	陶器	碗	—	—	4.2	—	外）灰白10Y7/1 断）灰白7.5Y7/	灰釉	高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。	京都系
223	SK5 上層	陶器	甕	31.0	—	—	—	外）黒褐10YR3/2 断）灰褐5YR4/2	外）白化粧土刷毛目	外面に白化粧土刷毛塗りの後上位に波状の刷毛目。内面施釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
224	SK5 上層	陶器	火入れ 又は 香炉	10.0	—	—	—	外）暗褐10YR3/4 断）灰白10YR7/1	外）丸彫りによる鎬鉄釉	内面ロクロ目。内面無釉。	尾戸窯か
225	SK5	陶器	壺 胴丸形	7.8	16.5	9.2	13.2	外）黄褐2.5Y5/4 断）灰白2.5Y8/2	灰釉	双耳を貼付。外底回転ケズリ。内面施釉。黄褐色の半透明の釉。	瀬戸・美濃産
226	SK5 下層	陶器	鬢水 入れ	残存長 11.8	3.1	全幅 3.5	—	外）灰白10Y8/1 断）灰白7.5Y8/1	外）錆絵 内）灰釉	楕円形。たたら成形。外底ナデ。内面施釉。外底無釉。灰釉は灰白色を帯びる透明の釉。	瀬戸・美濃産
227	SK5 下層	陶器	火入れ 又は 香炉	10.0	6.6	4.8	—	外）黒褐2.5Y3/2 断）黄灰2.5Y4/1	外）白化粧土打刷毛目 透明釉	外面の双方に打刷毛目を輪状に施す。内面無釉。高台施釉。	肥前産 17世紀後半～18世紀前半
228	SK5 上層・ 下層	陶器	灯明 受皿	9.9	1.8	3.5	受部径 6.4	外）暗赤褐5YR3/3 断）灰N6/	錆釉	油溝は半月状で3箇所。前面施釉。	口縁部に灯芯油痕。
229	SK5 下層	陶器	灯明 受皿	10.4	1.9	6.0	—	外）暗赤褐5YR3/3 断）暗赤褐5YR3/3	錆釉	口縁部内外面回転ナデ。内底不定方向のナデ。外底回転ケズリ。外面下半無釉。	口縁部に灯芯油痕。
230	SK3 下層	陶器	灯明 受皿	9.0	1.4	4.4	—	外）褐7.5YR4/3 断）褐7.5YR4/3	錆釉	口縁部内外面回転ナデ。内底ナデ。外底回転ケズリ。外面下半無釉。	口縁部に灯芯油痕。
231	SK5 上層	陶器	灯明 受皿	10.0	1.2	4.2	—	外）にぶい赤褐 2.5YR5/3 断）にぶい赤褐 2.5YR5/3	錆釉	口縁部内外面回転ナデ。内底ナデ。外底回転ケズリ。外面下半無釉。	口縁部に灯芯油痕。
232	SK5 上層	土師質 土器	白土器 小皿	11.4	1.7	6.4	—	外）灰白10YR8/1 断）灰白10YR8/1	内）陽刻による松竹梅鶴亀文	内面型押しによる陽刻文。外面ケズリ後ヨコナデ、内面ナデ。外底ケズリ後ナデ。	尾戸窯
233	SK5	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	7.6	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	内）陽刻による高砂文	内面型押しによる陽刻文。内面回転方向のナデ。外面ヨコナデ。外底ナデ。	尾戸窯外面に煤。
234	SK5 下層	土師質 土器	小皿	7.7	1.0	4.7	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2		内外面回転ナデ。内底に強いロクロ目。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油痕。
235	SK5 下層	土師質 土器	小皿	8.3	1.4	5.8	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2		内外面回転ナデ。内面ロクロ目。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油痕。
236	SK5 下層	施釉 土器	ひょう そく	3.6	1.5	2.2	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2 内）明黄褐2.5Y7/6	浅黄色の低火度釉	型押成形。外面チヂレ目、内面ナデ。内面施釉。外面無釉。	
237	SK5 下層	瓦質 土器	焜炉か	—	—	12.5	—	外）黒 断）灰白2.5Y7/1	外）印花文	外面ナデ・ミガキ。内面ヨコナデ。外底に三足を貼付。	
238	SK5 下層	土師質 土器	焙烙	—	—	—	—	外）にぶい橙 7.5YR6/4 断）にぶい橙 7.5YR6/4		口縁部外面ヨコナデ。外底ユビオサエ・イタナデ。内面ヨコナデ。	讃岐　岡本系 内底に焦げ、外面に煤。
239	SK6 上層	磁器 染付	中碗 半筒形	8.7	8.1	5.3	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）蓮弁文・渦・圏線	透明釉は明緑灰色を帯びる。畳付に灰白色の粗砂が付着。	肥前産 1610～1630年代
240	SK6 下層	白磁	中碗	—	—	5.2	—	外）白 断）白	外）蓮弁文	外面に細線のヘラ彫りによる陰刻文様。	肥前産
241	SK6 上層	白磁	小杯 端反形	5.4	3.3	2.6	—	外）灰白5GY8/1 断）白		外面ロクロ目。高台無釉。	肥前産 1630～1650年代

Tab.15　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
242	SK6	白磁	小杯 端反形	6.9	4.7	3.0	—	外）白 断）白		高台外に粗い鉋痕。高台内兜巾状。高台無釉。	肥前産 1630～1650年代
243	SK3上層・SK6下層	白磁	鉢 菊花形	22.0	—	—	—	外）灰白5GY8/1 断）白	内）菊弁文	口縁部輪花形。内面にヘラ描きによる菊弁文。外面に緩やかなロクロ目。	肥前産
244	SK6上層	磁器染付	小皿 丸形	8.4	2.0	3.6	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）灰白N8/1	内）梅花か	透明釉は明緑灰色を帯びる。外面に鉋痕が残る。	肥前産
245	SK6下層	磁器染付	蓋物	8.0	—	—	—	外）白 断）白	外）植物・蓮弁文・圏線	口縁端部～口縁部内面無釉。	肥前産
246	SK6下層	磁器染付	蓋物蓋	笠部径13.9	—	かえり径12.3	—	外）白 断）白	外）草花文・圏線	内面施釉。かえり無釉。	肥前産
247	SK6上層	磁器染付	蓋物蓋	笠部径10.5	—	かえり径8.8	—	外）白 断）白	外）植物・岩	内面とかえり無釉。	肥前産
248	SK6下層	磁器染付	蓋物蓋	笠部径11.5	—	かえり径9.8	—	外）白 断）白	外）唐草文	かえり無釉。	肥前産
249	SK6上層	磁器染付	瓶	—	—	—	—	外）白 断）白	外）梅	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前産
250	SK6	磁器染付	瓶	—	—	—	—	外）白 断）白	外）松	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前産
251	SK6上層	磁器染付	瓶	—	—	5.6	9.7	外）白 断）白	外）圏線 内）圏線	内面無釉。	肥前産
252	SK6上層	陶器	水鉢	29.0	7.8	17.0	—	外）浅黄5Y7/3 断）灰白5Y8/1	内）波状文 見込み）印花文・3条沈線 灰釉	内面櫛描きによる波状文。見込みに印花文。高台施釉。	瀬戸・美濃産
253	SK6上層	陶器	片口	22.0	12.3	10.4	—	外）明赤褐5YR5/6 断）暗赤褐5YR3/2	鉄釉	片口を貼付。内外面ロクロ目。外面下半無釉。暗赤褐色の釉。	
254	SK6	陶器	甕又は壺	—	—	20.4	—	外）暗赤褐5YR3/2 断）灰褐5YR4/2	焼締め	粘土紐積み上げ成形。外面ナデ、格子状の叩き目。内面ヨコナデ、部分的に同心円状の当て具痕が残る。	肥前産 17世紀前半 169･254同一個体。
255	SK6上層	土師質土器	小皿	9.0	1.8	4.4	—	外）橙7.5YR7/6 断）橙7.5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に渦状の強いロクロ目。	
256	SK7上層	磁器染付	中碗 丸形	10.2	5.6	4.4	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）四方襷・桜	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に「能茶山製」銘。
257	SK7上層	磁器染付	中碗	—	—	4.0	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	外）花卉か 高台外）二重圏線 見込み）宝文・圏線	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に角枠内「茶」銘。
258	SK7下層	磁器染付	中碗 広東形	10.8	6.1	5.4	—	外）灰白N8/ 断）白	外）紅葉 見込み）岩波・圏線 口縁内）二重圏線		肥前系 1780年代～幕末
259	SK7上層	磁器色絵	小碗 端反形	8.0	—	—	—	外）白 断）白	外）上絵付（黒・赤・その他は剥離）による鼠	文様の輪郭は黒で描く。胎土は透明感をもつ。	関西系
260	SK7上層	磁器染付	碗蓋	笠部径9.8	2.3	—	摘み径3.8	外）白 断）白	外）雲・動物 摘み外）二重圏線 摘み内）銘		摘み内に「□□山□年製」銘。
261	SK7	磁器染付	碗蓋	笠部径9.6	2.8	—	摘み径5.4	外）白 断）白	外）花 摘み外）二重圏線 内）昆虫文・圏線・二重圏線	透明釉は貫入が入る。	肥前産 1780年代～幕末
262	SK7上層	色絵染付	碗又は鉢	—	—	—	—	外）白 断）白	外）呉須による圏線・上絵付（赤・緑・金）による文様・赤による地埋め 口縁内）呉須による四方襷		肥前産
263	SK7下層	白磁又は染付	人形又は水滴	—	—	—	—	外）白 断）白	人物	中空。型作り貼り合わせ。内面ユビオサエ・ナデ。	肥前産
264	SK7	磁器染付	蓋物 半筒形	13.2	5.9	9.2	—	外）白 断）白	外）窓に草花	内面施釉。口縁部端部無釉。	肥前産
265	SK7床	磁器染付	髪油壺	2.6	—	—	—	外）灰白2.5GY8/1 断）灰白N8/	外）草花文	呉須は青緑灰色。	肥前産
266	SK7下層	磁器色絵	髪油壺	2.2	—	—	—	外）明緑灰7.5GY8/1 赤10R4/6 断）白	外）上絵付(赤・剥離）による花卉・赤による更紗文と地埋め	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前産

Tab.16　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
267	SK7 最下層	磁器 染付	瓶	2.8	—	—	—	外）灰 白2.5GY8/1 断）白	外）不明	頸部内面施釉。	肥前産
268	SK7 最下層	陶器	中皿	21.0	4.4	7.6	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y8/1	灰釉	口縁部波縁状。内面に段。高台内施釉。高台無釉。灰釉は浅黄色を帯び貫入が入る。内底の３箇所に目痕。	瀬戸・美濃産
269	SK7 最下層	陶器	蓋物 蓋	笠部径 8.8	1.3	かえり径 7.2	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y8/1	灰釉	内面とかえり無釉。オリーブ灰色を帯びる透明の釉。	関西系
270	SK7 中層	陶器	蓋物 蓋	笠部径 12.6	1.1	かえり径 8.6	—	外）黄2.5Y7/8 断）灰白2.5Y8/1	黄色の釉	内外面施釉。かえり端部無釉。光沢の強い黄色の釉。	珉平焼
271	SK7 上層	陶器	土瓶又は急須の蓋	笠部径 8.0	1.5	—	摘み径 1.2	外）灰白2.5Y8/2 断）灰2.5Y5/1	灰釉	円孔あり。外底回転糸切り。白化粧土の後灰釉施釉。下面無釉。	尾戸窯か
272	SK7 下層	陶器	不明	—	—	8.0	—	外）暗灰黄2.5Y4/2 断）黄灰2.5Y5/1	灰釉	内底に強いロクロ目。外底に渦状の鉋痕。外底無釉。暗灰黄色の釉。	安東焼　19世紀か 外底に小判枠内「安東」銘印。
273	SK7 最下層	陶器	火入れ	11.5	—	—	—	外）灰白5Y8/2・緑 断）黄灰2.5Y6/1	外）呉須による山水文 白化粧土・灰釉・緑釉	白化粧土施釉の後灰釉。口縁部から緑釉流し掛け。内面無釉。	尾戸窯又は能茶山窯か
274	SK7 下層	土師質 土器	白土器 小皿	11.8	2.1	8.8	—	外）灰白10YR8/1 断）灰白10YR8/1	内）陽刻による高砂文	内底に型による陽刻文様。内面周縁回転ナデ。外面ヨコナデ。外底直線方向のナデ。	尾戸窯
275	SK7	土師質 土器	白土器 小皿	11.0	1.8	7.3	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	内）陽刻文様	文様不明。内面周縁と口縁部外面回転ナデ。外面下位ケズリ後ヨコナデ。外底直線方向のナデ。	尾戸窯
276	SK7 上層	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	8.0	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	内）陽刻による高砂文	内底に型による陽刻文様。内面周縁回転方向のナデ。外面ヨコナデ。外底直線方向のナデ。	尾戸窯
277	SK7 下層	土師質 土器	白土器 小皿	—	—	—	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	内）陽刻による高砂文	外底直線方向のナデ。	尾戸窯
278	SK7 最下層	土師質 土器	白土器 小皿	12.0	2.0	8.2	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1		文様の有無は不明。内面周縁と口縁部外面回転ナデ。外面下位ケズリ後ヨコナデ。	尾戸窯
279	SK7 中層	土師質 土器	白土器 小皿	10.8	2.1	7.6	—	外）灰白10YR8/2 断）灰白10YR8/2	内）陽刻による寿字文	内底に型による陽刻文様。内面周縁回転方向のナデ。外面ケズリ後ヨコナデ。外底直線方向のナデ。	尾戸窯
280	SK7 最下層	土師質 土器	小皿	11.3	2.2	7.5	—	外）にぶい黄橙 10YR7/4 断）にぶい黄橙 10YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底中央に渦状のロクロ目。	
281	SK7 中層	土師質 土器	焙烙	—	—	—	—	外）橙7.5YR7/6 断）橙7.5YR7/6		口縁部外面回転ナデ。外底にチヂレ目。内面回転ナデ。	関西系 外底に煤。
282	SK7	土師質 土器	焙烙	—	—	—	—	外）橙7.5YR7/6 断）橙7.5YR7/6		口縁部外面回転ナデ。外底にチヂレ目。内面回転ナデ。	在地系 外面に煤。
283	SK7 下層	土師質 土器	火鉢	25.0	—	—	—	外）にぶい橙 7.5YR6/4 断）浅黄2.5Y7/3		粘土紐積み上げ成形。外面上位にミガキ・ヘラ彫りによる沈線、下位に格子状の圧痕。内面回転ナデ、一部に粘土紐接合痕が残る。	
284	SK7 中層	瓦質 土器	火鉢	—	—	—	—	外）灰黄2.5Y6/1 断）灰黄2.5Y6/1	外）印花文	外面に印花文。内面に強いロクロ目。	内面に煤。
285	SK7 中層	土師質 土器	焜炉 丸形	20.4	—	—	—	外）にぶい黄橙 10YR7/4 断）にぶい黄橙 10YR7/4		突起の形状は不明。体部に円孔あり。外面ナデ・ミガキ。	内面から口縁部に煤。
286	SK7 床	土師質 土器	焜炉	—	—	—	—	外）にぶい橙 7.5YR6/4 断）にぶい橙 7.5YR6/4		内面に手捏ねによる突起を貼付。外面ナデ。内面回転ナデ。	
287	SK7 中層	土師質 土器	焜炉	—	—	—	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1		内部施設部分。その他は欠損。前方にアーチ状の窓。中位の三方に円孔3穴。内外面ロクロ目とユビ後が残る。	京都系
288	SK7 下層	土師質 土器	焜炉 箱形	—	—	—	—	外）灰黄2.5Y6/2 断）灰黄2.5Y7/2		たたら成形。脚は削り出しによる。外面ナデ。内面ナデ、接合部に強いユビナデ。	内面に煤。
289	SK7 最下層	土師質 土器	焜炉 箱形	—	—	—	—	外）明赤褐2.5YR5/6 断）橙5YR6/6	赤彩	前方に四角形の窓をもつ。底部脇と体部隅に面取りあり。脚は削り出しによる。内面ハケ、接合部にユビナデ。外面ナデ・赤彩。外底イタナデ。	
290	SK7 上層	施釉 土器	ミニチュア	—	—	—	—	外）橙5YR6/8 断）橙5YR6/6	家形 外）橙色の低火度釉	型押成形。	

Tab.17　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
291	SK7 上層	土師質土器	ミニチュア	0.7	4.0	1.2	2.4	外）橙2.5YR6/6 断）橙2.5YR6/6	壺形	型押成形貼り合わせ。外面に印刻による銘。「養寿軒製」か。	
297	SK8	磁器染付	小碗丸形	8.2	5.1	3.4	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）土坡・草・圏線	露胎部は橙色に発色。畳付に灰白色の砂が付着。	肥前産
298	SK8 上層	磁器染付	小碗丸形	8.0	—	—	—	外）白 断）白	外）五弁花文	コンニャク印判による五弁花文。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
299	SK8 上層	磁器染付	小碗丸形	—	—	—	—	外）白 断）白	外）五弁花文 高台外）二重圏線	コンニャク印判による五弁花文。	肥前産 17世紀末～18世紀前半
300	SK8 下層	青磁	皿又は鉢	15.4	—	—	—	外）明緑灰7.5GY7/1 断）灰白N8/	青磁釉	口縁部折縁形。	肥前産 二次被熱により釉は変質。
301	SK8 床	青花	皿	—	—	—	—	外）白 断）白	内）不明		中国　景徳鎮窯系
302	SK8 上層	陶器	中碗筒丸形	9.0	—	—	—	外）灰白10YR8/1 断）にぶい黄橙10YR7/4	灰釉	内外面に多段の強いロクロ目。焼成不良で釉は白濁する。	尾戸窯
303	SK8 上層	陶器	中碗	11.0	—	—	—	外）灰白7.5Y7/1 断）灰白5Y7/1	灰釉	内外面ロクロ目。灰白色を帯びる透明の釉で貫入が入る。御本が入る。	尾戸窯
304	SK8 上層	陶器	中碗丸形	10.0	—	—	—	外）灰白10YR8/1 断）黄灰2.5Y6/1	灰釉	外面に強いロクロ目。焼成不良で釉は白濁する。	尾戸窯
305	SK8	陶器	中碗丸形	10.0	—	—	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）黄灰2.5Y6/1～にぶい黄橙10YR7/3	灰釉	外面にごく緩やかなロクロ目。	尾戸窯か
306	SK8 下層	陶器	中碗	—	—	5.4	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）にぶい黄橙10YR7/3	灰釉	高台施釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉で貫入が入る。目跡なし。	尾戸窯か
307	SK8 下層	陶器	小皿	—	—	2.0	—	外）灰白7.5Y7/1 断）にぶい橙7.5YR6/4	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面ロクロ目。外面下半無釉。灰釉は灰白色に発色。内底に砂目。	肥前産 1610～1630年代
308	SK8	陶器	皿	—	—	—	—	外）灰黄褐10YR4/2 断）褐灰7.5YR5/1	内）白化粧土櫛刷毛目・銅緑釉	刷毛目二彩手。	肥前産
309	SK8 下層	陶器	火入れ又は香炉	11.4	—	—	—	外）黄灰2.5Y5/1 断）黄灰2.5Y5/1	灰釉	体部を部分的に窪ませる。内面に多段のロクロ目。灰釉は焼成不良。	
310	SK8	陶器	擂鉢	24.0	8.7	8.2	—	外）灰赤2.5YR4/2 断）灰赤2.5YR5/2	焼締め	口縁部外面に凹線。内面と内底に櫛目。外面上半回転ナデ。外面下半と外底回転ケズリ。内外面に火襷。	備前
311	SK8 下層	陶器	壺	—	—	—	最大径15.8	外）オリーブ褐2.5Y4/4 断）灰白2.5Y8/2	褐釉	双耳を貼付。内面ロクロ目。内面無釉。オリーブ褐色の釉。	
312	SK8 上層・下層	土師質土器	小皿	8.5	1.4	4.0	—	外）橙5YR7/8 断）橙5YR7/8		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
313	SK8 上層	土師質土器	小皿	8.4	1.4	4.0	—	外）橙5YR7/8 断）橙5YR7/8		内外面回転ナデ。内底にロクロ目。外底回転糸切り。	
314	SK9	青磁	大皿	—	—	16.0	—	外）オリーブ灰10Y6/2 断）白	内）片切彫りによる植物文・算木文	蛇の目凹形高台。高台内周縁に鉄錆。	肥前産 17世紀後半
315	SK9	陶器	皿	26.8	—	—	—	外）灰白5Y 7/1 断）灰白5Y 7/1	灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。	尾戸窯か
316	SK9	磁器染付	蓋物蓋	笠部径10.0	—	かえり径7.8	—	外）白 断）白	外）花文・二重圏線	内面施釉。かえり無釉。	肥前産
317	SK9	陶器	擂鉢	34.0	—	—	—	外）にぶい赤褐2.5YR4/3 断）にぶい赤褐2.5YR4/3	焼締め	口縁部外面に凹線。体部外面に強いロクロ目。内面櫛目。	備前
318	SK9	磁器色絵	水滴又は人形	—	—	—	—	外）白 断）白	動物 外）上絵付（赤）	中空。型押成形貼り合わせ。内面ユビオサエ・ナデ。	肥前産
319	SK10 上層	磁器色絵染付	猪口桶形	9.8	7.4	6.6	—	外）白 断）白	外）山水文・蓮弁文 口縁内）四方襷 見込み）二重圏線	外面に呉須と上絵付（赤・緑・黒）による文様。	肥前産
320	SK10	磁器染付	中碗	—	—	—	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	外）寿字、他	外面に縦方向の面取り。	肥前産 1610～1630年代

Tab.18　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
321	SK10 床	陶器	中碗 丸形	12.0	—	—	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y7/1	外）錆絵 灰釉	外面にコテ痕。灰白色を帯びる透明の釉で粗い貫入が入る。	尾戸窯
322	SK11	磁器 染付	小皿	13.4	3.0	6.0	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	内）草花文、他	口縁部輪花形。口錆。	肥前産 1640～1650年代
323	SK11	磁器 染付	小皿	—	—	6.0	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	内）草花・鹿	畳付に白色の粗砂が少量付着。	肥前産 1640～1650年代
324	SK11	青磁	中碗	—	—	4.4	—	外）明オリーブ灰5GY7/1 断）白	青磁釉	外面に緩やかなロクロ目。高台施釉。畳付に灰白色の粗砂が少量付着。	肥前産
325	SK11	陶器	中碗 丸形	11.4	6.6	4.6	—	外）灰白5Y7/2 断）灰白5Y7/1	灰釉	高台内を鋭角的に削り出す。高台内に渦状の鉋痕を装飾的に加える。高台無釉。灰白色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。	尾戸窯
326	SK11	陶器	中碗	11.0	—	—	—	外）褐7.5YR4/3 断）褐灰10YR5/1	鉄釉	褐色の釉。	
327	SK11	陶器	中碗	—	—	4.4	—	外）黒褐10YR3/2 断）にぶい黄橙10YR7/3	鉄釉	高台内兜巾状。外面下位無釉。釉は焼成不良気味で部分的に白濁。	肥前産 17世紀前半
328	SK11	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白5Y8/1	灰釉	高台施釉。灰白色を帯びる透明の釉。	肥前産 17世紀
329	SK11	陶器	小皿 端反形	15.6	—	—	—	内）淡い緑色 外）灰白7.5Y7/2 断）灰白7.5Y8/1	外）灰釉 内）緑釉		肥前産　内野山 17世紀後半～18世紀前半
330	SK11 上層	陶器	大皿 又は鉢	—	—	13.0	—	外）灰褐5YR4/2 断）にぶい橙7.5YR6/4	外）錆釉 内）錆釉・白化粧土刷毛目	外面下位に鉄錆を刷毛塗り。内面錆釉と白化粧土刷毛塗り。見込みに円形の砂目。畳付に胎土目の剥離痕。	肥前産
331	SK11	陶器	瓶 船徳利	—	—	16.4	—	外）暗赤褐2.5YR3/4 断）橙2.5YR6/6	鉄釉	体部内面ロクロ目。内底にユビオサエ。外底施釉。鉄釉を刷毛塗り。	備前 17世紀前半 外底に丸内「十」刻印。
332	SK11	土師質土器	小皿	10.4	—	—	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1		白色系小皿。内外面ナデ。	尾戸窯
333	SK11	土師質土器	人形	—	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 断）にぶい黄橙10YR7/3	西行	型押成形前後貼り合わせ。中実。底部に径2mmの穿孔。外面にキラ粉。	
334	SK12 下層	磁器 染付	中碗 端反形	10.2	5.2	3.6	—	外）白 断）白	外）不明・圏線 口縁内）帯線・圏線 見込み）水に岩		瀬戸・美濃産 1800年代～幕末
335	SK12 下層	磁器 染付	中碗 平形	14.2	5.3	5.2	—	外）白 断）白	内）鳥・葦		能茶山窯 1820年代～幕末 高台内に角枠内「茶」銘。
336	SK12 上層・下層	陶器	小皿 端反形	9.4	2.5	4.0	—	外）灰白2.5Y7/1 断）灰白2.5Y7/1	内）呉須による葦・雁 灰釉	灰白色を帯びる半透明の釉で細かい貫入が入る。内底に黒褐色の目痕4足。	尾戸窯か
337	SK12 下層	陶器	中碗 丸形	11.8	—	—	—	外）灰オリーブ7.5Y6/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	灰オリーブ色を帯びる半透明の釉で貫入が入る。	尾戸窯か
338	SK12 下層	陶器	行平	9.9	4.9	4.6	—	外）にぶい赤褐5YR4/3 断）にぶい橙7.5YR7/4	外）飛鉋・鉄釉 内）鉄釉	把手は欠損。外面上半に飛鉋。外面下位無釉。	能茶山窯 1820年代～幕末
339	SK12 下層	陶器	神酒徳利 円筒形	—	—	4.6	5.5	外）灰白5Y7/1 断）灰白5Y7/1	外）鉄錆による文字「八幡宮」 灰釉	外面緩やかなロクロ目。	尾戸窯
340	SK12 下層	陶器	土瓶	5.5	—	—	11.4	外）オリーブ灰10Y5/2 断）灰白N8/	外）緑釉 内）灰釉	内面ロクロ目。内面施釉。口縁内と端部無釉。	
341	SK12 下層・SK7 中層	陶器	手水鉢 又は 植木鉢	30.4	20.0	18.6	—	外）褐灰7.5YR5/1 断）褐灰7.5YR5/1	外）白化粧土刷毛目・打刷毛目	内面無釉。平底。底部脇にアーチ状の抉り。内面ロクロ目。	肥前産
342	SK12 下層	土師質土器	人形	—	—	—	—	外）にぶい橙7.5YR7/4 断）にぶい橙7.5YR7/4	不明	型押成形貼り合わせ。中空。内面ユビオサエ。内外面にキラ粉。	
343	SK12 下層	土師質土器	型	全長3.3	全厚1.5	全幅3.8	—	外）にぶい橙7.5YR7/4 断）にぶい橙7.5YR7/4	兎	兎の毛並みなど、細部に細いヘラ彫りを施す。	

Tab.19　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
344	SK12下層	土師質土器	泥面子	径2.6	全厚0.6	—	—	外）にぶい黄橙10YR7/3 断）にぶい黄橙10YR7/3	型による花文	型押成形。	
351	SK13	陶器	壺又は甕	—	—	9.0	—	外）灰褐7.5YR4/2 断）にぶい黄橙10YR7/3 釉）黒褐10YR2/2	褐釉	粘土紐積み上げ成形。内面に同心円状の当て具痕。内面と外面下位無釉。黒褐色の釉。	肥前産 16世紀末～17世紀前半
352	SK171層	青花	碗	10.8	—	—	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	外）不明・二重圏線 口縁内）二重圏線	古染付。呉須は淡青色。	中国　景徳鎮窯系 17世紀前葉～中葉
353	SK17	青花	碗	11.6	—	—	—	外）灰白10Y7/1 断）灰白10Y8/1・明褐灰7.5YR7/1	外）不明 内）圏線	呉須は暗緑灰色。乳濁した釉の上に透明釉を施釉。	中国　漳州窯系 16世紀末～17世紀初頭
354	SK17	青花	小皿	—	—	8.0	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）灰白N8/	外）花唐草文 高台外）二重圏線 内）花唐草文	高台内に放射状の鉋痕。	中国　景徳鎮窯系 16世紀後半
355	SK171層	青花	小皿	12.8	—	—	—	外）明オリーブ灰2・5GY7/1 断）灰白N8/	外）圏線 内）圏線 口縁内）圏線	呉須は暗緑灰色。透明釉は灰白色を帯びる。	中国　漳州窯系 16世紀末～17世紀初頭
356	SK17床	白磁	中碗	11.4	—	—	—	外）灰白N8/ 断）白	白磁釉		産不明
357	SK171層	陶器	中碗	11.4	—	—	—	外）にぶい黄橙10YR7/4 断）にぶい黄橙10YR7/3	外）錆絵 灰釉	絵唐津。透明の釉。	肥前産 1590～1610年代
358	SK171層	陶器	中碗	10.2	—	—	—	外）灰黄2.5Y6/2 断）灰白2.5Y7/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。灰白色を帯びる半透明の釉。	肥前産 16世紀末～17世紀前葉
359	SK171層	陶器	中碗丸形	9.8	—	—	—	外）灰オリーブ5Y5/3 断）灰5Y6/1	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面下位無釉。灰オリーブ色の釉。	肥前産 16世紀末～17世紀前葉
360	SK171層	陶器	中碗	11.0	—	—	—	外）灰オリーブ7.5Y6/2 断）灰黄2.5Y7/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面に緩やかなロクロ目。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	肥前産 16世紀末～17世紀前葉
361	SK171層	陶器	中碗	—	—	4.6	—	外）灰オリーブ7.5Y6/2 断）灰黄2.5Y7/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。外面に緩やかなロクロ目。外面下位無釉。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。	肥前産 16世紀末～17世紀前葉
362	SK171層	軟質施釉陶器	中碗	8.3	—	—	—	外）浅黄5Y7/3 断）灰白2.5Y7/1	外）浅黄色の釉 内）黒色の釉	軟質施釉陶器。外面上半に浅黄色の釉、下半に鉄錆。胎土は軟質で粗い。	京都 17世紀前半
363	SK171層	軟質施釉陶器	中碗	10.0	—	—	—	外）黒褐7.5YR2/2 断）にぶい橙7.5YR7/4	黒褐色の釉	軟質施釉陶器。内外面に黒褐色の釉。胎土は軟質で粗い。	京都 17世紀前半
364	SK17	軟質施釉陶器	碗	—	—	5.6	—	外）黒褐2.5Y3/2 断）にぶい橙7.5YR6/4	黒褐色の釉	軟質施釉陶器。高台施釉。黒褐色の釉。胎土は軟質で粗い。	京都 17世紀前半
365	SK17	軟質施釉陶器	碗	—	—	4.2	—	外）灰白5Y8/2 内）黒10YR2/1 断）にぶい橙7.5YR6/4	高台外）白土と透明釉 高台内）透明釉 内）黒色の釉	軟質施釉陶器。胎土は軟質で粗い。	京都 17世紀前半
366	SK171層	陶器	小皿	12.0	3.5	5.0	—	外）オリーブ黄5Y6/3 断）浅黄2.5Y7/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に段。外面下位無釉。オリーブ黄色の釉。内底に砂目痕。	肥前産 1610～1630年代
367	SK171層	陶器	小皿	11.8	3.0	4.6	—	外）灰7.5Y6/1 断）明褐7.5YR5/6	灰釉	唐津系灰釉陶器。灰釉は焼成不良気味で白濁。目痕なし。	肥前産 16世紀末～17世紀前葉
368	SK171層	陶器	小皿	15.0	—	—	—	外）灰オリーブ5Y5/3 断）灰黄褐10YR5/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。灰オリーブ色の釉。目痕の有無は不明。	肥前産 16世紀末～17世紀前葉
369	SK17床	陶器	小皿	9.9	—	—	—	外）灰オリーブ5Y5/3 断）灰黄褐10YR6/2	灰釉	唐津系灰釉陶器。灰オリーブ色を帯びる透明の釉。目痕の有無は不明。	肥前産 16世紀末～17世紀前葉
370	SK171層	陶器	皿又は鉢端反形	—	—	—	—	外）褐灰10YR5/1 断）にぶい褐7.5YR5/3	内）錆絵 灰釉	絵唐津。灰白色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1590～1610年代
371	SK171層	陶器	皿か	11.7	—	—	—	外）灰5Y6/1 断）灰5Y5/1	内）錆絵、草花文 灰釉	絵唐津。灰白色を帯びる半透明の釉。	肥前産 1590～1610年代
372	SK171層	陶器	大皿	29.2	8.2	9.0	—	外）(釉）灰オリーブ5Y6/2 断）にぶい黄橙10YR7/3	灰釉	唐津系灰釉陶器。内底に胎土目痕。外面下半無釉。	肥前産 1590～1610年代
373	SK171層	陶器	小皿	11.0	—	—	—	外）浅黄2.5Y7/4 断）浅黄橙10YR8/3	灰釉	浅黄色の釉。	瀬戸 16世紀

Tab.20　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
374	SK17 1層	陶器	小皿	—	—	—	—	外）黒褐7.5YR2/2 断）灰白2.5Y8/2	鉄釉	口縁部波縁状。黒褐色の釉。	瀬戸 16世紀
375	SK17 1層	陶器	皿又は鉢	—	—	—	—	外）黒7.5Y2/1 断）灰白2.5Y8/2	鉄釉	口縁部輪花形。黒色の釉。	瀬戸か
376	SK17	陶器	皿又は鉢	—	—	—	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	内）錆絵、草文 長石釉	外底施釉。	美濃　志野焼 16世紀末～17世紀初頭
377	SK17 1層	陶器	向付	9.6	6.0	8.4	—	外）灰白5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	外）錆絵、草、垣、山水文 長石釉	クリ底。外底無釉。	美濃　志野焼 16世紀末～17世紀初頭
378	SK17 下層	陶器	向付	15.3	5.9	14.5	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	内）錆絵、草花文 長石釉	外側面に円形文を貼付。外底に手捏ねによる三足を貼付。外底施釉。	美濃　志野焼 16世紀末～17世紀初頭
379	SK17	陶器	向付	16.2	5.2	13.5	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	内）錆絵、草花文 長石釉	外側面に円形文を貼付。外底に手捏ねによる三足を貼付。外底施釉。	美濃　志野焼 16世紀末～17世紀初頭
380	SK17 下層	陶器	皿又は鉢	—	—	—	—	外）灰白2.5Y8/1 断）灰白2.5Y8/1	内）錆絵 長石釉	外底施釉。	美濃　志野焼 16世紀末～17世紀初頭
381	SK17 1層	陶器	向付	—	—	—	—	外）灰白5Y7/1 断）灰10Y4/1	外）鉄錆による圏線 内）錆絵、宝文か 長石釉	外底施釉。	美濃　志野焼 16世紀末～17世紀初頭
382	SK17 下層	陶器	向付	—	—	—	—	外）灰黄2.5Y8/1 断）褐灰10YR4/1	内）鉄錆を全面に施し白抜きによる文様 長石釉		美濃　志野焼 16世紀末～17世紀初頭
383	SK17 下層	陶器	向付	—	—	—	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/1	内）錆絵、草文 長石釉	内底に段。外底施釉。	美濃　志野焼 16世紀末～17世紀初頭
384	SK17 下層	陶器	向付	—	6.9	—	—	外）褐灰10YR4/1 断）灰白2.5Y8/1	内）鉄錆を全面に施し白抜きによる鳥・草文 長石釉	外底に手捏ねによる三足を貼付。外面強いロクロ目。全面施釉。	美濃　志野焼 16世紀末～17世紀初頭
385	SK17 1層	陶器	向付	—	5.1	—	—	外）淡黄2.5Y8/3 断）淡黄2.5Y8/3	内）錆絵、菊花文 灰釉・緑釉	向付。方形で四隅を面取る。外底に手捏ねによる三足を貼付。内面に布目。外面ナデ。	美濃　織部焼 17世紀前葉
386	SK17 1層	陶器	向付	—	4.5	—	—	外）灰白2.5Y8/2 断）灰白2.5Y8/2	外）錆絵、草文 内）錆絵、千鳥 灰釉・緑釉掛け分け	向付。把手は剥離。外底に手捏ねによる三足を貼付。内面布目。外面ナデ。外底無釉。	美濃　織部焼 17世紀前葉
387	SK17 床	陶器	蓋物か	7.9	—	—	—	外）黒褐10YR2/3 断）灰褐7.5YR5/2	鉄釉	内面施釉。口縁端部無釉。黒褐色の釉。	
388	SK17 1層	陶器	香合	4.7	1.7	3.6	—	外）灰黄2.5Y8/1 断）灰黄2.5Y8/2	外）錆絵 長石釉	香合の身。外底施釉。	美濃　志野焼 16世紀末～17世紀初頭
389	SK17 床	青磁	香炉	—	—	—	—	外）灰オリーブ5Y6/2 断）灰5Y6/1	灰釉	外面に多段の凹線。内面施釉。灰オリーブ色を帯びる半透明の釉。	中国　龍泉窯以外 13世紀～14世紀か
390	SK17 1層	陶器	擂鉢	30.0	—	—	—	外）にぶい赤褐5YR5/3 断）にぶい赤褐5YR5/3	焼締め	内面ロクロ目と斜方向の櫛目。口縁部外面に凹線。体部外面ロクロ目。口縁部外面に自然釉。	備前 16世紀末～17世紀初頭
391	SK17 1層	陶器	擂鉢	25.4	—	—	—	外）灰褐5YR5/2 断）灰褐5YR5/2	焼締め	内面ロクロ目と斜方向の櫛目。口縁部外面に凹線。体部外面ロクロ目。口縁部外面に自然釉。	備前 16世紀末～17世紀初頭
392	SK17 1層	陶器	擂鉢	—	—	12.0	—	外）灰褐5YR5/2 断）灰褐5YR5/2	焼締め	内面ロクロ目と斜方向の櫛目。体部外面ロクロ目、底部脇にヘラナデ。外底に凹凸。	備前 16世紀末～17世紀初頭
393	SK17 1層	陶器	擂鉢	—	—	13.6	—	外）灰褐5YR5/2 断）灰褐5YR5/2	焼締め	内面ロクロ目と斜方向の櫛目。体部外面ロクロ目。外底に凹凸。	備前 16世紀末～17世紀初頭
394	SK17 1層	陶器	鉢	21.0	6.8	14.0	—	外）灰褐5YR4/2 断）褐灰10YR5/1	焼締め	内外面回転ナデ。外底に凹凸。口縁部外面に自然釉。	備前
395	SK17	陶器	瓶	—	—	5.0	—	外）褐灰10YR4/1 断）灰褐5YR5/2	焼締め	内底に渦状のロクロ目。外面と外底ナデ。底部無釉。	備前
396	SK17 1層	陶器	鉢	—	—	25.0	—	外）灰オリーブ5Y5/3 断）灰黄2.5Y6/2	灰釉	叩き成形。平底。内面と外底施釉。灰オリーブ色の釉。	肥前又は福岡か 1580～1610年代
397	SK17 1層	土師質土器	杯	10.2	3.1	4.8	—	外）にぶい橙7.5YR7/3 断）にぶい橙7.5YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油痕。
398	SK17 下層	土師質土器	杯	11.4	2.9	6.0	—	外）にぶい橙7.5YR7/4 断）にぶい橙7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油痕。

Tab.21　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
399	SK17 床	土師質土器	杯	9.8	3.2	5.4	—	外）橙7.5YR7/6 断）橙7.5YR7/6		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	
400	SK17 1層	土師質土器	杯	10.2	2.8	5.2	—	外）にぶい橙 7.5YR6/4 断）にぶい橙 7.5YR7/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に渦状のロクロ目。	内外面に煤。
401	SK17 1層	土師質土器	小皿	12.2	2.5	6.8	—	外）にぶい黄橙 10YR7/2 断）にぶい黄橙 10YR7/2		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	内外面に煤。
402	SK17 1層	土師質土器	小皿	6.2	1.6	4.8	—	外）浅黄橙10YR8/3 断）浅黄橙10YR8/3		手捏ね成形。内外面ナデ。	
403	SK17	土師質土器	小皿	8.8	2.3	4.4	—	外）にぶい黄橙 10YR7/3 断）にぶい黄橙 10YR7/3		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。内底に渦状のロクロ目。	外面と口縁部に煤。
404	SK17 1層	土師質土器	小皿	7.3	2.0	3.9	—	外）にぶい橙 7.5YR6/4 断）にぶい橙 7.5YR6/4		内外面回転ナデ。外底回転糸切り。	口縁部に灯芯油痕。
405	SK17	土器	鞴の羽口	—	径 10.1	—	—	外）にぶい黄橙 10YR7/3 断）にぶい橙 5YR6/4		径2.5cmの円孔あり。外面に灰黒色の自然釉がかかる。	
410	SK19 下層	磁器染付	中碗望料形	10.8	6.0	4.4	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	外）丸文・寿・圏線 高台外）二重圏線 口縁内）四方襷 見込み）昆虫文・圏線	望料碗。呉須は暗青灰色。	肥前産 18世紀後半
411	SK19 中層	磁器染付	中碗望料形	10.4	6.1	4.8	—	外）白 断）白	外）寿・蓮弁文 高台外）圏線 口縁内）四方襷 見込み）花又は氷裂文・二重圏線	望料碗。	肥前産 18世紀後半
412	SK19	青磁染付	中碗丸形	11.8	6.4	4.2	—	外）オリーブ灰 2.5GY6/1 断）灰白N8/	外）青磁釉 口縁内）四方襷 見込み）五弁花文・二重圏線 高台内）角枠内渦「福」	手描きによる五弁花文。	肥前産 18世紀後半
413	SK19	磁器染付	中碗広東形	11.6	6.4	5.8	—	外）白 断）白	外）窓に草花 高台外）二重圏線 口縁内）二重圏線 見込み）寿・圏線		肥前産 1780年代～幕末
414	SK19 中層	磁器染付	中碗広東形	11.2	6.2	6.0	—	外）白 断）白	外）岩・植物 高台外）圏線 口縁内）圏線 見込み）不明・圏線	胎土は透明感をもつ。	瀬戸・美濃産 1800年代～幕末
415	SK19 中層	磁器染付	中碗丸形	9.6	5.4	4.4	—	外）灰白5GY8/1 断）白	外）鳥・葦 高台外）二重圏線 高台内）渦「福」		肥前産 17世紀末～18世紀
416	SK19 中層	磁器染付	中碗広東形	12.6	7.0	5.8	—	外）白 断）白	外）若松文 高台外）二重圏線 口縁内）二重圏線 見込み）岩波・圏線	透明釉は貫入が入る。	能茶山窯又は肥前系
417	SK19	磁器染付	中碗広東形	12.2	5.5	6.8	—	外）白 断）白	外）蝙蝠・寿字 高台外）二重圏線 口縁内）二重圏線 見込み）蝙蝠・圏線		肥前産又は肥前系 1780年代～幕末
418	SK19	陶胎染付	中碗広東形	12.2	6.7	6.4	—	外）灰白5Y8/2 断）灰白5Y8/2	外）捻子 口縁内）圏線 見込み）五弁花文・圏線	太白手。透明釉は貫入が入る。コンニャク印判による五弁花文。	瀬戸・美濃産 1780年代～幕末
419	SK19	磁器染付	中碗端反形	11.6	6.3	4.4	—	外）白 断）白	外）竹・花 高台外）二重圏線 見込み）昆虫文		肥前産又は肥前系 1820年代～幕末
420	SK19	磁器染付	中碗端反形	10.8	5.9	4.4	—	外）白 断）白	外）雲龍・宝珠 高台外）二重圏線 口縁内）雲 見込み）宝珠 高台内）圏線・「成化年製」		肥前産又は肥前系 1820年代～幕末
421	SK19 中層	磁器染付	小碗端反形	8.8	4.7	4.2	—	外）白 断）白	外）氷裂文・梅花 内）氷裂文・梅花		肥前産又は肥前系
422	SK19 上層	磁器染付	小碗筒丸形	7.2	6.1	3.2	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白7.5Y8/1	外）菊・垣 高台外）二重圏線 口縁内）雷文帯 高台内）銘		肥前産又は肥前系 高台内に銘。

Tab.22　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
423	SK19 下層	磁器 染付	小碗 腰張形	8.6	5.9	3.6	—	外）白 断）白	外）草花・蝶 内）蝶か		肥前産又は肥前系
424	SK19	磁器 染付	小碗 腰張形	8.2	4.8	3.4	—	外）白 断）白	外）区画割に草花 高台外）二重圏線 口縁内）二重圏線 見込み）五弁花文･圏線	手描きによる五弁花文。	肥前産
425	SK19 上層・中層	磁器 染付	小碗 端反形	9.0	4.9	4.0	—	外）白 断）白	外）草花文 見込み）草花		肥前産
426	SK19 上層	磁器 染付	小碗 端反形	8.2	4.2	3.4	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	外）花文		肥前産又は肥前系
427	SK19 下層	磁器 染付	小碗 端反形	9.0	5.0	3.8	—	外）白 断）白	外）山水文・圏線 口縁内）帯線・白抜きによる如意頭文 見込み）岩波・圏線	胎土は透明感をもつ。	瀬戸・美濃産
428	SK19 下層	磁器 染付	小碗 端反形	7.4	4.1	3.0	—	外）白 断）白	外）帯線・輪繋ぎ文 口縁内）帯線・圏線 見込み）輪繋ぎ文･圏線	胎土は透明感をもつ。	瀬戸・美濃産
429	SK19 上層・下層	磁器 染付	小碗 端反形	6.4	3.7	3.0	—	外）白 断）白	外）帯線・蓮弁 口縁内）帯線・圏線 見込み）草花･二重圏線	胎土は透明感をもつ。	瀬戸・美濃産
430	SK19 上層・下層	磁器 色絵	小碗 丸形	7.0	—	—	—	外）白 断）白	外）上絵付(赤・緑）による竹・梅		肥前産
431	SK19 上層・中層	磁器 染付	小杯 丸形	6.6	2.9	2.2	—	外）白 断）白	外）葦・鳥		肥前産
432	SK19 上層	磁器 染付	小杯 丸形	6.8	3.1	2.4	—	外）白 断）白	外）紅葉・流水		肥前産
433	SK19 床	磁器 染付	小杯 丸形	6.3	2.5	2.7	—	外）白 断）白	外）笹文		肥前産
434	SK19 下層	磁器 染付	小杯 浅丸形	5.6	1.6	2.6	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	外）笹文	呉須はオリーブ黒色。	肥前産
435	SK19 上層・中層	磁器 染付	小杯 丸形	4.8	2.1	1.4	—	外）白 断）白	外）草花文		肥前産
436	SK19 下層	磁器 色絵	小杯 丸形	5.0	—	—	—	外）白 断）白	外）上絵付(赤）による海老文		肥前産
437	SK19 中層	白磁	小杯 菊花形	4.8	2.5	2.0	—	外）白 断）白	外）型による菊弁	蛇の目高台。型押成形。	肥前産
438	SK19 下層	白磁	小杯 桶形	4.4	2.8	3.0	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）灰白N8/		外面に工具痕が残る。	肥前産又は肥前系
439	SK19	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.8	3.1	—	摘み径 4.4	外）白 断）白	外）蓮弁文・寿字 摘み外）圏線 内）十字花か･二重圏線 口縁内）四方襷	望料碗の蓋。	肥前産 18世紀後半
440	SK19 中層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.0	3.3	—	摘み径 4.4	外）白 断）白	外）花文 摘み外）二重圏線 口縁内）四方襷 内）寿字・二重圏線	望料碗の蓋。	肥前産 18世紀後半
441	SK19 中層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.4	2.6	—	摘み径 5.8	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	外）稲束・鳥 見込み）鳥	広東形碗の蓋。	肥前産又は肥前系
442	SK19 下層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.2	2.9	—	摘み径 5.4	外）白 断）白	外）若松文 内）花卉か	広東形碗の蓋。透明釉は貫入が入る。	肥前産又は肥前系 1780年代～幕末
443	SK19	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.0	2.5	—	摘み径 5.4	外）白 断）白	外）松・花 内）鷺・二重圏線 口縁内）二重圏線	広東形碗の蓋。	肥前産又は肥前系
444	SK19 下層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 10.2	—	—	—	外）白 断）白	外）野菜文 内）野菜文	広東形碗の蓋。	肥前産 1780年代～幕末
445	SK19 上層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.0	2.5	—	摘み径 3.6	外）白 断）白	外）葵・帯線に白抜きの如意頭文 内）葵・二重圏線・帯線に白抜きの如意頭文 摘み内）銘	胎土は滑らかで透明感をもつ。	瀬戸・美濃産 1800年代～幕末
446	SK19 中層・下層	磁器 染付	碗蓋	笠部径 9.6	2.9	—	摘み径 3,6	外）白 断）白	外）雲・龍・宝珠 摘み外）二重圏線 内）宝珠・雲 摘み内）「成化年製」		肥前産
447	SK19 上層・下層	磁器 色絵	碗蓋	笠部径 6.0	1.6	—	摘み径 2.4	外）白 断）白	外）上絵付（赤･緑･金）による文様。区画割りに花卉・紗綾形文	文様の輪郭は赤で描く。	肥前産

Tab.23　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
448	SK19 中層・下層	磁器 染付	小皿	13.6	3.4	5.4	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	外）如意頭連続唐草文 高台外）圏線 内）瓜	口縁部玉縁形。蛇の目凹形高台。	肥前産
449	SK19 中層・下層	磁器 染付	小皿 端反形	12.4	3.5	6.6	—	外）灰白2.5GY8/1 断）白	外）不明・圏線 内）植物・鳥		肥前産
450	SK19 中層・下層	磁器 染付	小皿 輪花形	12.2	3.1	7.2	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	外）山水文	口錆。口縁部輪花形。蛇の目凹形高台。	肥前産 18世紀後半～1860年代
451	SK19 下層	磁器 染付	小皿 丸形	9.8	2.0	6.8	—	外）白 断）白	外）連続唐草文 内）蛸唐草･銀杏合わせ	蛇の目凹形高台。	肥前産
452	SK19 下層	磁器 染付	小皿 輪花形	10.2	2.6	6.0	—	外）白 断）白	内）山水文		肥前産又は肥前系
453	SK19 中層・下層	磁器 瑠璃釉	五寸皿 菊花形	14.6	2.6	9.0	—	外）青 断）白	内）白抜きによる文様 瑠璃釉	内外面に藍色の釉。高台内に透明釉。	肥前産　有田 1650～1660年代
454	SK19	白磁	小皿 菊花形	13.8	3.9	8.6	—	外）白 断）白	口錆菊弁	蛇の目凹形高台。白磁釉は青色を帯びる。	肥前産
455	SK19 上層	磁器 色絵 染付	小皿	—	—	6.0	—	外）灰白2.5GY8/1 断）灰白N8/	内）上絵付(赤・緑）による文様		肥前産
456	SK19 上層	磁器 染付	中皿	—	—	8.0	—	外）白 断）白	高台外）二重圏線 内）不明	呉須は淡青色。	肥前産
457	SK19	青磁	皿	—	—	9.0	—	外）明オリーブ灰2.5G7/1 断）灰白N8/	内）陽刻による菊弁・花弁	蛇の目凹形高台。	肥前産
458	SK19 下層	磁器 染付	大皿 丸形	22.2	3.1	13.4	—	外）白 断）白	外）如意頭連続唐草文 高台外）二重圏線 内）墨弾きによる波文・松竹梅円形文		肥前産
459	SK19 下層	磁器 染付	大鉢	36.8	7.6	20.4	—	外）白 断）白	内）丸内に梅文と宝文・花唐草・植物 高台内）変形字銘・二重圏線	口縁部折縁形。外底にハリ支え痕。	肥前産
460	SK19 上層	白磁又は染付	中皿又は鉢	—	—	14.4	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/			
461	SK19 中層	磁器 色絵	皿又は鉢	—	—	16.0	—	外）灰白2.5GY8/1 断）灰白N8/	外）上絵付（黒・黄・その他）による松 内）〃松	畳付に白色の粗砂が付着。	肥前産
462	SK19	磁器 染付	猪口	7.2	5.8	5.2	—	外）白 断）白	外）矢羽根文 口縁内）四方襷 見込み）昆虫文・圏線	蛇の目凹形高台。	肥前産 1780年代～幕末
463	SK19 上層・中層	磁器 染付	猪口 広東形	8.0	6.6	5.0	—	外）白 断）白	外）山水文 見込み）網代か		肥前産
464	SK19	磁器 染付	小鉢	11.4	6.3	5.8	—	外）白 断）白	外）松・山水 内）菊・人物 口縁内）唐草文	口縁部輪花形。	肥前産又は肥前系
465	SK19 下層	磁器 染付	中鉢	—	—	9.4	—	外）白 断）白	内）葡萄	蛇の目凹形高台。透明釉は淡青色を帯びる。	肥前産 18世紀後半～幕末
466	SK19 下層	白磁	鉢輪花形	10.4	—	—	—	外）白 断）白			肥前産
467	SK19 中層・床	磁器 染付	鉢	12.6	7.1	6.0	—	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）扇・窓に山水文・貝・岩 高台外）鋸歯文か 口縁内）沙綾文 見込み）机・筆	八角形。口縁部折湾形。	肥前産又は肥前系
468	SK19 上層・中層・下層	磁器 染付	中鉢	14.4	10.2	12.4	—	外）灰白2.5GY8/1 断）灰白N8/	外）雲 内）龍・雲	呉須は暗青灰色。高台に灰白色の砂が付着。	肥前産又は肥前系
469	SK19	磁器 染付	中鉢 端反形	18.0	6.7	9.6	—	外）白 断）白	外）花唐草文 内）山水文 口縁内）波濤	蛇の目凹形高台。透明釉は貫入が入る。	肥前産
470	SK19	磁器 染付	中鉢	22.0	6.8	11.8	—	外）明緑灰7.5GY8/1 断）白	外）如意頭連続唐草文 内）風水文 口縁内）花	蛇の目凹形高台。呉須は暗青灰色。	肥前産
471	SK19 中層・下層	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 8.2	2.1	—	摘み径 2.4	外）白 断）白	外）山水文・帯線	摘みを貼付。	肥前産
472	SK19 下層	磁器 染付	蓋物蓋	笠部径 7.0	2.1	かえり径 5.8	摘み径 2.2	外）白 断）白	外）青海波文	かえり無釉。かえりに灰白色の砂が付着。	肥前産

Tab.24　遺物観察表（陶磁器・土器）

図版番号	出土地点	種類	器種器形	法量（cm）				色調	文様・釉薬・胎土	特徴（成形・調整・釉調他）	備考（生産地・生産年代・銘・使用痕他）
				口径	器高	底径	最大径				
473	SK19 上層	磁器 色絵	蓋物 蓋	笠部径 7.0	—	かえり径 6.0	—	外）白 断）白	外）上絵付（赤・その他）による山水文	かえり無釉。文様の輪郭は赤で描く。	肥前産
474	SK19 下層	磁器 染付	蓋物 蓋	笠部径 8.3	—	かえり径 7.0	摘み径 2.8	外）白 断）白	外）松		肥前産 474･475同一個体。
475	SK19 下層	磁器 染付	蓋物 丸形	7.6	—	—	—	外）白 断）白	外）松・圏線	口縁端部無釉。	肥前産 474･475同一個体。
476	SK19 中層	磁器 染付	蓋物 蓋	笠部径 13.0	3.4	かえり径 11.6	摘み径 4.0	外）白 断）白	外）雲鶴	摘みを貼付。	肥前産
477	SK19 中層	磁器 染付	蓋物 腰張形	12.6	7.0	7.2	—	外）白 断）白	外）笹文 高台外）二重圏線	口縁部内面と端部無釉。	肥前産 477･478同一個体。
478	SK19 下層	磁器 染付	蓋物 蓋	笠部径 13.2	3.0	かえり径 15.8	摘み径 2.0	外）白 断）白	外）笹文・蝶	かえり無釉。	肥前産 477･478同一個体。
479	SK19 中層	磁器 染付	蓋物 蓋	笠部径 7.2	2.5	かえり径 6.0	摘み径 2.4	外）白 断）白	外）丸に寿	かえり無釉。	肥前産 479･480同一個体。
480	SK19 中層	磁器 染付	蓋物 丸形	6.8	3.5	3.4	—	外）白 断）白	外）丸に寿・圏線 高台外）二重圏線		肥前産 479･480同一個体。
481	SK19 中層・下層	磁器 色絵 染付	段重	12.6	5.8	7.6	—	外）白 断）白	外）呉須による丸に山水文･上絵付（赤･緑･金）による花卉	腰部括れあり。口縁端部と腰部無釉。腰部に白色の砂が付着。	肥前産
482	SK19 上層	磁器 色絵	蓋物	4.0	2.5	2.6	—	外）白 断）白	外）上絵付（赤）による文字	端部と口縁部内面無釉。	肥前産
483	SK19 中層	磁器 染付	合子 蓋	笠部径 3.4	0.6	—	—	外）白 断）白	外）不明	端部無釉。	肥前産
484	SK19 上層	磁器 染付	合子 蓋	笠部径 6.0	1.1	—	—	外）白 断）白	外）草花文	端部無釉。	肥前産
485	SK19 上層	白磁	合子	3.6	1.7	3.2	—	外）白 断）白			肥前産
486	SK19 中層	磁器 染付	合子	5.8	1.8	—	—	外）白 断）白	外）松葉	内面施釉。口縁端部無釉。	肥前産
487	SK19	磁器 染付	髪油壺 胴丸形	2.4	9.2	4.4	9.3	外）明オリーブ灰 5GY7/1 断）不明	外）梅文	呉須は暗緑灰色。内面無釉。	肥前産
488	SK19 中層	磁器 染付	髪油壺 胴丸形	2.4	—	—	9.3	外）明オリーブ灰 2.5GY7/1 断）灰白5Y7/1	外）梅文	内面ロクロ目。内面無釉。呉須は暗青灰色。	肥前産
489	SK19 中層	磁器 染付	小瓶 辣韮形	—	—	3.8	5.9	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）草花文	内面無釉。	肥前産
490	SK19 中層	磁器 染付	小瓶	—	—	4.0	6.0	外）白 断）白	外）蓮弁文・唐草文・圏線 高台外）二重圏線	内面無釉。	肥前産
491	SK19 上層	磁器 染付	小瓶 端反辣韮形	2.6	15.1	4.8	8.4	外）灰白10Y8/1 断）灰白N8/	外）草文	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前産
492	SK19	磁器 染付	小瓶	—	—	4.8	8.9	外）灰白5GY8/1 断）灰白N8/	外）草花文・松葉	内面無釉。露胎部は橙色に発色。畳付に砂が付着。	肥前産
493	SK19	磁器	瓶類か	—	—	—	—	外）白 断）白	外）型による陰刻文様、花卉･檜垣･四方襷 鉄釉	型押成形。内面ユビナデ。側面に鉄釉。	肥前産
494	SK19 上層	白磁	水滴 変形形	全長 13.7	5.1	全幅 5.2	—	外）白 断）白	象	型押成形左右貼り合わせ。背と鼻の部分に円孔あり。内面ユビナデ。外底に布目。	肥前産　有田 17世紀後半
495	SK19 上層	磁器 染付	水滴 箱形	全長 5.6	1.7	全幅 3.7	—	外）白 断）白	外）型による陽刻文様。植物と動物 錆釉・呉須	型押成形底部貼り合わせ。上面の２箇所に円孔。陽刻文様は呉須と鉄錆で部分的に塗り分ける。外底に布目。外底施釉、片側面無釉。	肥前産
496	SK19 下層	磁器 染付	水滴 箱形	—	2.9	—	—	外）白 断）白	外）型による陽刻文様。花文	型押成形底部貼り合わせ。上面の２箇所に円孔。陽刻文様は呉須で塗り分ける。内面ナデ。	肥前産
497	SK19 上層	磁器 染付	水滴 変形形	—	—	—	—	外）白 断）白	外）縞状の文様	型押成形。上面に円孔。内面ユビナデ。内面無釉。	肥前産
498	SK19 中層	磁器 染付	不明	—	—	—	—	外）白 断）白	外）草花文	コンニャク印判による草花文。	肥前産
499	SK19 下層	青磁	火入れ 又は 香炉	9.0	—	—	—	外）明オリーブ灰 5GY7/1 断）灰白N8/	青磁釉	内面ロクロ目。内面無釉。	肥前産